

IS 白き一角獣

どこぞの機械好き

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2015年

世界より日本に向けて5000を超えミサイルが向かっていた。

そしてそれを迎え撃つ白き騎士と白き獣が……

いろんな作品がまじえまじえ……してます。そこだけご注意ください……

原作開始前と原作開始、その後もつながる予定のソードアート・オンラインも随時更新中。下のURLから是非ご覧を。

<https://syosetu.org/novel/321610/>

活動報告にて参加形式実施中、アンケートもできれば……

12/6機体解説、登場人物の更新完了……是非見てネ。

活動形式随時更新中、今メインのやつは以下のものです。3・6更新。

NEW! <https://syosetu.org/?mode||kappo|view&kid||309874&uid||427875>

小説に自分の考えたISを出したい!という方はしたのURLから是非。

<https://syosetu.org/?mode||kappo|view&kid||298944&uid||427875>

目次

原作開始前

プロローグ | 1

機体・登場人物解説 | 6

第1話 行き着いた世界、そこは…… | 17

第2話 アイエエエエエ!? ナンデ!? ユニコーンナンデ!? | 20

第3話 白き軍神の日 | 25

第4話 和解 | 31

第5話 ファーストコンタクト | 36

最終話 A h e r o w h o i s d a r e d e v i l

44

I S 原作開始

第1話 二人目 | 53

第2話 S H R | 58

第3話 よろしい、ならば○○だ。 | 64

第4話 ルームメイト | 71

幕間 ツイマッド社の愉快な仲間たち1 | 79

第5話 墜落 | 84

第6話 会長 | 93

第7話 クラス代表決定戦 | 99

第8話 パーチー | 107

G W 編

第9話 アイソクラッドズとの再会1 | 115

幕間 ツイマッド社の愉快な仲間たち2 | 123

第10話 C 4 . 6 2 1 | 130

第11話 1000艇の銃

第12話 喫茶リコリコ

クラス対抗戦編

第13話 突然の○○

第14話 ケツチャコ

第15話 乱入

第16話 彼女たちの復讐

第17話 社員たちの復讐

第18話 Wake up

第19話 ウォールナット

学年別トーナメント編

第20話 3人目

第21話 殺人兵器

幕間 ツイマッド社の愉快な仲間3

第22話 身バレ

第23話 救済

第24話 学年別トーナメント、開始

第25話 心象空間

第26話 決勝戦

第27話 古き……

第28話 合法○○○○

第29話 DA本部

福音戦編

第30話 買い物デートと残留思念

第31話 ロニイの過去

第32話 恋バナ | 298

第33話 赤 | 305

第34話 戦闘開始 | 311

第35話 生存……? | 317

第36話 再臨 | 324

第37話 レイヴン | 330

第38話 2つの決着 | 338

幕間 ツイマツドの愉快的仲間たち4 | 346

夏休み編

第39話 お買い物 | 354

第40話 世界旅行 in ドイツ | 372

第41話 世界旅行 in フランス | 381

第42話 世界旅行 in イギリス | 390

第43話 世界旅行 in 中国 | 399

第44話 5人の帰宅 | 410

第45話 ALO訪問 | 419

第46話 コンバート | 427

第47話 護衛任務① | 436

第48話 護衛任務② | 447

幕間 ツイマツドの愉快的仲間たち5 | 461

学園祭編

第49話 始まり | 469

第50話 出し物 | 477

第51話 学園祭の準備と…… | 485

第52話 いざ学園祭 | 495

第53話	シンデレラという名の鬼ごっこ	506
第54話	本当の3人目	515
第55話	伏兵	530
第56話	escape	541
第57話	技術の暴力	550
キャノンボール・ファスト編		
第58話	新たななる3機	558
第59話	新米のような経験者のような……	566
第60話	ラインの乙女	574
第61話	資格	582

原作開始前 プロローグ

『MSからのIFF反応なし、敵勢力であると思われる!』

けたましくブザーのなるブリッジ内、IFFに反応がない超高熱原体——MS発見の一報を受け慌ただしくなっている

『警告は!?』

『応答なし! 本艦隊との距離急速に近づきます!』

「……」

そのMSのコックピット内、パイロットは完全に意識がない状態でした。息が途絶えたわけでもなく、Gに耐えられなかったわけではない。ではなぜか

そのMS、いや、MSとは言えない

新たな「生命体」と言おうか。

なぜなら彼は

MSと同化しているのだから。

『付近の艦隊に緊急信号送れ! MS隊発艦準備出来次第発進しろ!』

『一番近い艦隊でも20分はかかります!』

『MS隊発進急げ! 何グズグズしている!』

『クソつもういいっ! 司令部の命令などないっ、撃ち落とせええ!!』

色とりどりのビームやメガ粒子砲が暴走したMSを喰らわんと追いかける

だがその「生命体」に当たることはなく、艦隊に向かって普通のMSでは信じられない速度で近づいた

『だめです!! 一発も当たりません!!』

『どうなっているんだ! だからあいつが乗っているからもつと艦を増やせと言っていたのに! もう知らん! 私は船を降り』敵性MS本艦目前!!』何? もうそこま……で』

艦長と思われる軍人が外の風景に目を向けると一機のMSが目前に近づいていた。

『う……嘘だろ……や……やめてくれ……だれかたすけてく』

その言葉は最後まで続くことがなくブリτζを4枚の羽が襲った付近に5つほどの鮮やかな円形の花咲いた後、その「生命体」は青い光が溢れ出したかと思うとその空間から姿を消した……

UC106年、『ユニコーンガンダム4号機』——』の起こした光はシャアの反乱時に起きた地球が包まれた光と同じものが宇宙に溢れ出した。多くの人がこの現象を目撃したものの、地球連邦政府はこの現象について何も情報を知らないことを主張した。この事件はこのMSの存在が秘密であり、公に出せば問題が起こるのが目に見えていたので闇に葬られることになった。

この世の世界のどこでもない空間である男が漂っていた。

side???

「………は……？」

「起きたか、親友よ」

おぼろげながらに目を覚ました「彼」が懐かしい声のする方向にふと向くとかつて赤い彗星と恐れられていたかつての仲間「シヤア・アズナブル」がいた。

「シ、シヤア!? ……てことは俺も……」

あの「石ころ」のあとからたまに見る彼と同じような存在になっている……そうか、あのMSとの時間もついに終わったのか……今まで一番長く乗っていたものだから少し寂しさが残るな。

「ああ、残念だがあの世界で君の存在はなくなってしまうっている」

……ん？ あの世界「では」ってどういうことだ？

「……何が言いたい」

「君は別の世界で新たに生まれることができる」

そうか……またか……は？

「いやまて、そんなもの存在するのか？」

「ああ、たしかにその世界で彼らは生きている」

まあ、こんな現象があるのにありえないわけではないか……しかし特に夢のなかった俺なんか行ったところでなんの得にもならんと考えるが……（あの世界に来れた時点で夢はかなったものだからな）

「なかったのではない。あつても実現できなかった、だろう？」

……間違っではないが。

前世でできなかった、やりたかったことはやまほどあったがこの世界ではできないも同然だったから。

「でももういいんです。人の可能性に任せますよ。きつと誰かがやってくれる」

「前世でできなかった、やりたかったことはやまほどあるんだろう？」

……転生のことまでバレテラ。

「そこまでお見通しとは……やはりあんたに嘘つくのは無理だよ……で、いつから気づいてたんだ？」

「はじめあったときから怪しんでたよ。エウーゴの時にはすでに確信に変わっていた」

それはそれは……ほぼ即バレではないか

「この存在になってから君の前世をのぞかせてもらった」

やっつてることほぼテンプレの神では？

「現世でもかなりの人生を歩んでるようだが……」

「なあにあまりそういうことに疎いので気にしてませんよ」

「ならいいが……ララアもなにか話してみないか？」

「本当にひさしぶりね。こうやって話せるのも何年ぶりかしら」

そういうとシヤアの横が光り出したかと思うとこれまたこの世界でも珍しい昔ながらの知り合いでシヤアのおかあ「何かよからんことを考えてるな？」ゲフンゲフン彼女……「ララア・スン」が現れた

「これはこれはララア……どうです？ 彼とうまく行ってますか？」

「それはいまは関係ないっ」

彼のララアに対するポンコツはいつまでも治らないものなんだな

「さっさといけっ！」

おーおー怒ってる怒ってるやはりいじりがいがあったたのしいなー

「次の世界で今までの世界の情報を渡そうかと思ったが、やめておこうか？ んっ？」

「マジですみませんシヤア様何でもするので許してくださいっ」

「はあ……次の世界で役に立つものを渡す物がある。そして今までの知識が向こうでもある」

これももうテンプレじゃん「ただし」ん？

「知識は5歳になってからだ。5歳でも高熱にうなされるのに赤ん坊からあれほどの知識があったら脳が焼き切れるぞ」

「お優しいことで。もうそろそろこっちの視界が霞んできてる。まだまだ話したいが……話せるのはまだ先のようにだな。またどこかでおうキヤスバル」

「ああ、また会おう……最後に、あそこの世界で知っているやつがいるかもな」

「おいそれどういふことだ」

なんでフラグ立てとうわ何をするやめ r

「……いったか。私も時が満ちれば追いかけるか」

「……彼のこころのわだかまりもそっちで消えるといいんですけどね」

「ああ……できるかぎりサポートするでしょう……彼に本当の幸せを知ってもらうために」

機体・登場人物解説

使用機体 (IS)

- ・RXIS-0-4ユニコーンガンダム4号機「アレス」
- ・NZIS-6666「クシャトリヤ・エクスターミネーター」↓
「クシャトリヤ・ハマリング」
- ・ISGP-03-2「IIデンドロビウム」
- ・「アレックス」
- ・ISN-WGIX/V「ブラックグリント」
- ・AMX-018-IS「トリスリッター」

機体説明

ユニコーンガンダム4号機《アレス》

- ・機体基本装備 (白騎士・白獅子事件やモンドグロツソ出現時など)
ビームマグナム×2 (拡張領域込で40発)
ビームサーベル×4
アームドアーマーDEX×4
アームドアーマーSB×2
アームドアーマーVN×2 (基本拡張領域にある)
アームドアーマーXC
実体剣×2

・宇宙世紀より尾白流星とやってきた可能性のおぼけ。何故かMSではなくISと変化している。コアはなかったので束サンにもらうことで完成した

・(La+ユニットは) ないです

・頭部バルカンはあったものの衝撃が強すぎるので外している。

・大量の目標物を叩くときはビームマグナム、極超音速ミサイルなどの高速体を正確に叩くときはSBを使うかVNに即時換装するかサーベルで切る傾向がある。(後の高速換装の原型となっている)

・アームドアーマーDEXは2機をスラスター、別の2機をファンネ

ルとして運用する

・VNは非常に拡張領域を食うので悩みの種となっている。

元ネタお分かりの方いると思いますが、もろペルフェクティブリティに少し武装足した感じですよ

：高速戦闘時装備（厄災迎撃時）

ビームガトリング×2

ビームライフル

対艦刀×2

ビームマグナム×2（拡張領域込みで1250発）

シールドファンネル全方向追加スラスタースター装備型×40（ビームガトリング×2装備）

アームドアーマーDE×4（固定）＋ファンネル型×20

アームドアーマーSB

アームドアーマーXC

追加プロペラントタンク兼ブースター×2

VOB

ガトリングビット（ISサイズのアドバンスドジン、Gビット、ジックスなどジオン系多数）確認できるだけで200。

DEを固定化し完全にスラスターとして使用することでユニコーンの殺人的加速をさらに追加して、アムロやシャアもにっこの速度となっている

・VNをオミットすることでマグナムの残弾と別のビームライフル、対艦刀を乗せている。

・対艦刀となっているが滅多に対艦で使用しない。もろにマグナムで土手っ腹に穴を開けることが多い。

・ビームライフルはまんまザビーVer. Kaのロングビームライフルです

・リミッターは解除しているため異常なほどまでに拡張領域や機体性能が上がっている（だいたいサイコフレームのせい）

クシャトリヤ・エクスターミネーター↓クシャトリヤ・ハマリング

機体基本装備：

- ・ビッグウイグキャノン×1
- ・超多連装ミサイル×60×4
- ・アームドアーマーVN×1
- ・小型Iフィールド・ジェネレーター×4
- ・グラインドブレード（6枚ブレード）
- ・大型シールド兼スラスタユニット×4
- ・高周波ナギナタ「夢幻」
- ・参加形式により誕生した全身兵器のクシャさん。簪愛用。

ツイマッド社のいい意味でマッドな人たちが作った3. 5世代に分類される「ぼくたちのかんがえたさいきょうのIS」。殲滅する者と言う名の通り、歩く武器庫。

・外見は袖がなくなって、上腕二頭と太もも、その他少しの装甲がない状態で、シールドが宙に浮いてるかつ、右の背中に物騒なあれを背負ってる。

・ミサイルは各シールドに60発ずつかつ拡張領域より再装填可という誰もがニッコリできる仕様。

・Iフィールドはシールドに一個ずつついてます。

・VNとグラインドブレードでトラウマになったものは少なくはない。

・期待各部に拡散メガ粒子砲が基本装備でついているのでほぼすべての方角からの攻撃に対処できる。

IIデンドロビウム

：機体基本装備

コジマキャノン

長距離レールガン×2

サテライトキャノン

パイルバンカー×2

小型連装レーザー×4

Iフィールドランチャー

マイクロミサイルランチャー

・サテライトキャノンは太陽光でも一応撃てる。でもやっぱり月からのマイクロウェーブでチャージしたほうが威力は高い。

・小型連装レーザーの見た目は宇宙戦艦大和のあれ。

・ビーム、レーザーなどはIフィールドジェネレーター、Iフィールドランチャーでメタを張れる。ずるい。

・マイクロミサイルランチャーはマルチロック、ファンネル仕様の兼用なのでチャフ、フレアごときではどうにもできない。……ずるい。

・なんとこいつ、変形する。

：重装備仕様

n o d e t a

アレックス

機体装備

常に変化しているので不明。

・ペイルライダー重装備の武装は持っていることが判明している。

・アレックスのチョコバレムアーマーが基本装備のIS。それ以外はアレックスと見た目が少し違うようだが……

・デンドロに搭乗するか、ツイマツド社の武器を多数使用する。

・機体性能は白式より少し下くらいとされているが……？

ISN|WGI X/V「ブラックグリント」(形態によって少し名前が違うので一括していません)

第零段階 ブラックグリント・B (ブレイク)

見た目:T D N黒く塗った旧白栗。武装も性能も旧白栗のまま。だが、ロニイはこれで流星にやられるまでに一度も撃墜されてない。

武装

旧白栗そのまま (ライフル二丁持ち、肩ミサ。下部参照)

第一段階 (ファーストシフト) L (ロスト)・ブラックグリント

見た目 第零段階の背部に黒栗の触手が生えた状態。

性能 全体性能が1.5倍上がり、装甲・PAの性能値が2倍になったことが確認されている。

武装

右手:051ANNR (実弾ライフル)

左手:PLANAR (突撃ライフル)

背部:レーザーキャノン

第二段階(セカンドシフト) ブラックグリント・LW(ロストウイング)

見た目 N|WGI X/V (ブラックグリント)に白栗の意匠&ブルーマグノリアのパーツ追加

性能 全体性能1.5倍+機動性のみ3倍……ジェネレーターに強化が入っている。

武装

右肩部:触手型TLSもしくはマシンキャノン

左肩部:触手型TLSもしくはマイクロミサイルポッド

右手:HLR01|CANOPUS (AC4. fa) もしくは弾倉

式パイルバンカー 無装備時パルマファイオキーナ 掌部ビーム砲

左手:HLR01|CANOPUS (AC4. fa) もしくは弾倉

式パイルバンカー 無装備時パルマファイオキーナ 掌部ビーム砲

右腕:コジマパイルもしくはフラッシュエッジビームブーメラン

左腕：コジマパイルもしくはフラッシュエッジビームブローメラン
右腰部：スラッシュハーケンもしくは単分子カッター
左腰部：スラッシュハーケンもしくは単分子カッター
右脚部：マイクロミサイルもしくはコジマミサイル
左脚部：マイクロミサイルもしくはコジマミサイル
拡張領域：コジマバズーカ、対戦車ダガー、OW
HLR01-CANOPUS (AC4. fa) は連射力が低下し、威力が上がっている。

流星を守るといふ思いでこれほどの武装が、著現した。
チートでアーセナルな黒栗。

第三段階(サードシフト) ブラックグリント、FD(フォールンダ
ウン)

見た目 第二段階にアレサとナインボールセラフRが追加。コジ
マフラッシュが翡翠色から薄紫に変更……というわけか、サイコフ
レームの物質が確認されてる。

性能 全体性能2倍 装甲、PA3倍 機動力3.5倍……ツイ
マッドの技術をもって解析しても、時間がかかるジェネレーターに変
化した。

武装

左右腕：KARASAWA Mk-2 (パルスライフル)

左右肩：SALINEO5 (マイクロミサイル)

サブ1：ANOTHER MOON (レーザーブレード)

サブ2：KIKU (とっつき)

・ロニイの愛機、襲撃時に一次以降した。クラス対抗戦時に二次移
行、福音戦時に3次移行を確認。

・もともとジェネレーターは無害化してないコジマ粒子を用いてい
たが、ツイマッド社により無害化されたモノに変更。だが3次移行の
時にコジマ粒子が薄紫になる現象が発生。目下調査中。

・他の「カロード」達の機体にはISコアが搭載されておらず会社

内のISこの機体のみとなっていた。

・この機体は異常にロニイとの適合率が高いが……？

AMX-018-IS「トリスリッター」

機体基本装備：

ビームサーベル

ハイパーナツクルバスター

メガ粒子砲付シールド

ハイパービームサーベル

インコム

OIGAMI (Acfa)

・マドカの専用機。ブルーティアーズ2号機「サイレント・ゼルフィス」に代わるISとしてツイマッド社が用意した。

・元はペイルライダーだったが、ファンタズマ戦時に2次移行を確認。その後はインコムを用いたオールレンジ攻撃を戦法とする。

追加機体があることにここに情報を載せていきます

登場人物解説

・尾白流星

数多くの外伝を経てISの世界にやってきた、本作主人公で一夏とは二歳年上。

究極のお人好しで本人の自覚はないよくが稀にギャグに走る傾向がある。

MSやファンネルの運用技術は一級品でハマーンやシャアからも一目置かれていると言われている。

2021年の厄災時に行方不明となっていたが、2025年春に一夏がISを起動後に突然東Ⅱサンに暴露させてそのままIS学園に入学することとなった。なので次に束にあったらしくとケツイしている。

元スネーク。

ただならぬ過去を抱えているようだが……？

・C4・621（カラードヴェセラ・ロニー）

ツイマッドに任務として襲撃したが、失敗。雇い主により、帰る場所の小さな傭兵会社「カラード」を破壊されて居場所を失いIS学園に行くこととなった。

連日の任務で疲れていたため流星に敗北したが、それまでは任務成功率が非常に高く傭兵会社で一番人気だった。

傭兵会社の生き残りを探している。また、モノクローム・アバターの3人とは面識がある。

流星は相棒と捉えており、失いたくない。

初対面時

おしやれ時

戦闘時

・仮称BS77-4（ナナシ）

ロニーの作ったオペレーターAIと言っても、元々あったAIに人格を持たせている。

ある人を参考にしていうようだが……？

最近実体を流星からもらってごきげん。流星の家でよくシヤアやユウキとよく遊んでいる。

イメージ図

画像提供元：RIIZE・DUMMY氏 制作元：五百式立ち絵メー

カー

・
????

……ダレカ。

10年前に流星と千束に恨みを持つようになったらしいが……カネに目がないらしい。

それ関連でなにかあったのか？

その他の人たち（第49話時点）流星の一言コメント付き

義姉弟：

一夏（愛は平等にな）

千冬（……臨海学校の時良かったのか？ 初こ「うわあああああつ

／／／」……まだ希望しないなら言わないでおく）

名無（シヤアといつも遊んでるな？）

木綿季（まじで……？ 再来年の志望校そこ？）

義姉妹（一夏の嫁）：

箒（一夏に弁当作ってもらってウツキウキのどこを最近見た）

束（上に同じ。ただしお礼に何渡そうとしてんだ？）

鈴音（酢豚以外にもレパートリー増やすってさ）

ラウラ（上司がドズルさんだったとは……）

婚約予定：

セシリア（お土産の紅茶おいしかった）

シャルロット（本編にはまだ乗ってないがアタックがすごくなっ

た）

ロニイ（相棒……そっぴやもう一人のあいつはどうしてるんだろう？）

簪（ハマリングに太陽炉積んでほしいと言われた。できないことはないが……）

刀奈（なんで彼女が好意を持ったかは、SAOが終わってからな）

本音（癒やし。うん）

マドカ（はじめの時は一夏に殺意向いてたけど……これがビフォーアフターか）

一応身内？　：シヤア（話し相手）

喫茶リコリコのみんな：

千束（彼女がいる時はコーヒー一杯無料になる）

たきな（どうした最近？　なんか視線を感じるんだが……）

ミカさん（コーヒーいつもご馳走様です）

ミズキ（さっさと相手見つけてゴールインしてくれ）

クルミ（……なんだかんだで束に絡まれたりで苦労してるね）

ツイマツド副社長：

マ・クベ（優秀。いつもお疲れ様）

ツイマツドのみんな：

トビア・アロナスク（海賊というより宇宙賊では？）

シーマ・ガラハウ（デンドロビウムがトラウマらしい）

エルビー・プル（……年齢は（殴）

主任（名前教えて？）

オタコン（親友）

ダブスタクソ親父（ガンダムではないが口癖）

黄色い翼が特徴の人たち（リーダーは13）

以下構成員の変態技術者と社員（暴言は褒め言葉になる？）

ツイマツド^A実働部隊^Cの皆さん：

ダグザ・マツクール（全てにおいて優秀）

ジンバ・ラル（みんなのパツパ）

ククルス・ドアン（みんなのパツパ²。元リコリスの人たちに懐か

れてる）

イーライ（液体蛇、兄弟）

以下構成員のみんな（過去は知り合いの特殊部隊。お酒好き）

変態仮面部隊の人、いつも全員出るとは限らない（不服だ！）：

自分ガンダムの人（まだまし）

プロスペラ（4年前はありがとう）

東方不敗の人1（生身でデスアーミー潰せる人）

東方不敗の人2（1を倒した人。なんでおてて光るの？）

ネオ（仮面枠1兼副隊長。ムウ・ラ・フラガのはずなのにな……？）

シユバルツ（仮面粹2。仮面の色どうにかならん？）
ジヨルジユ（騎士粹1。そのガンブラ好きだね……？）
サイ・サイシー（拳法家粹。少林寺か……CCCにも取り入れようか？）

チボデー（ボクサー粹。ピエロは見ないようにね……）

アルゴ（パワーレスリング SAOじゃない方ダヨ）

マシユマー（騎士粹2。何の光い!?)

ゼクス（仮面騎士粹。あまり背負うなよ）

ニムバス（騎士粹3。こら、EXAMしちやだめ）

プロスペラの部下（開発者。変態技術者とはぼ同じ）

海外にいる知り合い：

ザビ家の皆さん（ドイツ在住。頭が上がらない）

バナージ・リンクス（←のお婿さん）

ミネバ・ザビ（→のお嫁さん）

リリウム・ウォルコット（セツシーのおばさん。緑の光に反応する）

カミーユ・ビダン（中国在住、治つててヨカタ）

花園麗（カミーユを狙ってるらしい）

ごひ（しあわせとのこと）

竜妹蘭（しあわせらしい）

デユノア夫妻（シャルのパツパとマツマ）

出番がこれからの人：

キリト（……ヘアツ!?)

第1話 行き着いた世界、そこは……

ウイイイイイイイツスどうもこっちの世界で5歳になったリユウセイ・オジロこと尾白流星です。

これを聞いてくれる人は、誰ひとりいませんでした……まあふざけた挨拶置いておくとして。

いやほんとに知恵熱って怖いね……42・3度が1週間続くって結構しんどかったヨ……シリシリシヌオモイデモウ……まあ、経験したことあるからまだマシだったかもしれないけどね……

そして稽古と挨拶を交わしてからから帰ってくると部屋にあった40cmくらいの球体——向こうの世界では見慣れたロボ「ハロ」が あらわれた！ ……まさかと思うがここにあいつのゆつていたやつ全部入ってるとか言わないよな？

とりあえずこいつどこからやってきたの？ ……まあこの世界じゃイレギュラーな存在だろうし……

とりあえ開け方はあの時と変わらない……さてさて何が入ってると思う？

とりあえず見せてもらおうか！ ハロの中身とやらを！

「……なんでや」

この言葉しか出ないよ。うん。

いやほんとになんでさ！ 今の世界じゃありえないほどの医療の情報があるんだよ！ 治療薬や特効薬の製造方法、再生医療の仕方とか……うん、病気の心配なくなった……じゃねえ！

まだここの世界決まったわけではないけど絶対ここまで進んでないでしょうが！ たぶん今までの世界全て合わせたもんだらうけど何？ ノーベル医学賞毎回取れて毎回祝宴に行けると？

いるかつ！ ……入っていたのはこれだけではなさそうだな。

そうひとりごちながら、更に解析を進めていく。

どれどれ………はあ………難なく予想はついてたけどさ。

なに？ 今まで言ってたからもう驚かんど。某たけのこ型の永久機関とか色がコロコロ変わる不思議装甲、何でもできちゃう発光原因

不明のやつのが作り方が乗っても驚かんど。

ふむ。まあ他にも色々あるが……一番気になるのはこの「生体認証システム必要」のところだな。

網膜と静脈の2重とはシヤアもなかなか気合いはいつてる。

『生体認証システム承認、アンロックします』

御開帳ツ！ ……ほう。ほう？

まあわかっていたが……これ設計図だよな。「一機のみ即時展開可能」と書いてるが……とりあえず今後調べまs「エイツ」「選択されました。」——」を展開します。所要時間は3分です』

ちよつとおお!? 勝手に押さないでいただけますか!? これあのとぎのままのやつだったら家飛ぶぞ!!

「何勝手に押しちゃってるんですか!?!」

そういうば説明をするのを忘れていたようだ。俺が今誰といるかというど……

天災こと篠ノ之束です。いやなんでさ。

なぜこうなったか……すこし話を過去に移そう。あれは4時間前だったか……

まず今世の情報を整理しよう。親は工業系の会社の取締役だったそうだ。名前は『ツイマツト』……絶対知り合いいそうな名前してるな。

そしてなぜ親が過去形なのかは……後に話すとしよう。いまは家で1人いや、今は3人か。親が偶然保護した姉弟も一緒に住んでる。姉の方は少し離れているが、弟の方は私より1歳位ほど若いそうだ。……訳ありそうだがこれも後に考えよう。

近くに剣道場があったのでその姉妹が行きたいと願っていたので通わせることにした。

普通人がやってるの見たら誰でもやりたくなるじゃん？ そこの俺もすることにした。結果はまあ……そこの師匠倒しちゃった。い

やなにこれ!? こんなにあっさり勝てるのものなのか!? 確かにトレーニングとかは人並みにしてるだけだしすこし（大量に）戦闘経験あるだけだよ!?

今回はそれが原因ではないだろう。姉弟の姉のほうがその道場にいた師匠の娘二人の内、姉と面識があるそうでうちにやってきたことだ。

そして家にあがるとまずこちらに感謝に言葉が向けられた。

『君がちーちゃんといっくんをここに?』

『え? ああ、見つけたのは僕だけどいって言ったのは僕の親だよ』

『ありがとう——っ!!』

『ザクレロッ!』

ちよつ突然タツクルしないで!? 何とは言わんがきつともつとおつきくなつたらSAN値直葬だから!

こんなに突撃する癖あるならカウンター覚えないな……

『君の名前は?』

『お、尾白流星です』

『じゃー君はりゅーくんだねっ』

おうふ、もう親しくなったな……

『あなたの名前は?』

『私は篠ノ之束! これからよろしくね!』

……てか放してくれませんかね?

その後少し話したあと自室に招き現在に至る。

——話を現在に戻そう。

結論、これでこの世界の1つの要素がわかった。

「IS——インフィニット・ストラトス」の世界がここにはあ『準備完了、ただいまより展開します』る?

あ、あいつ出てくるの忘れてt——

この日、ある家でなんの光!? が起きた。

第2話 アイエエエエエ!? ナンデ!? ユニコーンナンデ!?

「な、何(なに)と!?!」

光より現れたるは、から純白の装甲に加えて所々見える動きそーな継ぎ目、そびえ立つ白い一角……あつるえー?俺の目が狂ってなかったらユニコーンが10分の1くらいになって目の前に現れたんだが?……まああんなデカブツいまでも困るだけだしな。

横の束(たば)サンに至ってはピヨンピヨン飛び回ってはしゃいでるし……もううさぎじゃん。

てかこれよく見たら1号機じゃなくて4号機じゃねーか!エンブレム目立ちすぎだろ!シヤアなんでよりにもよってこいつチョイスしたんだよ!!(『知らんな』) もっと別のあつただろ!

「ねえねえ球体からなんか出てきたよ!?!りゅーくんこれなにこれ!?!」

「あーなんて言ったらいいのかな……僕もコレガワカラナイ」

なーんで元搭乗機が出てきたのかね……とりあえず……

「束さんとりあえずこれ何なのか調べてみまs「これコアがないよーん?」」

ホワツツ?もう調べたの?それはわからなくはないが……

てかコアってことはコイツも……

「ア……コアってなんですか?」

あつぶねえええISって言いかけたよ!?!あと少しで色々やばいことになりかけたよ!?!

「フンよくぞ聞いてくれたねりゅーくん、それはね……これです!!」

そう言っただけからともなくあのアニメでみた通りの結晶が現れた。てかどこから出したの?

「そしてえーこれをお(お)こ(こ)にいー」

こ(こ)にいー?

「こ(こ)うっ『ブツピガンツ!』」

……どっからそんな音出たの??てかこんなに軽くつけていいもの

なの??確か500もないはずでえげつないくらい国が欲しがってるはずだよ??

「……あれ?なんで?起動しない?」

ohそれは…というか『ブツピガンツ』ってなったら普通起動するのね…そつちのほうがなんでか気になるなあ

「少し触ってみますね…っっ」

「だだ大丈夫!」

何の光!?じゃなかった何の情報!?膝から崩れ落ちそうになったぞ!
!?落ち着け餅つけ、こういうときは素数を数えるんだ。2, 3, 5, 7,
11, 13, 17, 19……

「っふう……大丈夫ですよ束さん、突然情報の洪水が襲ってきただけです」

うん、ほんとにそれだけ。……あるえ?束||サンなんか金魚みたいに口パクパクしてない?エラ呼吸になったの?いつ某名前を呼んではいけないあの人がいる世界の海藻食べたの?

「なつななななな」

かの天災はどうしたというのだ(困惑)

「なんでそれを動かしているのーっ!」

うん、たしかにさつきより目線は高くなって周りに色々な情報…例えばSEだったり機体の状態とか……

……あ?

「た、束さん、僕もしかしくなくてもなにかやらかしちやいました?」

「……うん、盛大にやらかしちやつてる。」

……おーん……お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”
ん”ん”ん”ん”!!??(ニヤン〇ゆう風)

「アイエエエエエエ!?ナンデ!?ユニコーンナンデ!」

今振り返つてもわからん、どっからこんな音出たんだろうか???

「ま、まあとりあえず、気になるスペックは……」

あれ?またフリーズしたよ?またこいつなにかやらかしちやいました?てか泣きそうになってません?

「じろぎじがよわぐみえぢやうよお、グスツ」

あ、もう泣いてらっしやった。てか白騎士完成してるのね。……ん？なんだ？この地響きは？

「束に何をしたアアアー……!!」
「グフカスツ!」

痛つてええええ!!!あれ？絶対防御あるんじゃないの？なんで竹刃でダメージはいるの!?!千冬!!サンは化け物かつ!!

「束！何があつた!?!」

あまり言わないでいただけると……これ以上こいつは広めないほうが良いn「りゅーくんがあ……グスツ」では……

スウウウウー……（ー、ー）フウー……終わつたな。

「どういうことか説明してもらおうか、流星?」

「では辞世の一句を」

「詠めると思つたか?」

「ジーク・ジオ「俳句でもないわっ」ん」ツ

このとき、俺の意識は木刀に刈り取られた。

なぜか時も見えた気もした。

『……でここは？また死んだのか?』

少し前に体験したあの空間と似ている。

『死んだわけではない。ここは君の深層意識といったところか。』

『じゃあなんでいる?』

『今回渡した機体について話しておくことがあつてな……』

『なんかデメリットでもあるのか?』

『デメリットではないぞ。私がコアに乗っているのだから。』

『ほなデメリットか。』

『どこがデメリットだつ!おそらく50年先でも右に出る機体にはないらんぞっ。』

『ほなデメリットちやうか。』

『全く……まあ今回は話すのはこれくらいか。では』

『待つてくれシヤア……………ありがとう。』

『ん？めずらしいな。どうした？』

『少し前はあんな事あったが、今の所いまままで一番幸せだよ。』

『……………それが聞けてよかった。』

おやおやあ？シヤアもしかしくなくても泣いちゃってます？

『さっさと戻れっ!!』

『ズダッ!』

……………こつちにも痛覚あるんだ。しかしいい一発、もらえましたよ。

そして気が引つ張られる感覚とともにその空間を後にした。

「……………で戻ってきたと。」

「りゅーくん大丈夫!」

「まあなんとか……………何分くらい伸びてました？」

「ざつと3分くらいかな？」

「……………申し訳ない。」

「大丈夫ですよ千冬さん……………次は気絶しないようにしなきゃな。」

「『ええ……………』」

おい、なんでそんな人外見る目で見るんだ。そしてシヤア、あんたはしれつと頭の中で便乗するのではない。

「まあまあ……………どうです？もう遅いですしご飯でも食べていきますか？」

「なにっ！束!」

「ツ!?どうしたのちーちゃんそんなに急に真剣になつて？」

「こいつの作る飯は……………」

「……………ゴクリ」

……………まさかっただですか？

「うますぎるんだぞ!」

「なぜひいただかないとっ」

「今から準備するから待つといってくださいね」

「はーい!!」

嬉しいし、千冬と束の喜んでる顔かわいい……………普通に尊い。

それよりも……………あの事件ももうすぐ起こるだろうし。気を引き締

めないとな。

ちなみに作ったものは3人に非常に好評だった。

第3話 白き軍神の日

前回の事件があった少し後……

束さんは世界に向けてこのISについて発表する機会があった。結果は……まあ原作通りといったところか。かなり痛い意見もらっていた。俺はこっちの会社の発表があったのでその場に居合わせることとなっていた。

『PICとか絶対防御といったものは画期的だ。今後の研究に期待しようじゃないか』

こんなものはまだ、ていうか一番マシだったんじゃないか？ほかにも……

『こんな物が実際にできるものか！』

『実物を持ってきてくれ』

『ここは学校の発表会じゃないんだよ、よそでしたまえ』

おいこら最後のやつ、コロニー落としたるか。こちとら実績あるぞ。

まあ少し乱れたが……こういうったところだ。拍手していたのも俺と一緒にきてきたあつちで世話になったメカニックマンたち（現ツイマツド社研究員）だけぐらいだった……だから今回は原作通りとは行かないんだよなあ……これが。

場所は変わって篠ノ之家……束さんの部屋の前である。

「束さん、入っていいですか？」

すると返事はないが、扉が少し開く。

そこには暴れた後であろう壊れた機械、家具などがひどく散乱している部屋の隅にうずくまっている彼女がいた。

「……束さん」

「……」

「少しこいつからも話があるそうぞ」

そしてポケットからISの待機形態——こいつの場合2枚の小さなアームドアーマーDEがクロスしている飾り……をとりだした。

（「シヤア、頼んだぞ。」）

「ここはあいつに一役買ってもらおうか。」

「……？」

『少しいいかな束女史』

「……えっ？も、もうコア人格が!？」

「なんでも束さんを励ましたいそうだね。」

『今回はあのような忌まわしい奴らがいたが、決して全員が同じ意見を持つているとは考えられん。いま宇宙の玄関——ISSにいる複数人の宇宙飛行士なら絶対喜んでくれるだろう。そんなに絶望しなくてもいいさ。人類の可能性はこんな器が小さいわけではないのだから。まだまだこれからさ。』

「……グスツ……うん、それを信じたい。」

そのカリスマがここで役に立つとはな

(『……ユウデハナイ』)

「……その部屋の外にいる筈もなにか慰めてあげてください」

「……姉さん」

部屋に入ってくる筈。これで姉妹の仲も直ってほしいな。

おっとこの雰囲気は……

「つもる話をゆっくりどうぞ……聞きませんよ」

そして玄関を出ると千冬さんがいた。

「…あいつはどうだった？」

「なんとか立ち直りそうですよ……千冬さんも話してきたらどうです？」

「後で話しに行くとしよう………なんだ？」

突然携帯を取り出し誰かと話す千冬さん

顔が険しくなってきた。

「世界中からミサイルがここに来るぞっ！」

あ、白騎士事件でございますか。

——場所は変わって山の中

待機形態のISSを取り出し念ずる

そして純白の装甲を持ったISS——「アレス」を身にまとう。

横では白騎士を装着した千冬さんが束さんにレクチャーをうけて

いる。

(「行くぞ「アレス」そしてシヤア」)

装甲の継ぎ目から青い光が溢れ出し、目の前には見慣れた文字が現れた。

N・T・Dと

このシステムのあつちでの名称は『ニュータイプドストロイ』だったがこつちでは『ニュータイプドライブ』のほう为正しいだろう。

この機体は人類の未来を見せるべく一緒に来たのだろうから。

次々に下の方から展開されていき下から青く光るサイコフレームが露出していく。

そして最後に一本の角が割れ、マスクの下から特徴的なスリットとツインアイ——ガンダムフェイスになる。

「へえー」

「変形するのか……なかなか粋なデザインだな？」

「そいつはとも……作ったかいがあるものです」

このデザインはなかなかのものとは思わんかねシヤア？

まだなにか疑問がありそうな顔をしていますな千冬さん？

「なぜシールドが飛び回っている？」

『わたしがこのファンネルの操縦をしている。』

「っそれはコア人格!? もう発現したというのか!？」

「ええ、運が良かったようだね。」

シヤアに頼んでサポートしてもらっていることを偽っている。

なぜかは……今すぐこんなことマスターしてたら絶対怪しまれるからな。

「オペレーションは任せて!」

「では、行きますか!」

「ああ!」

そして2つの白が空に上がった。

日本洋上にて

『このあたりが一番通るそうだからこのあたりでよろしく!』

「了解!」

まずは挨拶代わりに一番数が多い熱原体群に向けてビームマグナムを発射する。

……いままで100くらいは消えたか?横で千冬さんが物欲しそうにこれを見つめる。

「……私もそれ使いたいぞ。」

「腕壊れるかもしれないので今回はなしで。」

今それ起きたらほんとに困るから、うん。

基本は実体剣とアームドアーマーVNで切るか、叩き潰す

少し離れたものについてはアームドアーマーDEのキャノンで破壊していく。

千冬さんは剣と価電子粒子砲を使っている。

「っ!!千冬さん15時半方向から5つ!頼みます!」

「はああああっ!!」

この距離は今使っている装備とファンネルでは撃墜できないことはないが、その後に攻撃が薄くなる。

ここは彼女に頼もう。

彼女に真つ二つに叩き切られて海に落ちていく巡航ミサイル

「ありがとうございます!」

たまにこれがある……そしてすぐに対応してくれる千冬さんありがてえ……

……さてよ。こんなに多方向からやってくるものなのか?しかも数が異常に多い。もう合わせて5000は落としているはずだ。カウンターもあるし間違つてはいないはずだ。

——ここで原作にはなかった厄介なやつらトップ3を紹介しよう。

第3位……海面すれすれでやってくるミサイルだ。わざわざ高度を下げて潰さないといけないのがめんどくさい。

マグナムを使おうにも一発あたりの効果が薄いのもうざかったり

する。

第2位、それは

『りゅーくん極超音速体接近5！できる!?!』

「了解！」

アームドアーマーDEのキャノンとマグナムで弾幕を張り撃ち落とす。別方向から2機来たがそれは近接武装で落とせた。……またどこからか人外を見てる目で見られてる気がするが気にしないキニシナイ……

そして、

『真上より接近の高熱源体19！』

なっ！この起動はっ!!

「ちいっ！あいつらロフテッド軌道かつ！」

「っこいつは迎撃しようにもできないぞ！どうする束！」

厄介なやつ第1位、大気圏再突入をしながらマッハ20を超えてここを狙ってくるICBMやSLBNだ。現代兵器で今の所完全な迎撃がこの段階に入るとほぼ不可能な兵器。

だが今使っているのはずっと先の未来の兵器と世界最先端のISのセンサー類、そして頼もしいあいつの援護だ。

すぐさまVNを拡張領域に収納、立て続けにすぐさまアームドアーマーSBを展開、照射モードにセット。

「おおよそ予測できたかシャア!?!」

（『ああ、今そちらにおおよその位置をあげる！』）

これならっ！

「当たれええっ!!」

右手よりほとばしる紫電のビームはすべての獲物を食らいつかんとはしる

そして空には巨大な火の玉が作られていた。

「っふう……やるな！シャア！」

「迎撃できたのか……あれを……」

だーかーらーなぜ人外を見る目で見えるんですか？

「あれはアシストあったから……ね？」

『あれはミサイルがある場所に点つただけだぞ？』

……なんであたったんだ？まさかもうNT超覚醒してたりする？

『ファンネルあんなに動かしてる時点でそうでは？』

いやいやそんなこと……あつ……

ファンネルで頭あまり回してないし……

そっかあ……こっちでも忙しくなりそうだなあ……

……今回束さんが起こしたわけではなさそうだ……一体誰が？

「ふう……終わったか？」

『それフラグだよっ！水上と空中にさつきとは違う反応が出た！それぞれ戦闘機と軍艦かな？多分こいつらも乗っ取られてるから無力化できる？』

「だつてさ……千冬さん、あと一仕事でうまい飯が待ってますよ！」

「それはそれは……手を抜くわけには行かないな！行くぞ流星！」

「了解!!」

この日、現代兵器がことごとく破壊、無力化されたにもかかわらず死者は0人というISの圧倒的な力が示されたことを人々は後に「白騎士、白獅子事件」と呼んだ。

そしてその名を

『「どこが白いバンシイだっ!」』

と否定したい一人の少年と一人の思念体がいたそうなの。

後日

その後白騎士でマグナムを試射したが案の定腕の衝撃が消しきれないことがわかった……千冬さんそんな顔しないで。罪悪感すごいから。

……一般IS用の改良型作るか。

第4話 和解

ユニコーンガンダム4号機「アレス」がISと化してともに別世界にやってきた流星。

「アレス」が現れた後に白騎士・白獅子事件（「誰が白いバンス（ry）」を引き起こす。

その事件はISの有用性を示す物となったが……

side 流星

あの事があつた後のとある午前中、我が家で俺もとい流星と一夏、箒、千冬、そして束がリビングで輪になって座っていた。ハロは箒が抱えてる。

あの事件は原作では兵器の可能性を示されたとされていたが、今回俺たちが起こしたものはいきなり絶対的な強さの象徴となった可能性が高い。

なんせ誰かがSLBMとかICBMまでも叩き落としたんだから。（『やったのあんただろ。』）だ、だまらっしやいっ！

おそらく原作通りに束は世界に追われる立場になるだろう。あの事件前に少し話せたとはいえまだ完全に仲直りしたわけではないだろうしな……

そこでこの話し合いの立場を設けた。仲のこじれたまま姿くらましたらもつと悪くなるだろうし。ずっとあと一歩だつてゆうのなんかむずむずするからな。

「まあみんなリラックスしててください。」

『リラックスー！リラックスー！』

ハロが一部をオウム返しする。

一夏と箒が麦茶をちびちび飲みながらそれを聞いている。

そして千冬は腕を組んで目をつむっている。寝てr「起きてるぞ」あ、そうですか。

しかし束は少し落ち着きのない様子でそわそわしていた。……あのあと色々情報公開しろとかあの兵器はなんだとか世界中からこつ

ちにこいだのこの研究所で働いてくれだの……俺のせいでもあるから責任を感じている。うちの会社でかくまえるなら今すぐそうしたいが、政府や各国からの圧力が凄まじくなり会社が潰れる恐れもある。もしそうになったら一夏や千冬を養えなくなるし……本当に申し訳ない。

「東さんま落ち着いて……いまは箒さんと仲良くなるためにこの場所を設けたんでしょ。いまは箒とだけ向き合ってください。」

「うん、それもそうか……ねえほうきちちゃん」

「何、姉さん？」

うん、原作よりかはだいぶ丸いと思うけどまだ少し引つかかっている様子。IS関連だろうか。

「私の夢って知ってる？」

「それは……ううん、知らない。」

「私の夢はね、宇宙に行って色々なことをしたいんだ！例えば色々な星にいったり初めての足跡をつけたりまだわかってないものを取って調べたり……とにかく色々やりたい！それをするために作ったのがIS——『無限の成層圏』なんだけどね……」

その話に耳を傾ける箒や一夏たち。ここにいる誰もが否定的な意見を持っていない。むしろ全員興味を持った目で見ている。

そういつてるとつけていたテレビのニュース番組がちょうどISの話題に変わる。

『次です。今回のあの大量のミサイルが日本に向けて発射された事件に使われた篠ノ之東氏が開発したとされる「インフィニット・ストラトス」通称ISについて元防衛相の茂部さん、どう考えますか？』

『今回の事件はねーこの機械？がなんのために開発されたか知らないけど現代の兵器を無力化できてあのステルス性を持つていたら今後どこかでもテロとして使われる可能性が非常に高いですねーうん。』

東がうつむいて手を強く握りしめる。

その手を箒が優しくおおう。

「姉さん、姉さんのやりたいことはよくわかったし、いままでこれをするためにいつも頑張って設計図を書いていたのも知ってる。あたし

も宇宙は一度行ってみたいな。……そうだ！宇宙で剣道してみたい！姉さんの作った機械で宇宙ではじめて試合した人になれるかな？」

束の着ている服にしみができてそれが広がっていく。

「できれば私も姉さんと仲良くしたい。まずは姉さんの人見知りを直すところからかな？大丈夫！私も手伝うよ！」

『ダイジョウブ！ダイジョウブ！』

「……えっ……ぐすっ……う……うわあああああ!!」

ついに堰が切れたかのように泣き叫ぶ束。

一夏や千冬も目尻に光るものがある。……いかん、俺の真上に雨が降ってきたな……

でもこれでもう安心だろう。きっと彼女たちの溝は埋まった。

（『……グスツ、久々にいいものを見れたな。』）

シヤアよ。あんたそんなに涙もろかったっけ？

しかし今の現実是非常に残酷だ。後数年もすれば家族が引き裂かれることになるのだから……彼女たちには気強く生きてもらいたい。

「……もう昼か、箸と束さん食べていきませんか？」

「……うん！」

「はいっ！」

目の周りが赤くなった姉妹が元気よく返事した。……その心意気だぞ。

場面はぐると変わり、昼食後、郊外の家から東京の一等地にあるツイマッド社本社に向かっている。もちろん車で迎えに来てもらったさ。ISは使っていないよ？

というのにも新たに開発したものを本社に運び込んだので是非見てほしいとのこと。……やべーのじゃないだろうな。

ここでうちの会社の話をしよう。うちの会社は俺から数えて6代前が作った会社だそうで初期は工作機械をメインに作っていたそうだ。その後、製薬やIT産業、重機、軍事などにも事業が進出している。はてまでは今話題のISにも興味を示している。

……もちろん最後は俺のことだぞ？

結論を言うとは色々な分野に繋がっている大企業というわけだ。

しかし考えてほしい。今の年齢はまだ二桁にも行っていない7歳だ。前代は夫婦もろとも事故にあって死んでいる。……イギリスの列車で起きたテロに巻き込まれたんだ。偶然のまた偶然か……ちようどイギリス似できた支社を見に行くためにな。それで引き継いだわけだ。

それでもなんでこんなやつが社長なんだよ!?ガキが会社経営できるか!?と思つたその君、安心してくれ。今運転している目の前に代理がいる。名前は「マ・クベ」というどこにでもいるツボ好きだ。

「業績の方は順調か？」

「ああ、大方想定通りだよ。」

「社員のクレームや勤務の問題、社内トラブルなどは？」

「それも一つもない。労基がうんとすんとも言えない完璧なホワイト企業のままよ。」

「……そうか。マ、いつもありがとうな。」

「こちらこそ、こんな安定して高収入なものに感謝してるさ。リュウセイさん。」

彼ははつきり行つてカリスマの塊だ。前世の彼よりひとときわ輝いてみえる。決して若いだけではないだろうな、うん。

「ところで今回はあいつらどんなのを作つたんだ？」

「もともとわれらの世界にあったもの、といったところか。」

「…ハ口か。よく再現できたな、あいつら。」

マはあのハ口について知っている。そこに何が入つてたかも。

最初に彼に話したときは目をひんむいて椅子から転がり落ちてた。多分そつちの才能もあるな。

その後話し合つた結果少しずつこのハ口の情報を生かしていこうという方向性で決まつた。兵器関連は使用していなかったが、いずれ使わざるを得ないときが現れるだろうということに削除はしていない。今こそ使い始めるときだ。

「マ、少し気になるものが最近出始めたのだがなこれからきつと大事

になつてくるぞ……」

「ほう、それはなんだ？」

「IS——インフィニット・ストラトスき。」

その後本社についたあと、できたできたと言つてはしゃいでいるものとメカニックやクルーメイト達……：現在のいい意味でも悪い意味でもマッドの兆候が見え隠れしている研究員や技術員たちが見せたのはあの世界と同じで俺の持つてる情報おぼけではない人工知能搭載の学習する球「ハロ」だった。これを製品化する旨を伝えると肩を組み合つて喜ぶやつもいれば嬉し泣きするやつもいた。そして帰る最後にとつておきのこと——ISを話すと話していた会議室は雄叫びに包まれた。俺が何を話したのか……のちにわかるだろう。

「この技術をついに使うときが来たぞおお!!」

「ぼくたちのかんがえたさいきよのISをつくるんだ」

「新たに発見したみどり色の粒子が使えるのでは」

とかとか……おい、最後のやつ地球砂にするコから始まる粒子じゃないd「もともと鉄さえ粉々にする粒子だが性能の変わらないまま無害化して量産できるようにになりました！」よろしい。ならば量産だ。企○連もにつこりだね!!

そんなこんなで夕方になつてまたマに家に送つてもらつている時、ふとなにか明るいなとその明るい方を見ると

東京スカイツリーが燃えていた。

……あれ?こんな原作にあつたつけ?

世界の構成がわからなくなつてきたな。

第5話 ファーストコンタクト

話し合いの立場を設けて篠ノ之姉妹の仲をもとに戻すことができた流星。

その後ツイマツド社で新製品の説明を受けた帰りに……

side 流星

東京スカイツリーが燃えていた。文字通り東京スカイツリーの下側から火が上がっていて東京スカイツリーが黒煙に包まれていた。

……あれ？こんな事IS原作にあっただけ？いや、なかったはずだ。おそらく不慮の火災もしくは……

「テロでも起こったか？」

「……見に行きますか？」

「ああ、最悪アレも使うかもな。」

「アレですか……あの事件でも使ったというのに、いつかバレますよ？」

「その時はその時さ。」

「全く……むちゃやしすぎないように頼みますよ。そういつていつもあっちで無理して怪我とかしてたじゃないですか……」

「わかってますって。……ではいつてくる。」

「彼と彼女たちのご飯には間に合わせるように。」

「……了解。」

やはりマ・クベはこういうときの対応は普通の人では考えられないほど冷静だ。さすが戦争をしていただけある。……最近こちらの心配ばかりするようになったが。

車を現場から少し離れた位置に止めてもらい、車を降りて人目につかない路地裏に向かう。

手元にある飾りを見てそれを握りしめる。

「今回も頼んだぞ。『シヤア』」

『……無茶するなよ』

side???

あちらこちらから火が上がっている日本一高い塔の足元にあるシヨップینگセンター、そこではいったいどれだけの仲間が残っているんだろう。ふと気になって隠れている座席の横にあるガラスより下を見下ろす。たまに爆発音が鳴り響く中、煙でよく見えるマズルフラッシュもさつきよりだいぶ減っている……下での作戦はうまく行っているのかな？

「……つつ!?!」

……まだうまく行ってなさそう。

突然地面が揺れてもたれかかっている背中がずり落ちて倒れそうになるのを必死に堪える。

さつきからずっとこれが続いている。この建物が倒れるのも時間の問題かな。

揺れが収まるのと同時にいくつもの銃声が聞こえて盾にしているソファアに弾が吸い込まれたり弾かれたりする。

銃撃音が止むと同時にソファアから身を乗り出して今までこちらに撃ってきた目標——テロリストに向けて撃つ、撃つ、撃つ

額から血を吹き出して倒れていく覆面をかぶった人たち。

死んだかどうか確認する暇なく、すぐに近くにあつたカウンターに片手で体を持ち上げてカウンター上を滑って降りて身を隠す。

するとすぐさま新たに銃撃音が聞こえてものに当たる音がする。

ここは戦場だ。一瞬でも気を抜けばさつきの人みたいになる。

……今日だけで一体どれだけの人を撃つたのかな。20は超えているはずだけど一向に減る気配がない。

「……あなたは……誰？」

横を見ると珍しい水色の髪を持った姉妹？が同じように身を隠して身を寄せ合っていた。そして妹と思われる方は少し怯えていて、姉と思わしき方は妹をかばうように前に立ちこちらを見ていた。冷静に状況を伺っているあたり、こういう状況には慣れているっぽい。……逃げ遅れたのかな？今からでも階段を使って間に合うかどうか

……怪しいね。とりあえず敵ではないことを伝える。

「あたしは悪い人をやっつけにきたんだよ！」

その言葉を聞いて安心したのか

「……気をつけてください。」

敵ではない事はわかってくれたごようす。

またもや音がやんだのでカウンターから飛び出して出して敵に向かつて撃つ。しかしブラフだったようで敵はまだ弾切れを起こしておらず、こちらに向かつて撃ってくる。持前の瞬発力の高さとの小ささを生かしてそれらはすべて躲した。

はずだったけど

「っあああっ！」

右腕に鋭い痛みが走って思わず銃から手を放してしまい片膝が床につく。床に銃が落ちてゴソツと鈍い音になる。思わず傷口を空いている手で塞ぐ。それでもなお落ちてくる赤い液体。

撃たれた。やらかした。

思ったより疲労が溜まっていたようで体が追いつけていなかった。

戦場では一つの判断の過ちが死につながる。

近づいてくる足音。

これから起こることを覚悟して目を強くつむる。

乾いた音が2発……そして倒れる音。

……あれ？死んで、ない？

ゆっくりと目を開けると血を流して地に臥せている大柄な男とそれに向けて銃を向けている青髪の大きい方の女の子。

「……傷、大丈夫ですか？」

「……助かった。ありがとう。」

その後あたりを探したがもうテロリストはいなかった。姉妹に手伝ってもらい適当な布切れを探して患部に強く巻く。銃弾は貫通していた。布に赤く染みがすぐできるが、多少はマシだろう。

エレベーターに向かい、呼び出しボタンを何度も押すが、4機とも

動く気配がない。

「司令部、誰か応答してください。」

『……ガガガッ…ザザッ……』

インカムで司令部に向けた通信もつながる気配がない。

そして階段の方は……

「……そんな」

本来中にあるはずの階段がなく、外の風にさらされていた。所々で階段の一部が宙に浮いている。見下ろすと確認できる階段が残っているのは50m下の方だ。

思わず膝をついてしまう。

降りるための道を完全に失った。

今までよりも一際大きな爆発音が起きる。

また地面が大きく揺れてついには下からは金属が軋む音が断続的に、かつその音が大きくなっている。

「おねえちゃんっ」

「大丈夫、大丈夫だからっ」

姉妹がお互いを抱き合っている。

最後に日の入りを見ようと外の景色がよく見える外周へ歩く。眼下にはいる東京の街並み。

……煙がなければ完璧だったんだけどね。

そっか。あたし、ここで死んじゃうのか。

ものが碎ける音となにか重いものが地面につく音が聞こえる。左の少し離れたところからだろうか。

碎けた音はガラスが割れた音に近い。誰か来たのだろうか。

音が起きたそちらに顔を向けると、大きな翼のようなものを背中に持った白い機械のようなものがたずんでいた。

その機械？が光ったかと思うとスモークがかかったヘルメットを被ってバイクのライダースーツのようなつなぎを着た子供くらいの背丈の人があらわれていた。

あの乗っていた？機械は人間で頭に当たる場所がキョロキョロと周りを見るような仕草をして立っている。

こちらに援軍が来る予定はないはず。確認するためのインカムはこんな時に限ってうんともすんとも言わない。

……しかしここは地上から300Mを超える地点。どんな技術を持っているのだろう。

とつさに拳銃をそれに向けて少女たちの前にたつ。……止血してもらったとはいえ痛みは引いてない。銃を持つ手が震えて標準がブレる。

「……なんのようですか？」

『……』

反応なし。敵か味方かもわからない。

銃やその他の武器は見当たらない。しかしさつき起きた光のようになにか突然現れるかもしれない。ましてやさつきの機械？が襲ってくる可能性もある。

突然右腕が光りだしその人の右手に拳銃が現れた。やはり何かしらの銃器は持っていた。

デザートイーグル・50A.E。マグナム弾を撃つことができる大型拳銃。あんなの当たったらひとたまりもない。

そしてそれは左手も添えられてゆっくりとこちらの方向へ向けられる。

こつちを狙ってくる!?

震える右手を左手で強引に抑えて狙いを定める。

突然相手が銃を上げる速度が早くなり、そして

ズドオオンツ!!

相手の撃ってきたマグナム弾は

「ぐうっ!？」

後ろで青髪姉妹に近づいていた男の頭を撃ち抜いた。

そして

『……助けに来た。』

機械で変換されたであろう中性的な言葉が聞こえた。この時、ヘルメットが動いたので顔が少し見えた気がした。

side流星

路地裏にはいつて適当な服装……ジオンのパイロットスーツに着替えてISをまとい、背部のアームドアーマーD Eのスラスターで一気に空にあがる。50秒でいけるか?いや、40秒で間に合わせる!

このタワーへ向かって飛んでる際ショッピングセンターに向かう予定だったが、ネットをつないですこし検索したところ、

「本当か!？」

タワー内でも戦闘が発生しているという情報があったためそちらに変更した。

変更した理由はこれだけではない。

なんと少女が一人で戦っているというのだ。

もう終わってるかもしれないが、行かないわけにはいかない。

アームドアーマーD Eと機体各部のスラスターの出力を上げてスピードを上げていく。

向かっている間にもスカイツリーの足元で爆発が起きて目に見えて大きく揺れる。

倒れないでくれよ。

現場に到着し、勢いのついたままショルダータックルを窓にかまして入った瞬間PICで急停止して床におりる。

赤く滲んだ布を腕に巻いてる白に少しベージュがかった髪の毛の一人少女と青髪の毛の顔つきの似た二人少女がハイパーセンサーで拡大された視界に入る。情報通り彼女が戦っていたのか怪我もしている。そして別の二人……あれ？あの青髪二人どつかで見たことあるような……？

怪我の手当をできているなら戦闘は終わったようだ。とりあえず機体から降りてシヤアに操縦権を一時的に委託、周辺の警護に当たってもらう。

「……なんのようですか？」

白い髪の毛の少女がこちらに銃を向けながらきいてくる。下手に答えて敵と判断されるのも困るしな……いやほんとにどう答えようか？ここで下手に答えて敵対するのも困る。

………ん？あれ敵か？こつちをみながら青髪少女たちの背後より近づこうとしている大柄な男が一人。当の本人たちはこちらを困惑や怯えといった様々な感情のこもった目でこちらを見ていて後ろに気がついてない。男の手にはサバイバルナイフを持っている。やるつもりか？

『仕留めきれないやつが一人いるぞ。』

わかっている。銃を取り出してゆつくりと上げていき、その男を牽制する。白髪の毛の少女は脇をより締めて警戒し、姉妹は怯えの表情が強くなる。誠に申し訳ない、後ろに敵がいるんだ。

男が踏み込んで彼女たちに飛びかかろうとする。ええい、致し方ない！

銃のトリガーを引き、男の頭に向けて撃つ。放たれた銃弾は男の頭へと吸い込まれて行き、

「ぐうっ!？」

男が地に臥せた。……もういないか？

〔「生体反応はもうここ以外ない。」〕

なら一安心か。変声機を起動し、声を変えて目的を伝える。

『……助けに来た。』

白髪の少女は銃をおとして崩れるように地面に座り、青髪少女たちは今まで我慢していたのか涙を流し泣き始めた。

その後青髪姉妹はアームドアーマーDEにベルトを通して体を固定し、手を肩に載せて、白髪少女は腕を怪我しているので右腕を使わせないように両手で体を持つ……いわゆるお姫様抱っこで上空からゆっくりとおろした。〔「緊張してるだろう？」……うるさい。〕

多くの人の前だったので、長居はまずい。3人を下ろすとすぐに上空に飛び上がり光学迷彩を起動、そのまま家へと帰りご飯をたべた。

のだが

「流星、なんでこんなに遅かったのか説明してもらおうか。うん？」

「……ハイ。」

千冬からありがたいO☆H A☆N A☆S Iもあった。内容はざっくりいうと心配したとかなんだとか……申し訳ない。

外では空には一番星が輝いていた。

最終話 A hero who is dared
evil

国連報告書

2021年5月21日

世界各地の天文観測所より総数12000を超える全て70Mを超える隕石群、中でも一つは800Kmクラスに達するものが観測され、全て地球の直撃コースとなっている。

直撃するのは6月12日UTC3時頃の予定。

迎撃はほぼ不可能。この日が地球最後の日になるだろう。

この情報は決して外部に漏らしてはいけない。

が、知れ渡るのも時間の問題だろう。

side 流星

ある夢を見た。それは空からいくつも地に落ちてくる夢。一際大きな星が地に着いたとき……

「ツツ!? つ、はあ、はあ……」

ベッドから飛び起きる。今は……

『今の夢は何だ!? もしや……これから起こることなのか!?』

「……願ってないが、見てしまった以上起こるんだらうな。」

『……どうする?』

「……今準備できるありつたけの火器を準備してくれ。」

『分かった、準備を進める。』

朝、階段を降りると、テレビがついていた。一夏と千冬が食い入るように見るそれでは、速報の近づいてくる大量の隕石で話が持ちきりだった。

それを横目に俺はツイマッド社の研究所へと急ぐ。

「プロスペラ……今製造済みのガンビット、全部渡してくれ……この通りだ」

研究所内、ガンビットが200機以上、ずらりと並ぶ保管施設でプロスペラを始めとする技術者に頭を下げる。

「私は反対するわ……でも、あなたはいくのでしょうか? みんな、準備を始めるわよ」

「つ……ありがとうございます」

「スレッタたちより高いパーメットスコアの耐性でこの子達を、うまく使うのよ。」

「この星を、頼んだわ」

「……了解」

『こつちも最後のあの装備、準備完了だ』

よし、これで全ての準備が整ったな。あとは……

とある山中、即席のマスドライバーに機体をのせ、準備を進める。

「流星っ！ ここにいたのか！ 何をしている!？」

「りゅーくん……」

千冬と今どこに姿をくらましているか、わからないはずの束が現れる。

「……俺にできることをしてきます……そう言えば通信機器はここにおいでるので上に居るときに声を聞かせてください。それだけでも嬉しいので……それでは行つてきます」

「待てっ、流星！」

「りゅーくんっ！」

マストライバーの横にある同じく即席の通信所を指差し、機体のメインエンジンの出力をどんどんと上げていく……よし、VOBを起動。一気にレールを駆け上がり、宇宙に上がる。

「ぐっ……やはりこの衝撃はきついな……」

初速で8000Km/hを超え、今尚加速している。

数分が経過し、宇宙。第一宇宙速度に達し衛星軌道に入り、地球の重力を使つて加速、一気にその目標に接近する。そしてハイパーセンサーで捉えたのは……

「やっぱり、でっけえな……」

（『私が落とそうとしたアクシズより遥かに大きい……そして周りにもゴロゴロと石が……本当に、やるのか?』）

他に誰ができる？ あんなデカブツ、ISでもむずいに決まってる。

「全Gビット展開、パーメットスコア7！」

次々に拡張領域から出てきたISサイズのザクやGNX、ジンにGビットといったアニメガンダムという敵側の量産型が次々と取り巻きの隕石をバズーカやビームライフル、ビームサーベルにヒートホークといった多種多様な武器で、大気圏で燃え尽きるサイズにまで砕いていく。

アレスの一部の装甲がサイコフレームとはまた違う青の発光をしている。

頭に200機以上の機体の情報が溢れ返っている。きつと体にも

支障が出てるのだろう……だがこのくらい！

『おい流星！ バカ野郎戻ってこい！』

『りゅーくん無茶しないで！ もうそんなことしなくていいから！』
通信器から聞き慣れた二人の声が聞こえる。

しかし今はそれらに対応している暇もない。ただひたすらにソラに登っていく。

「続いてアームドアーマーDE、シールドファンネル展開！」

持てる力全てを持って立ち向かう。それ故に話す暇もない。

こいつ等の制御と俺自身の操作に必死なのだから。

VOBをパージして真っ直ぐあの1番大きな隕石に真っ直ぐ向かいながら、周りにいる大量のGビットとアームドアーマーDEを操作している。

「単一能力、《NT-D La+》起動！」

機体がサイコフレームの光で発光を始め、サイコフレームが緑色にひかりだす。

——
なんとしてもあの隕石群を落とさせる訳にはいかない。

「ゼラアアアア——ッ!!」

対艦刀で隕石を粉碎する。その手は止まることを知らない。

「チィッ！ 数が多い！」

あのとぎのELSとまでは行かないが、こっちは援護が一つもないからな……

こっちはSEと絶対防御をOFFにして、そのエネルギーを武器やスラスターに回して一つでも多くの隕石をより早く壊すために使っている。

……後で束には怒られるだろうな。

大方の隕石は壊せた……あとのやつは海にドボンのコースだけ……しかし、あのサイズなら津波の心配はないだろう。

あとは……

「隕石の親玉を、どうにかしないと……」

眼前で並走している巨大なこれ……壊すのには、時間がかかりすぎるからそれは無し……軌道を変えるのは……行けるか？

「やって見る価値は、あるか！」

巨大隕石の横に機体を密着させ、全スラスタの推力を最大にして、サイコフレームでも斥力を発生させる。使えるものは、使う主義なんぞな。

そして、次々にGビットやシールドファンネル、DEが隕石に取り付き、同じように押すが予想軌道は一向に動かない。

「さつさと逸れるよ、このデカブツ！」

成果がなく、焦燥だけが積み重なっていく……

そして地球に近づき、周りが真っ赤に燃え始めた頃、異変が起こる。

隕石の表面にひびが入り、ガスが噴き出す。これは……摩擦熱で引火するっ!!?」

「ガアアアアツ!!?」

「何なのよ、あれ……!」

完成して数年も経たない喫茶店の店長と従業員、とあるファーストリコリスは空を見上げる。

「ねえ、先生。どうすることもできないの……?」

「……残念だが、私達はどうにもできない。これが、自然の摂理だ……最後にコーヒーを飲むとしよう」

「……ん? 白獅、子?」

「どうした千束?」

「ううん、多分空耳だよミスキ。さ、早くコーヒーのも?」

「いちかあ……怖いよお……」

「大丈夫、大丈夫だからな、鈴……」

一夏たちの家、ちょうど訪れていた鈴音が真っ赤になった、空を写すテレビを見て震えている。

「こんな時に流星は、どこに行っただ……?」

「……………あそこに、あの時のISがいる」

「……………かんちゃん？」

かつて彼に助けられた青髪の少女は、宇宙に彼がいると直感で感じ取る。

「白獅子さん……………負けないで」

「バイタル異常……………!? りゅうくんが……………!」

「いや、まだ動いてる……………あいつは諦めてない」

彼の情報が逐一アップロードされる端末を見送った二人の女性は空に想いを馳せる。

「……………頑張つて、流星（りゅうくん）!!」

「……………い！ 大―夫か、流星!」

「ぐうツ……………なんとか、な」

咄嗟に左半身で守ったが、身体中が焼かれるように熱い。いや、これは焼けてるか。周りで操作していたGビットとシールドファンネルが破壊されている。随分お怒りのようだな……………今のでXCも吹き飛んだか。

「がはっ……………はあ、はあ、はあ……………グツ」

さっきので隕石から離されたか。んで、損害は……………肩が無いか……………絶対防御のエネルギーをスラスタ―やビーム兵器に回したツケが来たか。

……………だが、なんのこれくらいでくたばって構うかつ!

痛覚を遮断し、意識吹き飛びそうになるのを引き戻す。そして、また目標に取り付く。

「何百年も生きてて石ころ一つも押し返せないか？ 気合いを見せろ、尾白流星!」

背中に載せていた物体を円になるように展開する。すると、緑色の結晶が円状に形成され始める。フロントアルが使ったときは黄色だっ

たがなぜ今は緑色……やはり、サイコミュの謎は何年生きてもわからないことが多いな。

「サイコシャード……これを使うことになるとはな……！ 胸糞悪いが、使わせてもらおう！」

どんとんと光の輪は広がっていく。

「この機体は、伊達じゃねえっ!!!」

アムロの言葉を借り……っ!? 機体から光が溢れて……!?

『サイコフレームのオーバーロード……これなら!』

さっきまで地球に向かっていた隕石に緑の光が纏われて、あからさまに地球とは別の方向へと動くのがわかる。

『隕石の速度のベクトルが地球からそれていくをとった！ 上手くいったぞ……流星』

へへっ、やればできるじゃねえか、俺……は。

……まずい、ピントが合わなくなってきた。随分と無茶したからな……

少し……寝る。

(『……ゆっくり休んでくれ。あとは、私が引き受ける』)

国連議場内

6月13日

……奇蹟が起きた。

原初のIS『白獅子』によりすべての隕石は破壊。超大型隕石も謎の光により地球にぶつかることはなく、太陽系を離れていくコースに入ったことが分かっている。

なぜそのような現象が起きたかは現在調査中だが、一つだけ言えることがある。

白獅子のパイロットに心からの感謝を。

ツイマッド社報告書

この資料は各部門長以上のみしか閲覧を許可しない。

全員目を通したらこの資料をすぐさま焼却せよ。

2021年12月24日

衛星軌道で漂流していた尾白流星を回収。ISは装着されていた様子で発見が4日遅れたら生命維持機能が切れていた。

全身の火傷に左肩から左胸にかけて欠損、左上部の肺の喪失及び心臓部に傷あり。緊急手術を行った。傷跡の後遺症が残っていることに注意されたし。現在、欠損部の培養を行っている。

今日中にも目を覚ます可能性あり。リハビリにはアーガス社提供のメデューキボイドを使用する予定とする。

ユニコーンガンダム4号機『アレス』は追加装甲を取り付けツイマッド社偽装第2世代『アレックス』とする。

2022年10月28日

療養中に改装、及び修繕中のアレスを持って脱走。20時間後に帰還。「ドイツに用があった」とのこと。

同年11月6日

新型VRMMOのソードアート・オンラインに捕えられた。覚醒の
めどたたず。

同年12月15日

アレスの修繕及び、アレックスへの偽装工事完了。

IS 原作開始

第1話 二人目

side 流星

「——今日の授業はここまで。課題はこのP24から28までで忘れないように。この後質問のある人はいつも通り職員室に来てください。6時半くらいまでならいるからね。じゃあ終わりまーす」

そう言われて今まで書いていたノートと教科書を閉じて腕を持ち上げて伸びしながら大きくあくびする。少し目を休めようと外を見ると2月下旬の春の芽吹きがあちらこちらに見られる、ここ一ヶ月ほど見続けている学校の庭が視界に入る。ふう……平和だ。落ち着くなあ。

周りの人を見渡すと席が一番うしろなだけクラスの様子もよく見える。

友達と今日の授業の内容について議論している人や週末の予定を話している人、なんかの話題で盛り上がっている人たちもいればイチャイチャしてる黒の騎士と閃光……おい、いつもよく大衆の前で平然とできるな。ウツ……やべえ、いつ見ても砂糖吐きそうだ。

いや、別にいいのよ？ 恋愛はたぶん誰でもするものだろうし、町中ではよくカップル見るから耐性はある程度あるけどペアがストリート過ぎるかっ仲いい奴らだからね……

そんなバカップルを横目にPCを起動して会社からのメールを確認、こちらで決定する必要があるものや打ち合わせなどについての必要なものがないか確認する。……よし、一旦終わり。今日は合計14件あったか。結構数としては多いほうだが、2件を除いてOKを出したり、簡単に意見を書く簡単なものだった。

手元においていた缶コーヒーを啜りながらその簡単じゃなかった2件を思い出す。一つはあの特効薬も使う人とのアポ決めについて。非常に悩ましい。こっちも帰還者学校の授業も始まっているので簡単に決めることはできない。寮に帰ってスケジュールと相談するか。もう一つ

は、うちの重工から持ってきた新しい製品の名前決め……なんじゃこりゃ。コジマ粒子を用いた武装とはこれまた……ネーミングセンスが問われるのでこれも簡単に決めることはできない。これも寮に持ち帰るとするか。

会社以外から大量にメールが来てるが、いつもの迷惑メールだろうか。これも後でゆっくり確認してしっかり返信するか。(ニチャア)^{ハッキング}……む？ 教室が急に騒がしくなった。なんかあったのだろうか。PCを閉じてカバンの中にしまい込み、話しているバカップルの片割れ——桐ヶ谷和人に話しかける。

「なんか面白い話題でも見つけたか、和人？」

「ん、ああ流星か。すごいことが起きたぞ！ ISを男で動かしたやつが出たらしい！ いいよなあ、IS使って自由に空とびまわって剣振り回せるんだろ？」

ほーん、そんなことできるやつが出てきたんか。いつか出るんじゃない？ とは思ってたけど今とは。

「ほう……そいつの名前は？」

そういつてコーヒーをぐつと飲む。

「それは……お、あったあった。そいつの名前は——」

「織斑一夏」だつてさ」

この瞬間、俺は盛大に某少佐が『泥水』と表現する茶色い液体を盛大に吹き出した。

「うあつ！ ちよつ！ 流星急にやめろ！」

「ウエゲフツゲフツ……グフツ……いや、すまん。知ってるやつの名前急に出たからついな」

……すっかり忘れてた。ISの原作は今日から始まるんだっけか。となると一夏は今頃何処かのホテルに隔離されているはず。俺もそろそろあつちに行くとするか。ぶちまけた処理をしてから即座にス

マホを起動し、本社内線につなぐ。

「……ああ俺だ。あのメールは後で確認しとく。今日ついにとつておきのアレを広める時が来た。すぐに会見の準備をしてくれ、俺もすぐに本社に向かう。……分かった、張り切ってくれよ。頑張ったやつにはボーナス弾むと伝えといてくれ。……ん？ そつちが少し騒がしいな。……迎え？ いつもバイクで行ってるじゃないか。……何？ テレビをつける？ 了解、確認しておく」

通話を終了してテレビを確認しようとする。テレビにいつも以上に群がっている人たち……あれ？ 明日奈さんやなんでそんなにこつち見たりテレビ見たりしてるんだ？ 首痛むよ？

少しテレビを見ようと群がっている中に一人に声をかける。

「和人、ちよつとテレビを見せて……く……れ」

テレビに映るのはうさみみをつけたフリルが特徴的な女性——
篠ノ之束と俺の写真。……？

『どーもみんなー！ みんなのアイドル篠ノ之束だよー！ ブイブイ！ 今朝いっくんがISが動かせることがわかったけど実は！ ツイマッド社の若社長「尾白流星」くんことりゅーくんもISを動かせるのでーす！ というわけでこれを学校終わりで見てるりゅーくん、頑張つてねー！ それじゃー！』

バツ

今までテレビを見ていた学生・先生たちが一斉にこちらを向く。

「「「ええええええええええつ！」「」」」

「うそ、流星くんあの会社の社長だったの!?!」

「お前も動かせたのか……」

ミシツ……スマホが悲鳴を上げてるようだが知ったこつちやない。
「あんのうさぎやろおおお!!」

一人の少年の叫びが帰還者学校にひびく。

どうやら平穏という平和はすぐに崩れたようだ。

場所は変わってツイマッド本社ビルの会見室。到着してスーツに着替えた。いつも着ているものだが、初めて着る感覚になる。

一番でかい部屋を使っても廊下にまであふれかえるマスコミ……
そして会見を前にして俺の横のため息をつく社長代理のマ・クベ……
「はあ……マ、この会見のあとでいっしょに製薬部に薬貰いに行くか
？」

「……お供します。」

会見は質問の嵐だった。「いつからそれがわかっていたのか」「やはり企業代表としてIS学園に行くのか?」「織斑一夏についてどういう考えを持っているか」などなど……その都度会社としての意見を答えていた。

ただ、最後にでてきた「ISについてあなたの考えを聞かせてください」という質問に対しては

「IS——インフィニット・ストラトスは今でこそ競技としてだが、世界最強のパワードスーツとしてあるけど本来の目的を考えてほしい。ハイパーセンサーは正確な位置や観測を行う目的でついでおり、シールドと絶対防御は搭乗者の命を守るためにある。そしてあの強力な武装は障害物を排除するために装備されていた。これらがついてるのはなぜか?——宇宙で活動するためだ。今でこそ条約でできることは少ないが、できるなら宇宙で自由に飛び回りたいと思う。」
というの自分の率直な感情で話した。……シヤアよ。これらが付いてるのはなぜかのところで(『坊やがのるからさ。(ー、ドー)キリツ』)といわないでくれ。吹きかけたから。

俺もやはり世界で二人目の男性操縦者。襲撃などを避けるために日が沈んだ高速道路にのってホテルに車で向かっている。……横には織斑千冬が座っている。気まずい。

「……久しぶりだな。確か4年ぶりだったか。」

「……ええ。一夏は元気になりましたか?」

会見では俺が記者に一番聞きたいけど聞けなかったことを聞いてみる。

「あいつはだいぶまいってるようだが、流星も来るとなればきつと大喜びするだろうな。……生きてるなら連絡の一つは寄越したらいいものを。」

「んー、寄越せたら寄越したかったんですけどね。なんせあのあと1年半眠ってた上に架空空間で2年間武器振り回してたからなあ。」

ほんと、気がついたらもう4年も経っていたのか……あの時に家を出て1年半意識不明になった後、起きてても会社の用事が大量にあつて、その後にあの事件だ。生きてるかどうかも知らせていなかった。「あの事件にも巻き込まれていたとは………どれだけ心配したと思ってる。」

千冬の話してる声が少し震えて聞こえる。やはりいつも過ごしていた人が安否も分からずに4年年後ひよつこりとテレビに出てきたら色々な感情が出てくるだろう。

「……大丈夫です。もうどこにも行きませんから。」

「……本当だな。」

「わかりました、千冬さん。」

「い、今は千冬でいいぞ。ただ学校では織斑先生にしといてくれ。」

「了解、千冬。」

……あれ？フリーズした？

「……おーい、大丈夫ですか？」

「………っは！ご飯はまだできてないぞ！」

「………え？ご飯？」

「い、今のは忘れるおー！」ガスッ

「ガザDッ!？」

いたい。

この後は何故か千冬がツンツンしてたので特に話すことなくホテルに着くのだった。

第2話 SHR

ISを動かせることを篠ノ之束くそうさぎいにばらされてIS学園に行く羽目になった流星。そこから始まる青春——つて女子だらけなのに大丈夫なのか？

side 流星

その後、一ヶ月ほどホテルに詰められてふと気づけばもう新学期、ほぼ女子校と言つていいほどの男女比を誇る(用務員含む男性3人のみ)IS学園、1年1組の教室の中で俺たちは何もできないでいた。教室はもちろんのこと廊下にも溢れ返っている様々な学年のJK女子高生が2人の男性操縦者に向けて集中している。

互いが互いを牽引しているのか、はたまた緊張して何もできないのかわからないが、俺が教室に入つて30分付ほどこの状態が続いている。

「(あれが男性操縦者たち?)」

「(一人は高身長で純粋なハンサム、もう一人が一人目より少し小さくて顔の傷がワイルドだけどハンサムも持ち合わせているハーフか……どっちもいい!)」

「(新聞部のあんたが先陣きつてなにか喋つてきなさいよ!)」

「(なんで私なの!?)」

ヒソヒソと喋り声も聞こえてくる。

……今なら上野のパンダの気持ちかわかるな。嫌だ、俺はまだ育毛剤にまだ世話になりたくない。早くチャイムなつてくれないか？
頼む！ 頼むからあ!!

「それじゃあSHRを始めますよー」

扉が開き、メガネを掛けたポボンツキュツボンツなのに中学生と言われてもおかしくない小柄なアンバランスが激しい女性が教壇に立つ。……あの髪地毛？ 緑とは……この国の地毛こんなカラフルだったっけ？ 昔白とか水色見たような……

「皆さん、はじめまして。このクラスの副担任を努めます『山田真耶』」

と言います。これからよろしく願いますね〜」

……反応なし。

反応の無さに涙目になってオロオロしている真耶。

「……よろしく願います、山田先生」

あまりに不憫だったので返事をする。

「これからよろしく願いますね！ 尾白さん！」

おうふ。急に元気になったな。……すげえ。あんなに胸部装甲つて動くんだ。後小動物みたいで可愛い。

「それじゃあまず初めに名前順に自己紹介してもらいましょう！ まずは相川さん！」

「はい！ 私の名前は相川清香です！ 趣味は——

——
そうしてついに織斑一夏の番になる。……あれ？ 真耶に何度呼ばれても反応しないぞ。どうやらただのしかばねのようd「は、はい！ あ、生きてたのね。」

「俺は織斑一夏です！ ……」

それを言ったきり黙り込む。何言うか悩んでるな？

さあさあ何を言うのか一夏よ……………

「……以上です！」ガタタツ

っあれっ!? それだけかい！ たっぷり間を取ってそれ!? 周りの人が思わずズドゴツと椅子からずっこける。

もちろん俺も肩透かしを食らった。

「え、あれ？」「お前はろくに挨拶もできんのか」「アダツ」「バコンツ」そして周りの反応を見て困惑している一化に降りかかる出席簿。今ので2000万は逝ったか。

「ゲエ!? 関羽!?」「誰が三国の英雄だ」「ドムツ!?」「ズコンツ

4000万。一体どこまで伸びるかn「「き……………」」「こ、これは!?」まずい!? 今すぐ耳栓を!」

「「「きやあああああつ!!!」」

グオオオオオオオ!? 耳が、耳がアアアアアア!?
新手の音響兵器か!? 馬鹿な、ありえん。耳栓高性・能・耳・栓・無効・貫通をしてても脳効・貫通に響く
だど!?

「本物の千冬様よー!」

「あたし織斑先生に憧れて北九州から来たんです!」

「あたし、もう死んでもいい!」

「……わが人生に一片の悔いなし!」

まだ死ぬには早いぞ。ん? クラス内に死にかけの拳王いない?

「静かにしろ。全く……なんで毎年私のクラスに面倒くさいやつが集まるんだ……」

この一声で静かになると思いきや、僅かな間をおいてさつき以上になつて返ってきた。

「お姉様、もつと叱って!」

「もつと罵倒して!」

「たまには優しくして!」

「それでも絶対つけあがらないように私をムチで調教して!」

やべえ。このクラスSMプレイ好き多すぎないか?

「ち、千冬姉!?」「織斑先生だ馬鹿者」「ドワツジ!」「ドゴツ

6000万。今日だけでクレイドル脳何機分細の住民胞が死んでいくの
だろうか。

「まあいい。次、尾白が自己紹介しろ」

名前が次なので、頭を抑えて沈んでいく一夏を前にして座標が入れ替わるように席を立つ。

「了解ちf「スチャ……」お、織斑先生。

では……紹介に預かった尾白流星です。くそうs……篠ノ之博士の紹介にもあったとおり、ツイマッド社の若社長の肩書を持っています。がここは学びの場。そんなことは気にせずこれから3年間みなさんと仲良くしてけたらなと思っています。

趣味は物作りをメインにアニメ鑑賞や料理も結構します。

いつもはこんな堅苦しくないので気兼ねなく話してくれて嬉し
いかな。一歳みんなより年上だけどそんなことも気にしないでくれ
たら嬉しいです。

これから3年間よろしくお願いします」

大体、こんな感じでいいのだろうか。言い終わって席につく。周り
のクラスメイトの反応を見るとファーストインプレッションは悪く
ない様子だ。

「これがまともな挨拶だ。これからはこれを見習うようにな、織斑」

「……はい」

そんなしよげるなよ……今日は晩飯作ってやるから。

キーンコンカンコン「む、もう時間か。今回できなかつた生
徒は後日行うから気を抜くなよ？ では次の授業の準備をするよう
に」

「久しぶりだな！ 流星！」

こちらに4年^織ぶりの再開となる男が近づいて話しかけてくる。そ
の声とは裏腹に半泣きの表情になってるが。

突然女子校に放り込まれたと思ったら、ひょっこり行方不明になっ
てた学年が違うはずの義兄弟とクラスメイトになってたりと……無
理もないだろう。

「ああ、ほんとに久しぶりだな一夏。家事頑張ってたか？」

「(涙ながらの再開、色々な感情がそえられるわあ……)」

「(やっぱり流星が攻め？ もしや一夏かも!?)」

「(一×流？ いや流×一？ どっちでも……いい!)」

「(これで夏のコミケのネタに困らないわ……グフフ……)」

ヤメロオオオ！ コソコソ喋っていても聞こえてるぞ腐女子ども
！ 俺たちを魔の飢酸異本のネタにするなあああ！

「おう！ なんとかな！ ただ千冬姉の部屋が……」

「……やっぱりそうか。ツハ!？」

「ウツ!？」

な、何だ!? 扉の向こうから殺気が!? 殺気だけで刺されたような感覚になるとかどんな姉だ!?

「……ここでの話するの一旦止めるか」

「……そうだな」

「少しいいか?」

む? この声は? 随分懐かしさを感じる。

声のした方向に俺たちが振り向くとポニテが特徴的な侍乙女がいた。

「……箒か!？」

「う、うむ! 久しぶりだな! 一夏! 流星さん!」

「流星でいいさ。歳離れてるとはいえ同級生だろ?」

「わかった。り、流星。ところで一夏を貸してもらってもいいか?」

「いいぞ、二人で積もる話でもしてこい。ああ、後今日の晩飯作ってやろうか?」

「本当に!？」

食いつきがいいな。でもなんでだ? 隠し味が多少あったり作り

方が少し違ったりするだけなのだが(『それだけで十分うまい上にお前が作るのだがな』) そんなもんなのかシヤア?

そして……

「(えっ!? もうそんな関係なの!?)」

「(まさかの禁断の三角関係!?)」

「(特定班、今までの彼らの経歴を洗い出して! 報酬は出すわ!)」

おいこらそこ。もう仲良くなったな。俺に関しては4年位調べても何もわからん所あるぞ?」

「楽しみに待ってるぞ流星! ではいつてくる!」

「授業には遅れんようにな」

「おう!」

……いったか。教室に一人だけの男、何も起きないはずはなく……

「ねえねえりゅーりゅー?」

ダボ袖が特徴的な全体的にだぼっとした服を着た女子がこちらに話しかけてくる。この学校では制服のある程度のカスタマイズが可能となっており、同じ制服の人は少ない。

例外にもれず俺もフードを付けたリ、前を少し開けていたりとかナリラフなカスタマイズが施されている。

「……それは俺のことか?」

……初めてこんな名前と呼ばれた。どんなに緊張している状況でもこの声を聞くとその状況が崩れそうな声色だな。

「そうだよ、私は布仏本音。よろしくね。ところでこの匂い、お菓子持つてない?」

布仏本音……のほほんさんだな! (異論は受け付けんツ)

お菓子か……よくわかったな。なにか特別な嗅覚でもあるのだろうか?

「よくお分かりで。ほれ、一つあげるぞ」

「お、おとおお?! こ、これは年間1000個しか作られていない幻のト○ポのクアトロチョコレート味ですとおお?! ありがとう、りゅーりゅー!」

そのままトテトテとこちらを見ていた一部の2人組に歩いていくのほほん。

「(どうだった本音!?)」

「(すごいお菓子をくれたよ!)」

「(それ幻のトツ○?! 後で私にも頂戴!)」

「(いいよ)」

「(ありがとう! 神様仏様のほほん様!)」

あん人たちもすぐに仲いいグループできてるじゃん。……これから俺も仲いいグループとかできるのかな……女子ばかりだけど。

「(すこしよろしく?)」

まだまだ休憩時間は続く……

第3話 よろしい、ならば〇〇だ。

「すこしよろしくて?」

のほほんの次に話しかけてきたのは金髪の左右に縦にロールした髪を持つ欧系の人? だった。確か名前は……

「どうしました、セシリア・オルコットさん? だっけ。確かイギリスの代表候補生の。これからよろしくお願いします」

「間違いないですわよ。どうやら思ったよりもしつかりしているようですね。さすが若社長といったところででしょうか」

むう。すこし下に見られてる感じがする。

「世界でただ二人だけの男性操縦者の片割れがどれほどの人なのかを見定めに来ましたの」

やはりそうか。今どきよく見る女尊男卑主義の人なのか? しかし妙だな………根っからそのような考えをしてないような気がしてやまないのだが(もしかしなくても:NTの感知能力)……今はあまり探らないでおいとこう。

「俺はまだメンタルに余裕があつて学校のこととか調べたけど、一夏は結構まいってたようだから無理に期待するなよ?」

「あら、そのようでしたらもう一人の方にはあまり期待はせずに話しますわね」

うーん、なんでそんな言い方するんだ? わざわざかすこし挑発気味に話さなくてもいいじゃないか……

「……もうそろそろチャイムなるぞ? 出席簿の餌になりたくなかつたら戻ったほうがいい」

「あら、もうそんな時間なのですね。ではごきげんよう」

これから一波乱ありそうだ。

「それでは授業を始める。」

まず大前提としてお前たちに心がけてもらう事がある。ISは今でこそ競技の範疇に収まっている上にアラスカ条約で軍用としての使用が禁止されているとはいえ、人の命を簡単に奪うことができる兵

器であることに変わりはない。

お前たちひよっこはその兵器を正しく扱う術を学ぶためにここにいる。それを心得ている前提で授業を始める」

IS学園に入って初めての1限目が始まり、織斑先生が最初に心得を叩き込んでいる。やはり、こういつたことは覚えておかないとうっかりで人を殺めてしまう場面が多発するだろう。

「ISの学園外での無断展開は届け出を出してないかつ、悪質な使用をするとIS法第2条第3項に違反してしまい、IS委員会の査問会議によって罰が決定するので――」

授業ははじめだということもあり、ISの運用や扱いの注意についての初期的な知識について山田先生が授業をしている。

俺はIS自体の構造や整備の方面についてはあのうさぎと一時期一緒にIS作っていた事もあり、問題はないと思うが法律などは全く知らん。

いや、本当に法律なんてコロコロ変わるから全部覚えるのめんどくさいんだよ……（『もしや一語一句逃さず?』）当たり前だよな。

（『』）

……どうしてそこで黙る。

おしやべり相手

シヤアが反応しなくなったので授業に意識を移す。

俺の席の前では一夏が顔を青くしていた。腹壊したのか？

「一夏くん、何かわからないところでもありましたか？ あつたらぜひ教えて下さいねー!」

山田先生も一夏の変化に気が付き教卓から身を乗り出して質問がないか聞いている。

「……ほとんど全部わかりません!」

「……ええ? ほとんど、ですか?」

「はいー!」

これにはどうしたら良いのかわからないのだろうか、涙目になってオロオロしだす山田先生。

「織斑、入学前に渡した参考書はどこにやった?」

「あれですか? タ○ンワークかと思つて廃品回収に出しましたッ

！」

「必読と書いてあっただろう！」

「バイザック!？」

本日4度目の出席簿アタックをもらう一夏。8000万。

「再発行するから覚えておくように。1週間で覚えろよ。それまでの間尾白、頼めるか？」

なんで俺に押し付けるんですかねえ……まあ学園内で今のとこ話しやすいやつ俺くらいしかいないから当然か。

「はあ……後でノート見せてやるから写せ」

「……悪い」

また授業が終わって休み時間、俺は参考書を自分なりに解釈して書いたノートを一夏に見せていた。やることがないので一夏の横に立って少しわかりにくい場所を補足したりしている。

「——とりあえずここまででいいんじゃないか？ これだけでもあの授業の感じだと2週間は持つだろうな。残り時間はゆっくり休みな」

「本当にすまん、流星」

「少しよろしくて？」

また現れたか、縦ロールさんや。頼むから面倒なことしないでくれよ。

「んあ？」

「まあ!? なんですよ、その返事は。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのでですから、それ相応の態度と言う物があるんじゃないかしらっ。」

……しないでくれよお。

「わるい。俺、キミが誰だのかわらなくて。名前はなんていうんだ？」
「……イギリス代表候補生のセシリア・オルコットさんだ」

紹介してもらって嬉しいのかフランス！ と喜びの表情を出している。

「へえーオルコットさん……で代表候補生ってなんだ？」

とここで一夏が爆弾発言を投下。

聞いていたであろう周りの女子がずっこけて俺とオルコットもガクツとなる……俺たち新喜劇の才能あるんじゃないか？

さつきまで嬉々としていたオルコットの肩が震えだす。

「あ、あなた、代表候補生を知らない!? 本気で行ってらっしゃいますの!?!」

「おう、知らん」

もうやめてくれ! 問題増やさないでくれ!

「信じられませんわ。極東にはテレビも置いてないのでしようか?」

ええ……俺たちの文化レベル低すぎませんかねえ……

「いや、日本のテレビの普及率ほぼ十割だから少なくとも高齢者の家でも普通にあるはずだぞ……一夏、代表候補生というのはな、その国における国家代表の候補として選ばれた人たちのことだ」

「へえー、とにかく凄いなー!」

「……すこし国家代表候補生より名が劣るしれんが、俺も企業代表だからな。俺の会社の」

ここで少しお返ししておく。

「ええっ!? ……そういえばそれもそうか。どっちもすげえんだな」

「まあ、あなたも……とにかくエリートなのですわ! 入学試験で唯一教官を倒すことのできた人物ですから! そんな候補生たる私に話しかけられるのも光栄ではなくて?」

「あれ? 試験の教官なら俺も倒したぞ?」

え、いやすごくね? でも待てよ、そんな乗ってすぐの動かし方もほとんど分らん一夏がそんなこと事できるのか?

実戦に乗り方わからん新兵がMS乗って手加減しているベテラン乗りと戦うようなもんだぞ……おそらく何かしら教師が自爆したんだろうな。

「あ、あたくしただけだろうか?」

「女子だけではっていうオチじゃないか?」

それは多いにあると思うな、うん。

「あ、あなたはどなたですか?」

そりやあもちろん

「負けたさ。最後は体力不足で倒れて。というのも今はある事情が重なって少し筋肉が衰えていてな……あと1ヶ月ほどでもとに戻せるはずなんだがな。」

——60分間戦い続けて負けたよ、織斑先生に」

「やはり男性は……え？ 60分間、織斑先生と戦っていた？」

「気のせいだと思うが周りの空気が凍りついた感覚になる。……気のせいだろうか？」

「そりやあ一夏やオルコットさんには負けるだろうか」

「……………」

え？ どうして二人とも黙っちゃうんですか？

「……あれ？ 戦ったの織斑先生じゃなかったの？」

二人が激しく首肯する。あれ？

「流石に教室に織斑先生と戦った人、一人はいるだろ、う……」

周りに同志がいるだろうと全員が首を横に振って否定している。

あつるえー？

「……織斑先生はあまりに強すぎるので試験教官では無いはずなのですが……」

「いや、織斑先生が試験するって試験開始前織斑先生から直々に……」

俺の首を授業の準備を終えてこちらを見ていた織斑先生に向けるとバツとすぐにそっぽを向く。

「……なんで俺だけだったんだろう？ 別に他の人ともおんなじように本気でやればよかったのにな」

「…………私達（俺）殺す気?!…………」

クラス全員からツッコまれた。解せぬ。（『私も今の状態であれとタメ張れる流星がおかしいと思うぞ』）

シヤア、あんたもか。

「これから授業を始める……そうだったな、その前にクラス代表を決めないといけん。クラス代表は学校行事の司会をしたり5月にあるクラス対抗戦などにクラス代表で出てもらうことになる。自他推薦は問わないぞ、誰かいないか」

織斑先生が授業のはじめにクラス代表を募る。ここはやはりというか……

「織斑くんを推薦します！」

「あたしも！」

「お、おれ！」

「いや、そこは尾白くんでしょ！」

「あたしもりゅーりゅーがいいかなあ。だって織斑先生と戦えるんだよ」

と、一部まともな理由を述べている人を除いて物珍しさゆえに俺たちが推薦される。しかし、経験を積むという観点から考えると惜しいことをしているな。代表になったら断然強い人と戦えるし。

そう考えていると、

「待ってください！ 納得がいきませんわ！」

机を叩いて立ち上がったオルコット。

「一部まともなことを言ってる人はいますが、そのような選出は認められません！ 大体、そんなかんたんな理由で決まったクラス代表なんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を1年間味わえとおっしゃるのですか!?!」

少しまだ俺たちに嫌味がある言い方をするが、まあ筋は通っているな。

そう言ってオルコットはこちらを見てズビシツツと指を指し、

「実力のある生徒がクラス代表であることを決めるためにこの人たちに決闘を申し込みますわ！」

「それも一理あるな……それで構わないか？」

織斑先生がこちらにこれで構わないかと聞く。

「いいぜ、四の五言い争うよりもてつとり早くていい」

「よろしい、ならば戦争だ」

「そこまでしなくていいわっ」

「ゲルググッ!？」

今度はこっちのクレイドル脳1細基分の住民胞が出席簿にやられた。
いたう。

「全く……では来週の月曜日、放課後にISアリーナで対戦してもら
う。いいな?」

「はい!」

さて、アイツらの作った新しい兵器の実験台になってもらうぞ(ニ
チャア)

第4話 ルームメイト

side 流星

「——ってなこと張り切っていったけど勝てるかなあ……」

オルコットから宣戦布告を受けた今日の放課後、一夏が不安そうに考えている。

「勝てないって言ってたら、絶対勝てないからな一夏。0パーは何かけても0だが、ほんのすこしでも、0.1パーでもあつたらいくらでも勝率をあげることが出来る。無理無理言わずに頑張ってみようじゃないか?」

「それもそうだけどなあ……けどやっぱりいきなりエリートと素人が戦うから」

「そんなこともないぞ。たとえどんなに強い相手でも装備によつたら乗りたての人でも勝つときがある例えばもし相手が近接攻撃だけならずつと距離を保つて打ち続けられればいいし、逆に射撃特化の機体なら守りを固めながら距離を詰めればいい……でしよう? 織斑先生」

さつきから話があるようでこちらで話のタイミングを伺っていた織斑先生に話を振る。

「尾白の言ったことは非常に基本的だがあながち間違つてはないな。織斑、まずはそういった戦略を考えるとところから始めるといいかもしれんな。」

ところで話は変わるが織斑、さつき伝えられた情報だがお前に学校が貸し出せる機体がない、つまりお前に専用機が与えられることになった。だがまだ準備に時間がかかるから渡せるのはまだ先になるがな」

織斑先生から一夏に専用機が割り振られることを伝えている。
……十中八九データ集めのためだろうが。

「この学年でもう専用機を使えるの!」

「いいなあ……私も一回乗ってみたい!」

そんな軽いもんじゃない。だつて世界に500もないもので飛び回るんだよ、国が持つてるものを。

もし壊したり取られたとなったら……その国の胃がたまったもんじやない。俺達じやないよ。国が、だよ。

そ う い え ば 今 I S 作 っ て る の
俺と愉快なマツドサイエントたちと倉持技研だったっけ。

俺の会社にそんな通達政府から来てないから一夏の専用機作るの
はあっちか……とすればあっちの代表候補生の機体開発はどうする
のだろうか。

そんな中、

「あれ？　そういえば篠ノ之箒さんって篠ノ之博士と名字同じだけど
博士の関係者？」

と質問する生徒が現れる。いつかは分かることだろうし、このこと
について織斑先生が

「篠ノ之東は箒の姉だな」

といずれわかることだろうか、織斑先生がカミングアウトす
る。

「すごい！　このクラスに有名人が3人もいる！」

「じゃあ箒さんもIS作れたりするの!？」

箒が東の妹だということをクラスメイトが知り、次々に注目が集
まっていく。……そういえばあの後からまた仲が悪くなったりし
ないだろうか。なつてたら泣くよ？

「……みんな、すまない。私はあの人ほどなにかできるわけではない。
声を荒らげずに、すこし残念そうに話す箒。あれから姉妹の仲が悪
くなつていなかっただようだ。……よかった。

……だが偶に連絡したりしているし、昔の姉の日常生活についてな
らなにか面白い事が出てくるかもな？　例えば黒歴史とか」

……いまでもとても仲の良いご様子で。

どこかで（「ヤメテ!!　それだけはヤメテエエ!!」）と聞こえた気
がする。

「……そういえば尾白くんは専用機ももらえないの?」

「ん? いや俺はもう持つてるぞ。あのテレビのあとのか意見のあとすぐに渡されたよ。これがそうだ」

「と言ってポケットから白い二枚の機械質な羽のようなものが、クロスしている紐付きの飾りを取り出す。」

「あれ? それ昔から持ってたやつじゃないか?」

「いや、あれと同じデザインにしてもらったんだよ。結構似てるだろう?」

「今どんな機体が見れる!?!」

「それは当日の見てからのお楽しみだ。楽しみに待ってるよ?」

「今俺だけ情報を見せるのはアンフェアだしな。」

「……? なにか用でも山田先生?」

「良かった、織斑くんと尾白くんまだ居たんですね。このあとどうするかご存知ですか?」

「えっ? 俺はこの後ホテルに行くのが一週間ぐらい続くって聞いてますけど……流星は?」

「俺もだ。で、なにか変更でもあったのですか山田先生?」

「はい! 今日から寮生活にしてみせます! 寮の部屋割が予定よりかなり早く終わらせることができたので今日から織斑くんたちはこつちで寝泊まりできます!」

「おや、今日からもうこつちなのか。毎回ホテルを往復するのも疲れていたので素直に嬉しいな。」

「では一緒に部屋を見に行こうじゃない「あつ……いえ、お二人は別の部屋です……」か……」

「じ、じゃあ俺たちふたりとも女子との部屋……」

「うそーん。」

「普通そこは同じ部屋でしょお! なんで!? なんでただでさえ教室にほとんど女子なのに寮でもしらない女子と寝泊まりしないといけないの!?!」

「……一夏、次の部屋替えまで頑張ろうな」

「……ああ」

「うう、本当にすみません……あともう一つ伝えないといけないことがあります、大浴場は今のところ使うことができません」

「……なるほど、了解しました」

「え？　なんで使えないんだ？」

やめろ一夏。そんなこと言い出したら

「だ、だめですよ織斑くん！　女子と一緒に風呂なんか……」

山田先生の妄想がH A D E Sしだしちゃうから。

「そ、そんなわけ無いです！」

「ええっ女性に興味がない!?　それはそれで問題かと……」

ウツソだろ一夏。お前がそつちに気があつたとは……まずい、なにかされそうな気がしてやまん。

「そつちなのか、一夏は……」

それに

「(まさかの本人からの告白!?)」

「(やはり現地調査は確定ね……今度のGW一緒に現地調査に行かない?)」

「(行くわ！　きつとアンナコトやコンナコトをやったことが出てくるに違いない……やばい、ヨダレ出てきた)」

みる、腐女子どもに油注いでどうする。俺達がヤベーいやつにしか見えなくなるんだぞ?!　これから3年間ヤベーいやつとして見られ続けるの嫌だ!!

「お、俺は別に普通に女子が好きです！　それと流星！　そんな顔で見ながら距離を取らないでくれええ！」

一夏の魂の叫びが放課後の学園に響いた。

「俺が1025号室で流星が1028号室か……結構近いな」

「ああ、後でできたて持って行ってやるから箸とついでにお前のルームメイトも誘ってやりな」

山田先生に鍵をもらい、部屋の前に来た俺たち。

「じゃあ30分後にまたご飯届けるからひましてたら今日の復習でもしとけ」

「おう！ 待ってるぞ！」

「おじやましませーす」

……む？ 返事がない。今はどこかに行っているのだろうか、もしや部屋の人はもう食堂に行つたのだろうか。

ご飯を作り始める前に手を洗うため、洗面所に向かう。

ガチャツ

「えっ」

思考が停止する。

そこには風呂上がりであろうバスタオルをまいた水色の髪を持った少女が頭を乾かしていた。

お互いに10秒ぐらい停止していただろうか。「き」あ、まずい。

「キヤアアアアアッ！」

「ネオジオングッ!?!」

飛んできた桶が顔面にクリーンヒットして、そのまま後ろに倒れる。意識が消し飛ぶほどの威力とはつ。

「(グアアアアアッ!?)」

このとき一夏も同じ状況になつてる気がした。

「誠に申し訳ありませんでした。俺を殺すなりこの会社の社長になるなり好きにしてください」

「そ、そこまでしなくてもいいよ。わぎとじやなかったんだし」

俺はその後服を着た彼女に向けて床でDO☆GE☆ZAをしていた。日本古くより伝わる最上級の謝り方だ。相手に誠心誠意謝罪するにはこれしかない。

「……じゃあ何を以て俺の罪を償いましょうか、俺をマスブレードでかつ飛ばしますか？ それともコロニーレーザーで焼き払いますか？」

「……なんかよくわからないけども優しいよ。ちゃんと謝ってくれたし」

それでも俺はなにかしないと気が済まん。

……そうだ！

「では差し支えなければあなたの友人とまとめて今日の晩ごはんを作らせてもらってもいいか？」

「……いいの？」

今日は麻婆豆腐を作るとしようか。あいつらはすこし辛めで彼女はほんのり辛くするとしよう。はじめは味の好みなんかわからんから大体の人が好む味付けにする。

「こんなことで許してもらえるならいくらでも作らせていただきます。」

……そういえば名前を紹介するのを忘れてた。俺は尾白流星、くそうさぎにバラされてここに来る羽目になった元一般人です。何故か会社の社長だけどこんところはあまり気にしないでほしいな。

これから3年間よろしくお願いする。

……あなたの名前は？」

「……更識簪」

……まじかよ。

（『……まさか、流星があの中の時の』）

……アインクラッドにいた彼女ここで再開するとは。（『えっ？』）
えっ間違ってた？

その後一夏たちに麻婆豆腐と白飯を持っていった。同居人は箒だったようで、どちらも美味しそうに食べていた。

簪さんにも好評だったようでおかわりがあった。

side 簪

……ふう、疲れが取れた。

政府から専用機を渡されたかと思うと今度は自分で作れとか意味わからない。そのうえ急かしてくるのに……ほんとにどうしよう。

間に合うかな……

シャワーをの栓を締めて髪を拭きながらバスルームから出てくる。

「おじやましませう！」

部屋の同居人の人だろうか。鍵を締めていたのできつとそうだ。

……女子にしては声が結構低いような？

一応ばったり会うかもしれないのでバスタオルで体を包み脱衣所でドライヤーのスイッチを入れる。

ガチャツ

あ、入ってきた。つて

「えっ」

お、男？ 嘘、知り合い……例えば本音とかと同じ部屋になると思ってたのに

……最近あまり話せてないけど。

「キヤアアアアアッ！」

「ネオジオングッ!」

次に気づいたときには顔面に桶がめりこみ、後ろに倒れていく男性の姿があった。

「グアアアアアッ!」

このとき別の男の叫び声も聞こえた。あっちも同じ状況？

「誠に申し訳ありませんでした。俺を殺すなりこの会社の社長になり好きにしてください」

その後すぐに目が覚めた男性がすぐさま土下座をして何度も謝っていた。

「そ、そこまでしなくてもいいよ。わざとじゃなかったんだし」

「……じゃあ何を以て俺の罪を償いましょうか、俺をマスブレードでかつ飛ばしますか？ それともコロニーレーザーで焼き払いますか？」

マス……質量？　どんなものだろうか

それにコロニーとレーザーの掛け合わせとは想像もつかない。

「……なんかよくわからないけども面白いよ。ちゃんと謝ってくれたし」

「……では差し支えなければあなたの友人とまとめて今日の晩ごはんを作らせてもらってもいいか？」

突然聞いてきた。購買で買う予定だったけど……

「……いいの？」

「こんなことで許してもらえならいくらでも作らせていただきます。」

……そういえば名前を紹介するのを忘れてた。俺は尾白流星、くそうさぎにバラされてここに来る羽目になった元一般人です。何故か会社の社長だけどそこんところはあまり気にしないでほしいな。

これから3年間よろしく願います。

……あなたの名前は？」

えっあの会社の社長さんだったの!?

というかくそうさぎって東博士のこと……

相手が紹介してくれたからには自分もしなければ！

「……更識簪。よろしく」

……ああああ！　失敗したああああ！

もつと言えることあったのに……

その後作ったご飯と麻婆豆腐を別の部屋の人に渡しに行った後、作ってくれたごはんを食べた。彼の作った麻婆豆腐はとても美味しかった。

できれば作り方も聞いてみたい。

そういえばこの味どこかで食べた記憶がある……なんでだろう。

幕間 ツイマツド社の愉快な仲間たちⅠ

これはある日のツイマツド社IS装備開発部門での1日……

マツドな研究者が作るISたちのお話

・コジマドム

side 流星

5日後にはIS学園に入学するのか。

そう思いながら、今日はいくつかの試作ISの試験をしてほしいという研究部からの要請で休日、東京郊外にあるツイマツド社の実験場にいる。

「これはどんな機体だ、主任？」

今装着しているのは十字形のカバーに入ったモノアイ、目を引く大きなレグアーマーに2つのシンプルな背部スラスタ———ではなく巨大なスラスタがいくつも背部各部についているリックドムである。

「これは「ISSMS-09R-K K-リックドム」だな。俺たちの作ってたMSのデザインを残しつつ新たな動力源———コジマジエネレーターを搭載しているんだ！」

「ふむ。コジマジエネレーターの出力は従来のISリックドムよりどれだけ変わった？」

「かなり向上しましたよ！ なんせ元はある程度しか空中に滞在できず、ホバーメインの移動方法でしたが空中でダッシュできるようになりましたし！」

「ではさっそくうううううううう！」

速すぎません!? アクセルすこし踏んだだけでこれ!?

「あ、非常に操縦がピーキーだから注意しろよ！ ちなみに素でアクセル踏むとQB———クイックブーストと違って一瞬で最高速になるぞ！ 最高速は現行のISとは桁違いだ！ ギャハハハっ！」

「先に言ええええええええ!!！」

壁に激突するわけにも行かずに実験場を旋回し続ける。……ウエツ、慣性制御あるはずなのに吐き気してきた……

「では今から模擬戦闘を始めます。敵の数は12、戦闘想定場所は森林で流星のHUDを表示させてる。かなり離れた位置からのスタートだからさつき説明したOB——オーバードブーストを用いて接近してください」

「了解……ん？ SEの他にもう一つエネルギーゲージがあるが？」

「それはPA——プライマルアーマーといってコジマジエネレーターで生成したコジマ粒子を機体に散布してダメージを抑える機能だ！」

一定量回復し続けるものだからな。ダメージを受けると減少していき、ゼロだと普通のISと同じダメージをくらいます。これがある限りSEの減りは半分位になる計算。まあ昔似たような機体動かしただからわかるでしょ？」

「……強すぎないか？ 絶対レギュレーションの規制食らうぞ？」

「その時はその時じゃん……それじゃあ始めようか！」

「尾白流星、Kリークドムでます！」

実験場が森林のような風景に変わり、離れたところで投影された仮想敵がスポーンされる。——なんでジムなの？ それもISサイズの。

……要望通り、OBを使って目標に接近する。……QBで使っていないスラスタも動かしたらどうなるんだろうか。

試しにやってみるk

「グウツ!？」

……やばい。いま一瞬速度計2000Km/h超えてたぞ。どんなバケモン作ってくれるんだうちの奴らは。

そうしている間にも目標との距離はみるみる近づいていく。

こちらの接近を感知したのだろうか。12機のジムがこちらにビームスプレーガンを撃ってくる。

こちらの速度に対応できてないのだろう、弾はほとんど当たらな

い。しかし当たったものもS Eの減りがいつもより少ない。説明通り、プログラミングよりもほとんど半分の威力になってるな。

右手に試製コジマキャノンコールし、背部と連結される。

この試製コジマキャノンはコジマ粒子をチャージして打ち出す肩から飛び出る巨大砲、とのこと。

「いけっ！」

接近しながらチャージした試製コジマキャノンを目標に向けて発射する。

狙われたジムが5機まとめて一撃で爆散していく。

えっ……流石にこいつらの強度はI Sよりも弱いよな？

森林の頭上を飛行していき、試製コジマキャノンを格納する。

次に右手にヒートホーク、左手にI S汎用24mmSMGを装備して固まっている2体のジムに撃ちながら別のジムの背後に回り込む。

そのまま左上に上げたヒートホークを振り下ろして目標を袈裟斬りにする。

その後QBでさらに別のジムに振り下ろして右下にあるヒートホークを振り上げてこちらも切り上げる。

計4体のジムがSEゼロの判定となり地に落ちていく。

数で押せると思ったのだろうか、3体のジムがビームサーベルを手を持ってこちらにスラストを吹かしながら肉薄してくる。

SMGを格納しヒートホークを右手に持ち替えてこちらもスラストを吹かして接近戦に応ずる。

敵に直進していき……今だっ！

一回敵の目の前でQBを起動して敵の動きが鈍る。その隙をついてもう一度QBを吹かしてジムの側面に周り、その遠心力を用いてヒートホークを横薙ぎに払う。

ジムのバイザーから光が消える。

その場で回転こちらに対して後ろを向いている1機に向かってヒートホークを投げる。

そのヒートホークは敵のバックパックに突き刺さり、煙を上げなが

ら錐揉み回転しながら落ちていく。

あと一体か！

ハイパーセンサーで視界が全方位に広がっているので敵の位置も把握しやすい。

こちらの後ろからビームサーベルを振り上げながらあちらの最高速で突撃してくる。

すべてのスラスタを全開にして真上に飛翔する。

今までのドムならこの距離では間に合わなかっただろう。

そして

「オラアアアッ!!」

両手を組んでジムの真上からその小節を振り下ろしてそのまま地面に叩きつけた。

「どうだった、コジマドムの性能は？」

「随分とクイックな操縦を強いられるな。こちらの考えが機体に反映されすぎる。少しレスポンスを弱めればなんとか、といったところか。けど機体自体の性能は十分良かったと思うぞ。これは生産して一定量契約が見込めるのでは？」

んで、俺のほうのデータはうまく取れたか？」

「こっちは十分すぎたよ……ダブルイグニッションブースト実質二連瞬間加速を使っているし、何なら高速換装も出来てる……」

さすが、赤い彗星と対をなす白き隕石と呼ばれていたただけはあるね」

「……よしてくれ、それももうだいぶ前の話だろ」

それは前の世界でおいってきた名前だ。今はそんな名乗れるほどすごくないよ。

そのままスラスタの出力の調整や、HUD内情報の表示位置の変更など、細かい調節が続いた。

「いや、やはりコジマキャノンの威力は絶大ですね！ なんせ今の第二世代と同じはずのSEと硬さを持つはずの訓練用の投影されたジムが5機も爆破判定なんてね！ この火力、流星さんも惚れ惚れするでしょう!？」

「……主任」

「ん？ なんか用？」

「……リミッターつけようか」

「……そりゃ無理だ。申し訳ないけど」

「いいからつけてくれ……!」

機体番号解説

I S M S II インフィニット・ストラトス・モバイルスーツ

K II コジマ技術使用

第5話 墜落

side 流星

『お——せい！ば——う——ど——こい！』

『りゅ——んむちや——もうそ——しな——いい——！』

通信から聞き慣れた二人の声が聞こえる。

しかし今はそれらに対応している暇もない。ただひたすらにソラに登っていく。

こつちのこいつ等の制御と俺自身の操作に必死なのだから。

なんとしてでもあれらを落とさせる訳にはいかない。

オキロ！ オキロ！ アサダゾ！

「っ……………またか」

……………久しぶりにあの時の夢を見た。

……………なにか伝えたいことでもあるのだろうか。

午前5時、家庭用に作られたハロのアラームで起きた俺は日課をこなすべくパジャマからジャージに着替える。

ふと横のベッドを見るとこの部屋の同居人がいない。周りを見渡してもいない。……………どこに行ったのだろうか。

教材などを置いているところを見ると、まだ戻ってくるのだろうか。

彼女も代表候補生で色々と忙しいのだろう。彼女の使っている机

の上に冷蔵庫から取り出した缶コーヒーを置いてく。

「朝から精が出ているな流星」

「なあにただのリハビリの一環ですよ織斑先生」

朝のランニング、同じようにジャージを着た織斑先生……あつ今は千冬か。次からそうよぼう。

と会って今は横になって話しながら走っている。

「と、言いつつも昔から続けてるではないか」

「昔よりだいぶ速度も落ちてますからほんとにリハビリなんだけだなあ……」

あれは……」

と言いつつ走っているとある建物の前を通り過ぎかける前にあるものがケースに入って保管されているのが見えて、思わず立ち止まる。

「……あのとときの一部こんな所にあつたんですね」

「あいつの使ってたやつだ。解析してもただのブラックボックス……というか何も分からなかったからな。」

なぜあれだけの出力が出せていたのかも」

そこには

一部が黒く焦げている白い盾が2枚飾られていた。

「ま、今日も授業がんばりますかね！ 千冬さん！」

「……スルーしているがこういうときは最初からそう呼んでくれ」

「ジン!？」

軽めに頭をポカッと千冬に叩かれた。……あれ、なんで威力低いのか？

時は昼、俺と一夏、箸は食堂にてご飯を食べていた。

俺は温玉生姜うどんと塩おにぎりで一夏と箸は和食セットB（煮

物)をいただいている。

「決闘の特訓どうしようかなあ……アリーナも予約いっぱいだって言われたし……」

一夏が来週のことについて頭を悩ましている。

「あなた達が噂の一年生?」

そう呼びかけてきたのは見知らぬ人二人。服の色が違うあたりこちらよりも学年が高いのか。

「……噂とは?」

データを取りたがっているとわかりきっていることだが、一応事実かどうかの確認をする。

「世界で二人だけの男性搭乗者が代表候補生と決闘するって話。代表候補生は少なくとも300時間は搭乗時間あるわ。そういえばあなた達の搭乗時間は?」

「え、えつと……」

「そんな考えなくてもいいぞ、電子生徒証に書いてる。ほら、こんな感じに。乗った時間は勝手に増えていくんだとさ」

そう言つて俺の電子生徒証の搭乗時間を見せる。

そこには「12時間」と書かれていた。

「あれ? もうそんなに乗ったのか流星? 俺は……お、あつたあつた。1時間だつてさ。やっぱり少ないよなあ」

「いや、俺は企業で少し動かした^間からな。一夏は一般生徒とあまり変わんないじゃないか?」

「それで? 私達が一緒に教えてあげましょうか?」

何も知らない人がこれを聞いたただのお人好しになるのだろうかこの状況においては俺はデータ取りたいと思えん。

「いいですよ。篠ノ之東の妹である私が教えるので」

なんつーパワーワード。

「そ、そうなのね。それじゃあ」

その言葉に思わず日和って立ち去る二人。

「できるのか箒!?!」

「あ、ある程度ならできると思うぞ! 姉さんに教えてもらったし今

も連絡してるから」

すこし頬を赤らめて答える筈。……といつてもIS使った訓練はアリーナで予約しないと実機を使った訓練はできないんだがな。だが今回は、

「今日ちようど俺名義でアリーナ借りてるから一緒にどうだ？」

「ほ、本当か!? 座学と剣道だけじゃ不安だったから良かった。ありがとう流星!」

ISの実技なかったのかよ……

「じゃあ5時半に第2ISアリーナの第2ピットで待つてるぞ」

……あぶねえ。指で隠してたけど6512時間なんつー国家代表も真つ青の時間見せれるわけ無いだろ。

午後5時半より少し前、予約していたアリーナに一足先について俺は、

「お、りゅーりゅーだー!」

「あれ!? 尾白さん!」

「こんにちはー!」

「ども、相川さんに佐川さん、それと本音さん。あんたたちも訓練か?」

相川さんに佐川さんとのほほんと出入り口でバタリと出会った。

「ううん、今終わって帰るところだよー」

「あ、私すこし忘れ物したから先に帰っててねー」

先に二人を帰すのほほん。こちらを向いて……なにかあるのか?

「りゅーりゅー……いや、尾白くん。手伝ってほしいことがあるんだ」

……ん? 急に名前呼び……重要なことか。

「(うそ?!) もうそんな仲に!」

「(いや、本音のお姉さんと分けるためだったはず……ハズ)」

そうではない。……ないよな?」

「……聞こう」

司令室に向かった俺が見たのは

「……心配か？」

「……うん」

心配そうにある飛行中の一機を見つめているのはほんだった。

……あの機体は何だ？ 打鉄のようにも見えるが……そうか。簪の乗ってる例の専用機か。

のほほ……布仏さんが言うには元々今見てる機体は打鉄二式……倉持技研が開発していた機体だそうだ。それが一夏の機体を作るため彼女に未完成の機体と資材をわたしたただけでほっぽりだしたそう
だ。

……何やってんのあいつら。

この学校では機体を整備課がオーバーホールしたりするようだがその手に頼らずに一人で作っているそうだ。というのもこの学校にいる姉と少しいざいざがあっただとか。……その姉も何やってるの。

まだ飛行も難しいと言われてたが……いつの間に。

「そりゃあそうだろうな、わからんでもない。」

——なんせ彼女、剣を振り回す世界でも結構無茶してたからな」
「……え？ どうしてりゅーりゅーがそれw 『打鉄二式に異常発生！ 付近の生徒はピットに退避してください！』 かんちゃん!？」

横にいた今日の監視担当の教員が、警報を出してアリーナ内をISSで飛んだり歩いていた生徒が慌ててピット内に入っていく。

一部のスラスターから黒煙が吹き出して飛行が不安定になっている。こういうときはパイロットはパニックを起こしている場合が多い。

『残ってるスラスターでゆっくり地上に降りてくるんだ！ いいか！ 絶対慌てるなよ！』

その場にあった教師が使っていない横のマイクで指示を出す。

少し制御が安定してきたか。

そう思ったのも束の間

『かんちゃん!!』

機体は推力がなくなった上にP I Cも作動せずに地面に墜落した。

side 簪

……ねむたい。

昨日整備室で機体の追い込みでなんとか飛行できるまでにはこぎつけたけど……今日の授業起きてれるかな……

午前8時に部屋に戻って来たけど誰もいなかった。……もう校舎に向かったのだろう。私も授業に必要な教材の準備を始める。

「……ん？」

私の荷物の横に缶コーヒーが置かれている。

同居人の人が気を利かせてくれたのだろうか。

放課後、私はアリーナで作っている途中の機体で試験飛行をしていた。

……今のとこいい感じ。これなら期限に間にあ

『第1・4スラスターに異常発生、推力が低下していきます』

え。

打鉄二式から警告が発せられたかと思うと思わずバランスを崩してしまう。

スラスターより黒煙が吹き出す。

未だ作りかけであるこの機体にはフライ・バイ・ワイヤが搭載されていないので、飛行が不安定になっていく。

どうしようどうしようどうしよう。

『残ってるスラスターでゆっくり地上に降りてくるんだ！ いいか！ 絶対慌てるなよ!』

司令室から尾白さんがが指示を出している。そうだ。落ち着かないと……

『第2・3メインスラスターオーバーヒート。停止します』

「っ！ そんな！」

機械からの無機質で冷酷な宣告が告げられる。

まだ辛うじて動いていたスラスターもついには動かなくなり、

「だめっ！」

スラスターをすべて失った打鉄二式は

『かんちゃんっ!!』

本音の声が聞こえる……

と思うとすぐに地面に激突した。

整備室にて地面に激突して何一つ言わなくなった打鉄二式と向かい合っている。

まだ機能が万全ではなかったSEがうまく作動しなかった。絶対防御の方はどうか作動したようだけど……

スラスターは焼け焦げているか、制御装置がグチャグチャになっており、もはや取り替えるほうがてつとり早いほどだ。

それだけなら良かった。

一部しかつけていなかった装甲は破損または脱落。フレームも歪みに歪み、一部は断裂している場所もある。

無傷なのはISコアだけ。

結論を言うと

この機体はもう復活できない。

当の私本人は、体を少し痛めた。まだ湿布を貼っている肩や脛がヒリヒリする。

あの子の夜に目を覚まして今に至る。

「最後にこいつは身を挺して守ってくれたんだ。こいつは頑張った」
「……」

ここには、本音や整備科の人たち、そして……なぜ尾白さんがいるのだろうか。

「……で、事情は多少知ってるが、布仏さんや他の見た整備課が心配してたぞ。学校始まる前からずっとここにこもりっぱなしで一人で

作業してたって」

尾白くんがそう話す。大体本音あたりから聞いたのだろう。

「……フレームも装甲も予備を使っても足りない。この子は直せないし、作り直すこともできない。だから政府からの命令で……っ」

「そ、それじゃあ……」

「期限になったらこの学校を出ないといけない」

整備室内の空気が凍る。

整備科の人たちの顔が驚愕や悲壮な顔に染まっていく。

「あんなに頑張ってたのに……」

「後輩ともうお別れか……」

……そっか。みんな見てくれてたのか。

「……かんちゃん」

本音の目に涙が溜まっていく。

「……ごめん。私が一人で突っ走っちゃったから……」

「……そんなことないよかんちゃん！ だって、たっちゃんでも一人であんなことできないんだよ！」

本音がそう話すが、あながちう「ちよつとこれ見てみな」え？

そう言っつて尾白くんこちらに複数の名前が書かれた紙が渡される。

その名前の中には姉の名前も入ってる。

そしてその名前は

「……ロシア第三世代IS製作者名簿？」

「……話ほだいたい聞いている。そのたっちゃん？ が作ったISでもこれだけの人が関わってるんだ。」

この短期間でこんだけ出来るやつは俺の知る限りだと……俺と束くらいか？

なんか姉のほうかどうのとか言ってるけど、俺は簪のほうかすげえようにしか見えんよ」

姉より評価してくれたのは嬉しい。なぜ篠ノ之博士の名前が出てくるのかはわからないが、それだけの実力があるって認めてくれたことは分かる。嬉しい。

今までそんなこと言っつてくれるのは本音くらいだったのだから。

「……あ、今の資料はここだけの話な。ちよつとまずいから」機密資料出しちゃだめじゃん！

でも……

「今更そんなこと言ってくれてももう遅いよ……」

「で、ここからが本題」

この話は誰も知らないのだろうか。整備室にどよめきが起ころ。……ここから何をできるというの？

尾白くんが真剣な目をこちらに向けて

「もともと整備科と俺、のほほんと一緒に簪の専用機作る話だったんだがああなつちまったからな……」

そこで！ 簪の機体、俺達に任せてくれないか？」

「「「「「……る？」」」」」

思わず口に出てしまった。周りも言葉の意味がわからずハモる。

彼が少しキョトンとしていたがすぐに

「いや、少し言い方が悪かったな。」

簪の専用機、俺達の会社と一緒に作らないか？」

「「「「「……ええええええ!!」」」」」

そんな軽く決めていいものなの!?

一方その頃

「……ほんとうに流星どこ行った？」

「誰かを保健室に運んでたな。あいつから先生に話しといたから使っている」と聞いてる。

うん、歩行はだいたいぶ様になってきたからもういいだろう。では次は飛行の練習だ。やるぞ一夏！」

「ああー！」

こっちはこっちで箒が頑張っていた。

第6話 会長

side 簪

「……というわけでここに俺の会社のISカタログがある。好きな機体と装備選びな。わからんことあったら俺に聞きてくれ。俺はちよつと機体の状況詳しく見てくる」

そう言つて尾白くんから渡されたのは『タイムマッド社IS部門機体・装備一覧&アセンブルのススメ』と書かれた冊子だ。

「そういえば物を運びに来る人と説明する人は？」

整備科であろう一人の子が質問する。そういえば学園に干渉うんたらかんたらという規則があるが、どう対処するのだろう。

「今回はそうだな……職場体験ということにしておこうか。特別だぞ？」

そんなぽつとでの理由でいいのかな……

私や本音含めて尾白くんを除くその場全員のジト目が向けられる。

「……特別だぞー？」

彼が目をそらす。

何回も言わなくていいから。

「……かんちゃん」

本音がこちらを見ている。先程までとは違い、その目は喜びに満ちていた。

「……一緒に考える？」

「っ！ うん！」

「あ、値段書いてるけど考えなくていいぞー！」

……いいもの作ってお姉ちゃんを超えてみせる。

「シナンジュかクシャトリヤ……どっちも高機動だけど更に速度を求めるか、装備を取るか……うーん」

「おう、この装備かっこいいかも」

「……マスブレードってこんな見た目してたんだ」

「なにこれ、ミーティア……でかすぎない？」

「グラインドブレード……これがいい。ロマンがある」

「ちよつと簪さん!？」

「んで？ いい感じのできたか？」

「ここにいるみんなで決めた紙を渡す。」

「うん。この紙に書いた機体と武装の部品を頼める？」

「どれどれ………ほう。いい感じじゃないか？ 大量のミサイルと機体各部のビーム砲に加えてビッグウイグキャノンの中距離を主体に高周波薙刀で近距離もカバー……この機体の特性をしっかりとわかってらっしゃる。」

それにロマンでグラインドブレードまで……いいじゃないか。

この短時間でよくここまで組めたな。すごいじゃないか。普通ここまで行くなら何日もかかってもおかしくないが……素晴らしいの一言に尽きるな。

他にもほしい武装とかあるか？」

彼が私達の決めた装備を高く評価してくれる。ISの開発も行っている会社がこうしていつてくれることに周りも照れていたりにしている。

「……今のところはないかな」

「んじやさつそく」

そう言つて彼がポケットから取り出したスマホを操作し電話をかける。

「……俺だ。今日新しくカスタマーができた。……どこでつて？ もちろんIS学園だ。」

こつちに今から言うやつ倉庫から持ってきてくれ。基礎はNZI

クシャトリア・エクスターミネーター
S | 6 6 6 で武装はB W C シールドスラスタ―は全部
ミサイル型のアレだ。

……威力と性能？ あたり前田のクラッカー、とびっきりのやつを頼む。あまり使ってるやつ少なかっただろう？ たつぷりもつてこい。

これを後ろで聞いてる奴ら、喜べ、
グラインドブレード G B の出番だ。『ウオオオオ!!』

そういやコアはこっちにあるからな……コアの意向を聞いて一行きたがってるやつを倉持に渡して……わかった数合わせしとくように政府とか関係各所によるしく。来るめど立ったらまたこっちに連絡してくれ、なるべく早くにな。

それじゃあ頼んだぞ」

電話の後ろで誰かの歓声が聞こえたまま電話を切る尾白くん。

……色々突っ込みたくなってきた。

ミサイルそんな性能高くなってもいい。

G B でそんなに喜ぶって……もしかして色々まずい機能とか入ってない？

コアって普通意志はあまりでるものじゃないのに、この言い草だとあの会社のすべてのコアが意志を持つていることになるよ!?

「尾白くん……後で色々とツッコんでもいい？」

「ん？ 別にいいが……今の話にそんなところあったか？」

「」「」「あつたよ!」「」「」

ここにいた全員とまた意見が一致した。

「まあそれはそれとして……」

ではあらためて、

更識簪、我がツイマッド社のパイロットになつてくれるか？」

そう言つて彼が手を差し伸べてくる。

「……はい、よろしくお願いします」

その手をしっかりと握つた。

その場が沸いた。
待っててね、打鉄二式。作り直して代表候補生としてまた頑張るよ。

時は部屋に戻って時計は8時指している。

彼はパソコンを開いて何やら作業をしていた。

まだ伝えていなかったことを伝える。

「……尾白くん、あの機体が完成したらまず戦いたい相手がいるんだけど……」

「……誰だ？」

「前に少しいざごぎがあつてね……私のお姉ちゃんって知ってる？」

「……更識楯無さんのことか？ 生徒会長の」

「そう。昔喧嘩しちやつてね……」

『あなたは無能でいなさいな』なんて言われたからいままでへこんでたけど……

もう無能なんかじゃないことをしっかり伝えたくてね」

「……家の事情は偶に耳にするから知ってるけど、更識家は対暗部用暗部の家で彼女はご当主さんなんだろう？ 迷惑かけたくないから言つたんじゃない？」

「……まあ大企業の社長だから知つてもおかしくないか。

「……今度聞いてみる」

「それがいいと思うぞ。」

「……よし。こっちの作業終わったから、ちよつと外の空気浴びてくる」

side 流星

（『まだ顔が赤いぞ』うるせいシヤア。

……あの時くつそ恥ずかしかつたんですけど。

思わず謎の空気を避けるために思わず手握っちゃったのまじで。いやほんとに。

というか

「最初からずっと見てたのわかってますよ、生徒会長」

「あら、気づいてたのに話してくれなかったのね」

そう言つて木の陰から姿を表したのは水色の髪を持ったこの学校の生徒会長、更識楯無だ。手には「残念」と書かれた扇子を広げている。

要件をいきなりだが伝えるとするか。

「話はだいたい聞いてます。」

あいつの機体が完成したらぜひ戦つてくれませんか？」

「……いきなりお願い事？」

「いきなりなのは本当にすいません。ただ、あなたはあなたで今のまま簪と仲が拗れたままになつてるのも嫌でしょう？」

「……あなたはなぜ初めてあつたかんちゃんにそこまで尽くすの？」

「あなたまでかんちゃんっていうん「べ、別にいいじゃない!」……まあ人の呼び方はそれぞれですけどね。彼女と会うのは今回が初めてではありませんよ。前々から『KANZA』っていう名前で交流があつて……」

『KANZA』という言葉に反応して、驚愕の表情に染まつていく生徒会長。

「っ!? かんちゃんのその名前のことを!? ってことはあなたも……」

「まあだいたい考えてることで合つてると思いますよ。」

俺もあの世界の生き残りの一人です。『メテオラ』として僕もその世界で結構暴れてたので」

『メテオラ』、ね……今とんでもない情報がここで出て正直びっくりしてるわよ……」

扇がいつの間にか『仰天!』となつている。……あの扇子どうなつてんだ？

「大したことやってないですけどね……」

「大したことって……アインクラッドの英雄さんがなぜかんちゃんに興味を？」

「そのときにいた彼女が今こうやって困ってるの見てたらいっても立つてもいられずに、ね」

「そう……あなたはお人好しね」

「そんないいものじゃ無いですよ。ただの俺のエゴですから……」

で、話を戻しますけど、簪との戦闘受けていただけですか」

「いいわ、受けてあげる。かんちゃんを頼んだわよ」

で、一通り話が終わったのだが……

「かんちゃんあつちでどんな生活してたか教えて！」

「……いずれか」

これについてが一番興味津々ですやん。

流星からみた人たち

一夏：いいやつ。さっさと周りの好意に気づいてほしい。シスコン。

簪：幼馴染。束とは仲いいようでヨカタ。さっさと一夏にアタックしろ。

ちっふる：ブラコン。前からここで働いていたのは聞いてたからお仕事頑張れ。

簪：アインクラッドからの知り合い。その当時にあったときはほんでもなく暗かったけど現在はかなり明るくて安心してる。

楯無：シスコン。

第7話 クラス代表決定戦

side 流星

「尾白、すまないが一夏の専用機がまだ到着していない。アリーナの貸し出しの時間の都合上先に試合を行ってくれないか？」

クラス代表決定戦当日、出るのが2回戦以降だったのでピット内で観戦の準備をしていたところに織斑先生と山田先生が連絡を伝えにやってくる。

「本当に申し訳ありません流星くん……」

「いや、別にいいですよ。では今から準備します。」

「これが俺の専用機『アレックス』です。」

二の腕や膝下より下は既存のISより2周りほど装甲——チョバレムアーマーによって肥大化して、アーミーグリーンの塗装が施されており、ふとももと二の腕、頭と一部腹部が以外完全に機械に覆われている。

ちなみに頭はガンダムMk-2のバルカン・ポッドシステムの形をした物を装着している。

「随分ゴツゴツしてますね……」

「というのもこれだけ装甲があつたら絶対防御が発動しにくくなり、実質二重で硬くなったそうですよ」

「機体各部にスラスタは結構見受けられますけど結構重そうですね……」

「こいつ、見た目に反して結構動いてくれるんですよ。まあ今回はこいつメインじゃないんですけどね……」

「どういうことだ流星？ こいつで戦うわけではないのか？」

「それは違いますよ……つて言ってるうちにそれが来ましたね。」

「二「おまたせしました——」」

そう言っつてピット内に複数人の男によつて台座に載せられた7メートルはゆうに超えるであろう巨大な機械が運び込まれていく。

「これは……」

「あ、あの……間違えてませんか？」

「間違えてないですよ、レギュではサイズについて何も言われてませんからね……」

「こんな巨体は普通は存在しない。いや、存在できないはずといったほうが正確か。」

本来、ISそのものを大きくしていくとエネルギー供給構造が複雑になり操縦者にエネルギー分配のタスクが増えて操作難易度が上がる上に、機動が鈍重になるので既存兵器よりも高機動というメリットが潰れてしまう。……というのが世間一般的な大型ISが存在しない理由なのだが、

「大出力ジェネレーターで解決したんでね。」

「……まあいい。準備を進めてくれ。」

「了解。」

寝そべるようにその機械と一体化し、各接続の確認をする。

「FCS（火器管制装置）のリンク……よし。」

ジェネレーターの稼働率一番炉97・6、二番炉96・8で安定してるな。

機体各可動部の動作……特に問題なし。

コジマキャノンは……大丈夫だな、リミッターかかっている。よし。」
カタパルトの重量制限ギリギリだ。もう少し欲張ってたらカタパルト使えなかったな。

「尾白流星、IIデンドロビウムいくぞっ!!」^{出撃}

これから始まるのは

「来ましたわね……ってそれなんですか!？」

「もちろんISだが……」

『クラス代表決定戦第一回戦、尾白流星対セシリア・オルコット……試

合開始!』

蹂躪劇だ。

とりあえず全ミサイルの5分の1ほどをばらまきながら高機動型ISにも劣らない横移動でアリーナの壁に沿って移動していく。

「なぜその巨体でそのような起動ができますの!?!」

彼女は回避していき手に持っている武器——スターライトMk1——IIだっけか? をこちらに向けて発射する。

だがこちらも巨体に見合わぬ速度でそれを回避する。……化け物だなこりや。

「くっ、なら……ブルーティアーズ!」

そう言っただけの彼女の背中にあるスラスタの一部が分離し、4機の自立起動武器となる。

こちらを的確に狙ってくるビット。だが、伊達にこつちがでかい図体しているわけではない。

「なっ!? 効かないですって!?!」

前方位を中心としたエネルギー偏向・吸収をする大型フィールドジェネレーターと右手に装備しているフィールドランチャーがごとごとく働き、ダメージは後ろに当たるレーザーのみとなっている。だが、当たる場所は装甲が施されたウエポンコンテナとスラスタなのでダメージもすくない。

「どうやらメタ装備だったっぽいな」

「ティアーズはこれだけではありませんわよ!」

そう言っただけのコンテナの一部からミサイル2基が発射される。

尾部は無効化されないと気づいたのだろう。ビットがこちらの後ろに回り、撃とうとしてくるがコンテナの全方位についた機銃型レーザーが標準させるのを許さない。

そうしている間にもミサイルはこちらに向かってくる。

それを

「おらっ!」

コンテナより取り出し、同じくコンテナより出現したサブアームに掴まれてチャージしていたサテライトキャノンの極太のビームで

横薙ぎに払い、撃墜する。

「一体何種類の武器を持っているのですか!？」

Iフィールドランチャーとミサイルを織り交ぜて弾幕を形成しながらコンテナより取り出したレールガンを両手に持ちこれらで精密に本体を狙う。

しかし相手はただの一般生徒ではない。何発かは命中しているが、発射のリロード時間を読んで発射寸前にスラスターを吹かすことで命中率を下げようとしている。なかなかやるな。

こちらでも少し面白いことするか。

「なっ、変形しますの!？」

足元にあった大型スラスターは巨大なテールスカートに変形し、ウエポンコンテナは両肩後ろよりに移動、アームで一応本体と繋がってはいるが、アンロックユニット非固定武装となっている。

主砲のコジマキャノン^は右コンテナ下にの少し奥に移動し、左にあったIフィールドジェネレーターは左腕下部についている。

この間約2秒。

「うちの変態科学者たちが考えたんだとき! アーマー形態とスーツ形態の変更可能によるマルチロールファイターがコンセプトだ!」

「イカれてますわ!」

「いい意味で、な!」

さっつきからチャージし続けていたコジマキャノンを発射する。

リミッターがかかっているとはいえやはりコジマ。

ミサイルに直撃すると緑色のプラズマが発生し、周りを飛んでいた2機のビットもかすただけでスパークが発生し、1機は墜落し、もう1機は爆発した。

「かすただけでティアーズが!? なんですかこの威力は!？」

「……これでもレギュ引つかからない程度までに随分威力は抑えてい

るはずなんだがな」

「それは逆に言えばレギュレーションギリギリの火力つてことですわよ!？」

そうこうしているうちに彼女の持っていた武器、スターライトMk-3にレールガンが命中、貫通して使い物にならなくなる。

「クツ……インターセプターツ！」

手に短剣をコールしこちらに向かってくる。だが、

「近接ないとも思ったか！」

両足付近に浮いている構造物——パイルバンカーをいま両手に持っているレールガンから手を話し装着する。

そして両者は距離は接近していき……

「キヤアアアア!!」

パイルバンカーは発射され、打ちどころが悪かったのか絶対防御が発動しSEを一気に持っていった。

『ブルーティアーズのSEエンプティ！ 勝者尾白流星!』

SEを削りすぎたのか彼女の機体が解除され上空30M程から落下します。

「ちよつ?!? ……よつと」

これにはすこし肝を冷やされた。眼の前でクラスメイトがスプラッタされるのは見たくないからな。

すぐに彼女の下手に回り彼女を抱える。

「二「キヤアアア!!」二」

下から黄色い声が聞こえるが気にしないキニシナイ。

「今回はちよつと不利すぎたな……すまん。ただビットが後ろから狙われたとき結構ヒヤヒヤしたぞ。ビットの早撃ちとか練習したらいいかもしれない」

「……ハイ／／／」

ん? なんて顔赤いんだ?

次の試合は一夏対セシリアだったのだが白式が試合中に一次移行し、あいつが何故かもうある単一能力、零落白夜で決まるかと思われたのだがデメリットを把握しきれておらずあと一步のところまで自滅した。

……あついま殴られる音が聞こえた。

そして次の試合。

「やるぞ一夏、心の準備は出来てるか？ 俺は全武器のチャージが済んでる」

「ち、ちよつとまってくれ！ ウワアアアア!!」

この試合は大半が膨大な量のミサイルやコジマキャノン、サテライトキャノンとその他射撃との追いかけてこだった。

……なかなか当たらん。避ける才能はかなり高いってことかなかなかやるな。

「待ってくれ！ 俺だけ剣一本でそれはないだろつてうわっ！」

「口動かす暇あつたらすきみて本体に突撃してこい」

「なら……いまだっ！」

こちらの弾幕が薄くなった一瞬のうちに白式が方向転換し雪片式型が単一機能『零落白夜』を発動し機体各部についてる小型のレーザー機銃をかわしながらこちらに肉薄してくる。

……いまの瞬間加速だったな。機体の速度と相まって機銃が追いついてない。機体の色も相まってかつて目の前で見たユニコーンとホワイト・グリントを彷彿とさせる。

面白いものを見せてもらったお礼に

「げえ!? それで受け止めれるのか!？」

「……最後は良かったぞ」

雪片式型を左のパイルバンカーの先端で受け止めて空いている右のパイルバンカーを腹部にお見舞いし、地面に叩きつける。

「ガハッ!？」

「まだまだ行くぞお！」

「やめてくれええ!! アアアア!!」

次々にパイルバンカーを発射していく。……これ楽しいな。

一夏のSEはゴリゴリ削れていき……

『白式のSEエンプティ! よって勝者、尾白流星!』

観戦席より歓声が沸く。これで全勝か。まあ代表は辞退するけどな。

機体を解除して地面に降り立ち、地面にヤムチャしている一夏の確認をする。

「……モウアレトタタカイタクナイ」

あらら、少しトラウマになってしまったようだ。

「まあ第3世代機の機動力は十分に活かしてたから次からはむやみに突撃したりせずにもうちよつと戦略組もうな」

「……わかった」

という訳で一夏とピットに戻ってきたのだが……

「やりすぎだバカモノ!」

「ゼーゴック!?!」

ゲンコツをもらった。

「……まああいつらに評価や改善点を教えてくれたことは感謝する」

少しお褒めの言葉ももらった。

「……はあ」

その日の夜、寮の自室にて

「……今日のアレすごかったね」

試合を見ていた簪が一緒にアニメを見ながらそうつぶやく。

「簪のやつあれより性能高くなると思うぞ。なんせ今日あれと一緒に来たやつは3.5世代謳ってるし」

「……ちゃんとリミッター一緒に設定しようね」

「……おう」

side セシリア

シャワーを浴びながら今日あった試合についてふと思い返す。

「織斑……一夏……」

真つ直ぐで正直な男性。

彼はひたむきにブレードオンリーというトングデモ機体に乗っているながら試合中に一時移行が行われ、こちらがやられるあと一歩まで追い詰めた男。そして、

「尾白……流星……」

ある話では日本の代表候補生を独断で救ったと噂されている男性。クラスでもいつもみんなと仲良さそうに話している。

巨大なISを操って圧倒的な武器の数々を的確に操作し、実力と武器の性能を生かした戦いで私に勝利した男。

ISでお姫様抱っこしてもらったことを思い出し、頬が火照るのがわかる。

そういえばあのとき抱っこしてもらった際に見えた装甲の隙間から見えた白いものは何だったのかしら……？

「もっと、知りたいですわ……」

今まであつてきた男とは何かが違う彼ら。

「なんかいったセツシー？」

「な、何でもありませんわ！」

とにかくこれほど魅力的な男性と出会ったのはいつぶりだろうか。

ああ、これが

「恋、なのでしょうか……」

「やっぱりなんかいったー？」

「ななな、何も言ってますんわ！」

第8話 パーチー

side 流星

「というわけで1年1組の代表は織斑一夏くんとなりましたー！
あ、1つなかりで縁起がいいですね！」

「いやなんでそうなった!？」

代表録決定戦劇の後日、クラス代表は一夏となった。なぜかって？
それは

「私と流星さんが辞退したからですわ！」

そうオルコットが代弁する。

……なんで下の名前呼びになってるの。(『もしかしたら……いや
言わないでおこう』) 最後まで行ってくれよ…… (『自分で気づけ』
ええ……ひどいなあ。)

「……でも俺全敗だぞ?！」

「織斑さんにはもつと実戦の経験を積んでもらって、流星さんに負けないほどの実力者になってくださいまし！」

「つー訳だ。とりあえず、頑張れ一夏。トレーニングとかは付き合っ
てやるからそんなに気負いするなよ」

まあできる限りサポートしよう。メインは筈がしてる未来しか見
えんがな。

「……終わったな? では今日は外で実際にISを使った訓練をす
る。1時間目のチャイムがなるまでには外で並んでおけ。もたもた
するなよ?！」

「それではISを用いた訓練を開始する。専用機持ち、前に出てこい」
そう織斑先生に言われて俺と一夏、オルコットが先生の横に並ぶ。
「では機体を順番にISを展開しろ。まずは織斑からだ」

そう言われて一夏が機体を展開………した。ほぼ始めてたし最
初はんなもんか。

「3. 42秒、遅いぞ。熟練の操縦者になれば1秒もかからん。では
次にオルコット」

「はい」

これは……なかなか速いな。(『つくづく思うんだが機体をその場で展開できる技術……一体どうなってるんだろうな』) ん？ 次元操作で取り出してるんだとき。(『なぜ知ってるんだ……』)

「1. 4 1秒……流石候補生といったところか。これからもつと下げていけ。最後に尾白」

「俺はオーキスもだしますか？」

「オーキス？ ……あれか。いや今回はなしていいぞ。それと……手加減なしだ」

「了解」

いくぞシヤア。(『ああ』)

ISの待機形態を取り出し己が機体をまとっている姿をイメージしてアレックスを展開する。

「ほう、0. 6 6……やるな」

「すげえー！ どうやるんだ!？」

「一体どこでそれほどの技術を!？」

「まあ要はイメージだ。自分がこれをつけているな」

「ええ……」

間違ったことは言っていないはずだが、人外を見る目で見ないでくれ。

「それでは上空200M付近まで上昇しろ」

そう言われて3機一斉に上昇する一夏は……箒にちゃんと教えてもらっているな。一応ついてこれている。

『白式のスペックはその3機で一番高いはずだぞ。まあだいたいできてるからこれから頑張れよ。では次に降下の実践だ。地表10cmが目標だ。セシリアから行け。』

セシリアが降下して行き……あれはうまく行つたな。10cmジャストだろう。

『……うむ。では次は織斑、行け。』

あれは……チキつたな。

『36cm……早とちりするな。では尾白、行け。』

少しトリックをするか。

この場で瞬間加速を実行し、更に降下中有にもダメ押しで瞬間加速をする。

傍から見たら地面に激突するように見えるだろう。悲鳴が聞こえる。大丈夫、それはない。

宙返りをしてPICをフル稼働、10cmジャストで停止する。

「できてるが……真面目にしろ。見てるこつちがヒヤヒヤする。」

では次に武装の展開の実演だ。織斑、やってみろ」

そう言われて雪片式形を展開する一夏。これはいい線いつてるな。

「1.9秒、今の段階では悪くないだろう、オルコット、銃の方はできるだろうから得物を出してみる。」

展……「ああもう、インターセプター！」あら、やっぱり苦手か。試合でもコールするとき名前呼んでたからな。

「やはりな。こつちの訓練をしっかりしておくように。」

そして尾白、わかったから横で次々に武装を変えていくのをやめろ。……一体何種類あるんだ？」

今の間、俺は次々に武装を出したり収納したり、ラビッドスイッチ高速変換を実演していた。

「あれ？もうしなくてもいいですか？では……」

「……終わったな？では次にやることを説明する——
こうして授業は続いていった。」

「……織斑くんクラス代表おめでとーう！」「……」

そういつて夕方より始まったのは食堂の一部を借りている代表決定パーティーだ。他のクラスは決定戦がなかったりあつてもすぐに決定戦があつたりでもうパーティーをしているクラスが大半、らしい。

俺は料理を振舞うため、借りている厨房と会場を行き来して合間に少し食べることを繰り返している。

時折

「尾白くん頭も切れて料理もできる……お嫁に行きたい！」
「……完全に負けた」

なんて声も聞こえる。すまん、ただの趣味なんだ。そんなハイスベックじゃないよ。(『いや、十分美味かったのだが……また食いたい』) そうか？ じゃあまず身体ねえとな。(『……少し東女史と話しておこう』) ……あ？ 実現できそうで怖いんだが……

「ねえりゅーりゅー？」

「どうしたのほほんさん？」

「デザートある？」

「それならあっちの方にあるぞ」

「ありがとう！ りゅーりゅーのご飯全部ウマウマだよー！」

そう言つてデザートを取りに行くのほほん。

そういや一夏はどうしてるんだ？

一夏の所へ向かうと誰かがインタビューしていた。

「——うわっ前時代的。適当に捏造しておこうっと」

「ちよっ……」

「じゃあ次はセシリアさんね」

「私がなぜ織斑さんに代表を譲ったのかというのですね、流星さんと話長くなりそうだから適当に惚れたことにしとくねー」ま、待つてくださいましー！

そんなんでいいのかインタビューは……あ、こっちに気づいた。

「きみが尾白くんね。ちようどよかった。あなたにもインタビューしたかったのよ。」

「へえ……捏造しなければ受けますけど……」

「ちゃんと答えてくれたらそんなことしないわよ……」

それじゃあ端的にクラス代表になった織斑くんになにか一言！

「サポートはできるだけするからとりあえず頑張つとけ。」

「うん、それらしくていいわね……じゃあ写真を取るから3人とも寄ってー！」

いきなりだなおい。まあいいが……なぜオルコット腕を絡める。

「いい感じじゃん、それじゃあはい、チーズ！」

カシヤツ

その写真にはクラス全員が写っていた。箒、いつの間に一夏の真横とつたんだ？

「尾白くん、これは少し個人的な話なんだけどね……」

「……ん？ なんだ？」

みんなが談笑している中、新しくスパゲティの皿を用意している最中にさつき質問してきた新聞部員の黛さんが話しかけてくる。

「簪さんの機体、ありがとうね」

「……どうしてあなたが感謝を？」

なんで急に新聞部員に感謝されないといけないんだ？

「今の生徒会長いるでしょ？ あの人は1年の頃から仲が良かったんだけど、簪さんのことをずっと気にかけてね……少し前にあの事件が終わったじゃない？ その時は泣いて喜んでたんだけど……」

「なるほどね……」

友達が心配だったって言う訳か。

「あの家はちよつと特殊だね……政府の言いなりになるしかないというか……」

「まあそこらへんは昔から知ってるからあまり話さなくてもいいぞ」

「なんであなたが知ってるのよ……」

そこらへんは……昔任務でちよつと裏の傭兵業やってたときに先代当主と任務したことがあるって言えるわけ無いじゃん。

「大人の事情といますか……」

「あなた今の一年より年上とはいえ私達とほぼ変わらないでしょ……それで話の続きなんだけど、今の政府には今の対暗部用組織にもIS操縦者がほしいっていうことでね今の会長はロシアに籍おいちやつててね……」

とある別の組織からこの学園に人を送ることもできないから簪さんが行くことになったのよ」

ある組織って……DAか？ なんの略だったっけ……？ ダツシユアタック？ (ちがう)

というより……

「……通りで帰還者学校にいなかったわけか」

「あの成績は良かったし、ある程度先の勉強は済ませていたから別に問題ないって判断されたのか、選ばれちゃったのよ……専用機付きでね」

「んで一夏のあの機体か」

「そう、最低限の資材だけ渡して期限付きでね……もし壊れでもしたり期限に間に合わないってなったらすぐに用無しになって退学にされちゃうってときに……」

「1週間前のあれか……」

「ええ。会長やいろんなクラスの先生、織斑先生も頑張って説得しようとして職員室でずつと電話で上に抗議していて、それでも何も成果を得られずに会長なんか「どうしよう……」ってずつと言ってたわ。

私もその場で色々連絡先の検索とかでいたからね……慰めるぐらいしかできなかつたのよ」

色々な先生や織斑先生も頑張ってたのか……生徒がいなくなるのはやはり寂しいのだろう。後で礼しに行くか。

「そんなときに簪さんが退学しなくていい話を整備科の子が職員室の入口で言った時は誰もが信じていなかったわよ。織斑先生なんか「そんな嘘は通じないぞ」なんてすごい剣幕で詰め寄ってたからね。あれ怖すぎたわよ……」

俺も想像しただけで怖いわ。(『……殺気を感じるぞ』 あっ……もう考えないでおこう。

「でもその後に「ツイマッド社の尾白くんが代わりに専用機を用意してくれるって！」っていう話がその子の口から出たときの職員室の驚き様といったらもう凄かったわよ……」

職員室が湧いて織斑先生も一気に疲れが取れた顔していて楯無さんが「よかった……」って言ってその場でへたりこんで泣き始めて……2時間は続いたかしら」

へえ……あの会長そんな一面もあるのね。初めて会ったときは想像もつかん。

「自分の出来る事をしたままでですよ……」

「出来る事って……スベック高すぎない？」

「まあ……ちよつと特殊な学生ですからね……」

「とにかく、ありがとね、尾白くん。」

あ、『メテオラ』について教えてもらってもいいかしら！ できれば記事にもしたいし！ これは特大ネタよ！」

「そのことも会長話したんかよ……まあ別に隠したいわけじゃないので記事にしてもいいですよ」

後日、校内新聞で俺のS A Oについての話載っていて質問が絶えない日が続いた。……いずれかこうなるわけだし別に構わんが……

その後

「織斑先生、山田先生、料理、お気に召しましたか？」

「流石だな。やはり尾白の飯に外れはない」

「すごいですね尾白くん！ いろいろな美味しい料理も作れるなんて！」

同じく会場で食べていた先生陣のもとへ向かう。織斑先生はイタリアン系統、山田先生は中華系統を食べていた。

「ちよつと話変わりますが……簪のことありがとうございます」

「……いや、礼を言いたいのは私達の方だ。あの場で何もできなかったのだからな。……教師として本当に情けない」

「それは本当にありがとうございます……とところでどこからその話を？」

「新聞部員の黛さんという人からね……それじゃあ部屋の人にもご飯渡してくるのでお暇します。ゆっくりしてゆっくりしてくださいね」

「ああ、そうさせてもらうあとで黛覚えとけよ……」

そう言っって会場を後にする。何か聞こえたが気にしない。

パーティーは夜の9時頃まで続いたらしい。……お前ら寝坊するなよっ！

……どこかで黛さんの叫びが聞こえた気がするが気のせいだろう。

午後7時半、自室にパーティーで作っていたご飯の一部を持って入る。

「すまん、遅れたな。はい、これ。できたてだぞ？」

「いいよ別に、ありがとう」

作業していたのだろう。簪さんISの資料を整理していたのを中断して一旦書類を隅に留めている。

「この学校にお姉ちゃんもいるから簪って呼んで」

「了解、簪……そういやゴールデンウィークの土曜日、開いてるか？」

少し頬を赤めながらカレンダーを確認する簪。（『あの子もか……』）だからなについてよ。

「ちよつとまってね……うん、開いてるけどどうして？」

「その日、キリトやアスナたちとあってみないか？」

GW編

第9話 アイスクラツドズとの再会1

side 流星

GWの土曜日の午前、俺はバイクの準備をしながら彼女が校門からでて来るのを待っていた。

周りでは同じく外出する人やこちらを見に来た野次馬で溢れかえっていた。

「誰か待つてるのかな!?!」

「あのバイクつてとんでもない値段するんじゃないか?」

「(いいなあ、合法的に尾白くんを抱きつけるんでしょ?)」

「というかこのバイクタンデムなんだが初めての相方が簪さんとはな……」

「……おまたせ」

黒基調でところどころに白と緑のラインが入ったライダーズーツを着た彼女がやってきた。

「(うそ、あの子が!?)」

「(デ、デートだと……)」

「(まだだ! まだ終わらんよ! 私達のアタックは終わってない!)」

んなもんじゃねえわ。アホウ。ただ宴会しに行くだけだよ。

「ちよつと用事あるから連れて行くだけだ。変に期待しないでくれ」

その一言で周りが落胆や安堵の声を出す。

この世界にもkawasakiがあつて良かったと今でも思う。

【Kawasaki Ninja H2 SX SE】

あの世界に入る少し前に手に入れた逸品だ。ちなみに免許取ってから2年たつてるしタンデムは大丈夫だぞ。

こいつの最高速は400km/hを超えろというが……まあこの国では出せるはずがない。ドイツのアウトバーン(制限速度なし)で走らしてみたいな。

「それじゃ、安全運転でかつ飛ばしますか」

「それが許されるとでも思っていたのか？」

「ゲツ、織斑先生……」

「いつの間に横に横にいたんだよ……」

「外出届を出した生徒の監視にな。こういったバカがいなか見るとめだ」

「……安全運転だけにしときます」

「不埒な行為はするなよ？」

「誰がしますか……まあ行ってきますね」

「気をつけろよ。……今度乗せてくれないか？」

「あんたも乗りたいんかい。」

「……まあ言ってくれば予定開いてる日に乗せますよ」

「……また伝える」

……といふかなんでそんな急に落ち込むんですか簪さんや。もしかして飛ばしてほしかったんか？

バイクを出して学園が離れたとき、二本の巨大な鉄塔が見えてきた時ににぼそつと言う。

「……ある程度離れたらかつ飛ばすからな」

「……ありがと」

「ここは目的の場所じゃないけど……」

簪がそう尋ねる。

東京郊外にバイクを止めて目的地に向かう途中、別のある人と今いる公園で待ちあわせをしていた。予定通りならもうそろそろ来るはずなんだが……

「少し会社の方の新薬の被験者になってもらってる。とある子も今日の宴会に出る予定でね……きつと驚くと思うぞ？」

「あ、流星さんだー！」

む？ この声は……

「……え、ユウキ？」

「あれ!? かんちゃん!?!」

担当のドクターが車椅子を押してやってきたのは

「こんにちはドクター。ここに來れたってことはかなり快方に向かっている、ということですね」

「ああ。まだ完治、とまでは行かないが十分免疫もできてるし、普通に外に出る分には問題ないないほどまでにはなってるよ。今日も無茶しても大丈夫なほどに、ね」

ツイマツド社製対HIV特效薬被験者、もといSAOの帰還者の「紺野木綿木」だった。

そのままドクターとは別れて簪が綿木の車椅子を談笑しながら押していく中、20分くらい歩いたところで目的の場所についた。

『ダイシー・カフェ』と書かれた店の扉を開ける。

「久しぶりだなあ流星！」

「お久しぶりです流星さん！」

「こんにちは、景太に壺井さん」

店内に入ると料理が盛られた皿を運んでいたケイタとクライン、それぞれ小林景太と壺井遼太郎が真っ先に反応する。

「やっと来た！」

「待ってましたよ！」

「木綿季の迎えもしてましたからね……ちよつと遅れました」

料理の準備をしているのだろうか、リズベツトとサチ、もとい篠崎里香さんと鳴野沙知代さんがカウンターから顔を出して挨拶する。

「待っていたゾ、木綿季に簪さん」

「久しぶり紺野さん！　そして簪さんははじめまして！」

「あ！　簪さんだー！」

「久しぶりー皆！」

「こちらでは初めまして皆さん」

同じく上の男性陣と同じくテーブルに皿をおいたりフォークやスプーンを配っていた喋った順に

アルゴ——帆坂朋さん、

エギル——この店の店主でもあるアンドリユー・ギルバート・ミルズさん

そしてシリカ——綾野圭子さん

がそれぞれ彼女たちと挨拶する。

「そっぴや何でももうみんな集まってるんだ？」

「尾白があの子たち連れてくるって言うからサプライズしたくてな

……流星には少し遅い時間言つた。すまん」

「でも良かったでしょう？」

隣り合わせで座っていた和人と明日奈がそう話す。

「……まあ悪くなかつたぞ」

この後ミトさんこと兎沢深澄が店に入ってきて今日のメンツが揃った。

「——という訳で『KANZA』さんこと更識簪さんだ。今は俺と同じIIS学園に行つてる」

に凄まじい殺気を感じる。

これは……終わったな。(『流星、ご愁傷さまだ』)

side 簪

突然の新事実で頭が追いつかなくなつて気を失つたあと、SAO帰還者歓迎会が始まった。

みんなが口々に色々な会話をしている。

流星くんは……席のコーナーで机に突っ伏していて、壺井さんや小林くんが慰めている。

……何かあつたかは聞かないでおこう。

「にしても日本代表候補生力……」

「すごい役職だね!」

「つてことはテレビとかでよく見る専用機を持つてたりするの!?!」

「作つてただけだね……壊しちゃつたんだ」

「」「壊した!?!」「」「」

周りで喋つていた彼女たちが一斉に驚く。

「あれつて何千万、何億もするんじゃないの?」

「うん……それで一時期は本当にIS学園やめないといけないはずだつただけだね……」

「じゃ、じゃあ今は……?」

「新しい専用機をもう作つてるんだ」

「……あれ? でもそのさつき言つたた倉持なんたらはもう作つてくれなかつたんじゃないの?」

「流星くんの会社がね……」

そう言つて私達が当の本人に視線を向けると、

流星くんがまだ机に突っ伏しながらこちらにサムズアップしている。

あながち「俺たちの会社が作つてやったぜ」なんて言いたいんだろう。

「彼が、ねえ……」

「ボクも彼の会社に薬もらつて今この場にいられてるんだけど

そつち^{I S}方面^{開連}にも強いとは……」

「あの会社一体どうなってるのよ……」

口々に彼や会社の話題に切り替わる。

「そういえばGGOっていうフルダイブのゲームもツイマッド社じゃなかったつけ……」

明日奈がそうつぶやく。

……あの会社手を出してない分野ないんじゃないの？

流星くんが新しくご飯を作ってくれたり、カラオケ大会などが始まったりして時計はもう8時を指していた。……門限間に合わなかった……

今は外でみんな喋っている。

「もうそろそろ遅くなってきたしお開きにしない？」

「……そうだね。ボクも病院の迎えがそろそろやってきそうだし」

「簪さん学校の門限とか大丈夫なの？」

里香さんがそう訪ねてくる。

「もう過ぎてるんだけど……どうしようかな」

「一応外泊届もだしてるからそこは問題ないんだが、どうする？ 俺

は明日実験場に用あるから、その近くの宿舎に泊まる予定なんだが……誰かの家に泊めてもらうか？」

門限の問題や、外泊の問題は流星君がもう手を打っててくれてみただけど、どうしようかな……私もその宿舎に泊めてもらおうかな。

そう考えていると、

「あ！ 今日私の家に泊まらない？」

そう明日奈が提案してくる。

「……いいの？」

「全然大丈夫だよ！ ね、和人！」

「俺も別に構わないぞ？」

桐ヶ谷くんも肯定する。

……あの子達同棲してたの!?

「んじや、スマホに連絡してくれたらまた迎えに行くからそれでいい

か？」

それなら……

「うん、そうするね。みんな今日はありがとうございました！」

「「「」

今日は人生でも指折りのとても充実した一日だった。

幕間 ツイマツド社の愉快な仲間たち2

side 流星

ツイマツド社の宿舎で一夜を過ごした今日、併設されている実験場の入り口にある建物でスマホを見ていた。

昨日のメンツで構成されているチャットグループだ。

つい先程送られてきた写真では明日奈と簪がパジャマ姿でツーショット、いや後ろに髪爆発してるやついるからスリーショットか。……和人、お前寝癖すごいな。

そのことについてチャット内で指摘するとすぐさま草やWWWが流れていく。

黒の騎士さんが「みなかったことにしてくれたのむ」とあわてて文字を打ったのだろう、全てひらがなになっている。

「新しくできた彼女とのおしゃべりかい？」

上から声がかかり、顔を上げる。

「いや、そんなもんじゃありませんよ。仲の良い奴らとのただの会話です。」

おはようございます、シーマさん、エルビー」

「おはよう！ 流星！」

「ああ、おはよう。もう主任から準備ができたとのことだ」

腕時計を確認し、今日の試験予定時刻に近づいていることを確認する。

「了解。それじゃあ行きますか」

「おはよう、皆さん。長い休みにわざわざすみませんでしたね……」

「ちゃんとお給料は弾んでもらうよ流星？」

「いつぱいちょうだいねー！」

「分かってる……ちゃんと経理課には言っとく」

今日テストする俺たち3人はMSのパイロットスーツを模した服装でそれぞれ搭乗するISの前に立って赤と白の機体の前に立って

いる主任の説明を聞いている。

「まず左からあ……シーマさんに搭乗してもらうのは『ISGNX—604T—K—K—アドヴァンスドシンクス』だ。

この機体は太陽炉、コジマジエネレーターのダブルジエネレーターで試験的に運用するのが目的の機体。まあ使いこなして見せてよ？

どちらか一方の動力源が潰れてもどちらも現行の普及しているISよりも大幅に性能が上回っているから、……太陽炉とコジマジエネレーター双方が半永久機関であることも相まって万が一離脱する時でも安心だと思う」

「へえ……機動力の方は？」

「高機動の一言につきるね。あと『TRANS—AM—SYSTEM』という機能も搭載しているのでぜひ使ってみよう！」

「……了解した」

次に主任が真ん中に位置する白と緑に塗装された機体に移動し、説明を始める。

「真ん中のプルさんに乗ってもらうのは『ISZGMF—1017M—K—K—ジンハイマニューバ』だな。

この機体はさっきの機体とは違い、コストがかなり抑えられている。まあジエネレーターを減らしたからだけだね。

機体の関節部の強度の向上をメインに機体本体の強度の向上を『ジン』から図ってましてそれによりコジマジエネレーターの出力に対する機体強度は十二分に強くなったし、

機体破壊後の絶対防衛発動自体が少なくなった恩恵もあるよ！」

「なるほど、あ！ 頼んでたあれつけてくれた？」

「オプシオン通りファンネルも12機ついてるから、キミ好みの戦闘ができると思うよ？」

「ありがとう！」

そして最後に俺の前に立っているグレーのイフリートに主任が

立って説明する。

「最後に一番右の流星に乗ってもらうのは『MS-08TX-W
イフリート・ナイトメア』！」

ウイザードシステムを改良した多様なパッケージを拡張領域に搭載して、戦闘中の換装により近・超近距離、中距離、遠・超遠距離のそれぞれに特化した装備や機動力が確保されているな！」

「……なるほど。ちなみにパッケージはどれくらいあるんだ？」

「今回はソードやクロウ、ナイフ類を装備した近距離、オールラウンダーの高速飛行型、長距離ビーム砲やミサイルなどの重火器を搭載した遠・超遠距離をインストールしていまーす」

「……了解した。それで、今回のテストはどのような形で行うんだ？」

「シーマさんとエルちゃん対流星で戦闘してもらってもいいかな？」

「なんでファンネル持ちと超高機動のやつまとめて相手しないといけないんですかねえ？」

「……主任、ちよつとこれ酷くないか？」

流星にファンネル持ち+ダブルジェネレーター、しかも太陽炉とコジマの組み合わせの奴らと戦うのはいじめにきてない？

「いや、それでも勝てるか怪しいんだがねえ……」

「そんなことないと思うよ？」

「だといいいんだが……」

「尾白流星、イフリート・ナイトメアでるっ！」

高速飛行型を装備した青色の魔神がカタパルトを滑り、飛翔する。

「シーマ・ガラハウ、K-アドヴァンスドジnkスでrつぐう!!」

「エルビー・プル、K-ジンハイマニューバでるyツキヤアア!!」

緑色の粉を撒き散らしながら2機が高速で飛び出して来る。……

あ、あれQB使っちゃったな。

「……後で絶対主任にパフェおごってもらお」

「主任……後で覚えとけよ……」

シーマさんとエルビーから負のオーラが噴き出している。……
ちゃんと伝えないからあ……

『あ、そうなんだ……それは後でね!』

スピーカーからブザーが鳴り、試験が開始する。

プルがマシンガンで牽制をしながら、シーマさんがGNライフルでこちらでの的確に狙ってくる。

やはり高速飛行型において正解だったか。避けやすい。

こちらも機体の構造に干渉しないように左肩にガトリング、右手に長距離ビーム砲を装備してそれぞれの目標に向かって撃つ。

「グッ……高速の複数の目標を的確に狙ってくる……君の頭の中は一体どうなっているんだい?」

「やっぱりさすがね。いけっ、ファンネル!」

プルが12機のファンネル全部を出してこちらに全方位攻撃をし
オールレンジアタック
てくる。

殺意高いじゃないですかやだ!。

ガトリングを格納し、次に左腕に射出式クローとダガーを装備する。機体重量を減らし、少しでも避けやすくするためだ。だが、シーマさんへの攻撃の手を緩めるわけには行かないので右手はそのままだ。

ファンネルは3ウェーブ以上耐えれば誰でもほんの少し次はどう当てようかと考える。

そこで少し弾幕が薄くなる瞬間がある。

「抜けられた!」

うまく言ったな。それではこれよりこちらのターンに移るとしようか。

近づいて命中率をあげようとしたファンネルを……

「甘いっ!」

ダガーで切り裂いて破壊していく。大型刀じゃなくてダガーのほうかやはり次の斬撃を繰り出しやすい。

有線式クローも展開してファンネルを追いかけ回し、追いつかれたものは突き刺されたり、潰されて沈黙していく。

「なっもう9機も……シーマさん、そろそろこっちの弾薬が尽きそうです!」

「こちらもそろそろエネルギー残量がのまずいね……これを使って見るとしよう。」

『TRANS—AM!』

機体からでる粒子の量が増加して彼女の機体が赤色に発光し、先程とは比べ物にならないほどの起動を見せる。

「何っ!? ウツ!?」

長距離ビーム砲が壊されたか! GNライフルに撃ち抜かれたものが爆発し、こちらにかなり痛いダメージを貰う。

「ならばー!」

こちらがシーマさんが近づいてくるタイミングに合わせて……斬る!

「いけえっ!」

「……S E ゼロ……やられたねえ」
シールドエネルギー

SEがゼロとなったジnkスが地上に降りて戦闘を終了する。

「シーマさんが!? でもさっきので結構減ってるはず。ならー!」

ジンハイマニューバの腰に付いている刀を取り出して左手に持った銃剣で弾をばらまきながらとどめを刺さんと近づいてくる。

ここで引き撃ちをするのは彼女の機体のほうが速度があるので悪手だろう。

ならこちらも!

ガトリングを再コールして同じように右手に大型剣に換装し、彼女に突撃する。

「ウオオオオツ!!」

「ハアアアツ!!」

両者が激突し、その場に立つのは

「……やられちゃったかあー」

「残量13……ギリギリだったな」

『試験終了!』

蒼い悪夢だった。

試験終了後、3人で戦闘のリプレイを見ている。

プルは食堂で主任に買ってもらったパフェを美味しそうに食べている。あれ一番高いやつだったような……。

「……なんかなるもんなんだな」

「やはり尾白はどこでも化物だよ。流石ジオンのアムロとシャアのハイブリットと言われるほどはある」

「昔より体力結構落ちてるはずなんですけどn……」

「……っ!? この感覚は!？」

（『……なにか来るな』）

「どうしたの流星さん？」

「……下がっててください。なにか来ます」

「……え？」

アレックスを緊急展開し、超大型シールドを出して壁に向ける。

「どうした流せっ!？」

壁を破って3Mほどの何かが盾に激突し、その動きを止める。

肩に鈍い衝撃が走る。……結構な速度が出ていたのだろうか。

何がぶつかってきたんだ。

シールドをずらして止まった物体の正体を確認する。

「……黒い？」

「ホ・ワ・イ・ト・グ・リ・ン・ト・だ・と……!？」

オールラウンダーはフォースシルエットを想像していただければ

だいたいわかりやすいと思います。

最後の盾はデュラハンのあれ。

用語解説

K コジマ技術

WS ウィザードシステム搭載

第10話 C4. 621

side ???

『これより任務を始める。任務内容はツイマッド社実験場の襲撃と尾白流星の捕獲、又は殺害。』

きつと目標はISを使って応戦してくるものと見られます。2日連続の任務で疲れてるのは申し訳ないけど、気は抜かないようにね』

「……了解」

……2日連続の任務か。

でも生きるためには任務をこなして報酬をもらうしか道はない。

『VOB残りエネルギーゼロ、パージする』

背部のブースターが切り離されて自壊しながら落下していく。

作戦区域に入って目標の施設などがだんだんと見えてくる。

『新しい情報がはいってきた。ターゲットは新型ISの操縦試験後、今から示す施設に入った模様。先にそつちをやる?』

そうやってHUDに『TGT』と書かれた建物が出現する。……先に

に人の方を片付けたほうがいいかな。

「……分かった。そつちを先に片付ける。……メインシステム：戦闘モードに移行」

ジェネレーターが唸りだし、出力が目に見えて上昇していく。

右手武器051ANNR重ライフル

左手武器063ANARアサルトライフル

両肩武器SALINE05分裂ミサイル

いつもの武器をコールし、戦闘に備える。窓からはいるのは気づかれる可能性がある。なら壁から……

「……っ!?!」

壁から施設に侵入した途端に突然体全体に鈍い衝撃が走り、ISが急停止する。

『なっ、気づかれていた!?! 施設のアラームは一つもなっていないのに!?!』

大きな盾を持った目標はこちらを見て驚いているようだった。

「ホワイト・グリントだと……!?!」

なぜこの機体の名前を知っているのだろうか……まあいい。任務を続けよう。

「……何の用事でここに来た」

完全にこちらをまだ敵視していなくてこちらを見ているだけ……

? 目標との交渉の余地はあるのかな……??

オペレーター、少し彼と話してくれない?

『了解』

『こんにちは、尾白流星さん。パイロットに代わりこの機体のオペレーションをしている者が私達の目的を説明します。』

私達の任務はあなたの捕獲を指示されています。手荒な真似はしたくありません、どうか抵抗せずについていただけなishようか?』

機体のスピーカーからオペレーターが目標に説明する。うまくいくといいけど……

「……結局連れて行って殺されることが目に見えている。その話には乗れないな」

目標がこちらの目的を否と答えた。

……交渉は失敗したか。でもここで逃がす訳にはいかない。

『……残念です』

突然目標が開けた^実場所^場に窓を破って向かう。

『逃げるつもり!?!』

割れた窓を通り目標を追いかける。

だが目標は逃げることなくその場に佇んでいた。

さつきと違って目標の右手に大型砲、左手にはシールドが装備されている。足にもなにか増えているものがあるが、ミサイルの類だろうか。

「やるならこちらの方がやりやすいだろう?」

『あなたがやられる場所が変わっただけです。あなたが武装までも展開して戦うことを望んだ以上、今から降伏しても聞き入れませんよ

？』

「上等だっ！」

戦闘が開始してからもう30分程が過ぎようとしている。

先程まで両者共に飛び回ってたまに狙えそうになつたら射撃することを繰り返していたが、目標が先程まで使っていたプルパップ式の銃を捨てた後に使い始めている大型砲が出てきたことにより劣勢に立たされていた。

バックでミサイルを発射しながら両手の武器で目標に射撃する。

向こうも左の盾をこちらに向けて追いかけてきながら大型砲を発射している。

時折なにかのタイミングでミサイルも接近してくる。

一定間隔で走る衝撃と共に減っていくアーマー値。一方あちらには目に見えてわかる重装甲で特にこれと言ったダメージを与えることができていない。

(『なんであの重^{チヨバレム}装^{アーマー}備^{アーマー}である機動力が出せている!?!』)

いくら避けても右手の大型砲に被弾してしまう。付け入る隙がない。

カチツカチツ

……右の銃が弾切れ。カートリッジを拡張領域から取り出してリロード……カートリッジがもうない!?

左の銃もいつ弾切れを起こすか……(『063ANARあと4リロード分のみになった。もう弾が少ない』……まずい、倒しきれないかな。)

弾幕が薄くなつたからか、目標がピンクの刀身を持ったサーベルを取り出して接近してくる。

エネルギー系の近接武器!?

こっちは格闘武器内から避けるしかっ

「ぐうっ……」

こちらの装甲が削られ深刻なダメージを食らってしまう。

(『PA残り25%及び残りSE12%! まずい! 撤退する!?!』)

……なんだろう、この高揚感は。
今までこれほど強い敵に出会ったことがない。
まだまだ彼と戦っていたい。

『これはっ!?!』

私の機体は突然光に包まれた。

side流星

「フォーム・シフト形態移行か。ファーストかセカンドはさておき……第2ラウンドか」

あの黒いホワイトグリントは肩部ブースター部から触手？ のようなものが飛び出して全体のシルエツトが変化している。

『大丈夫か?』

なんとかな。多分あれは無害化できてないコジマを動力源に使ってるだろうから後でこの機体と周辺の除染作業が必要になる。面倒くさいことしてくれたな。

『随分とできる敵のようだな』

弾幕を切らさないようにリロードが重ならないようにしたり、機動の方も二段QB、いやダブルイグニッションブースト二重瞬間加速か？ それを多用してこちらの照準から逃れようとしていた。

だが心なしか相手の加速後の動きが、少し単調なので狙いやすかったのが災いしたな。狙いやすかったぞ。

ISは学習して今までの戦闘・経験から搭乗者が一番望むであろう形をフォームシフト形態移行をメインに実現していく。

だからさっきまでのようにうまくいかないだろう。相手の機体各部の装甲が時折展開しており、さっきまで使ってたアサルトアーミーA Aを使ってくる可能性もある。A Aのコジマは……まずい……

さて何で仕掛けてくるって、

「レーザーだど!?!」

肩部の武装はレーザー砲に変化したか。弾速が速いから非常に面倒なやつになってる。

右手の銃は変化してないようだが、左手の銃は変化している。……

性能が上がっているだろうから警戒が必要だな。

しかし向こうのSEはどれくらい回復したんだ？ シャア、少しコアネットワークで調べを入れてくれ。その間 アサルトアーミー A Aを回避し続けるからなるべく早く頼む。

『わかった。………ほう。流星、相手のSEは回復したとはいえ3割強といったところか』

ならゴリ押しでもう終わらせるとしようか。さすがに超高機動の敵とずっと戦うのも疲れてきた。

両手にビームサーベルを持ち接近戦を仕掛ける。

相手が近づかせまいとまた二連瞬間加速をませた引き撃ちを始めるが、常に相手の最高速以上の速度で近づけばそんな問題ない。

何度も瞬間加速して機体の限界速を維持して突撃する。体がきしむように痛い、あと数秒の辛抱だ。

二本のサーベルを黒いホワイト・グリントに刺突する。

相手の機体はエネルギーが底を尽き、活動を停止した。

倒れゆく黒いホワイト・グリントが解除されて出てきたパイロットは……

「少女、か……」

髪や肌までも真っ白で見えている顔や腕、足に打撲や出血が見られる。さっきの戦闘でついたものもあるだろうが、この感じは最低限の手当てしかできてない。

『尾白さん！ 大丈夫でしたか!?!』

スピーカーからツイマッド社員が話してくる。

「………なんとか。さっきのパイロットの少女を保護した、すぐ俺がそっちに行く。このあたりは無害化してないと思われるコジマ粒子が結構拡がっている。除染作業を頼めるか?」

『コジマ粒子が? 了解しました。コジマ粒子の除染作業をするから待機してる奴ら急げ!』

医務室、無数回、長短間隔で瞬間加速して疲れ切った身体の検査して特にコジマ汚染なども身体に見られなかった俺は襲撃者についての調査結果を聞いていた。

「——やはりあの機体、もとの有害なコジマ粒子をジェネレーター
の動力源に使ってました。

周辺の除染作業はすぐに終わりそうですが、流星さんの機体の汚染
が少しひどくて……

今預かっている機体本体の洗浄作業が終了するのは全力を持って
しても3週間後となる予定です……本当に申し訳ありません。

……その間、何かあの機体が必要になることがありますか？」

3週間、か……あの任務には必要ないだろうし、いまのところIS
学園で使う予定もない。クラス対抗戦も一夏が出るしな。

「……いや、特に今の所必要になる場面はないな。IS学園でも訓練
機を使うことにする。……して、あの子の機体は？」

「5分前に確認したところではそろそろ目を覚ましそうでしたよ。
……何か話しに行きますか？」

「ああ、話に行くとしよう」

……？ どうしたシャア？ （『少しあのパイロットのオペレー
ターと話した……今から一部始終を説明する』）

ある端末内

『ごきげんよう、尾白流星が使っているISのコア人格さん』

『やあ、どうも。私にはシャア・アズナブルという名前があるのだがね
……まあいい、君の名前は？』

『失礼しましたシャアさん。私はBS77-4通称ナナシ、と呼ばれて
います。私自体は今まで彼女しか認識していなかったので通称は
いささかおかしいかもしれませんが』

『……それで、なぜ今回このような真似をした』

『信じていただけるかはわかりませんが、彼女はとある傭兵組織に属
していました。その組織をよく使っていた亡国機業からの依頼で

す』

『……なぜ任務内容を晒した』

『任務は失敗しました。そしてもうその情報は雇い主に彼女の体に入っていたナノマシン——もう破壊してもらいましたが。それによってもうそのことは雇い主に知られています。』

それにより、彼女の帰る場所が雇い主によって無くなりました。……もとより任務を拒否しようとしてもし任務が成功しようとする予定だったようですが』

『さっきの言ってた場所が？』

『はい。』

それで今回、私の独断により任務をあえて受けて彼女が安心して暮らせる場所であり彼がパートナー、

すなわち強い相棒であるかどうかを判断し、もしその技量が認められた場合、このようにお願いさせていただくためこのような行為を起こしました』

『最初からそう説明すればよかったものを……だいたい事情は分かった、私の口から伝えとく。彼のことだ。きっと許してくれるだろう』

『……感謝します』

『それと、流星はそんなヤワではないぞ』

『……期待しておきましょう』

……何で俺のことをそんなふうに見てるんですかねえ？

（『……だめだったか？』）

まあもとよりあの子はIS学園に通わせるつもりだったし、向こうの意思もだいたい確認できた。

別に話がスムーズに進みそうで良かったよ。

（『やはり、流星は優しいな』）

「着きました。おや？ ……もう目を覚ましているようですね。彼女の処分はどのようにするつもりで？」

「彼女の意思を尊重しようと思ってるが、あなたはどうしたい？」

「おそらく誰もあなたの意見に反対する人はいませんよ。いつもあな

たが正しいと思って行動したことはだいたいうまく行ってますから」
「……ありがとう」

病棟内、ベットに横たわる彼女に話しかける。

「話は君のオペレーター、ナナシさんから聞いてるよ。名前はもう知ってると思うけど、尾白流星という。もしよければ君の名を教えてくださいな」

表情筋が弱っているのだろうか、あまり表情の変化は見られず、口が動く。

「……あの子が……」

私は傭兵組織『カロード』所属リンクス名：H o l l o w . Z a i n の『C 4 . 6 2 1』（カロードヴェセラ、ロニイ）。

……私をどうするの？」

カロードに虚構の存在……ねえ……最近裏社会でよく耳にする腕のある傭兵だったとはな……

実在するならオッツや古王もいる、ということになるだろう……

それはそれとして

「……君には2つの選択肢がある。まず一つ、ツイマッド社のパイロットになって俺と同じIS学園に行く。

そしてもう一つは、お金を渡すからそれで傭兵業から足を洗って生活するかだ。どっちがいいとは言わない、好きな方を選んでくれ」

「……警察に突き出したりはしないの？」

そんなことして誰が喜ぶ？ 少なくともツイマッドの奴らはこんなことして喜ばないな。

「そんなこと誰がするか。まだ君は遅くない、どっちにする？」

「私は——」

流星についていく」

「……それでいいんだな？」

「……うん。よろしく相棒」

彼女が少し微笑む。なんだ、笑えるじゃないか。

「これからよろしく、ロニー」

第11話 1000艇の銃

黒いホワイト・グリントの襲撃があった2日後、流星はとある任務に従事する……

side 流星

「これよりブリーフィングを始める」

ツイマツド社のある作戦会議室内、ダグザ・マックールさんが説明をする中でプロジェクトに今回の作戦区域が映る。

「ここにいる奴らは日本に約1000艇の銃が運び込まれたことを知ってるか？」

何人かはうなずいたり、「何やってんだ……」と呆れるものもいる。

「その一部が、こちらの情報によると今日の夕方、1630にここで取引されるらしい。日本政府直轄の組織、DAと共同で潰しに向かう」
マーカーで東京の地図内のあるビルを指す。

「向こうの勢力は多く見積もっても60人程度と見られているかなりの大世帯だ。俺たちの主な任務は見回りをできるだけ捕まえるように、とのことだ」

「今回のメンツは？」
お品書き

ダグザ隊の一員が質問を投げかける。

「今回の主な任務に当たるのはDAC（ダイレクト・アタック・コーポレート）部隊のランバ・ラル本隊と俺の隊で後方支援はドアンドアンの部隊が行う。なお、この場にいるからわかっているやつもいると思うが、ワンマンアーミーズの一部メンバーとの合同作戦となっている」

今回応援としてワンマンアーミーズ——通称変態仮面軍団よりミスター・ブシドーやドモンに東方不敗、ネオの四人が参戦している。

「私は望む……悪との戦いを！」

独特な挨拶をするブシドー。

「なお、総長の流星も現場のリコリスと作戦を行うことになっている。いつも通り気を抜くなよ。」

俺たちは歯車は歯車でもツイマツド社のみんなにとって大事な歯車だ。決して無理はしないように」

総長……いつの間にか裏のコイツラからいつの間にかそう呼ばれてた名前だ。

「ブリーフティングは以上だ。各員、準備を始めろ」

各々立ち上がって装備の確認をしたり、装備を取りに行ったりする。

……ん？ どうしたんだダグザさん。

「流星、一昨日に戦闘があったらしいが、大丈夫なのか？」

「……昨日たつぷりと寝ましたから」

「……無茶するなよ」

「了解」

それじゃあ、俺も準備を始めますか。

部屋を出て作戦準備室——火器や装備が保管されており、所々で退院が準備をしている場所に向かい、あるやつから今回使うスーツを装着しての説明を受けている。

「……これはタンカーで使ったメタルギアRAYの時のあれか？」

「そうだよ、光ファイバーを利用した特殊電気紡績技術を応用し作られており、わざとに着用者の体を圧迫し、各臓器の機能促進を図っている。

その上、外からのダメージは出血量や被弾部位をナノマシンやスーツ内部のセンサーが検知し最適化する機能が備わってるからダメージを抑えることができる。

あの時よりも性能が上がってるからきつと使いやすいはずだよ。

……にしてもほんとにタバコを吸わなくなったね流星、

——いや、今からはスネークか」

「……そうだな、オタクコン。料理を積極的に作るようになってあまり吸わなくなってる」

「君のよくわからないこだわりが治って嬉しい限りだよ」

「だがまだよくわからんきのことかは食べれるがな。それじゃあ、今回もオペレーター頼むぞ」

鼻まで隠れるマスクとバンダナを装着し、自分のバイクに向かう。

現場周辺に到着したが……

「なんでもう作戦が開始しとるんだ……」

ランバ・ラルが愚痴をこぼす。

リコリスとの合流予定地に本人がおらず、すでにビル内に突入していく姿が遠くに見える。

……こちらの時間はズレてないはずなんだが。

「だが、現場にはうろついている奴らがいるから手筈通り俺たちはそこらへ行く。」

メビウス^流_星は途中まで俺たちと周りのやつを片づけた後にビル内にいるリコリスたちと合流してくれ」

「了解した」

ランバ隊15人、ダグザ隊15人とワンマンアーミーズの4人の合わせて34人で敵が多く存在するビルの麓へ向かう。

道中にある銃を持ったあからさまに敵（というかこのあたりにいるのは俺たちとDA、犯人たちだけだが）なやつを

「デッドリー・ウェイブ！」

「石破、天驚拳！」

「ワベシツ!？」

ドモンや東方不敗が謎に光ったりする手などで敵の意識を刈り取り、

「刮目せよ！」

「グアツアア!？」

ミスター・ブシドーが麻酔銃やを撃つて敵を眠らし、木刀で敵を文字通り吹き飛ばす。

……なんで木刀でそんなに人が宙に浮くの？

また、ランバ隊やダグザ隊も彼らに負けじと敵を捕まえていく。

捕まった敵は後方支援のドアン隊に次々と回収されていった。

「ツイマッド社作戦本部、こちらD A C部隊及びワンマンアーミーズ。人員の脱落なしでビルに着いた。これからはコメット1単独行動でいいな?」

【作戦本部了解。任務を続行されたし】

ツイマッド社に設置した作戦本部より次の手順に移る。

「了解。これよりビルに潜入する」

先にリコリスたちが入っていったビルの非常階段から、こちらの隊員が周辺を警戒するのを跡にしなから俺は彼女たちのあとを追いかける。

『それじゃあ敵たちの情報を君の端末に送ったからそれを頼りに任務を努めてくれ』

そう言つてこちらの所持する端末に各階にいるリコリスと戦闘中の敵の数が表示される。

下の階の奴らからやっていくか。

銃撃音が聞こえる中、非常階段の各階の扉からそつと入り、近くの敵に手当り次第サイレンサー付のコルトガバメント1911を敵の手や足に撃つて行動不能にする。

その敵の相手をしていた白や紺の服を着たりリコリスは一瞬きよとんとするが、すぐさま拘束していく。

そして六階についたが……

「取引現場現場の銃撃音他の階より散発的になってる。中の状況はどうなってる?」

『一人が犯人に人質に取られている模様、現場は膠着状態になってる』
人質、か。めんどくさいことしてくれる。

体に装着している装備の中から缶コーヒーほどの大きさの筒を出してピンを引き抜き

地面に転がす。

その物体から吹き出す煙はあたりの人間の視界を白くする。

足音は聞こえないからその場で止まってるな。移動位置の予測をしなくて済む。

次々に敵に忍び寄り、意識を奪っていく。

「何ゴツ……」

「どうしっグエツ……」

一人は麻酔弾に切り替えたこちらの銃で沈み、ある一人は音もなしに背後より首を絞められて白目をむき倒れる。

「あん？ 何ごとっ……」

そしてある人質に銃を向けていた一人は後頭部を銃の撃鉄で殴られ地に倒れる。

「えっ……あなたは？」

突きつけられていた銃の感覚が無くなり、後ろを振り返った元人質はこちらに問う。

「嬢ちゃんを助けに来た、今回の作戦の協力者だよ。今から君を仲間と合流させ『……え？』る？」

インカムからオペレーターの困惑した声が聞こえる。

「どうしたオタコン？」

『DAとの通信が誰かに妨害された。今はもう復帰したけど』

「作戦に支障は？」

『いや、作戦は続けれる……って!』

「どうした!」

『君の目の前でリコリスの一人が自動小銃を構えてる！ 撃つつもりだ!』

……なーんでいつも拳銃メインで使ってる奴らがそんな重火器を？

ってそんな場合じゃねえ!

「キヤッ!」

すぐそこにあった柱の裏に彼女の首裏の襟を持って引っ張り込む。

次の瞬間、晴れかけていたあたりは破片の煙や血飛沫でまた曇りだす。

ガラスは砕けてサッシも破壊されて地面に落ちる。

なんかいま金属がひしゃげた音がしたような……

『敵があの中を生きてるのは絶望だね……』

ありやあ……気絶させた意味ないじゃん……
少し顔を出して状況を見る。

……今のはさつきまで彼女がいた場所だけ撃っていないかった。
助けたかったのだろうか。

こうなつては彼女たちの前に出現すると敵として見られる恐れがあるため、非常階段で降りるとするか。

「……ここから出る。ついてこい」

彼女を連れて非常扉を開けると

「あー！ あたしのバイクがあー！」

何故かバイクと叫んでいる白髪で赤服のリコリスがいた。

……もしかしてさつスキの音あなたなの？

side 千束

「あー！ あたしのバイクがあー！」

さつスキの大きな銃を持った子が撃ったときに割れた窓でひしやげた音とともにさつきまで使っていたスクーターが潰れる。

お小遣いためてやつと買ったやつなのにい……

まあ、今は任務を行うとしよう……

そうして6階の非常口に視線を戻すと

セカンドリコリスを連れている、所々に武器がついている黒がかった青い全身タイツのようなものを全身にまとい、バンダナを巻いた男性がいた。

……気づかなったがいつからいたのだろうか。

とつさに銃を構えて標準をあわせる。

「……何者ですか？」

向こうは鼻まで覆われたマスクをしているためあまり表情は分からない。

「あ、あの、彼は人質だった私を助けてくれた今作戦の協力者です！
決して敵ではありません！」

セカンドの子そうが申し立てる。嘘をついている様子もない。

なら安心か……あの弾を使わなくてよかったあ……

銃を下ろす。

「……下に居るやつらから説明を受けなかったか？」

男性がそう訪ねてくる。

下のやつら？ ……あ、そういえば

「敵を縛っていた人たちのこと？」

「そうだ。そいつらから俺がいること聞いてなかったか？」

あれ!? あの話ってそういうことだったの!?

「そんなこと言ってたようなあ……アハハ」

彼が額に手をあて、天を仰ぐ。

「はあ……」

んで、上の奴らは蜂の巣、残りはあんたたちの仲間か俺達が全員捕まえたから今作戦は終了した。

もうやることないぞ?」

え? じゃあ私来ただけで今回はバイクが潰されただけ!?

トホホ……

帰るとしますか……

「あの……」

「ん? どうした?」

「家まで送ってくれませんか?」

あのバイク一体いくらするんだろう……300万は絶対超えてる。そのまま彼はバイクで私を後ろに乗せてエンジン音を轟かせながら家までおくってくれた。

「ありがとうございます! 良ければこのあとぜひ私の店に来てくれませんか? お礼がしたいので!」

「あ……今日はまだ用事あるから明日行かせてもらってもいいか?」

彼がそう提案する。

「はい……いつでも来てくださいね!」

彼にどんなご飯を作ってあげようかと考えている中、彼が手を振って出発しようとしている。

手を振り返して彼を見送る。

彼がバイクの正面を振り向く時、フルフェイスのヘルメットが西日で彼の顔が透けて見えた。

非常に懐かしく思える顔だった。

「…………あれ？ 昔どこかであの顔見たことあるような…………？」

第12話 喫茶リコリコ

あるビルの任務の翌日、ある娘から店に来てきてほしいと言われ
……

side 流星

「……………」

昼前の東京都墨田区・錦糸町の下町をバイクで走り抜け、お目当ての店に到着する。

本来は今日は学園に戻らないといけないのだが、無理を言っ外出届の日数を延長してもらった。そのときに

『不埒な行為はしてないだろうな?』

と千冬から言われたが、昨日は誰も殺ってないし大丈夫大丈夫。
『少しずれている気がする…………』

その後新しくツイマツド社から一人入学させることになったことを伝えた時、電話の向こうで千冬の呻く音が聞こえた…………作業を増やしてしまつて申し訳ない。

今度なにかおごつてあげようか。

「こんにちはー」

そう考えつつ、『喫茶リコリコ』と書かれた看板の洋風な外観の店の扉をあける。

…………ほう。昼時の太陽壁やが天井などについている色付きガラスを通して少しミステリアスな雰囲気を出している。(『なかなか粋な構造だな』) お、あんたもそう思う?!

座席はカウンター席と座敷席があつて2階にも席があるようだ。

そして

「イケメンの男性キターー!」

こちらを見てカウンター席からそう叫ぶ、メガネをかけた徳利を持つ頬が紅潮した和風な服を着る女性が一人。

「私は中原ミズキ! 27歳の現在彼氏募集中です!」

突然彼氏欲しい発言をこちらに放つてくる。…………何? 俺に彼氏になつてほしいの? ただ、

「まだ17なんでそれはちよつと……」

「バカな、学生だと……」

そう言つて沈んでいく。俺の身長は一般成人とほぼ変わりないからよく間違えられるなあ……

というか別に彼女普通に顔立ちとかいいからモテると思うんだけど……

「またやってるのかいミズキ……」

店の裏側からガタイのいい肌黒の男性が現れる。

「こんにちは。この店の店長をしています、『ミカ』といいます。ここは初めてですか?」

「はい、昨日あった娘がこちらで待ち合わせを言つてまして……待つてる間コーヒーをもらえませんか?」

「わかった、ちよつとまつててくれ」

カウンター席の真ん中あたりに座り、荷物を足元に置く。

そうミカさんは言つてコーヒーマーカーを使って湯などを沸かしながらコーヒー豆を挽きながら話してくる。

「昨日はその彼女とどんな経緯で?」

「バイクが壊れたので変わりに家まで送っただけなんですけどね……どうしても礼がしたいと言うのでならばと思ひまして」

「その彼女の特徴は!」

ミズキさんがお猪口をぐいっとあおり、聞いてくる。

「赤い学生服を着ている、ちよつとベージュがかつた白髪の娘でしたよ」

ミカさんとミズキさんの肩が僅かに動く。もしやここは……

「……ああ、俺はその時そっちの方の人間だったのでご安心を」

湯の沸く音が店内に響く。

「……DAの協力者?」

「協力者……というよりはDAの傭兵版、といったところでしうか?」
「もし差し支えなければその名前を聞いても?」

名前……そういえば彼奴等の名前何だったっけ? ^{D A C}アヒルでもないし変態仮面軍団はブシドーとかプロスペラのことだろ?

「少々名前を思い出すのでお待ち「あ！来てた！」を？」

店の奥からひよこつと顔を出す赤い和装のベージュがかつた白髪の娘……昨日の！

「千束……もしかして君の言ってたのは彼のことかい？」

「……そういえば昨日バイクぶつ壊れたって言ってたわね」

ミズキさんが納得した表情を見せる。

「そうだよ！ 彼が昨日家まで送ってくれた人！」

昨日言いそびれたけど私は錦木千束！ ち・さ・とって呼んでね！

昨日はありがとー！」

「それでは俺も。挨拶が遅れました、尾白流星です。ダグザさんから昨日コメットーって言われてたのは俺のことです。昨日はどういたしまして」

「あれが噂に聞くダグザさんだったのか。変な仮面つけた人たちと一緒に現場で見たよー！」

「ダグザ？ 仮面？ とするとドアンさんも現場に……？」

おい、結構有名だなダグザにドアンや。そんなに裏で評判いいのかよアイツら。

まあいつも訓練きついし部隊の統制は優秀だが、そんなもんなのか？

「君は……」

ミカさんが何か言おうとすると店の扉が開く。客……客かこれ？

紺色の制服……セカンドリコリスか。

「こんにちは、今日付けでここに配属になった井上たきん……」

世界で二人だけの男性操縦者でツイマッド社の社長さんがなぜここに？」

こちらの姿を認めた途端、とんでもないこと（事実）を話すセカンドリコリス。

（『……思いつきりバラされたな流星』）

「……多々？」

こちらを見てフリーズするミズキさんと千束。

「やっぱりか……君はあの尾白流星なのかい？」

ミカさんはわかっていた様子だ。

ここまで来たらもう隠す必要はないか。

あ、あつちの名前も思い出したからついでに言う。

「そうです、改めまして、

俺はツイマッド社社長及びツイマッド社実働部隊【闇鍋】の総長
コードネーム「コメット1」の世界に二人だけのIS男性操縦者、『尾
白流星』です。どうぞお見知りおきを」

……うん、いちいちフルで言うの長いな。でもこれが正式名称だから削れることもできん。（『……難儀だな』）

「エエエエエツ?!?」

千束とミズキさんの驚きの声が店内に響く。

そして

「……ほへー」

セカンドは宇宙猫になっていた。……もどつてこーい。

「いつもあんな任務をしているのかい？」

「いや、2ヶ月ぶりにしましたよ。滅多にこんなことはしないんですけど、少し彼らのお手伝いをね……射撃の腕が鈍つてて残念でしたよ……」

ミカさんの質問に答えて淹れてもらったコーヒーを飲む。

うん、人は練習とか続けないと忘れる生き物だからね。（『あれで鈍つてたのか……』）？、あれは鈍つてたじゃん。

口当たりの滑らかなこのコーヒー、口に広がるキリツとした苦味とともにやってくるほのかに感じるフルーティーな味と僅かな酸味と……うまいなあ。

「なかなかいけますね、マスター。おかわりをもらっても？」

「いいよ。……はい、どうぞ」

「ありがとう」

「おつまたせしましたー!」

千束が持つてきたあんみつをかけた白玉がもられた皿が目の前に置かれる。

「お、待ってました。……ん、うまいな」

「でしよ〜！」

そのまま横に座り話しかけてくる。

「昨日の来てたあの服、あれどうなってるの!? 振り向くまで全然わからなかったんだけど！ つかってみたいなあ〜」

「あれは……企業秘密だ。使いたかったらこっちに入るんだな」

企業秘密というよりかはこの世界ではオーパーツのほうが正しいがな！

「えー、ケチ〜」

ムスツとする千束。そんな顔しても無理だぞ。出せるのはこれくらいしかない。

「代わりと言ってはなんだが……これは今日の昼のお礼だ。一般より安くしといてやる」

そう言つて俺たち闇鍋の連絡先を書いた紙を渡す。

「人手足りないときに呼びな。昨日の奴らがすぐに飛んでくる」

「私設部隊がすぐに飛んでくるって……さっきも言っていました、尾白さんは半年前に解決したあの事件の生還者でもある……一体どうなってるんですか？」

リコリコの服に着替えたたきなが訪ねてくる。あ、ちなみに千束とは同い年でたきなは一個下だそうだ。

「うーん……ほんのちよつと変な高校生、かな？」

「ほんのちよつとって……普通の人が見たらこんな超ハイスペック人間、欲しいって言わない人の方が少ないんじゃないの？ 現に私も狙ってるし」

ミズキさんさらつと言つた狙っている発言はさておき、そんな性能高いか？

MSの操縦ならシャアとアムロのコンビに負けるだろうし、近接戦でもドモンや東方不敗のあの謎に光る手に勝てるか怪しい。

頭脳は東に少し劣るだろうし、ましてや今は体力落ちてるから千冬

にも引き分けで終わってしまう。

『なぜ流星は私がアムロと共闘する前提で言ってる……色々おかしくないか?』

おかしくないぞ?

『はあ……もういい』

……なぜ呆れる?

「よし……ごちそうさま」

白玉を食べきり、手を合わせる。

「お粗末様。今日はあたしの奢り!」

「ありがとう、また来るよ。任務で一緒になったときはまた是非」

「うん! その時はまたよろしくね!」

その他にも少し話しながら店の外に出る。

千束が店を出て手を振るのを後にバイクにまたがりI S学園に戻っていく。

奥では二本の鉄塔が陽に反射して輝いていた。

帰り際、レビューに星5と「コーヒーと甘味が非常に美味」と付けておいた。

同日、夕方I S学園の整備室

「……できた!」

「お、コイツもついにできたか……名前は どうする?」

一緒に作っていた整備科の生徒たちが周りで肩を組んだり万歳をする中、俺と簪は目の前にある白基調で膝やバインダーなど所々に黒やオレンジが入ったクシャトリヤが完成する。

「もう決めてる。この子の名前は――」

クシャトリヤ・ハマリング」

クラス対抗戦編

第13話 突 然 の ○ ○

色々あったGWも終わり学園生活がまた始まる……

side 流星

朝、同時に起きた簪に明日の予定を伝える。

「会長とは明日戦うことになった。準備を頼んだぞ」

「……わかった」

「今日の放課後アリーナ取れたからちよつと慣らししとくか?」

「しとく、ありがと」

「ねえねえ! 隣の2組に中国から転校生が来たんだって!」

「へえー、どんな子なんだろうね!」

朝の教室、誰かがどこからか仕入れた情報を話題に出す。

「中国か……あいつ元気にしてるかな?」

一夏がそうつぶやく。

「あいつ? ……ああ、そのことか。連絡取ってるんだろ?」

「いや、最近忙しいみたいであんまり取れてないんだ……」

……忙しい? どうしたんだあいつ?

「今の時期に転校してくるって事はISの操縦上手かったりするのかな!」

「2組と3組は専用機持ちないし、4組の子のISも完成したらしいけど専用機持ちの織斑くんは箒さんに教えて貰ってるから優勝してデザートフリーパスも貰ったことと同じよ!」

どうやらクラスではもうすぐあるクラス対抗戦の優勝したクラスに贈られるデザート半年フリーパスなるもので持ちきりだ。

のほほんも「いっちーぜえーつたいに勝ってね!」ってきつき言ってたしな。

「その情報、古いよ!」

扉から懐かしい声が聞こえる。

「お前、鈴か!？」

「そう。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告しに来たのよ!」
小さなツインテールが腕を組み、不敵に一夏を見る。

「今日はクラス代表戦で叩きのめしてあげるわ!」
尤も

「鈴、なんでカツコつけてんだ? すげえ似合っていないぞ?」

「はあ!? あんた、なんてこと言うのよ!？」

余裕の表情は一夏の一言であっさり崩れたが。

「にしても久しぶりね! 流兄! 一体どこいったたのよ!」

流兄とはこれまた懐かしい名前だなあ……

「色んなことしたり剣振り回す世界に居たら気づいたらこんなに時間経ってたよ。あと……後ろ」

「剣振り回す世界って……え? 後ろ?」

「……扉を塞ぐな」

鈴音の後ろに仁王立ちする織斑先生。なんかハマーンが出してたオーラに近いものが出てる。なんで出てんの?

「ち、千冬さん……」

「学校では織斑先生だ。さっさと教室にもどれ、HRが始まる」

「ミギャツ!? ……はい、織斑先生……」

出席簿で頭を叩かれ、トボトボと2組に戻っていく鈴。南無。

俺たちも急いで椅子に戻る。

「これから朝のHRを始める……前にそうだったな。このクラスにも転校生がやって来た。」

よし、入ってくると良い」

教室の扉が開いて既存の学生服より少し黒がかったものを着る白髪の少女が現れる。

彼女も今日からなのか。

「……わたしの名前はヴェセラ・ロニイ、ツイマッド社の企業推薦ISパイロット……よろしく。……流星は相棒だから」

あれ? なんか相棒認定されとるんだが……まあ些細なこと……

「これは守ってあげたくなる系の子きたあー!」

「更にズブズブになっていく一夏たちとの関係……いい！」
些細なこと……か？

時は昼。ロニイやセシリア、一夏などと食堂に来たのだが……
「待ってたわよ！」

バアアアアンという表現が合いそうな状態でプレートを持って俺たちの前に立ちふさがる。

「……食券取れねえからどいてくれ」

「……麺伸びるぞ？」

「んなっ!? わかってるわよそんなこと！」

それもすぐに終わったが。

「にしてもファースト幼馴染みにセカンド幼馴染みねえ……上手いこと言うじゃねえか一夏」

「いや、それくらいしか思いつかなくて……」

「ファースト……フフツ」

昼食を取っている中、一夏と箒、鈴が昔の話をしている。

「そういえばヴェセラさんはなぜ今になっていらしたのですか？」

「ん？ ロニイは入学手続きが上手く行かなくてな……遅れたんだ。
すまんロニイ」

「……うん。……あ、これほしい」

「これか？ ……ほい」

唐揚げを一つロニイのご飯の上に渡し彼女がそれを美味しそうに食べている。

「……横、座つていい？」

「……ん？ いいぞ別に」

お盆を持った箒とのほほんが現れた。……のほほん、それはご飯なのか……？

「流星、彼女は？」

「4組代表の更識簪さんだ。一夏の専用機作るために彼女の専用機作られなくなつたんだぞ？」

「ゲエっ!? 俺のせいなのか!? ……更識さん、申し訳ない」

「いいよ別に、織斑くんは悪くない。専用機も今は流星の会社で作ってもらったからあるし」

「流星いつの間にかそんなことしてたのだ……」

「うまうま〜」

箒が少し引いてる気がするがきのせいだろう。

そしてのほほんよ、なんだそれは。

どうやったら白ごはんがそんな色になるといふのだ。

「……あれ、そういえば流星の専用機は？」

「ちよつと整備が手こずってるらしくてな……3週間は返ってこないって言われたよ」

放課後、アリーナで訓練機のラファールを操縦しながら箒のハマリングからだされるミサイルやビッグウイグキャノンの砲弾、機体各部から出されるビーム砲を避けつつ機体のテストをしている。

ついでにロニイの相手もしている。

「そう……にしてもなんで当たらないの!? 2対1なのになんで当たらないの!? 誘導性能高いはずだよね!?」

「うーん、勘? あと誘導性能は全部一番高いやつで間違いないぞ」

そのはずなんだけどなあ……

そう思いつつブラックグリントに接近し、蹴りをお見舞いする。

「クツ……さすが相棒、今の一発はすごかった」

「なんでそれで片付けれるのよ……」

やってくるミサイルの弾幕をラファールの機動力をもってして地面に叩きつけたり、相討ちさせたりしている。

（『私の機体よりかなり劣っているはずなのに……わからん』）

いや、普通に機体がいいだけなんだけどなあ……

「ラファールってあんなに動けたんだ……」

「何あの化け物ミサイルの量!? 避けても追いかけて来るじゃない!?!」

「あの黒い機体の子、すごく早いのにそれについていってるとどう

なってるの!?!」

周りで訓練している生徒から聞こえてくる。

そのはずなんだがなあ……（『そろそろわかれ』）

アリーナの使用時間になったので3人で寮に帰る最中……

「……どうした鈴?」

「一夏があ……」

外の椅子にうずくまって泣いている鈴がいた。

「ほれ、麦茶だけどこれで良かったか?」

「……ありがとう」

そのまま4人で来た寮の自室、冷蔵庫に入れていた飲み物を手渡す。

「んで、一夏と何があったんだ?」

「……流兄は毎日お味噌汁をーって言うやつ知ってる?」

「あー、告白の一種だったっけか?」

「……それをあたしが言うとすれば?」

鈴は中国人だから……

「中華に……エビチリとかチンジャオロースとかか?」

「そう、酢豚でそれを言ったんだけれどね……あいつなんて言ったと思っ?」

「……なんだ?」

「……毎日奢ってくれるって思ってたのよ!?!」

ドンツと持っていたペットボトルを机に叩く。

シヤア、お前とどっこいどっこいだな!

クエスとかハマーンにやったこととほぼ変わらねえじゃんか!

（『もう、その話は、やめてくれ。胃が、痛い』）

お前に胃なんてあるんか?（『ウウツ』）

「織斑一夏……女の敵……」

「……馬に蹴られて死んだほうがいいと思う」

一夏、簪やロニーにも引かれてるぞ。

「……あの鈍感にそれで通じると思ってたか？」

「ウツ、それは……」

「あいつに言うならドストレートに言ってやらんと分からんぞ？
……ちよつと待ってくれ、すぐ戻る」

そう言つて部屋を出て1025室の扉を叩く。

「一夏、少しいいか？」

「どうした流星つてアダダダ!？」

扉を開けた一夏の腕を引っ掴み連れて行く。

「どうした流星!？」

「箒……一夏は馬に蹴られて死ぬべきか？」

「……さっきの話か。ああ、尤もだな」

この話を知つてるとは……大体1025室で話したんだろうな。

「と言うわけだ、こい」

一夏を自室前に引きずつてくる。

「一夏、さっき鈴に言ったことは覚えてるな？」

「あれは……」

一夏がバツの悪そうな顔をする。

「分かつてんならさつきと謝つて告白の返事してやれ。別にイエスカ
ノーで答える必要はない。今の気持ちを伝えてやれ」

「……分かった」

扉を開けて一夏を連れ込む。

「ちよつ一夏!？」

「……ほんとに連れてきた」

一夏を座つている鈴の前に立たせる。

「さあ言つてみせろ！」

「鈴、さつきはほんとにすまなかった！ 俺は何回謝つても許されな
いことをした！」

腰を直角に折つて謝る。

「そっちはもういいわ……あたしも言い方が悪かったし。

じゃあ改めて一夏、あたしとつ、付き合ってくださいますか！」

……これで買ひ物の付き合うとかだったらこの場でゴジマキャノ

ン撃つぞ？

「それは……少し時間をくれないか？」

俺、こんなことしてもらえるなんてぜんぜん思ってもいなかったから、心の整理がついていなくて……」

ふん、まあいいだろう。

「全く、焦らして……いいわ。いつでも待ってる。ほら、目つむってこっち来て」

「え？ なんだいきなり……」

言われるがまま鈴に近寄り、目を閉じる一夏。
そして

鈴が一夏の頬にキスをする……俺たちの前で。

「……私達いるのわかってしてる？」

「流星、なんでこんなもの私達の前で見せるの？」

ジト目でこちらを睨んでくる簪とロニィ

「……スマン」

「あつ……」

一夏と鈴の顔がみるみるうちに赤くなっていく……シャアザクかな？

「見なかったことにしてええええ!!」

男女の叫びが寮に響いた。

「……ちなみにだが、箒の方も気づいてるか？」

「……あう？」

「はあ……鈴と同じだよ」

「……マジで？」

これは少し説明が長くなりそうだ……

一方その頃……

「お嬢様、簪さんの視察から戻ってきました」

「どうだった虚？ ちゃんと動いてた？」

「……本当にあれに勝てるのですか？」

「……へ？ 大丈夫よ！ 一番まずいマルチロックのミサイルも60発避けきつたらね……？」

「あの……確認できるだけでも1つのバインダーあたり60個が4つで再装填もしており、少なくとも1000発以上は確認されました……しかも何回も追いかけてきます」

「嘘だと言ってよバー〇イ!!!」

生徒会室で同じく絶叫している会長がいたとか。

第14話 ケツチャコ

side 簪

「……よし、問題ないな。準備オツケーだ」

「こつちも問題なくし！」

ピット内、私が乗っている機体に流星と本音がキーボードを叩きながら最後に機体の状態を確認してくれている。……流星の打つ手が見えないのは気のせ、い？

「あ、これもあげるよ。俺からのプレゼントだ」

そう言っただけで空中に浮かぶキーボードでなにか操作して私の拡張領域に武装が追加される。【VN（バイブロネイル）】？

「閉じたまま殴ってよし、開いてザツクリやるのもよしの近接武器だ。性能は保証するぞ？」

眼の前にホログラムが投影されてこの武装の立体図が映し出される。白い拳型のそれは時折ガバツと口を大きく開けるように開く。それはさながら4本の青い牙のようだ。

「……ありがとう」

「礼は試合が終わってからしつかりきいてやる。ちゃんとケリをつけてこい！」

「頑張つてね〜！」

カタパルトに機体を載せてビグウィグキャノンを手前に装備、前屈みになり発射の衝撃に備える。

「更識簪、クシヤトリヤ・ハマリング出ます！」

一瞬レールに電気が走ったかと思うと機体が急加速していきピットから飛び出す。

そして空にあがる。

「待つてたわよ！」

待ち構えるのはIS学園最強の名を持つ生徒会長であるお姉ちゃん。

「あたしも色々言いたいことがあるけどまずは……あなたの全力、見せて頂戴！」

「……うん！」

今日のアリーナは貸し切りなので誰もいない。
だから真剣に勝負できる。

『審判は私、布仏虚が行います。それでは非公式試合、始め！』
ブザーが鳴り試合開始が告げられる。

「いけっ！」

4枚のバインダーを開きミサイルを一斉に放出する。

「やっぱりその量おかしいってええええ!!」

そう叫びながらお姉ちゃん避けようとしているが、避けたものも1
80度回転し、追いかけている。

ミサイルは次々に命中して行く。

「……いつもより多めにベール覆つといて良かったわ」

だが所々に装甲の欠けが見えるが特に致命傷といったダメージは
受けていない。

水で爆発の衝撃を吸収したか。

向こうが接近戦を仕掛けてきたので薙刀『夢幻』を装備。

一回機体がぶつかるごとに激しい鏝競り合いが起こる。

「なかなかやるじゃな、いー！」

一旦離れたかと思うと相手が蛇腹剣を左手に持ち替え、水で出来た
ランス『ミストルテインの槍』を右手にもつ。あれで決めるつもり!?
自分を巻き込んでまで!?

左手に流星がくれたVNを装備する。

薙刀に蛇腹剣が絡みつく。それを私の胴体に引きつけて……

「嘘っ!?…なんでそれっ」

開いたVNでお姉ちゃんの右手に振り下ろす。その右手はランス
と共にたちまちゴシヤアツと鈍い音を立てて簡単に破壊され、お姉
ちゃんの素の右手が顕になる。

「その威力どうなってるのよ!?!」

「……さつき流星がくれた」

これは……さつき貰ったものだからリミッターは掛かっているのか
知らない。

何でこんなもの渡してきたの!?

「……後で流星シメない?」

「……賛成」

逃げないでね流星?

「少しムシムシしない?」

バインダーを急いで閉じて防御をする。お姉ちゃんの大技のクリアバツヨル熱き情熱が来る!

「ウツ……?」

次の瞬間、機体が爆発で大きく揺れる。SEは……あれ、あまり減ってない?

「うそ……耐えたの!? どんなに硬いのよそのバインダー!?!」

向こうが纏っている水の量が減って今度はこっちの番だ。

「グラインドブレード、起動」

背中に巨大なバックパックと6枚のチェンソーが装備され、チェンソーのユニットが右腕につく。

『不明なユニットが接続されました。直ちにユニットの使用を停止してください』

システムが警告を出す。流星曰く「演出」だそう。無視する。

左手へのエネルギー供給が完全に途絶えてただ装甲が付いてるだけという状況になっているが、今そんなことは関係ない。

「ちよ、ちよっとかんちゃん。それはちよっと……」

手を開いた形になったチェンソーは熱を帯び始めて右手の先へ移動。チェンソーの刃も、チェンソー自体も回転を始める。

「お姉ちゃん、覚悟はいい?」

「よ、良くないわよ! その物騒なものしまつて頂戴!」

蒼流旋のマシンガンでこちらを撃つてくるがバインダーで全て弾く。

機体のSEが目に見えて減っていくので早くぶつきたい。

HUDにノイズが走るなか右手を後ろに構えて機体の全スラスターにエネルギーをチャージする。

チャージが……完了した！

全てのスラストを一気に全開にして突撃する。

「ハアアアアアツツ!!」

「怖すぎるってそれええええ!!」

そのままお姉ちゃんを壁に叩きつけた。

『さ、更識楯無のSEエンプティ！ よって勝者、更識簪！』

か、勝っちゃった……お姉ちゃん

「ううっ……強くなったじゃないかんちゃん」

壁からISが解除されたお姉ちゃんが出てくる。

私もISを解除して

「……昔はごめんね。全然あなたのこと考えずにあんなこと喋っちゃって」

「いいよ、私もお姉ちゃんの言ったことは私のことを思って言ってくれたんだからね……私もあんな態度とって悪かったよってわわ!」

「かんちゃん!!」

お姉ちゃんが抱きついてきて涙を流す……私も涙が出てきた。

今はこうしときたい。

でもその後は……

「流星とO☆HA☆NA☆SHIしますか」

お、向こうも同じ意見のようで。

side 流星

抱きつきあっていたと思ったら急に負のオーラが出始めただど!?

「流星とO☆HA☆NA☆SHIしますか」

なんで説教されることになってるんだよ!?

『……VNのリミッターは?』アツ……忘れてた。

現場を背にして逃げようとするが……のほほんに肩を掴まれる。

「……逃げないでね、りゅーりゅー?」

こつちからも出ているだど!?

あ、更識姉妹が近づいてきた。

「流星、O☆H A☆N A☆S H Iしようか？」

口笑ってるけど目！ 目がすごいことになってるぞ！

「……慈悲は？」

「あると思ってた？」

無人のアリーナに俺の叫び声が響いた。

side 楯無

「さて流星くん、約束通り生徒会に入ってるね！」

「……はい」

地面に横向きヤムチャに倒れている流星からか細い声が聞こえる。

「そういえばかんちゃん、生徒会長は学園最強になるんだけど……」

「……あ、そんな大役やりたくないんだけど……やらないと、だめ？」

「いえ、今回は非公式試合だからなしね！」

「……良かったあ」

ホッとしてぐでーつとなるかんちゃん。そんなかんちゃんもかわいいい！

……にしても何故流星が伝説のISの装備を持っていたのだろう。

ツイマツド社ユニコーンガンダムに白獅子ユニコーンガンダムがいるというのか。

それとも……

どちらにせよ、10年前、旧電波塔で助けてくれたあのISの手がかりがツイマツド社にあることに変わりはない。

でも今は……

「流星ありがとね。今日かんちゃんと仲直りさせてくれて」

お人好しな彼に感謝を。

「……はい」

「生徒会での仕事一緒に頑張ろうね！ 私の仕事減って助かるわ！」

「それ目的だったんですか……」

第15話 乱入

姉妹喧嘩も終わり、クラス対抗戦当日……どうなる？

side 一夏

ピット内、ISを纏いカタパルトに足を乗せていると……

「鈴に告白されたあとに箒にも言われたのか？」

「ギクツ!? なんで千冬姉がそれを？」

「なんで千冬がそれを知ってるんだよ!？」

「今は織……まあいい。それは女の勘、といったところか。前よりもいい顔になったからな」

「ああ、まだ返事は出来てないけど……」

「もうすぐじゅ……これはまだ置いとくか。とりあえず、勝ってこい」

「了解。織斑一夏、白式出ます!」

視線の先では『甲龍』を纏った鈴が同じく試合開始の時を待っている。

アリーナの観客席は満員、ふと目を凝らすと流星がロニイを膝にのせ周りに布仏さん、簪さんにセシリアさんなどが座っている様子も見られる。

箒も手を降っているのを確認できる。

『両者、規定の位置に立つてください』

アナウンスに従い鈴と少し離れた位置に相對する。

……ん？ 鈴からプライベートチャンネル？

「一夏、全力で恋人候補のあたしにぶつかってきなさい!」

「はは、わかってるよ。全力で勝ちにいつてやる!」

「それはこっちのセリフよ!」

鈴がそう言っただけで笑ったと同時に

『クラス対抗戦、第一回戦……始め!』

ブザーが鳴る。

同時に俺と鈴は動き出す。

何度も離れてはぶつかって、お互いの持つ刀でかち合う。

どちらも今までより離れたかと思うと大きな音を立てて衝突した。俺の雪片式型と鈴の持つ二刀流の青竜刀とが鏝迫り合いを起こす。腎力ではこちらが上回っている。なら!

力任せに雪片式型を押しして鈴の足の装甲を一部切る。

「グッ……中々やるじゃない! なら、これはどう!」

「なっ!」

突然見えない何かによって身体を叩かれた衝撃に走る。

何に撃たれた!?

鈴の機体を見る……肩の部分に浮いてる装甲がさつきと位置がずれてる?

だがその球体に砲門は見えない……ということとは?

「……空気砲の類か?」

「よく気づいたじゃない。でも分かったところでどう対応する!」

「グアッ!」

先程より大きな衝撃で意識が一瞬飛びかける。

どうすればあれを対処できる!?

どうやって照準しているというのか。

「……避けるのうまいわね。『龍砲』は不可視の砲弾と砲身がウリなんだけど」

「流星に嫌というほどミサイルとかレールガンに追いかけられたせいでな!」

ハイパーセンサーに一瞬空気の乱れを感知するが、それでは間に合っておらず、勘で避けたほうが多い。

どうやって射撃を完全に見切れる?

鈴はこちらをずっと……見てい、る?

見る……そうか!

「うおおおおお!!」

「そんなイノシシみたいに突っ込んできても……何!」

龍砲が当たる瞬間に特技のイグニッションブーストを使用し、ギリギリで躲す。

おそらくこれが通用するのは一回きり。これで決め――

ズガガガアアアアアンツ!!!

アリーナ全体が衝撃で震えた。

「何事!？」

アリーナ中央から土煙が上がる。アリーナのシールドバリアを貫通したというのか。

「一夏! 試合は中止! 今すぐピットに戻って!」

鈴がプライベートチャンネルで話してくる。

『ステージ中央の熱原体……所属不明のIS。警告。所属不明のISより照準を合わせられています』

次に白式からの警告……って

「つぶねえ!」

咄嗟に急加速してその場を離れると、元いた空間はビームで焼かれた。

「……流星のコジマキャノンほどはないけどセシリアのよりかは絶対上だよな」

「一夏! 大丈夫!？」

「ああ、だがこいつら……」

「フルスキン全身装甲とはね……」

地面の土煙より現れたのは6機の黒い機械だった。

観客席から4機のISが上がったと思うと観客席にはシャッターが閉まっていく。

すると、向こうも4機空に上がり、戦闘が開始する。

俺と鈴の目の前に残ったのは2機……

「鈴、左のやつ頼めるか?」

「……大丈夫なの?」

「さっき言った通り、避けるのはいつも流星に教えられてるんでね」

「なら、やられても文句なしね!」

同時に駆け出し、不明機を追いかける。

「くそつ、なかなか追いつけねえ!」

なんで襲ってきたのに逃げてばかりなんだよ!

後ろから……腰から上が一周した!?

「どんな動きするんだよ!？」

流星とは別の意味で人間のする動きじゃねえ!? ……人間?

「鈴! こいつら本当に中に入ってるのか?」

「は? ISなら当たり前でしょう?」

「こいつらの可動域人間じゃあ考えられないぞ!? 腰から上一周するし!」

「……無人機? そんなことが?」

「管制室! こちら織斑です! 誰か応答してください!」

『こちら山田です! やられてない様子で良かったです!』

慌てた様子で山田先生が応答してくれる。

「アリーナないの生体反応の数は?」

『えつと……6? あれ? ISは12機あるはずなのに……』

「ありがとうございます!」

向こうは人が乗ってない。なら零落白夜で切っても大丈夫だな!

周りにいる5機の味方に通信で話す。

「みなさん! こいつらに人は乗ってません! だから——」

突然またシャッターが開きます。

『警告、複数の所属不明の武装にチャージ開始』

……チャージ警報!?

周りにいた複数の無人機がどこかに砲門を向けている。他の人が相手してるものまで!?

それら狙うのは……

「流星っ!」

気づいたときにはすでに発射され——

流星が誰かを庇い、ビームの餌食となった。

side 流星

……始まったか。

最初は双方の得物によるヒット・アンド・アウェイ。腕前は拮抗。

どちらが仕掛ける？

……お、一夏が先にダメージを与えたが、何かに弾き飛ばされた。
一瞬空気の歪みが見えたがレールガンの類ではない。一体何だ？

「あれは『衝撃砲』ですわね……」

セシリアが呟く。

「衝撃砲？」

「中国が開発した第3世代型兵器で空間に圧力をかけて砲身を作り、その時生じた衝撃を砲弾として撃ち出すもの。らしいわよ」

「なるほど。楯無さんサックス」

ドラ○もんの空気砲みたいなもんか。

（『ド○えもんとは……？』）ん？ また教えるよ。

「空気となれば、見えないのが長所になるはずなんだが……一夏なかなかやるな」

「流星のあの弾幕を避けるくらいだからな」

箒が少し自慢気にはなす。確かに彼女の特訓のお陰もあるだろうな。（『あれがおかしすぎるのだよ』）

「織斑くんが仕掛けた！」

少し興奮気味に話す簪。これは決まるか——

ズガガガアアアアアアアンツ!!!

空からシールドを破ってビームが!?

「何事だっ!？」

地面から上がる土煙から出てきたのは……

「これまた大所帯だな」

6機の黒いISだった。

「……どうする、相棒？」

「6機か……皆で1人1機ずつで対応できるか？」

「流星さんの機体はどうされましたの？」

「……生憎こんな時に限ってないんだ。ここの生徒達は俺がなんとかしとく。だから頼めるか？」

「「はい（うん）!」「」」

楯無や簀、ロニーにセシリアがISを纏って空に上がる。

次の瞬間、観客席の防護シャッターとこの出入り口が閉まり、外の状況が分からなくなる。

なんか待ってたような気もするが……今はいい。

……端末も武器もねえから扉の解除は何にもできん。だから外に逃げることもできない。

だが、できないことはない。

近くにいた3組の先生に話しかける。

「先生、できる限り生徒達を物理的な壁があるところへ。もしもこの場所にさっきのやつが撃ってきたとき、少しでも守れる確率が高い」
「……ええ、分かった。みんな！ 落ち着いて！ 私の誘導に従ってください！」

生徒たちは何とか落ち着きを取り戻し移動を始める。

だがまだ遅いな……人手を増やすか。

「箒と本音も手伝ってくれんか？」

「あ、ああ。みんな！ 慌てずにこっちに来てくれ！」

「みんな〜！ 慌てちゃだめだよ〜！」

箒も協力してくれて移動が一層速くなる。

……粗方生徒の誘導が終わったか。

「あ、シャッターが開いていくよ〜！」

ん？ シャッターが開いた？

目の前にはこちらを向く黒い機体が6機……

私見られますやだー。

ってまだそいつらいんのになんで開いたんだよ！

（『流星、狙われてるぞ！』）

わかってる。

向こうの手のような場所に光が集まっていつてる。

これは……避けようにも避けれんな。

俺に出来る事をする。

「箒、本音、ちよつとすまん」

「なっ!? 流星!?!」

「え？ わわっ!？」

箒は力いっぱい出来るだけ遠くくに押し出し、本音に覆いかぶさり

……

「流星っ！」

一夏が俺の名前を呼ぶが、

「間に合わんよ——」

俺の意識はそこでなくなった。

第16話 彼女たちの復讐

地に倒れる流星。その後……

side ロニー

『……さつきからこいつ逃げてばかり。襲ってきた意味あるの？』
ナナシが愚痴をこぼす。さつきからこっちは追いかけて撃つて
ばっかりで、向こうは反撃をする素振りも見せない。

一体何で

「みなさん！ こいつらに人は乗ってません！ だから——」

織斑くんから通信が入る。

それなら手加減無しで『ロニー、横見て！』……？ 突然観客席の
シャツターが開いた？

『前の不明機、ビーム砲にチャージ中！ その方向っ!』

突然無人機がビームを発射する。その方向は……

「流星さん!？」

「流星!？」

セシリアさんと簪さんが流星の名を呼ぶ。向こうでなにかあった
のか。

現場に向かうと……

「りゅー、りゅー?」

クラスメイトを庇い背中が焼けて倒れている、相棒。

クラスメイトが声を掛けても返事がない。

まだ無人機が彼に追い打ちをかけんと砲口に光が集まっている。

アイツラガヤツタノカ。

アイツラガアイボウヲヤツタノカ。

アイボウヲコレイジヨウキズツケルヤツハユルサナイ。

「これ以上やらせるかアアア!!」

彼と謎の機体たちとの間に割って入る。

複数の無人機から放たれるビームを一身に受ける。

先程よりも照射時間が長く、装甲がドロドロと溶けていくのが分かる。

『ロニー、機体が持たない！ 今すぐ離れて！』
いや。そうすれば流星が死ぬことになる。だから絶対離れるものか。

『SE残り35, 30……もういい！ 離脱して！』

まだだ。今離れるわけには行かない。

お前の実力はこんなものか？ ブラックグリント？

そんなものではないはずだろう？

「ロニー！」

簪の機体に押されてその場から離される。

……代わりに受けてくれているようだ。

ビームの照射が終わる。

肩のレーザー砲の砲身は鉛細工のように溶け、マニピュレーターも使
い物にならなくなっている。

これから相手が仕掛けてくることに、この機体の状態じゃ流星を守
ることがままならない。

どうすれば……

——力が欲しいか？

『っ誰!？』

この機体が聞いてきているのか。なら、

「力が、ほしい！」

——なぜ力を欲する？

「流星を、これ以上傷つけさせないために！」

——その願い、確かに聞き入れた。

機体から光が溢れ出す。相手が光線を放ってきたが、それをすべて
弾く。

『まさか……こんなことが』

SEとPAがみるみる回復し、武装も変化した。
待って流星、今助ける。

肩部と脚部に新設されたミサイルを発射し、敵の武器が搭載された
手を破壊する。

これで脅威がなくなったわけではない。

【コジマパイル】と表記された武装を両腕に装備する。

「消し飛ばええええ!!」

腕のなくなった無人機に2本のパイルを打ち込みトリガーを引く。
釘とともにコジマ粒子が打ち込まれ、無人機は、

バガアアアアアツ!!

跡形もなく消えた。

向こうも簪がGBで2機の敵を文字通り粉碎し、他のISも無人機を破壊していた。

こっちは終わったが……

「流星っ!」

ISを解除し、未だ血を流して倒れている彼のもとへ向かう。

まだ教師が運びに來ないのか!

『今この出入り口が開いて織斑先生達が入ってきた!』

複数の教師が担架を持ってここに来る。

「布仏! まだ流星の脈はあるか!」

「あ、あります。け、どさつき、より……」

流星の手を持って本音が泣きながら途切れ途切れに織斑先生の質問に伝える。

「AEDは今しなくてもいいな。すぐに緊急治療室に運ぶ。持ち上げるぞ。一、二!」

教師が織斑先生の掛け声で流星を担架に乗せて運んでいく。

私はセシリアが後を追う中、彼が運ばれて行くのを簪と楯無さんと共に、呆然と見ることにしかできなかった。

この場合は俯いて涙を落とす筈とすすり泣いている本音、私たちだけが残された。

side 簪

「ロニイ!?!」

ロニイが流星の前に立ち、ビームをずっと受けている。あのままじゃ機体が溶けるだろう。

自分になにかできることはないのか――

「——この機体のバインダー一つ一つに『Iフィールドジエネレーター』っていう光線系の武器にめっぽう強い物積んでるからやばいときはこいつら前に出したらどうにかしてくれる」

「……へえー」

少し前、流星がこの機体を作ってる時にふとこぼした言葉を思い出す。

これなら……！

「ロニー！」

彼女を押しつけ、今度は自分がビームを受ける。

前に出した4枚のバインダーの前方ではIフィールドジエネレーターが敵のビームを霧散させていく。

ついに向こうのビームの照射が終わる。

「流星を、やったなあああ!!」

『不明なユニットが接続されました。直ちにユニットの使用を停止してください』

グラインドブレードを展開。

ロニーも機体の変化し、攻勢に転じる。

「リミッター解除！」

『警告、リミッター解除はIS競技の規則に反「解除っ!!」了解。リミッター解除』

システムの警告を無視し、リミッターを解除する。

チェンソーの回転数が増し、炎の勢いも増していく。

「消えろおおおお!!」

無人機の腹にグラインドブレードを突き刺す。

大穴が空いた無人機は地に落ちていく。

「此処からいなくなれえええ!!」

セシリアが相手していた無人機にも機体の最高速で近づきグラインドブレードを振り下ろす。

文字通り、無人機はグラインドブレードによって真っ二つになり、

地面には残骸が落ちた。

クシャトリア・ハマリングのエネルギーが尽きたので、観客席に着陸する。

セシリアとお姉ちゃんも降りてくる。

「流星っ！」

ロニーが彼のもとへ駆け寄る。これ以上私ができることはない。

「流星さん……」

セシリアも心配そうに彼を追いかける。

「流星……」

私とお姉ちゃんはまだ、彼が先生に運ばれていくのを涙を流しながら見ることに出来なかった。

side none

「……ええ、分かりました。こちらから医療器具、再生細胞をすぐに渡すので全力を持って彼の治療に当たってください。それでは」

副社長席の受話器を置き独りしやべる。

「……まったく、彼も無茶をする」

そう言つてマは前で複数のモニターとキーボードを操作する彼女に視線を移す。

「それで、あの無人機を誰に乗っ取られたのか分かりましたか？ 篠

ノ之束さん？」

「……うん、今まーくんの端末に送つといた。今からちーちゃんに伝えてくる」

「了解、あとはこっちでカタを付ける」

「……頼んだよ」

彼女が扉から出ていったと同時にさつきまで使っていたものとは違う赤い電話にカードを挿して話し始める。

「闇鍋の全部隊・隊員を招集せよ。これより、新しい任務を発令する」
そう話す彼のパソコンには亡国機業本拠地の位置が記されていた。

side 千冬

IS学園のある地下……

「……解析が終了しました。破壊された3つのコアはわかりませんが、残りの3つはどれも登録されていないものでした」

真耶が無人機から取り出した3つのコアの解析結果を伝える。別の3つのコアは簀が2個、ロニイが1個機体ごと跡形もなく破壊したことが確認されている。

「そうか……しかし一体一体誰がこんなことを……」

「流星さん……大丈夫ですかね……」

数時間前に起きたこと。それは尾白流星が篠ノ之箒と布仏本音を庇い、背中から足にかけて重度の火傷を負った上に大量の失血による意識不明の重体になったこと。

ついさつき到着したツイマッド社から供給された医療器具で手術中の流星を思う。

「なんで、よりにもよって当時、専用機がなかったのだ……!」

もし彼が専用機を持ったままならばきつとこんなことにはならなかっただろう。

目の前で何もできずに倒れていく流星が脳内で思い返され、机に水滴がポタポタと落ちる。

「……ちーちゃん、これを見てほしい」

後ろから声がかかり、後ろを向くと

「……どうしてここにいる、束」

「……篠ノ之博士!？」

手に持っている端末を渡され確認すると……

「……何かの実行のログか？」

「そう。まず最初に、その無人機たちは私が作った」

「ならお前が……!」

「けど動かしてたのは私じゃない。その時この無人機たちは誰かに乗っ取られていた」

確認すると、ある時点から言うことが聞かなくなった記録がある。その時刻は、

「……襲撃の時間と同じ?」

真耶がそうこぼす。

「もう誰がこんなことしたのかは解ってる。その上そいつらにはもう手を打った。」

だから、今はりゅーくんの無事を祈ろう?」

「……四年前の同じ時期もこんなことだったな」

「……うん」

私と束は天を仰ぎ、その上に雨が降ってきた。

第17話 社員たちの復讐

TACネーム

ホロウザイン ロニー

ラストレイヴン 黒い鳥

「今から作戦を説明するわ」

仮面を被ったプロスペラが前に立ちプロジェクトが起動する。

「さつき聞いたと思うけど先日、篠ノ之東氏の無人機が亡国機業情報部に乗っ取られ、そいつらによって私達の総長である尾白流星が重症を負った。今は手術が終わって意識がない状態。手術は成功したみたいよ」

いつも以上に隊員が殺気立っているのがひしひしと伝わってくる。いつもはガヤガヤしている彼らだが、誰も喋る気配はない。

「篠ノ之東氏の協力により、亡国機業の拠点地を特定することに成功。これより、そこを徹底的に潰す。派手にやって頂戴」

地図が表示されとあるユーラシア大陸の森の上に照準される。

「鬱蒼な森にポツンと道路と建物があるだけに見えるけど、結構守りは固めてるそうよ。まず重装備型イーデンドロビウム3機で外を殲滅。その後、全隊を突入する電撃戦で行くわ。

中の奴らについては少しでも抵抗する素振りを見せたら殺しても構わない」

画面が変わり、3機のデンドロビウムが辺りを爆撃、破壊してその後、部隊が降下していく想像図が投影される。

「尚、今作戦は有志でロニーちゃんとその元同僚、『傭兵会社カロード』の【RUST・RAVEN】が一緒に行動してくれるわ。

さ、どうぞ」

プロスペラに言われ、黒いラフな服装をした男が部屋に入ってくる。

「アンタらが闇鍋ってヤツ？ 俺がRUST・RAVENこと黒い鳥だ。よろしく!! ロニーの元同僚だよ」

「彼とロニーちゃんは主力の亡国機業実働部隊『モノクローム・アバター』の動きを抑えてもらう。できれば降伏してこつちに引き込みたいわ。かなり難しいけど、できる?」

「彼らとは結構仲良かったから、もしかしたら話すだけでどうにかなるかもしれない。」

「……ちよつと持つていくもので借りたいものあるんだけどいい?」

「後でね。内容にもよるわよ?」

「サンキュ!」

「それじゃあ準備を始めて。モタモタしてる暇はないわよ」

一斉に彼らは立ち上がり、復讐の準備を始めた。

side ロニー

【作戦区域に到着した。ホロウザイン、ラストレイヴンの両名はその場でステルスモードを維持して待機せよ】

「ロニー! 久しぶりだなあ!」

「……ひさしぶり。オツツとか首輪付きは元気にしてる?」

黒い機体が近づいてきて通信に音声が入る。彼はもともと同僚であのとき以来会っていなかった。

『黒い鳥は元気そうね』

そうだね。そのようで良かった。

「オツツとかのアイツらは元気にしてるさ。ただ古王だけ連絡が未だに取れてない。何してんだか……」

オツツとか首輪付きとまた話したいな……なんでオールドキングだけ連絡がつかないのか疑問に思う。

「……そう。それじゃあ流星の仇討ちを始めよう」

「それが今のロニーの相棒?」

「……うん。昨日彼奴等にクラスメイトを庇つてやられた……」

昨日の出来事が頭の中で再生し、いろいろな感情が生まれて手が震える。

「……そいつは許せんな。よし、彼奴等の根城は徹底的に潰してもらうことにしよう。俺たちの会社も潰された恨みも乗せて派手に頼ん

だぜ、闇鍋さんたちよ！」

「わかっているさ。……作戦時刻になった。手筈通り森と建物をこんがり焼いてくれ。焼きムラがないようにしつかりとな！」

上空を3機のデンドロビウムが通り過ぎた瞬間、眼下に広がる森からミサイルや銃弾が空にあがる。

だが、その3機はそれをものともせず機体各部に増設されたパルスレーザーでミサイルを破壊し、AAガンやSAMを下部とウエポンコンテナについた計4門の大出力ビームカノンで溶解・爆散させていく。

「……よし。あらかた片付いたな？ それじゃあメインディッシュを調理してくれ！」

【(ウィルコー!)】

上空で編隊を組んだ3機は今まで手を付けていなかった建物をクラスターミサイルやビームカノンで破壊していく。はてまでは……

「ヒョオ……今の一際でかい花火はFAEB(燃料気化爆弾)か!? 派手だねえ！」

今の爆発で10棟ほどの建物が吹き飛んだ。

『やっぱり徹底的にやるわね彼ら』

「やはり一番でかい建物は硬いな……」

よし、上空にて待機中の降下部隊、降下して本部に突入し、中までしつかり火を通して焼き加減をウエルダンにしてやれ。降下開始！」
輸送機から次々と傘が開いて傘が降りていく。

【こちらダグザ隊、全員着陸完了】

【同じくランバ隊も全員降りた！ 突入開始！】

傘がすべて地上におり、次々に建物に入っていくのが見える。

【東南東方向よりボギー3機接近！ この反応はISS！】

ホロウザインとラストレイヴン、出番だぞ！」

【ご指名が来たぞ！ 行くとするかロニー！】

その場から離れ、3機のボギーに接近する。

近づくにつれて機体のシルエットがはっきりわかってくる。

あの機体はサイレント・ゼルフィスにアラクネ、ゴールドデン・ドー

ンということは……」

『間違いない、マドカちゃんたちね』

黒い鳥も彼女たちが誰か解ったようだ。

「本部、不明機は実働部隊のモノクローム・アバターであることを視認した」

【こちらでも確認できた。うまくダイナーに誘ってくれ】

さて、彼女たちがうまくこっちについてくれるといいんだけど……

「っロニーにレイヴンだ?!」

「……ロニーがなぜここに?」

驚くアラクネのパイロット、オータムにサイレント・ゼルフィスのパイロットであるマドカ。

こちらの姿を認め、向こうが移動を停止したのでこちらでも速度をゼロにする。

「本部が襲われたと聞いて来てみれば……『カラード』の傭兵さんたちがここへなんのようかしら?」

「久しぶりですスコールさんたち。俺たちは帰る家が壊され、またロニーに関係する一つ別の理由があるのでここを潰しに来た。

出来れば投降してもらいたい。投降してくれたら、丁重に扱うって言ってたよ」

「黒い鳥やロニーは嘘をつくとは考えられない……本当なのか?」

「私たちが『カラード』を!? あいつら……!」

どうやらカラードを破壊したことにマドカたちは関係してないようだ。

「落ち着いてオータム。……そうね。ロニー、これを読んでくれる?」

ゴールデン・ドーンからコアネットワークを通じて文章が送られてくる。その内容は、

「体に入れられたナノマシンで言動を監視されてて、寝返るようなことがあればすぐに殺される、って言いたいみたいだよ黒い鳥」

『どっちみち、カラードを襲っていてもそれは不本意だったようね』

「やっぱりな……司令本部、あんたたちに借りたあれを使わせてもらう。」

今から数分間俺たちの周りの通信と位置がわからなくなるぞ」

【了解した。うまくいくことを祈る】

黒い鳥が右手に黒い立方体を持つ。あれでどうにか出来るというのか。

「みんな機体を地面すれすれまで下ろしてくれ」

その言葉に応じ、4人は地面まで降りる。

「どうにかできるっていうのか?」

「俺が『今』って言った瞬間にISを解除してくれ」

「つ何を言っている!? それもあれと一緒になのだぞ!」

マドカが反論する。だが、黒い鳥には策があるのだろうか、

「信じてくれ。自由にさせてやるから」

「……わかった、合図をお願い」

「よし、いくぞ……」

今っ!

「ぐあっ!」

「ぐっ!」

『——は——!?!』

突然機体の計器が狂いだし、機体が地面に倒れる。

ナナシの声も途切れ途切れにしか聞こえない。

これは……

「EMPか……?」

「そうだ。それも特上な機械からだしたやつだ。

どうだ? 俺の機体はおろか、ロニーが使ってるISまで不調になるほどのやつだからどんなナノマシンもイチコロだろうな」

「……それほどキツイものならもう大丈夫でしょうね」

「これであのクソ共から開放される……ありがとな、黒い鳥にロニー!」

「こっちの通信機器は潰れたから……ロニー、代わりに通信を頼めるか?」

「……わかった。本部、こちらロニー。モノクローム・アバターの説得に成功、こちらの指示に従ってください」

【それはいいことだ！ そっちにランバ隊を送る。今からフランベをするから回収まで楽しんでくれ！】

フランベ……？

『フライパンの上でお酒を燃やす調理方法よ。なかなか料理好きな司令さんだったわね』

「ロニー、今どこで生活してるんだ？」

「……流星が保護してくれてIS学園に行ってるよ。マドカも流星に言ったら通えるんじゃないかな？」

「学校か……是非行ってみたいな！ ところで流星とは？」

「とつても強い私の相棒。彼が作るご飯が美味しい。今は大怪我してて……」

「そのご飯を食べてみたいな……彼の早い回復を願おう」

【よし、フランベを始めるぞ！ LSWM着弾今！】

青白い閃光とともに亡国機業本部が文字通り消えた。

「フランベはこんな色じゃないんだがな……だがスッキリした！」

フランベ……流星に頼んだらしてくれるかな……

早く目を覚ましてね、流星。

第18話 Wake up

【君に、託す。なすべきとおもったことを……】

光の結晶体を追いかける2機のRX-0。

「そんなんでミネバが抱けるのかよ……！ オードリーを盗つちまうぞ！ バナージィ！」

「戻ってこいバナージ。姫さんが悲しんでるぞ！ お前のようなやつが未来を作るんだろう！」

「オー、ドリー？」

バナージとユニコーンとの融合が終わりこちらに戻ってくる。

『コロニーレーザー再チャージ！ 確実にラプラスの箱を消すつもりだ！』

ネエル・アーガマより通信が入り、コロニーレーザーがもう一度放たれることが伝えられる。

「ミネバッ！」

「オードリー！」

メガラニカにもう一度憎しみの光が襲おうとしている。

あのドズルの娘を死なせてたまるもんか。

サイコフレームの斥力により、ユニコーンガンダム四号機『アレス』にユニコーンシリーズでもありえない速度が生まれる。

青い光を放つもう一つの白い一角獣が先程よりも巨大な青いサイコフィールドを展開し、コロニーレーザーを一身に受ける。

「リユウセイさん!？」

「リユウセイ大佐！」

「大人の役割を果たせてくれ」

だんだんとこの機体と一つになる感覚になる。

「若いの、ミネバさんと未来を任せただぞ——」

【天国はどうかかわらないけど、私、魂って絶対あると思うな】

NTガンダムが破壊され、コアファイターに乗ったヨナを倒さんとIIネオジオングの巨大な腕が手を開いて迫ってくるが、ビームマグ

ナムにより破壊される。

「手を出すなあ!」

ナラティブガンダムが破壊され、コアファイターもビームに貫かれてパイロットスーツだけになったヨナに2つの巨大な腕が彼を潰さんと迫ってくる。

ガランシエールの方にも……

「まずい! マリーダさん、ジンネマンさん回避を!」

「避けきれん! 身構えろ!」

ガランシエールに襲ってくる3つの腕から発射される15条のビーム。

だが

「……あれは?」

「おいおい嘘だろ!?! なんで、ここにあの亡霊が来るんだよ!?!」

「リュウセイさん……」

『まったく……ヒヤヒヤさせるな。さあ、行ってこい若いの!』

四枚のアームドアーマーDEで全て塞ぎ、宙域に一つの生命体が侵入する。

フェネクスのコックピットに滑り込むヨナ。

「もし生まれ変わるなら、あたし、彼みたいな鳥になりたいな! ヨナは?」

「君が鳥になるなら、俺は、俺も鳥になる!」

そして金色の不死鳥が覚醒する——

side 流星

『……んで、俺はまた別の世界に行くんかシヤア?』

心象空間でソファに座りながら横にいるシヤアに話しかける。

『君はまだあの世界で死んでない。早く戻ってやれ』

あの攻撃でまだお釈迦になってなかったのか……てつきり死んだかと思っていたがな。

『ナナイとかクエス誑かしてたやつに言われてもなあ……』

『あれは誑かしていたわけではないのだが……あれは反省してる』

『あれはちゃんと反省しとかんといつまでも追いかけられるぞ?』

……体がどこかに引つ張られる感覚がする。

この場で俺の体が薄くなっている。

『……そろそろ潮時だな』

『そのようだな……またこうやって話そうじゃないか』

『それは今みたいに死にかけてる時なのでは……』

そっぴいやそりやそっぴいか。

背中に痛みを感じうつすら目を開ける。

ベットだろうか、顔が斜め上を向いている。

「う……知らない天井?」

はつきりしない目で周りを見渡す。

カーテンで仕切れる空間……病室だろうか。

「……ん?」

気づかなかったが右手でなにか掴んでいるようだ。

一体何を掴んでいるというのか。

視線を右下に降ろすと……

「流星、さん?」

セシリアが横に座って俺の手を握っていた。

「セシリアか、おはよ」

「流星さんっ!」

「いっ!?!」

突然俺に抱きつく。ちよっ、背中痛い。(『我慢しろ、それくらい』)

「良かった、目を覚ましてくれた!」

ぐっと痛さをこらえ顔を横に向けると、そこでは彼女の目には涙が溜まっていた。

嗚咽するセシリアの頭を優しく撫でる。

「……すまんかったな。無茶して」

「あなた、が倒れてど、れだけ心、配したでしょうか……」

えづきながら話す彼女の背中を先程まで握っていた手でポンポンと背中を叩いてやる。

こちら、何度もナースコール連打するな。

彼女も落ち着いて離れて現状が話された。

「……俺は8日もぐーすかと寝ていたと」

「いつ流星さんがいなくなってもおかしくない状態だったのにぐーすかなんて……」

もつとあなたの身体の心配をしてくださいますしー！」

「これからは気をつけるよ……なんだ？」

この地響きはどこから来てる？ 看護婦が来たのか？

スパコーンツと保健室の扉が勢いよく開き、5人が入ってくる。

「「「流く星く（りゅーりゅー）（りゅーくん）!!「「「」

こちらに涙を流しながら飛びかかってくる簪にロニイ、のほほんに楯無。

それと……なんでしれつと束もいるんですかねえ？

そしてそんな一斉に飛びかかってきたら……

「グエツ?! いゝたゝだゝたゝたゝ!!」

背中いゝたゝいゝ。

side セシリア

彼が傷を負って一週間と1日。

昨日も目を覚まさなかった。

あの時、私が反論して観客席の護衛をしていたら、きっと彼は今こんなところにおらず、皆さんと楽しく話しながら授業の準備をしていたのに……

「……あなたはいつ、目を覚ましてくれるのですか？」

ベットに横たわる彼の手にそつと手を重ねる。

ふと時計を見ると、針はもう8時を指している。

今まで課題のみだされていたが、授業も今日から始まる。もう行かないと……

「……？」

彼から手を離そうとすると……離せない？

「……え？」

握る力が次第にしつかりしていく。

彼の顔を見ると……うつつすらと目を開けていく。

「う……知らない天井？」

彼がキョロキョロとゆつくりと顔を動かして周りを見渡す。

「……ん？」

こちらに視線を落とす。

「流星、さん？」

これは夢でしょうか？

いえ、こんなことが夢であつてたまったものですか。

「セシリアか、おはよ」

彼が、戻ってきてくれた！

「流星さんっ！」

おもわず彼に抱きつく。

「いっ!？」

「良かった、目を覚ましてくれた！」

頭を優しく撫でてくれる。

「……すまんかったな。無茶して」

「あなた、が倒れてど、れだけ心、配したでしょうか……」

えづきながら話した私を彼が背中をトントンと叩いてくれる。

こ、これは彼に抱きつかれている体勢!？」

おもわずした自分の行いの恥ずかしさを紛らわすため、夢中でナ

スコールを押していた。

涙も止まり、彼に何が起きていたかを説明する。

「……俺は8日もぐーすかと寝ていたと」

ぐーすかですって!？」

「いつ流星さんがいなくなってもおかしくない状態だったのにぐーすかなんて……」

もつとあなたの身体の心配をしてくださいますし!？」

「これからは気をつけるよ……なんだ？」

流星さんがなにかに気づき、保健室の入り口を見る。
看護師が来たのかしら？

保健室の扉が開き……

「「「流く星く（りゅーりゅー）（りゅーくん）!!」「」」」

あるとき流星さんの周りにいた生徒会長に4組の更識さんと布仏さん、ヴェセラさんが部屋に入ってくる。

ウサギのカチューシャのようなものを頭につけた女性……篠ノ之博士!?

そして、

「グエツ!」

そのまま彼の上に飛びついた。

「グエツ!?! いゝたゝだゝたゝたゝ!!!」

彼が悲鳴をあげる。まだ傷が完全に癒えてないので……

「お前らもつと怪我人をいたわれ!」

「「「あだっ!」「」」」

あとからやってきた織斑先生にゲンコツをもらっていました……

side 流星

いだった……

『あれだけ彼女たちに心配かけてたんだから残当、というものだな』
ひどくない!?

俺ベッドの周りにはその後一夏や箒、鈴も加わって11人もいる。

しれつと束がいるのは……気の所為ではないだろう。

「りゅーりゅー、ほんとによかった……」

俺の身体に顔をうずめるのほほん。今でも泣いてるのだろう、時々しゃっくりをする。

そんな彼女の背中をさすりながら話す。

「もう大丈夫だ、元気だよ……んで、いつから教室で授業を受けられますか織斑先生?」

「傷跡は流星の会社がきれいに消したそうさ。2日は安静にしとけよ? 課題は持ってくる」

「分かりました。ありがとうございます」

「そして束……お前はなぜここにいる？ 少しこっちでOHANAS
HIしようか？」

「私もりゅーくんが心配で……っていだだだ!? やめてちーちゃん!?

いつものアイアンクローより痛いよ!」

「気安くその名で呼ぶな!」

アイアンクローの力がさらに強まる。

「ミギヤアアアア!」

そのまま千冬と束は退場していく。

女性が出てはいけない声が出ていたな……

「なんで姉さんがいたんだ……?」

「そもそもどうやって博士は入ってきたのかしら?」

「楯無さん、彼女に入れられない場所はないと思います……」

気づいたらいるからな……その気になったら別世界まで来そう。

「りゅーせー、一つ見たいものがあるんだけど……」

ロニイがこちらに尋ねてくる。

「……? 聞こう」

「……よし、準備できたかロニイ?」

2日後の保健室から出てきた夕方、キッチンにエプロンをつけたロ
ニイと料理を始める。

「うん! それじゃあ始めよ?」

「ロニイ、包丁をそんな手でもつな、それは人を刺すときの持ち方だ」

「こ、こっち?」

「そう。んで食材を持つ手は猫の手だこうやって……にやーだ」

「に、にやー!」

「……声は出さなくていいぞ」

ロニイの後ろから食材の切り方を手を伸ばして教える。

いまのにやーは……ちよっとくるものがあつたな。

ロニイと一緒に付け合わせの野菜を切り終わり、メインディッシュの調理に入る。

「今日は一夏たちの13人分ビーフステーキを作るから十分フランベを見れるぞ」

肉の焼き加減を見ながら、横に立つロニイに話しかける。

「やってみて！」

「フランベはフライパンの上でお酒を燃やして香りをつけるのにやるんだ。こういうふうにつ！」

フライパンの上になつとお酒をまいて赤い炎があがる。

「わあ……全然青くないね」

フライパンの炎が消え、皿に乗せる。彼女も気に入ったn……青？

「ロニイ、なぜフランベが青って思ってたんだ？」

「闇鍋の司令官がLSWMのことをフランベみたいだって言ってたから」

「……あいつらあれ使ったんかよ。というか、なんで闇鍋知ってるんだ？」

「ロニイ、ちよつと前の亡国機業潰しに行ったやつ、ロニイも参加したんか？」

「うん、私はマドカとかスコールを説得するためにカラードの仲間といったんだよ」

「へえ……あいつらめ……危険度の低いものとはいえなんで同行許可だしたんだよ……」

「怪我はなかったんか？」

「りゅーせーは自分の怪我の心配してっ！」

ポカポカと体をロニイに叩かれる。

（『なんか口の中が甘くなってきたな……これが、そうか』）
なんか悟った赤い人はほつとくとして……

「もう大丈夫だよ。心配してくれてありがとな、ロニイ」

「あう……うん」

頭を撫でながら話すと頬を赤らめて返事をするロニイ。

（『もうやめてくれ……これ以上その空間を作らないでくれ……！』）

「流星だな流星！」

「腕は劣つてないはずだ。美味いか一夏？」

「当たり前だ！」

「そういや一夏は箒と鈴が恋人候補となったそうだ。やっとアイツラ進んだな。」

「束もこの空間にしれつといて、食べたらずイマツドに帰るそうだ。」

「……あ？」

「束さん、俺たちの会社でいいんですか？」

「うん？ モチのロンだよ！ りゅーくんの社員と一緒にISの宇宙進出の開発を今頑張ってるんだ！」

「……頑張ってください」

「これは公になつたら大問題になるが……」

「それまでに彼女が俺たちの会社に来てもおかしくないとされるほどまでにならないとな（『もうなつてると思うが……』）備えあれば憂いなしだよ。」

「ジューシー！」

「……美味しい」

「これ、誰か有名なシェフ連れてきたの？」

「うまうま〜」

「何だこの敗北感は……」

「美味しそうに食べるロニイや簪、楯無とのほんにちよつと落ち込み気味の千冬。」

「……俺が倒れたとき、一番心配してくれていたのが彼女たちだったそうだ。」

「もしかしたら彼女たちは……俺に気があるというのか？」

（『やっと気づいたか』）えっそんな前から？

第19話 ウォールナット

「はやく座れ……今日は俺が任務の説明をする」

がやがやと複数の男が部屋に入って来て次々に座っていく。

今日の説明はランバがするようだ。

「今日の昼、俺たちが行うのは個人的な依頼だ。お前たちはウォールナットは知ってるよな？」

ここにいてはすべての隊員が首肯する。

「30年前くらいからいたやつだな」

「正体不明の天才ハッカーねえ……」

「そうだ。そいつが俺たちに護衛の任務を依頼してきた。経路は……いま画面に写ったとおりだ。今回の報酬は安くないぞ？」

複数の隊員がガッツポーズをして喜ぶ。基本的に一回の出動で手当は約30万はもらっているのだが……

「俺たちランバ隊はウォールナットを狙っている別の依頼の奴らを叩くことだ。出会ったらすぐに無力化させる。」

このまえのストーリーカーと一緒にとつちめたお嬢ちゃん達との合同作戦だ。恥ずかしい所見せるな」

隊員が立ち上がるようにするがそれをランバが制する。

「ちよつと待った、最後に！ お前たちに嬉しいニュースをやろう。さあ、入ってきてくれ！」

隊員のすべての視線が開いていく扉に向けられる。

入ってきたのはスニーキングスーツを身に着けた……

「待たせたな！」

流星、もとい『スネーク』だった。

部屋が歓声に包まれる。

「何が『待たせたな』だ、心配かけさせおつて……まあいい、各自準備をしてくれ」

side 流星

「———そしてここから脱出、逃走手順は以上です。羽田でゲートに

潜ったところでミズキさんに交代……って聞いてますか?」

後ろに座るたきなが説明してたんだが……聞いてたか?

さすがに電車内でスニーキングスーツをつけているのは怪しき満点なのでチャック付きのパーカーとダボダボなズボンを上から履いている。

「んー、いらいぬひ……すごうでハツカなんでひよお? ほんなひとかなあ?」

「飲み込んでから言え。てかハツカって……」

それ人でも何でもねえただの植物じゃねえか。

「んぐ、ゴクツ……やっぱり眼鏡で痩せて小柄な男とか? カタカタ

……パチーンツって!」

「それとは限らんだろう……さてはアニメか映画の見過ぎだな?」

「そうですね……ってなんで知ってるんですか!?!」

駅弁を食べて、お茶を飲みながらしやべる千束にツツコミをいれる。

何やら後ろからたきなが人外の目で見てらっしやるような気がするが……

それはそれとして先程駅のコンビニで買ったものを取り出してたきなに渡す。

「ほい、たきなさん。この味で良かったか?」

「この味で大丈夫です」

「……二人とも何を食べようとしてるの?」

「俺はカロリーメイトだが?」

「私はゼリー飲料です」

「いや、いやいやいやお二人さん!? 今の状況わかってますか!?!」

何いってんだ?

「依頼人に会うために俺たちが特急に乗っている。そして昼飯を食べている。ん、これ食うかたきなさん?」

ちなみにランバたちは荷物があるのでヘリコプターで既に現地入りしている。

「ありがとうございます……美味しいですね」

「バニラ味、結構行けるだろ？」

4本入りを二箱買ったので一本をたきなに渡す。プレーンが一番うまいんだが、やはりたまには別の味を食べたくなる。

軽食をとっている二人を千束は信じられないモノを見るような表情を浮かべてみている。

「えー、それがあ？ 特急だよっ!? 駅弁食べようよー! あ、ちよつと食べる?」

「いや、構わんぞ」

「結構です」

どちらも即答。

「まあまあ、そう言わないで! 煮卵とか美味しいから! ほら、あーん!」

任務前でもいつも軽いのはいいのやら悪いのやら……

「あー、んむ……」

千束の押しに負けたたきなは千束が差し出す煮玉子を食べる。

「どう? 美味しい?」

「……美味しい……です」

「はあい、美味しい!」

……何を見せられているんだ?

「流星も食べる? ほら、あと煮玉子2つあるし!」

「いや、ほんとに大丈夫だ」

「いいから、ほら! あーん!」

「いらねえ!」

「あーん!!」

「だからいムグツ!」

ちよつ!?

口に煮玉子をつ突つ込まれた。

口にしたものは仕方ないから、それを食べる。

「どお? 美味しい?」

「美味しいが……わざとやったのか? それも人目のある場所で」

「あつ……や、やややだなああ! ベベべつにに他意はないよお

おお!? やつだなー、意識しちゃうとかお年頃なんですかあああ!?」
恥ずかしくなったであろう千束は誤魔化すように、冗談を口にする。顔はすでに真っ赤だ。

今彼女がしたのは、異性に対してのあーんである。これちよつと前だったらここで気絶してたな。

傍から見ればそれは恋人のやり取りでしかないだろう。

『(乗車ありがとうございます)ございました。まもなく、北千住……北千住です』
アタフタしている千束を眺めていると車内アナウンスが流れ、目的の駅に近づくことがわかる。

「降ります」

「はあ……」

「え、もう!?!」

「10分足らずで乗り換えだからゼリーを買ってもらったんです」

「後ろに同じく。カロリーメイトを買ったのはその訳だ」

「そうなのお!? 早く言つてよおー!」

言つたはずなんだがな……

早速だが、結果を言おう。ウォールナットは死んだ。

千束は完全に落ち込んでいる。……護衛対象を死なせてしまったと思っっているからだろう。

【あー、こほん。もういい頃合いなんじゃないか?】

あー、さっきの言い方が悪かったな。偽装したウォールナットの死を偽装した……ややこし。

んで、テロリストは全員ランバがやってくれた。あいつらボーナス弾むか。

「あつつううう……流星、ビール!」

「ほい、ミズキさん」

ヘルメットとマスクを外し正体を明かした手でパタパタと扇いでいるミズキさんに、クーラーボックスに入っていた缶ビールを取り出して彼女に投げ渡す。

「え、ちよみズキに流星!? え、あ、な、なんでえ!？」

「落ちて千束」

前から運転するミカさんの声が聞こえる。

「うゝえゝえゝえゝ!?! 先生っ!？」

そんなに驚くか？

「んぐんぐ……ぷっはああああ！ あ、これ防弾性よ？」

派手に血が出るのがミソね、マジでクツソ重いけど！

「ちよ、ちよつと待っててください!?! ウォールナットさん本人はどこへ!?!」

「そうだよ！ どこいったの!?!」

『……だ』

「うえ!?!」

【追手から逃げ切る一番の手段は死んだと思わせること。そうすればそれ以上搜索されないから……お？ おお？ 真っ暗だな】

スーツケースがガバツと開き、そこから金髪をした幼女が現れる。彼女がウォールナットなのね。

彼女が喋る言葉が着ぐるみの頭から加工音声として音が出ているから、彼女こそがウォールナット本人だということがよくわかる。

「では、わざと撃たれたと？」

……てかそのキャリーバック、内側から開けられるんかい。

開けれんと思ってたよ。

「ああ、彼の部隊のアイデアだ」

ウォールナットの視線がこちらに向かったことからこの作戦が俺立案のものだということが千束とたきなノ二人に伝わる。

「あーあ、最後はハリウッド並みの大爆発を用意したのに無駄になっちゃったわねー」

「ま、こっちの予算浮いたしいいんじゃないか？」

「そうだな、早く終わるのはいい事だろう？」

「想定外の事態にキチンと対処をして見事だったぞ」

今作戦の振り返りをするミカさん、みズキさんと俺に、千束を評価するウォールナット。

「ちよちよーつと待つて!? 色々聞きたいことはあるんだけど! つまり、その予定通りで。誰も、死んでない、つてこと……?」

「そうだぞ?」

「あ……はあああ……良かったあ……みんな無事でえ……!」

千束の問いかけに肯定したミズキ。

それを聞いてへにやへにや、と脱力しながら千束はほっと一息つく。

「この娘、めつちや金払い良いから命賭けちやったわ」

「それで……銃弾全部弾けて傷が一切ないこれ、どうなってるんだ?」
俺の会社が用意したキャリアケースをコンコンと叩くウォールナット。

いや、ただの防弾仕様のはずなんだが……

「……硬すぎないか、このキャリアケース? もしかしてあいつらガンダリウム合金を……!」

だとしたらもつたいたいなすぎるだろ! なんだよ、もつと安くできたでしょ!?

「もおおう……死なせちやっと思ったし、あああもおおう! 良かったああああ!」

「うおおう!」

「良かったああ、無事で良かったああ! ほ

んと、ほんとにい……! うええええん……」

ウォールナットに千束は抱き着きながら号泣して喜んでいた。

うえ? どうしましたかたきなさんや?

「みんな言及してませんが……流星さん、もしかして最初から知ってましたよね?」

「……ああ」

そういや二人は知らないんだつたな。

突然こちらに顔を向ける千束。どしたん。

「なんで言ってくれなかったのよおおお!!」

「オツゴ!」

千束に頬を平手打ちされた。いたう。

翌週の週末、ド○えもんのように押入れに住み始めたというウォールナット、もといりコリコ従業員のクルミが

「世界的な企業の社長さんがまさかの闇鍋の長だったとはな……んで、そんな社長に聞くが、何だこれは？」

PCを回転させてツイマッド社IS部門のHPの一番上で流れている動画を見せてくる。

Let's go! という掛け声とともにISたちが突然コミカルな動きを始めたたり、目に見えない速度でゴジマドムがキモイダンをしている動画だ。

「ブツ……それは……作った奴らに言ってくれ」

この動画に対して、俺の耐性はない。絶対吹き出してしまう。

今でもなんでアイツラがこんな動画を作ったのか理解できない。

「よく見たらこれ、あの篠ノ之束も映ってるし」

……ほんとだ、ウサ耳ついた束と一緒に踊ってる。なんだこりや。

「何見てるnブフェツ!?!」

千束も吹き出す。これ見たら最初理解できるやついない。

「ゴホッ、ゴホッ……あの硬すぎるキャリーケースといい、この動画といい……ほんとにどうなってるの流星の会社は？」

「ちよつと変でいい奴らが集まる会社、としか言えないな」

「その変のベクトルがおかしくないか……」

「ごもつともです、そうとしか言いようがない。」

そう思いつつコーヒーをすする。うん、旨い。

横ではPCでループ再生される動画を観ているときなどミスキさんが宇宙猫になっていた。

帰り際、レジを打つミカさんに小声で話しかけられた。

「……流星くん、あれの培養は順調かい？」

「はい、いま冠状動脈を発達させてるところです。あと4ヶ月半あればいつでも」

「……わかった、すまないね」

学年別トーナメント編 第20話 3人目

side 流星

「……どうしたものか」

千冬の寮長室内、俺と一夏、千冬に明日から学校に入るマドカがベッドの上で座っている。

最初にマドカを見たとき、ちっちゃくなくなった千冬かと思ったぐらい二人の顔が似ていた。

亡国機業から持ち帰った資料の一つを読んだが……さしずめプルシリーズといったところか。(『数だけでいうとニタ研よりも酷いな』)

それよりもたちが悪いな。

なんせ大量に失敗作として一夏等の兄弟が消されているんだから。

「はじめまして、織斑千冬。いや、成功試験体no. 1か」

「千冬姉……どういうことだ?」

突然呼び出されて、姉と瓜二つのやつがこんなこと言い出して困っている一夏。

俺も今何を言うべきか悩んでいる。

「一夏にはいずれか話さなければならぬとずっと思っていた……」

ぽつぽつと話し出す千冬。今まで一夏に隠していたことを話していく。

「私達は織斑計画——通称プロジェクトモザイカで生み出された人造人間だ」

そう、彼らは究極の人間兵士として遺伝子などを組み替えている人工人間だ。従って、彼らの生みの親は人間ではなく、試験管なのだ。

「っ!?!」

「……あの時、俺達の部隊が一夏と千冬を保護した。

だが、別の生き残りだったマドカは別の部屋にいて気づくことができずにあとから来た亡国機業に連れて行かれて……」

マドカ、あの時気づくことができなかつたせいで人並みの生活を、送らせることができなくてすまなかつた……！」

（『なんで流星が謝る!?!』）

俺の落ち度だ。一夏と千冬だけこんないい生活送つてて、マドカはまともな教育も受けずに汚れた仕事をしてたんだ。それも知らずに……

「……ありがとう」

マドカがなぜそんな言葉を……？

「……なぜだ？」

「こうやって血も繋がってない人を手厚く匿ってくれる、それも純粋な善意で……こんなことしてくれるやつなんて世界にいないと思つていた。」

あのとときは運が無かつただけだ……失敗作の私は成功作の千冬と一夏を恨んでいる」

「それは……今もか？」

「ああ。だが、お前たちが尾白家に保護されていると分かつたとき……正直、羨ましかつた。その輪に混ざりたかつた。」

だが体に入れられたナノマシンがそれを許してくれなかつた……」

「……それはどう取り除いたというのだ？」

「尾白が倒れたとき、彼のの会社が亡国機業を倒しに来てな……その時に破壊してもらつた。今はもう自由そのものだよ」

アイツらがEMPでどうこうしたつて言つてたな。

そういや別のやつも有志で参加したと言つてたが誰だつたんだ？
後で聞いとう。

「俺から一つ……」

言い訳がましいかもしれないが、3人はただ人造人間つていう肩書を持つだけで少なくとも俺とか俺の会社のみんな、箒や鈴たちから見ればただの毎日起きて、飯食つていろいろな感情を持つ人間だ。

もっと悲惨な事になつてるやつも見つたことある。それに比べたら3人は『人』そのものだよ」

実際、俺なんか骨を金属にする手術を過去に行つて『NEXT』に

なったこともあれば、金属生命体と共生したこともある。

「だが、その人造人間というレッテルは剥がれないのだぞ……！」

「大丈夫ですよ千冬さん。」

もし、なにか言いがかりをつけてくる奴らがいても絶対に守り通してみせます。もう十年以上も一緒に暮らしてる家族じゃないですか。

マドカも、もしよければ……どうだ？」

「……いいのか？」

「誰も反対なんかしないさ。な、一夏」

「おう！」

「千冬もいいよな？」

「……歓迎しよう」

よし、全員反対はないな？

「……これからよろしくおねがいます」

「「はい！」」

この場で、新たに家族が増えた。

「それじゃあ一夏、最後に……」

「ああ、それでは……」

「この汚い部屋片付けますか」

最後は4人で部屋の掃除をした。

散らかった空き缶やゴミ袋、はてまでは下着までを捨てていった。

千冬が涙目になってたが……なぜだ？

定期的にしなないとまたこんなことになるだろうな……

その翌日、朝のHRにて一組に3人の転校生がやってきた。

なんか転校生一組に偏り過ぎだった？ もともとそのクラスは他

のクラスに比べて人が少ない。このように転校生が多いからな。

教壇の前に立ってる3人も何かしらの代表だったり候補生である。

プロパガンダ的な目的もあるんだろうな。

（『にしても2ヶ月で4人は多くないか……？ それも半分は流星の会社だぞ？』）

条件とかだして入学させてるんだよ。訓練機のフレームとか結構提供してる。マドカもISのフレーム5機とちよつとの技術提供の交換条件で入学させた。

『本当に君は人のためならどこまでも尽くすな』

そりやそうだ。こんな自分ができる事で誰かのためになるなら喜んで何でもするさ。

……お、山田先生が話し始めた。シヤア、また後で。

「えつと……き、今日は転校生を3人紹介したいと思います……」

今日のSHR担当の山田先生が横に立つ3人をチラチラと見ながら話します。

織斑先生は……腕を組んで後ろから見ている。

前に立つ3人は誰もが個性過ぎた。

一人は眼帯を付けた軍服風の白髪。

一人は織斑先生をそのままちっさくした黒髪。

一人は男性の服を着た金髪……3人目か。

挨拶を促す山田先生。それに対し、金髪の男性？ がにこやかに挨拶を始める。

「皆さん初めまして。シャルル・デュノアと申します。出身国はフランスです。一応「3人目」の男性IS操縦者になるのかな？ 異性の身で色々と御迷惑をお掛けする事もあると思いますが、1年間宜しくお願いします！」

クラスに静寂が訪れる。これは……あれが来るのか。

「「キヤアアアアアツ!!」」

……頭痛い。耳栓効かないしもう諦めた。

ロニイも頭をクラクラとしている。

「3人目の男子っ！」

「二人とは違う護つてあげたくなる系の！」

「天使降臨きたあー!!」

……にしても妙だな。3人目だというのに世間が騒いでない。
〔『……どうした？ そんなにじっと見つめて？ まさか……』〕
いやいや、そういうわけではない。骨格が少しおかしいと思つてな
……デユノア、か。

そのときはその時か。

「み、皆さん静かにしてください！ 自己紹介が終わつてませんよ！」
静まる気配のないクラスをどうにか収めようとする山田先生。
やっとこさクラスが静まり次の紹介が始まる。

「私は織斑マドカ。その名の通り、織斑一夏や織斑千冬の親戚に当たる。所属企業はツイマッド社。趣味は最近始めた料理だ。みんなとは仲良くしたいと思つている。よろしく頼む」

「……………エエエエエエエッ?!」

山田先生の声も加わり、さつきよりも大音声となる。

もう頭が痛すぎ……

しかも窓ガラスにヒビ入ってるぞ……

「織斑先生と瓜二つ!」

「クールな織斑先生がそのままちっちゃくなつた!」

「もう飼いたい!」

最後のやつ、勝手に飼うな。

「あう……」

突然のクラスの押しに困惑しているマドカ。なんかかわいい。

「静まれ! ……よし。ではボーデウツヒ自己紹介しろ」

「はいっ教官!」

教官? なんか織斑先生軍でやってたんか? また後で調べてみよう。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

それだけを口にする。もうちよいなんかない?

「あのう……それだけですか?」

「……………む? ……ここは学校だったな。私はドイツ軍に所属しており、趣

味は兵器だ。聞きたいことがあればぜひ聞いてほしい」

……まあ一応出たか。んでなんで一夏の前に向かつてるんですかね？

拳を振り上げて……

「ほう……あの時より強くなったな。織斑」

一夏が手でそれを捕まえる。

「いつも鍛えてるからな……あのような事はもう起こしたくないし」

「……そうか」

そのままボーデヴィツヒはつかつかと自分の席に向かつていく。

なんか一夏絡みであったのか……？

「自己紹介はこれで以上だ。次の時間は実技だ。10分後、着替えて整列しておいとけ」

SHRが終わり、一夏とデュノアが近づいてくる。一夏とはもう挨拶をしたようだな。

「改めて宜しくね、流星くん。シャルル・デュノアです。同じ男子生徒として仲良く接して貰えると嬉しいな」

「ああ、よろしく頼む。早速だが……急ぐぞデュノア」

「えっ？」

「男子更衣室はちよつと離れてるんだ。それに加えて今日は女子が追いかけてくるだろうからな」

二人でデュノアの手を引いてクラスから出る。

「噂の転校生発見！」

「逃さないで！」

「ものども、であえであえい！」

ほらきた。

彼女たちに捕まると質問攻めにあつて授業に間に合わなくなる。

「走れええええ!!」

地獄の追いかっこが始まる。なぜかわからないが、この時の女子は異常な脚力を持ってこちらに迫ってくる。なぜだろう……（『しらんな』）

十字路に着くと前から来た。回り込まれたか！

「二手に分かれるぞ一夏！」

「また後でな！」

おれとデュノアが右に、一夏が左に走り出す。

手を引いて走るのはやはり遅いな……

「ちよつと失礼」

「わわっ!？」

デュノアを両手で抱えて加速する。

後ろからキヤーキヤー聞こえるが追いかけてくるからだよ！

このあとなんとか更衣室に辿り着くことができた。

第21話 殺人兵器

男子更衣室についたのだが……一夏がない。捕まったのだろうか……

(『だろうな』ならご愁傷さまだ。)

今救援に行ったら俺も遅れることになる。すまん。そして上を脱ぎ始めると……

「わあっ!？」

デユノアさんが突然顔を真っ赤にして物陰に隠れる。

「どうしたデユノアさん、Gでも出てきたか？」

「いや、別に出てきたわけじゃなくて、ちよつとビックリしただけ。ちよつと後ろ向いててね……」

「そんな趣味ないわ……ほら、さっさと着替えてくれ」

後ろを向いてISスーツを着る。

「……終わったよ、もう大丈夫。ところで、尾白くんのISスーツはやっぱりツイマッドの？」

「そうだ。今どき古いような全身タイツ型みたいだが、性能は悪くない。なんだ、欲しくなったか？」

白いスーツの腕をさすりながら説明する。

「い、いや別にそんなことはないよ！ さ、さあ行こうか！」

過剰な反応……やはり怪しいな。シヤア、少しネットで調べを入れといてくれ。(『了解』)

クラスの列に滑り込んだ直後、チャイムがなった。あぶねえ……

「あと3秒……間に合ったようだ。織斑は……間に合わなかったか」

「アイツ殿やったんでね……大目に見てやって下さい」

「……わかった。もつと急げよ、織斑」

優しくチョップを貰う一夏。あれは死んだ脳細胞の数はクレイドル一基分にも満たないな。

「……はい」

「それでは今日より実機を用いた訓練を始める。オルコットと嵐、前
に出て来てくれ」

「ええ〜……」

やる気のない二人に、織斑先生が「――、――
――?」となにか小声で言った途端、

「やってやりますわよ!」

「やってやるわ!」

二人はものすごいやる気を出した。何言ったんせんせー。

……ん? 空から山田先生が。ただし、こっちに向かって高速で。

「おい一夏、後方注意だ」

「へあ?」

一夏が私の示した方を向くが、時既にお寿司。

「ああああつ! ど、どいてくださーいっ!」

「ドワツジ!」

一夏は山田先生のラファールの突進をうけて数m吹き飛ばされた
後、地面を転がっていく。グラウンドを土煙が覆った。

「お、織斑くんっ!」

「ISの展開は間に合ったようだが……」

土煙が晴れた先にあつたのは、山田先生を押し倒し、胸を揉みしだ
いている(ように見える)一夏の姿だった。なんつーラッキースケベ。

「あ、あのー織斑くん? 生徒と教師がこんな関係になるのは良くな
いかと……あ、でも織斑先生がお姉さんになるならそれはそれでいい
かも……」

ぽつと頬を赤らめて自分の世界に入り込んでいつてる山田先生。
戻ってきてください。

背後から強烈な殺気を感じる。このプレッシャー、シヤア……じゃ
なくてセシリアか!?

「ッ!」

身の危険を感じたか、山田先生から体を離す一夏。直後、一夏の頭
のあつた位置をレーザーが通過する。

「ホホホホ……残念です。外してしまいましたわ……」

スターライトMk—IIIとビットを展開して、一夏に狙いをつけている。

満面の笑みだが、額に浮いた血管が明らかな怒りを表している。

「いゝちゝかゝ？」

金属が組み合わせる音がした。今のは鈴の武器、双天牙月の連結音か。

見ると鈴が両刃形態にした双天牙月を振りかぶり、一夏の首を狙って投げつけていた。

「ちよつ!？」

これをのけ反って躲す一夏。残念、これで終わってない。ブーメランの如く戻ってきた双天牙月が一夏を襲いかかる、次の瞬間。

空中を舞っていた双天牙月が撃ち落とされる。

「さすが、だな山田先生。元日本代表候補だっただけある」

「ほんとに候補止まりだったんですね……」

でも今のはほんとうに代表クラスの射撃精度だった。まあ当時織斑先生が代表だったからね……

その後、セシリアと鈴が組んで2対1で戦っていたのだが、惨敗した。

『連携がうまく行ってなかったな』それは確かに。

第2世代機で候補生とはいえ2機の第3世代機にも勝つ先生の実力は侮れないな。

「それではISを用いた実習を始める。ここに打鉄とラファールが3機ずつ、グレイズが2機ある。専用機持ちは1機ずつ持っていてレクチャーしてくれ」

織斑先生の支持が出たあと俺はグレイズの乗った台車を引き、集まった7人にさつと説明する。

「こいつは第2世代ツイマッド社製IS『鉄血シリーズ』のグレイズ。見た目がかなりシンプルなことからわかる人もいるかもしれないが、整備がとてもしやすい。

軽装甲だから機動力が高い上に使ってる装甲もちよつと特殊なやつだから防御力もそこそこ。

操作もできる限りしやすいうえ、カスタマイズがかなり効くようにしてるから、初心者はもちろん、熟練者も乗りやすい機体となっている。

さ、誰から乗る？」

「あたしから乗っていい？」

一番最初に名乗り出たのは谷本さんだ。

「んじゃ、どうぞ」

俺もアレックスを装着して谷本さんが乗り込むのを待つ。

「そういえばりゅーりゅーのISは何世代なの？」

（『そういえば……確かにこれは何世代に当たるのだ？』）

「……ある意味第1世代ともいえるし……大量の武装の後付があることから第2世代とも言える。かと言ってあのデカブツ（イオーキクス）の火力もあるから第3世代……わからんな」

「不思議だね〜！」

ある意味とは全身装甲であることもあるし、もう一つ理由があるが……あれははつきり言ってるグレーだいな。

「おまたせしましたー！」

緑の装甲を纏って準備ができたことが伝えられる。

「おし、まずは歩いてみるか。」

ISは言ったら自分が一回りおっきくなつた空飛ぶスーパーマンだ。いつもどおりに歩くイメージをしてみな」

そうすると、ちよつと不安定ながらも、ゆっくりとグレイズが歩み始める。

「凄い、できた！」

「いい感じだ。次はちよつと走ってみるか——」

この後順調に授業は進み、俺の班の全員が20キロほどで飛行出来ることができた。

他の班でもトラブルなく訓練できているようであった。

授業を乗り切った昼休み、セシリア・ロニイ・俺・簪・のほほん・ラウラ・マドカ・鈴・一夏・箒・鈴・デュノアの順に円になって屋上

で昼飯を食べていた。

一夏は公式に恋人候補となった箒と鈴に挟まれて鈴の酢豚と箒の唐揚げを交互にたべている。

周りに俺に気がある奴らが固まっている俺も人のこと言えんが……

「ほう……一夏も手作り弁当か……」

「そういう流星はどんだけ弁当の量あるんだよ!」

一夏がこちらにある6つの弁当箱を見て驚く。

「いやなに、ロニイと簪、のほほんに加えてマドカの弁当を今日作ると約束してたんでな……」

「何があっただよ……」

そう、それは今朝のこと……

部屋でむすつとしている簪。

というのも今日で部屋替えするので、部屋を変わりたくないそう
だ。

「……流星、今日お弁当作って」

「どうしたいきなり?」

「部屋離れる最後に何かしてほしい」

「別にいいが……」

そして弁当を作っていると……

「かんちゃんローローとマドっちと一緒に入るよ!」

タイミング悪っ

ちなみにローローとはロニイのことで

マドっちとはマドカのことである。

のほほんとはマドカは早速同じ部屋になったようで、もう仲良くなっているそうだ。

「どうぞー」

「迎えに来たよかんちゃんってりゅーりゅーそれは一体!」

「……簪の今日の弁当」

「え〜! いいなあ〜!」

「流星、私もほしい」

今から追加で3人分を？

「それは……」

「……だめ？」

やめて！ そんな目に涙の溜まった子犬達のような目で見ないで

！

「——っわけだ」

「尾白くんなんというか……ハハ」

「む……尾白氏は朝から忙しかったのだな」

空笑いするデュノアに労ってくれるボーデヴィツヒ。

マドカはというと……

「……うまい」

もう食べてらっしやる。

「流星さん、私の分は……」

「ないと思っただか？ あるさ。はい」

「ッありがとうございます！」

きつと言うだろうなと分かっていたことなのでもちろん作ってきた。(『女心が分かるようになってきたな流星』)

うるせい。

「良ければ私の作ったものを食べてみませんか？」

そう言ってサンドイツチが入ったバスケットを渡してくる。

それを受け取り、一つ取る……見た目はいいな。さぞかし味も良いことだろう。

セシリアと同室のロニイが激しく首を横に振っているが……まあいい。(『嫌な予感がする……』) 気のせいだよ気のせい。

卵っぽいものをいただくか。

いただいでしまった。

ぬ!!!??!?!?

（『どうした流星!?!』）

!? 密林の動植物でもこんなものはない、今まで食べたことない味だぞ!?!

まてまて今度は卵が……くさっ!?! 何? 昔束にいたずらでシニールストレミングかけられた時のおいしてきたぞ!?!

……ああ、また時が見え始めてきた……見えるのは、人類がELSと完全に対話できた世界線か? 人類全て以上の英知を今授かってくるよ、ララアにアムロ。

（『待て、悟るのはまだ早い! 流星、流星——!』）

side セシリア

彼が私の作ったたまごサンドを食べた途端、急にがつつき始めた。そんなに美味しかったのかしら?!

「流星……全部食べちゃった」

心配そうに見つめるロニィさん。何か心配する要素でも? 朝味見たところ無言で頷いてたのでは?!

「セシリア……今度一緒に料理作ろうな。時が見える……」

そういつて顔が真っ青になり後ろに倒れていく気絶する流星さん。今度一緒に流星さんと料理が作れるなんて……嬉しすぎますわ!!

「まあ! 気絶するほど美味しかったのですね!」

「そうなのか？ ちょっともらっていいか？」

「ええ、ぜひ召し上がってください」

一夏さんに続き箒さん、鈴音さんと続いてみなさんが食べていく。

「ああ……みんな食べちゃった……」

ロニイさんなんでそこまで怯えているのですか？

「「「「「ヴェッ!?」「」「」「」」」」」

ほら、皆さんも同じように美味しすぎて倒れましたわ!

「織斑先生ー!」

ロニイさんが先生を呼びに行ってくれました。

起こすのを手伝ってくれるでしょうか……??

「何をやったんだ馬鹿者!」

「あだっ!?!」

「……これどうやって作ったの?」

このあと生徒指導室で生徒会長と織斑先生に怒られたの言うまでもない。

幕間 ツイマッド社の愉快な仲間3

side マドカ

IS学園の学生寮内、同室となった布仏本音と風呂上がり後に話している。

「昼のセッシーサンド……凄かったねえ〜」

「なぜあの時ロニーの行動に気が付かなかったのだろうか……」

あの時、ロニーが首を横に振っている理由を聞いとけば、あの様な惨事にならなかつただろう。

「そういえば朝の実習で見たマドマドの専用機ってかんちゃんのハマリングと似てるよね〜」

「そうか？」

確かに全体の意匠や、装甲の配置などはかなり似た点が多いかもしれない。

「もしかしてりゅーりゅーと同じ会社だったりするの〜?」

「そうだ。最近貰ったばかりの第3世代機って言われたな」

「へえ〜! どういう経緯でマドマドの機体か?」

「それはだな——」

少し前の話をするでしょう。

ツイマッド社実験場、私は濃紺と青い装甲で形成されたISを身に纏って、横にしている兎の耳を付けてツイマッドのマークが入った白衣を着る女性が話している。

「この機体はね、ペイルライダーっていうんだ! フレームとか装甲はツイマッドのみんなが作ったんだけど、ソフト面は私のお墨付きだよー! ブイブイ!」

「は、はあ……」

篠ノ之博士の制作に携わった機体とは……

「それじゃあ早速機体のテストを始めようか!」

そういつて左手にいつの間にか持っていたボタンを押す。

すると、前の地面が2つに割れて下から別の地面が何かとともにせ

り上がってくる。

「な、何だのはあれは……!?」

目の前に現れるのは白とオレンジの横に大きく翼のように大きく広がった装甲を持つ自分と同じくらいの機械。

「あれはハシユマルっていつて無人のツイマッド社警備ロボットです！」

鳥みたいでかわいいでしょー!」

それに合わせて肯定するかのようにギャンと鳴く。

かわいい、い?

「……今からあれと戦うのですか?」

「君のような勘のいい娘は嫌いじゃないよ!」

ちゃんとリミッターは付いてるし、ハシユマルにもSEとほぼ同じ物を付けたから本気でやっちゃってオツケー!」

それでは行くでしょうか。

「それでは試験開始い!」

合図と同時に垂直に跳躍して司令部に飛んでいく篠ノ之博士。

なぜあれほどの跳躍力を持っているか不明だが、今は前の相手に集中するでしょうか。

ビームライフルで撃つが……

「弾かれた!」

『一定時間はビーム兵器無効の装甲を持つてるよー!』

言うのが遅い!

実弾兵器で装甲を剥がすしかないのか。

【ARIZAWA部門謹製グレネードキャノン】と記された武装をコールする。

背中にズシンと重い衝撃が走り、装備されたことが分かる。

『あ、社長砲だけはやめてください』

しらん。篠ノ之博士もやめてくれと言うほどのこいつがどんな威力なのかためしてみよう。

3つに折りたたまれていた砲身が接続されていき、砲身が、身の丈以上の長さとなる。

相手もなにか不味いと察したのか、回避運動を取り始める。
「撃てっ！」

ズドンツという音とともに発射されるグレネードの砲弾。

ISが3mほど後退するほど、発射の衝撃が強すぎるとは。

少しずれたか……

ズガアアアアアン!!

着弾した地点に半径30m程の火球ができる。

……爆発範囲が広すぎないか!?

ギャオオオ……と装甲が穴だらけになってSEもゼロとなったのか、黒焦げになって倒れるハシユマル。

まさかの一撃必殺……

『あー！ハシユマルがあー!?!』

「……これなら何機でも行けそうだな」

『ほう……言ってくれたね?』

ハシユマルに仔月光、出ておいで!」

次々に出てくる鳥に加えて3つの手を持ってカシャカシャと大量にやって来る球体。

「……なんだあれは?」

数が……100を超えている!?

『さあまーちゃん、この数にどう対処するかな?』

全方位からジリジリとにじり寄ってくる機械たち。

グレネードキャノンを装備したせいで動きが鈍くなっている。

「む、無理いいいい!!」

そして数の暴力でもみくちやにされてSEがゼロになって試験が終了した。

「——という訳でもらったのだ」

「そのグレネードキャノン、ほんとにリミッターかかったの?」

「本来なら火球だけであと4倍程大きく出来るそうぞ?」

流石にあれでも危険すぎるから更に火薬量を減らして5mまでサイズダウンしてもらったが……」

ちなみにこれで最低限の火薬量らしい。火薬の性能、一体どうなっているのだろうか……

「マドっち？　なんで篠ノ之博士がツイマッドにいるの〜？」

「……そういえばそうだったな。こっちも話そうか——」

試験が終わってISを解除し、椅子に座ってスポーツドリンクを飲みながら対面している博士に質問を投げかける。

「なぜ篠ノ之博士がツイマッド社に？」

肩を仔月光が揉んでいる中、博士が答える。

「まーちゃんは どうして私がISを作ったか知ってる？」

「……もともとは宇宙に行くために作った、とどこかで聞いたことがあるな」

「合ってるよ。元々はルクセンブルクにある隠れ家に住んでいたんだけど、りゅーくんがここなら私の考えに共感して、手伝ってくれる人がいるっていうから来たんだ！」

尾白が手を引いて世界中から追われている博士をスカウトしたというのか。彼の人脈はどうなっている？

「それで今はその開発は？」

「順調そのものだよ！　最近は宇宙で発電してマイクロウェーブで送電して電気を供給するシステムができたよ！」

はい、これ！

そうやって手渡されたのは平べったい半径10cm程の円柱状で白い塊だ。コンセントの穴がある。

「これは？」

「今リアルタイムでそこに電気が供給されているよ！　衛星軌道上にソーラーパネルを付けたゴーくんがいつでも太陽が当たる位置に移動して新鮮な電気を供給中だぜい！」

どうやらただコンセントの穴があるだけでなく、いつでも電気が通っているようだ。

何やらとんでもない代物である事はわかった。

「こういった感じで色々宇宙で使える新しいものをどんどん作れる此

処は最高だよ！」

「それは良かったな。宇宙か……一度月に行ってみたいものだ。あの時には考えもしなかったことだな」

流星……このように生きる楽しさを教えてもらったことを感謝する。

「……へえ〜！ 博士は自分のやりたいことをできる場所を見つけられたっていうことだね！」

「そういうことだな。そして、今使ってるのが博士からもらった『レクテナ』だ」

いま髪を乾かしているドライヤーのコードの先は確かにコンセント穴があるだけにしか見えない置物だ。

「……マドつち、それつてずつと電気代タダになるよね」
「そうだな」

「一体幾らになるんだろ？ 整備室とかで使いたいなあ〜」

IS学園の整備室では電動のクレーンや工具が揃っているので電気代がバカにならないそうだ。

「流星に聞いてみたらどうだ？」

「そうしてみよ〜……おやおや〜？ マドつちりゅーりゅーを名前呼びとは……もしかしてマドつちも!?!」

「……？ 普通に彼に恩があるから親しみを持って言っているだけだが……『も』？ ということは本音、お前は……」

彼に好意があるのだろうか？

「そそそ、そんなこと………ある」

本音が顔を真っ赤にして俯く。

身を挺して庇ったり、昼の弁当を作ってくれるところに惚れたのだろうか。

私は恋などしたことがないが、目の前で起こっていることがそんなんだろうな。

……にしても本音がそう感じるということは、私の感情も本音と同

じなのだろうか。

グレネードキャノンは皆さんご存知であろう温泉企業のおれです。
4Aでも1発1キルしたり発射の反動で空飛べるとかあたおか。

第22話 身バレ

side 流星

簪と入れ替わりでデュノアが同室となって2日目……デュノアと俺はベッドで向き合って座っていた。

違う点があるとすれば、デュノアが男装を解いてる点だろうか。どうしてこうなった……

話は30分前に戻る。

放課後、生徒会室で作業していた。

何故か楯無が俺を副生徒会長に任命し、生徒会長の仕事の補佐をしてほしいというものだ。

しかし、肝心の生徒会長が高確率でいない。

学校関連でよく先生と相談していることはよくわかる。

だが、かんちゃんの様子を見に行ったりするのは終わってからにしてくださいませんかねえ……

今日は珍しく、横で資料の整理を一緒にしている。

「いつもありがとね！ 三人でやってたときよりも、作業効率がとんでもなく速くなったわ！」

「それはやるかいはあります……で、なんで紙媒体での作業なんですかね？」

ふと疑問に思ったことを口にする。

今どきの会社はIT化がすすんで、今書いてる予算折衝のものもパソコンで打つ時代のはずなんだが……

『宇宙世紀では逆に諜報の対策として紙を使うことがあったから、それと同じかもしれんな』

たしかに、紙ならデータと違い管理を徹底すれば情報が漏れる心配はないだろう。

それでも全部はおかしくない？

「予算をちよつと生徒会に振って、パソコン導入したほうが断然いいかと思うが……」

そうこぼすとこちらにその手があったかのと驚愕の表情で見る人。

今まで思いついてなかったんかい！

「そこは盲点だったわね……」

「なんで気づいてなかったんですか……おし、こっちは今週中に
出さないといけないやつ終わりましたよ。そっちはどうですか？」

積み上げられた紙の束をトントンと叩いて整理し、提出と書かれた
BOXに入れる。

「私と虚はあと5分くらいで終わるから、先に帰ってもいいわよ」
楯無と3年生の虚先輩の机の上にある紙も一桁まで減っている。

そしてこの中で一番の年下であるのほほんは……

「おいひ〜」

こちらは作業が終わってスイーツを堪能している。

最近作業にエンジンが入ってきたようで、姉である虚も嬉しいとの
ことだ。

「んじゃ、お先に失礼します」

そう言って生徒会室から出る。

外は日が長くなったのでまだ夕方かのように思われるが、時計を見
ると7時を指していた。今日の作業は今までで一番多かったからな
……

というのも、学年別トーナメントが近づいてきた。

今年は例年と違い、タッグマッチで行うそうでそのエントリーの処
理もする必要があるかなりの時間を使う羽目となった。

「……寮に戻るか」

食堂は7時半までで使えるといえれば使えるが、ゆっくり食べたいか
ら部屋においでる食料を食べるとしよう。

誰とタッグを組もうかと考えつつ、自室に入る。

昨日から同じ部屋になったデユノアがない……

だいたい訓練してるか、一夏と飯食ってるんだろな。

自分のPCを立ち上げて、会社からの通知を確認する。

……デユノア社から動画が？

送られてきた動画を再生する。

『これは……やはり集めた証拠の裏取りとなるが、一体なぜこのようなことを?』

なぜこの学校にデュノアが来たのか、そしてなぜ男装をしていたかという動画とともに一言が付いている。

【娘を頼んだ】と。

あの温厚な社長があんな状況になってるとは、これまた面倒なことになった。

とりあえず今は飯食べて頭の中整理するとしようか。

手を洗うために洗面所に向かうと……

「えっ」

バスタオルを巻いたデュノアが髪を乾かしている場面だった。

サラシを巻いてたのか、いつも見る体とは思えないほど圧倒的に女性とわかる部分が出ている。

「キヤアアアアアアッ!?!」

「ハルユニット!?!」

そして顔に桶がめり込み、後ろに倒れる。

これなんてデジャヴ?

話は現在に戻る。

「……んで、俺もさつき知ったばかり何だが、なんで男装なんかしてたんだ?」

「それは……」

「もうバレたんだ。洗いざらい全部話したほうがスッキリするぞ?」

一応釘を差しておく。

「……わかった」

曰く、彼女は父親であるデュノア社長と愛人の間に出来た子であり、母親が亡くなった2年前にデュノアに引き取られ後にIS適性が高いことが判明し、会社の非公式テストパイロットになったそう。

んでこれはよく耳にしてたんだが、デュノア社はヨーロッパの第3世代機開発作戦『イグニッション・プラン』に参加できる機体を未だ

に製造できずに、EUからの支援金が打ち切られそうということで会社の株も不安定になって営業不振に陥ってるそうだ。

それを打開するために一夏又は俺の専用機のデータを盗むため、一夏もしくは俺と接触しやすいように、わざわざ男装して学園へと来たという。

つまるところ……

今みたいにバレたら、経歴詐称してIS学園に不正入学した罪で強制送還のち牢屋にポイ。

成功したらそれはそれでただのスパイ。どう転んでも犯罪者になる道しかない。

「バレた以上、もうこの学園にいることはできないよね……はは。

まあ、ここに来る前に本妻からも『この泥棒猫め！』って言われたし……私はもう用済みかな」

まるで人生を諦めたかのように目に見えて気力が失われていく。

そのことは間違ってるんだがな。

「……それは建前だったこと、知ってたか？」

さっきの動画が本当なら、彼女が聞いた内容はこのための嘘だということになる。

「……どういうこと？」

「この動画を見てくれ……さっき来たやつだ」

彼女の前にパソコンを持ってきて、先程見ていた動画を再生する。

『この動画は、きつと尾白くんが見ていると思う。今から伝えることはシャルロットのことについてだ』

『彼女は男性として入学したものの、もう君なら、気づいてるかもしれない。……ああ、今はそっちよりも大事なことを伝えないといけないな』

『どのみちデユノア社はもうすぐ潰れる。いまずぐに、シャルロットが尾白くんのデータを寄越しても第3世代機の開発には役立たないからね』

『会社が潰れたら、私と妻は借金取りに追いかけて回される未来が目の前まで来ている。シャルロットと同じ目を合わせたくないから、IS

学園に逃した。そっちにある特例事項とやらで少なくとも3年はシャルロットの身はあんぜんだろう。その後、そっちで保護をしてくれたら非常に嬉しい』

『私の妻は、先天的に子供が産めなくてな……シャルロットが生まれたと聞いたとき、すごく喜んでいたよ。ああやって言ったのはここに未練を残さないためだった。今でもすごく凹んでるよ、ほら』

『わがままだけど……いつか、あの子に伝えてね。あるときあんなこと言っってほんとに悪かったって』

『私も君の親と仲の良かったおじさんのわがままを聞いてくれ。一人の女性を愛することもできない親父で娘のことをちゃんと見ることができなかつたが……私は、シャルロットを愛してる。娘をよろしく頼む、流星くん』

ここで動画は終了し、画面に大きく停止のマークが現れる。

(『……娘思いでいいやつだな』)

「と言うわけだ。面と向かって言えない、不器用でいいお父さんじゃないか」

シャルロットの顔を見ると、目に涙をためて……

「……ばばあああー」

彼女が両手を顔で覆い泣き出し、指の隙間から涙がこぼれていく。今まで父親からも嫌われていたと思っていたのに、急にあんなこと言われたらそうなるだろうな。

「おっと……」

子供のように泣きじやくる彼女がこちらに顔を埋めて抱きついてくる。

服が濡れるが……これが男の勲章というものだろう。

「……よかつたな」

嗚咽する背中をトントンと優しく赤ちゃんをあやすようにたたく。泣き止むまで20分くらい経っただろうか。

泣き腫らした顔は先程とは違い、かなり生き生きとしたものとなった。

「ごめんなさい、服が汚れちゃった……」

「何着か替えあるから大丈夫だよ。気は落ち着いたか？」
服に関しては何にいいぞ。なんなら背中が焼けた服もあるしな！

「うん……でも父さんたちが……」

あんな風に愛してるなんて言われたら、かえって心配になるだろうな。

「それについては……明日の放課後、すぐにここに戻ってこれるか？」

「別にいいけど……」

「一つ、考えがある」

すこし、不器用なアルベートを手助けしてやるか。

第23話 救済

side 流星

放課後、ラウラがセシリアと鈴を特訓すると言って引きずっていき、一夏と箒がそれについていった。

それを横目に俺とデュノアは、早速寮に戻って国際電話の準備を進めている。横には、徹夜で作成した情報が詰まったハロー号機がいる。シヤアが渡したやつだな。

「アポは取れたが、繋がるか……?」

今起動したPCは、ツイマッド本社のサーバを通じて防諜されないようにしている。されないとはい思うが念には念をとっていうやつだ。

「……最後に聞く。お前自身はどうしたい?」

「……生きたいっ!」

「解った。その願い、確かに聞き入れたぞ」

これより、始めるのはデュノア社の救済劇だ。

画面に昨日見た男性が映る。

「フランスではおはようございますかな? アルバートさん、そちらの姿が見えた。そっちはどうだ?」

『……こちらも君とシャルロットの姿が見えるよ。その様子だと昨日の動画は、見てくれたようだな?』

「見ましたけど……あんなこと言うなら面と向かって、言ったら良かったじゃないですか……」

『あの時、ああでもしてないと未練が残ってしまうと思ってね……いや、選択を間違えたようだ』

画面の向こうで照れくさそうな仕草をする。

横でもシャルロットがモジモジとしている。(『やはり親子だから仕草も似ているな』)

「早速ですが、今からとある情報をそっちのサーバに送ります。少なくとも14TBは空いてほしいが……」

『少し待ってくれ。うちのサーバの空き容量はどれくらいだ?』

「……そうか、わかった。こちらの空き容量は、21TBだからい

けるぞ』

「分かりました。今から送るので受け入れ体制を整えてください」
徹夜して完成させたデータが入ったハコをケーブルでPCに接続し、デユノア社のサーバーに情報を転送する。

「……今転送中です。情報量がかなりあつて時間があるのでそれまで少し話しませんか?」

『構わないよ……しかしこんな事をしてもいいのかい?』

「大丈夫ですよ。ただの一個人の技術提供ですから。そちらが極秘裏に開発したことにすればいい」

仮に俺が提供したことが世間に知られても、一個人としてひらめいたことを伝えたら、デユノア社が実現できたといえればいいからな。そして、俺が別に構わないといえれば誰も口出しできない。(『結構腹黒くないか?』) うっせい。

「提供……? なにかを渡しているの?」

「まあ……そんなところだな」

『開発……なにかこんな会社を救ってくれるものでもくれたのかい?』

『ご謙遜を……あなたの会社は今まで軍需産業としても世界指折りの会社じゃないですか』

(『……ツイマッド社はどうなんだ?』)

一応向こうのほうの歴史は長いからな。名前の歴史はともかく、うち元々工作機械のメーカーだったし。

「……おし、そつちにデータを送りました。見てください」

『確認しよう……これ、は?!』

さ、驚いてくれたかい?

side シャルロット

『確認しよう……これ、は?!』

お父さんがカメラの下……向こうの画面を凝視して固まる。

何を見たというのか。

「……何を送ったの?」

「うち……というより俺が開発した第3世代機『ストライクガンダム』と第3世代に相当する装備、ストライカーパックスシステムの設計図だ」

えっ……一人で考えたの!?

『あのアニメのような……概要を聞いても?』

「確かに、こつちで作ってるアニメまんまの形だけ……デノア社の現行のISは大容量の拡張領域が売りですよね」

『確かにそうだが……』

「その発展型ですよ。換装するのは武装だけじゃなく、推進機もまとめて組み替えるんです。状況に適応したものにね」

でも、それだけでほんとに第3世代機と言えるのだろうか。

「……いま、こう思ってるでしょう。それだけで第3世代機なのか、と」

あれっ心読まれちゃった!? 画面の向こうでもお父さんが驚いた表情をしている。

「そこで、このストライクガンダムに載っている特殊な装甲と新型兵器の出番だ」

『……まさか』

「そう、こいつはPS装甲とビームライフルを持っている」

ビームつてあの粒子を飛ばすあれ!? そして……ぴーえす装甲?

「尾白くん、PS装甲って?」

「正式名称は、フェイズシフト装甲。電気を流すと実弾兵器による装甲の破損が殆どない代物だ」

「それってほとんどズルじゃないの!？」

「弱点もちゃんとあるからな。レギュにも引つかからないはずだ」

『あれはアニメ上の空想のものではなかったとは……しかし、ほんとに作れるのか?』

「必要な材料と製造方法、工作機械の切削手順も載せてるから生産ラインを整えればすぐに作る事ができますよ」

『わかった。この話が終わったらすぐにこのことをEUに叩きつける

としよう』

これでE.U.から補助金が貰える。即ち、お父さんの会社は潰れることがなくなつた。

「彼女の帰る場所を無くしたくなかつたのでね。今回は貸し一つつてことで」

『どうやら君にはとんでもない借りを作ってしまったようだな……本当にありがとう』

「確かイグニッション・プランの提出期限はあと2週間だったはずだから、ちゃんと補助金貰ってくださいね」

『わかつた。今すぐ手を付け始めるとしよう。会見の準備をしてくれ。』

国際電話が終了し、パソコンの電源が落とされる。

突然立ち上がる尾白くん。

「さて……もう一仕事だな」

次は何をしようというのか。

学園長室……つまり学校で一番偉い人が使う部屋で、尾白くんが横に座り、前には織斑先生と、用務員のおじさん？ が座っている。その横では生徒会長も立っている。

「轡木学園長、デユノア社の件はご存知ですよね」

この人、学園長だったの!?

「知ってますよ。なんでも、デユノアさんを逃がすためと聞いてます」

学校側はこのことをもう知っていたようだ。

「その様子だと、何かあつたようだね流星くん」

「ええ、彼女を正式に女子生徒として再編入してもらいたくて」

「しかし、そのようなことをすれば彼女に危険が……」

織斑先生がそのことに難をしめす。まだあの事を知らないのだから。

「テレビをつけてもらえませんか？」

「構わないわよ」

生徒会長が棚にあるリモコンを取ってスイッチを入れる。

『——速報です。つい先程、デユノア社が会見を開きISの第3世代機の開発に成功したと発表しました。中継です』

画面が切り替わり、数多くのカメラを向けられたお父さんとレポーターが映し出される。

『えー、こちらデユノア社の会見室です。20分前から始まったこの会見でアルベート・デユノア社長が、第3世代機の開発の目処が立ちイグニツション・プランに参加できるとの声明を発表しました。これまでデユノア社は——』

画面に釘付けになっていいる大人二人。横では尾白くんが計画通りといった顔をしている。

「これはつまり……」

「ええ、デユノア社は潰れない。つまり、彼女はもう男装しなくてもいいってことですよ」

「尾白、なにかしたな？」

「……それは想像におまかせします。ただやつちやいけないことはやってませんよ？」

とても含みのある回答をする、尾白くん。

「まったく……分かった。準備を進めておく。ただ、もうすぐトーナメントがあるからその後になるぞ。それまではデユノア、我慢してもらえないか？」

「わかりました。こちらこそ、ありがとうございます」

あと数日で女子生徒として普通に学校に通える……！

「尾白くんは昔からよくこんなこと解決してますな。ほんとに人に優しいですね」

「またまた……眼の前に助けられる人がいるから手を差し伸べてるだけですよ」

「やはり行動可能範囲が広いわね」

「そうですかね……？」

ほんとにそうだと思う。

学校側とも話がついて、また寮に戻ってきた。時計はまだ6時を過

ぎた場所を指している。

尾白くんは珍しくもう風呂に入って寝間着を着てレトルトカレーを一緒に食べている。

「あの第3世代機ってほんとに尾白くんが考えたの？」

「……………ん？ そうだぞ？ 元ネタはあったといえはあったが……………昨日と今日で設計図を書いたのは確かだ。耐久値とかもうちのAIがシミュレートしてオツケー出てる」

普通何年もかかるはずなんだけどね……………

「いやなに、昔束と一緒にIS作ってたからこういうのは元から得意なんだよ」

「篠ノ之博士とISを!？」

篠ノ之博士の単語がぽつと出ることもそうだが、昔からISを作ってたの!？」

「……………ああ、これ知ってるやつあまりいなかったんだっけ。別に隠してる訳じゃないんだがなあ……………」

そう言つて残りのカレーをかきこんでいく。

彼には謎が多すぎる。

ISを作れるという篠ノ之博士に並ぶ頭脳。

入学試験では体調不全にもかかわらず織斑先生と互角の戦いをできる。

そして空白の4年間……………4年のうち、2年はソードアートオンラインというVRMMOから多くの人を助け出したということが判明したが、未だに残りの2年の情報が一切ない。

4年前といえはあのことが思い浮かぶが、関連性もまるでわからない。

「デュノアはゆっくり食べといてくれよ」

「あつ……………わかった」

気がつくくと、彼はもう歯を磨き終えていた。

ボクもカレーをいそいそと食べる。

「そういや、もうすぐ学年別トーナメントあるが……………一緒に出るか？」

「……………いいの？ ロニイちゃんや簪さんとは……………」

「まだデュノアが女だつてこと知ってるやつ少ないだろ？ 転入する前にバレたら色々めんどくさいしな」

「……わかった、ありがとう」

「すまん、徹夜で頭回しすぎたせいで眠い……もう寝……」

言葉が続かずにベッドに倒れ込み、寝息を立て始める。徹夜で疲れしているのだろう。

というか、そこ私のベッド……

どうしようかな……横、いいかな？

私もお風呂に入ったあと、同じベッドで寝ることにした。

彼の内側に収まるように丸くなって横になる。

彼の体温が温かい……って

「わっ!？」

彼が腕を回し、後ろから抱きつかれる体勢となる。顔が、体中が暑くなるのがわかる。

そういえば、こんなことしてもらったのお母さんぐらいだったかな

……

それでもまぶたが重くなってきた、今日を終えた。

朝、起きた瞬間に目にしたものは、流星くんがジャンピング土下座する姿だった。

第24話 学年別トーナメント、開始

side 一夏

学年別トーナメントの当日、観客席と離れた場所で学生ではない人が多く座っているのが見える。

「なあ、どうしてこんなにも来賓が多いんだラウラ？」

前でさっきまで作戦を一緒に立てていたパートナーに疑問を投げかける。

「む？ それはだな、三年生のスカウトをしにきた企業エージェントや国の者だ。この場でいいところを見せることができれば、声がかけられるだろうな」

「じゃあ、なんで俺たちも試合をすることになってるんだ？」

「私達は学習や実習の定着を確認するため……とはなっているが、あの者たちに目をつけられる可能性があるだろうな。ましてや織斑と尾白に対しては、試合中は全員が目を光らせているだろう」

「げっ……恥ずかしいところは見せれないな……」

そのもうひとりの男性操縦者はというと、いま来賓に生徒会長と挨拶しまわっているのが見える。

最近、副生徒会長になったそうであのように生徒会長の補佐をしているんだとか……いや、流星は社長もしてるからそっちもあるのか。……おい織斑、対戦相手がわかったぞ。早速、目玉カードになったな」

そう言われて上を向くラウラが見ている電光掲示板を見ると……

【第1回戦 織斑・ボーデヴィツヒペア VS 尾白・デュノアペア】

「いきなり俺たちかよ！」

「確か一回戦はあと20分後だったはずだ、ピットに向かうぞ織斑」

その言葉に返事をして立ち上がる「一夏！」ん？

「勝てるか勝てないかじゃなくて、全力で当たって碎けなさいよ！」

「今までの練習の成果、流星に見せてみる！」

箒と鈴がこちらに声援を送ってくる。彼女たちはラウラにじゃんけんで負けて、その負けた同士で今トーナメントのペアを組んでい

る。

「……ああ、全力を出して来る!」

そう言っただけその場をあとにする。

ピットに向かう途中でラウラがふとこぼす。

「……織斑は、篠ノ之や鳳といった仲間に恵まれているな」

友達がほしいのか……?」

「ラウラも友達になりたいってみんなに言えばなってくれる人いると思うけどな」

「そうか……これが終わったら早速それを始めてみようか」

「作戦だが……さっきも行った通り、まとまって動くことを意識してくれ。そして織斑は、尾白からの攻撃の防御に徹して貰いたい」

ピット内に入った俺達は、椅子に座って最後の確認をしている。ラウラは先程から相手の情報をまとめた資料を見つめている。

「わかった。ラウラは何をするんだ?」

「私はデュノアを叩く。第2世代機など恐れる必要がない」

どうやらデュノア相手には勝てる見込みがあるみたいだ。セシリアと鈴の模擬戦闘の際に見たAIC、慣性停止結界は銃弾を止めることもできるのでエネルギー系の武器を使つてないデュノアなら……それでも、

「無理はしないでくれよ。呼んだらすぐに援護に入る」

「どの口が言う……方が一は無いと思うが、頼んだぞ」

入学した時よりもまた少し柔らかくなったかな……? 2年前のあれを経験してから自分なりに努力してきた成果が出ているのか?

『各選手はISを装着し、発進許可をとってください』

アナウンスが響きラウラが手に持っていた資料を前の机に置く。

カタパルトに装着した脚部を乗せ機体のコンディションを確認

……オールグリーンだな。

「ラウラ、準備は?」

「私はいつでも行けるぞ」

横ではラウラの乗っている黒い機体、シュヴァルツエア・レーゲンだっけか？ その機体のスラスト音が増加していく。

「司令部、こちら織斑です。発進準備ができました。許可をください」
『こちら司令部、発進を許可します。尾白くんはとても強いですけど、頑張ってくださいね！』

耳に1年1組の副担任の声が入ってくる。

「わかりました、山田先生。」

織斑一夏、白式と

「ラウラボーデヴィツヒ、シュヴァルツエア・レーゲン」

「出撃行きますっ！」

カタパルトを2機のISが滑走し、空に上がった。

side ラウラ

『それでは学年別トーナメント第一回戦……開始！』

合図とともに動き出すアーミーグリーンとオレンジの機体、尾白とデユノアが二手に分かれて攻撃を仕掛けてくる。

「織斑、頼んだぞ！」

「了解！」

作戦通り、織斑は尾白に肉薄し、実体剣同士で打ち合いを始める。零落白夜は使わないのか……あれは燃費が悪いそうなのでここぞという時に使うのだろう。

目の前にいるアサルトライフルを構えたデユノアと相対する。

「こうしてアンテイクの第2世代機と戦うことになるとはな」

「まともに量産できていない第3世代機よりはましだと思っただけだね」
「言ってくれるじゃないか……だが、結局は搭乗者の腕で勝敗は決まる。そして、機体はその勝ちを大きく伸ばす」

「そうだね。つべこべ言わず、僕たちも始めない？」

む、話が長引いてしまったか……

「そうするとしようか！」

ワイヤーブレードを射出し、自分が取られたくないようなポジションを取ろうとすると妨害する動きを取るようにする。

デュノアがショットガン、サブマシンガンと次々と持ち替えてこちらに射撃してくるが、それを的確にA I Cで弾を停止させる。

そうこうしているうちにしびれを切らした、又は残弾が少なくなつたのか短剣に持ち替えてこちらに近距離戦を挑んでくる。

こちらにうかうかと入ってくるとは引つ掛かったな！

デュノアが気づいた顔を表したときはもう遅く、右手から放たれるA I Cの餌食となつた。

「これがA I Cの力……！　ほんとに動けないね！」

「だろう？　後は地面でゆっくりとこの後の試合を見るといい」

レールカノンをチャージする。これでまずは一人……

「っ!？」

体に走る衝撃とともにレールカノンが砲撃を受けて砲身が潰れる。

尾白がやったのか!？」

「すまないラウラ、流星にS Eを全部削られた！」

織斑が自身が撃破されたと連絡を入れる。デュノアは私がよろめいた隙にA I Cを脱出して距離をとられた。

あと少しだったのにつ！

「いけっ！」

6基のワイヤーブレードを射出してデュノアを追い、追撃をいれる。

尾白と合流される前にできるか……!？」

「だあっ!？」　S Eが!？」

これによつてデュノアを撃破できた。だが、尾白からのワイヤーブレードに対する狙撃を警戒していつもより多くの軌道をとつていいはずなのだが、それでも3基壊された。

尾白がガトリング砲を右手に持ち牽制……狙いが正確すぎる！

本来あのレンジでガトリングは牽制に使うのが基本だというのに逃げるとそれと一緒に弾幕も正確についてくる。

「こっとなつたら……!？」

プラズマブレードを展開し、S Eが大きく削れる場所を守りながら接近する。

すると、尾白の背部から線のついた平べったい円柱状の物体が4つ射出された。丸い形なので私の持っているようなブレード型のものではない。

一体何の機能が……っ!?

「何だ急に!?!」

四方八方からビームがこちらを襲ってくる。尾白本体もエネルギー兵器を用いて射撃している。まさか、全方位攻撃か!?

とつさに回避行動を取ろうと機体を右にロールし回避行動を取るが、全方向からの攻撃を避けきることはできずに……

『ボーデヴィツヒのSEエンプティ! 試合終了!』

機体は私が乗ったまま、地面に仰向けになった。

やはり織斑教官の認める彼は強かった。彼には結局一度もダメージを与えることができていない。

一体どのようにしてあれ程の実力を手にしたのか。

彼のような力が欲しい……『ガガッ……ザッ』なんだ?

仰向けに倒れていると、ノイズが機体から聞こえる。

『body damage …… D.

passenger's intention …… ok.

Valkyrie Trace System …… boot』

突如機体から無機質な音声が聞こえたかと思うと……

「な、何だこれは!?!」

装甲の隙間からタールのような黒いドロドロとした液体が出てくる。

こんな機能はないはずだ……

「グアアアアアッ!?!」

激痛とともに意識が何者かに引っ張られるような感覚に陥り、目の前がぼんやりしてくる。

「誰か……」

意識はそこでこと切れた。

第25話 心象空間

side 一夏

「やっぱり流星は強いな……」

SEがゼロになって撃破された俺は、上を見上げてラウラに四方八方からビームを浴びせている流星を眺めている。

剣同士での打ち合いは最初は意表をついて拮抗していたものの、流星の攻撃速度についていくことができなくなってきて最終的に零落白夜で逆転しようとしたけど、剣を振る前に胴体を横一文字に切られて絶対防御が発動した。

「流星くんってやっぱり何か特訓でもしてるのかな？」

さつきラウラに撃破されたシャルルがこちらに寄ってきてなぜ彼があんな強さを持っているかと聞いてくる。

「あいつ自身は簡単なトレーニングだけって言うてるけど、絶対そんなことないよな……」

「絶対それだけじゃないよね……」

『ボーデヴィツヒのSEエンプティ！ 試合終了！』

ラウラの乗ったシュヴァルツエア・レーゲンが、地上に仰向けになって倒れた。

「さ、あとはラウラを起こして観戦「グアアアアアアツ！」なんだ!」
突如、ラウラが悲鳴をあげたかと思うと、彼女の乗っているISから黒い液体が出てきて彼女を機体ごと覆った。

そしてその液体が形作った者は……

「千冬姉の、暮桜?」

千冬姉の使っていたIS『暮桜』と右手に持つ『雪片』だった。

そしてその形はゆっくりと起き上がっていく。

「あれは……VTS?」

同じく変化していく様を見ていたシャルルがあれを知っているよ
うな言い方をする。

「シャルル、何かあれを知ってるのか?」

「うん、正式名称は『ヴァルキリー・トレース・システム』と言って、

第一回モンドグロツソの部門別優勝者の動きをトレースする機能なんだけど、搭乗者のことを考えない動きをするから研究や使用が禁止されてるはずなのに……」

「一夏ー・デユノアー！ 今すぐピットに戻れ！」

上から流星の乗った『アレックス』が降下してきて俺たちとラウラの間に立つ。

周りを見ると来賓や生徒が続々と出口に向かってるのが見えた。そして、まだラウラを飲み込んだあれはその場で佇んでいる。いつ動き出すかもわからない。

「流星はどうするの？」

「俺はここで教員部隊が来るまで時間稼ぎをする。来てからも余裕があったらそのままあれを鎮めるとしよう」

「……無茶しないでね」

そうやってシャルルはアリーナの側面にある扉に向かった。

だが、俺はここから動かない。なぜなら、

「……助きたいのか？」

「当たり前だ！ 仲間を、失いたくない！」

「はあ……まあいい。これをその待機形態のISに繋げろ。SEを半分分けるからそれで一緒に助けるぞ」

そう言つて流星はISの胴体部分にケーブルに繋いで手につけているガントレットと接続する。

すると、みるみるうちにSEが回復していき、白式が装着可能となる。

「あれは本物より3周りくらいでかい。その分、動きが鈍いだろうか、同時に中に突入して引きずり出すぞ」

「了解」

ISを纏った俺は流星と二手に分かれて暮桜もどきに突入した。

『ラウラー！』

よくわからない空間の先にはラウラがうずくまっている。

流星の姿は見当たらない。外でなにかしているのだろうか……

『……織斑か。ここまで来て、私を笑いに来たのか?』

『そんなわけない! 助けに来たんだ! ここから脱出できたらきつと君を助けれる!』

ラウラに手を伸ばして手を取るように言う。

『私は人の手によつて都合よく作られた者だつ! こんな私など生きる訳がない!』

そうか……ラウラも、同じなんだな。

『それは俺も一緒だ。生きる訳なんて無くたつていい! もし見つけたいなら、一緒にこれから探そうじゃないか……?』

『……織斑も、なのか。なら頼める、か?』

ラウラが涙ぐみながら伸ばしていた手を取りこちらにそのまま抱きつく。

そのままあたりを見回すと……

あれは……出口か?

ラウラの手を引いてその光の先に向かう。そこで見たものは……

一人の年老いた男性がよろよろと長く続くトンネルのような道を歩んでいる。その表面は異常な程に発熱している。

『……何が起こっているんだ?』

言葉は響くが、相手に聞こえている様子はない。横にいるラウラが自分の考えを示す。

『人体の発熱……マイクロウェーブの類だろう。しかし、これほどの威力なら普通の者なら即死するはずだが……』

その彼が歩いていると、来ているスーツのようなものが時々爆ぜて、遂に地面に倒れた。だが、それでも彼は進むことを止めない。

すると俺達の横に別の風景が映し出される。

そこではアメリカの戦艦に群がる球体と巨大な二足のもの。そして重装備の部隊と次々に被弾しながらも抵抗する男女の姿や両手が潰れていて剣を口に加えて同じ部隊と戦っている体の一部が機械の男。

何が起こっているかわからないが、どれも絶望的な状況でそれを解

決するために何かに向かって歩いていくということだけがわかる。

『艦首の63、ミーズリー号……あれはずっとパールハーバーにいるはずだが、なぜ戦闘をしているんだ……？　そしてあの軍隊と巨大なロボットのようなのは……』

ついにその空間を抜け出した老人はロボットが何か操作しているのを守りながら、大量にいる手を持った球体との戦闘を始める。だが、先程の影響からかよろけて取り付かれています。

万事休すかと思われたが、ロボットが間に合ったようで、取り付いていた球体は動きを止めて、横に出ている部隊や二足の化け物も倒れた。

その男は外に出て倒れるが、何者かに首に何か打たれてまた起き上がる。

それをしたものは……

『なっ、瓜二つの男だ?!』

そしてその漢たちは殴り合いを始めた……

そこで視界が暗転した。

『これは……流星の会社がつっているアニメ?』

『確かガンダムという名だったようだな』

次に見ている場面は、巨大な塊が地球に落ちて甚大な被害が出ている場面だ。

『ラウラは見たことあるのか?』

『副官に進められて一通り見ている……にしても、それらよりかはいささかりアル過ぎないか?』

そう言われてよく見ると、アニメとは違い宙に漂う破片や液体があらゆるこちらにありあたかも現実かのようににも思えてくる。

『なあラウラ、周りに緑の機械が多いんだけど、その中で白い機体が緑の持っているバズーカみたいなもの取り上げてそれを撃ってないか?』

よく見ると、落ちる塊に向けて筒を向けている緑の機体に対して次々と接近し、代わりに発射している白い機体が見られる。

『なにか肩代わりを……あの爆発は、核だと!?!』

確かに先程の爆発は異常に大きかった。あの描写は見たことがあるが、白い機体が全て奪っているものはなかったはずだ。

次々に変わっていく場面。それにはどこにも真っ白な機体が写っていた。

地球に落下していく隕石、周りの機械は虹色の光に弾かれたなか、白黒で赤い球体を持った機械の横にも、機械は変わっているが、同じ真っ白な機械が横にいる。

なにか必死に白黒の機械の中にいる者に話しているようだが、虹色の光が突然溢れ出し、地球を覆ってその隕石がどこかに導かれ始めると、その機械も先程の機械と同じように弾かれた。

その白い機械の中で男は泣いていた。

『逆襲のシャアの場面だが……やはりここにも白い機械がいて、内容が違う。どういうことだ……』

また場面が変わり、目の前に現れた機械は……

『あれは白獅子か!?! どうしてここに……』

確かに白獅子と同じ形だが、サイズが違う。ISの10倍以上はあるだろう。

白獅子のような機械は、簪が乗っているISと非常に似ている緑色の機械を、黒とオレンジのこれまた白獅子と似た機械からの攻撃から守ったり、巨大な赤い機械を3機の白獅子もどきで戦っている。

そして、「機動戦士ガンダムUC」だったか……その名場面でもある巨大なレーザーを2機とシールドで防いで白と緑の機体がどこかに行きかけてしまうところを食い止めた……と突然、

「コロニーレーザー再チャージ! 確実にラプラスの箱を消すつもりだ!」

機械を収容できる船から通信が入る。

またアニメとは違う展開が訪れた。

だが、3機は間に合いそうにない……っ!?!

『白獅子が!?!』

『何だあの速度は……』

一機だけ間に合った白獅子が、レーザーを一身に受け止める。そして白獅子は中にいる男と一体化し一つの生物となった。その後もいろいろな景色が映った。

巨大な金属生命体に特攻するボロボロの2機。

どちらも同じ機械だが、片方は黒でもう片方は白の機体。

散っていった二人は後方にいる青年に思いを託した。

巨大な兵器を地球に向けて発射されようとしていた所、またしても白い機体……今回はその作品内では一般兵が使っている機械で目のハイライトがない彼はその兵器の砲門に突っ込み、それを破壊した。砂と少しの構造物しか残っていない荒廃した世界、そこでは六脚を持つて上に大量の機械を乗せた機械を身体を改造した男が駆る機械が高速で移動しながら破壊していた。

そして最後に見たものは、流星にそっくりな高校生が誰かに押されて列車に轢かれるものだった。

それが終わると俺とラウラがいたのはどこにでもあるような家、その家のソファーに座って後ろを向いている金髪の男性がいる……顔は解らない。

『……どうやら彼の過去を見てきたようだな』

『彼って……流星のことか？』

その間に男性は是とする。そんなことが……

『どうして彼の過去を見ることができたのだ？』

『君達は強化人間に近い存在だ。N Tニュータイプに近い……言い方が悪くて申し訳ないが紛い物だ。その共鳴反応で見ることができたようだな』

訳がわからない。もしあれが本当なら流星は……

『ちょうど良かった。押し付けで申し訳ないのだが、彼の心の拠り所になつてもらいたい。流星は全然喋らないから……』

もしそうなら、全力で支えよう。家族なのだから。

『……分かりました。できる限り、サポートしてみせます。コア人格さん』

『ほう……どうやらNTとしての素質があるようだな』

……彼を、頼んだ』

意識が引つ張られる感覚に陥り、この空間から俺とラウラは去った。

「お——！ だい——!? い——か！」

光が差し込んで覚醒し、目を薄つすらと開けるとこちらを流星が覗いている。

「ん……大丈夫だ……ラウラは？」

「お前さんがちゃんと助け出したよ。横を見てみな」

そう言われて横を見ると、すやすやと寝ている。よかった……

「まったたく……VTSに突っ込んで真っ暗でなんにもわからなくて、外に出たら突然あの液体が崩れて一夏とラウラが倒れた状態で、出てきたもんだからひやひやしたよ」

奥からは教員が続々とこちらにきている。そんなに時間経っていなかったのか……

「なあ、流星？」

「……なんだ？」

「あまり抱え込まないほうがいいぞ？ 流星の昔のこと、流星のコア人格に教えてもらったんだ。だから、ちゃんと打ち明けてくれよ！」

過去を聞いたという話を聞いた流星は、

「あのこと教えたのかよシヤア……」

Orzっていた。

「まあ……頼りにしてるぞ？」

「ああ！」

この瞬間、俺たちの仲はとても近づいたと思う。

第26話 決勝戦

side 流星

一夏とラウラが俺の過去を見たその夜、IS学園ではISの点検……訓練機と専用機のOS点検が行われていた。何でもまだVTSのようなヤベーイシステムの入ってるISが無いわけではないので確認作業をしているのだ。

「尾白くん、マドカさんの機体にある『H A D E S』とは何ですか？もしかして……」

山田先生がペイルライダーの点検をしながら、その機体の機能の1つを聞いてくる。

「それは第4世代実証概念機の機構で、搭乗者の思考補助、回避や攻撃など、いろいろなサポートをしてくれるものです。VTSみたいな無茶な動きはしませんよ……と言ってもこの機体も簪の機体と同じく3・5世代止まりですが」

（『EXAMのようなものでもなければ本来のような搭乗者の処置はいらないのだな』）

そんなひどいもんじゃない。これはあくまでも搭乗者補助のものだからな。

あれやるオーガスタとかいう所の頭の構造を知りたいくらいだよ。
「さ、3・5世代!? ということは、尾白くんの会社はもう第4世代機を……」

「いや、東博士と俺の共同開発ですよ。その上、東博士がもう第4世代機を作っている途中だそうで」

俺と開発部が会議室でうんうん考えている時に乱入してきた束が第4世代の内容決定したぜい！なんて言ったときのアイツらの顔といったら……すぐに案が決まったよ。（『あの時はずっと大火力と補助システムで二極化してたな』）

ちなみに俺はハイブリッド派だった。

「今、さっさととんでもないこと話したような……」

「山田君、流星の話す内容をいちいち真に受け止めていたら頭が持た

ないぞ」

「そうだよ！ りゅーくんの言ってることはたまたま私でもわからない時があるからね！」

打鉄と白式をそれぞれ点検している千冬と東が気にするなという。ちなみに東はツイマッド社から出張してもらっている。そのおかげか、作業は佳境になっていた。

「……ひどくない？」

「私よりも速いスピードでドイツの問題起こしたISのOSを修復しながら言われてもなあ……」

確かにペースは速いかもしれない。現在IS学園には訓練機70機、専用機10機が存在していて、本来なら教員や3年の整備科が点検やオーバーホールをするとなると、1機あたり3時間はかかる。その上各国の技術員による機密部の修理もあるから更に時間がかかる。それが大体20人だから今日中に終わる予定ではなかったのだが、過剰と言っていいほどの助っ人が2人。

それも作りの親である二人も手伝っているので今、各々が点検している機体で最後となっている。機密部分についても二人の技術を見たいということでも二つ返事でやってくれと言ってきた。

「それは経験値といいますか……」

「何百年も生きてきた、か？」

「フアツ！」

千冬が他の人から聞こえない程度の声でド正論を言ってくる。なあんでもう知ってるんですかねえ……

「……一夏から聞いたんですか？」

「そうだ……まさか流星が、私と一夏以上の人生を歩んでいるとはな……つらいときは頼りにしてくれ。私はずっと流星に寄り添っているからな」

「……ありがとう」

（『なんか話があっちの意味も含んでいたような……』）

もう分かっているからいいんだよ。素直に受け止めてるからいいの。……これ知ってたらナナイとかクエスの反応がもうちよい変わって

たかもな。

〔……そうか。(・ω・)〕俺の脳内でそんな顔できるんだ……
「なあに話してるのかなちーちゃん？　もしかして？」

「お、お前は作業してろ！」

「ピギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

この話を聞こうとした兎がいつもより3倍ほど力のこもったアイアंकローを食らっていた。

side 楯無

次の日、安全が確認できたので、トーナメントが再開した。尾白くと篠ノ之博士が頑張ってISの点検とラウラの機体の修理をしてくれたからね……

今回出場したのは各学年16人の計48人で試合が一日目は一回しかできなかったので残り44試合を今日中に終わらせないといけない。

そのため第1, 2回戦は制限時間が10分となった。まあ、大抵はそれくらいで終わるから別にいいんだけど。

それならアリーナを3つ使うとして準備の時間も含めて考えると、授業時間内に終わらせれることが十分にできる。

「とういうわけでこのトーナメントを締めくくる一年生決勝戦、司会は生徒会長の更識楯無と！」

「どういうわけですか……新聞部の薫薫子がお送りします！」

生徒が観客席で沸く中、来賓も拍手して最後の試合の始まりを待っている。

「今から戦う战士们を紹介するわ！」

「まず紹介するのは、世界でも数えるほどしかない二次移行したISを駆り高機動で舞い、高火力の武器で刺すそれはまさに蜂のよう！」

最近料理に挑戦している少女、ヴェセラ・ロニー！」

薫子が紹介すると、ロニーちゃんが乗るISが肩から出ている黒い紐状のT.L.Sをたなびかせながら颯爽とピットから舞い上がってくる。

「ロニイちゃんとタッグを組むのは、私にとっては……失礼。私の妹であり、白い4枚羽を持ち、遠距離はミサイルとビームが、近距離ではかの伝説のISが持っていた武器と巨大なチェンソーで相手を沈める、まさに歩く武器庫、更識簪！」

ロニイちゃんが出てきたカタパルトから次は白い機体が上昇し、バレルロールをしてロニイの横に静止する。

「立ち向かうのは！ 第2世代機ながら、バランスの取れた武器構成で先程第3世代機に勝利した、最近お父さんと仲直りして嬉しい、シャルル・デユノア！」

「そ、それは今関係ないから！」と言いながら顔を真っ赤にしてオレンジのISがカタパルトより飛翔する。

交互に紹介しているので最後は私ね！

「そして、今飛翔したのは……ってちよつと!? 何でそんな巨大なユニットが拡張領域にあるの!?!」

暗めの緑色をした機体が飛んでる最中に巨大なウェポンコンテナとスラスターを装備、つまりイーデンドロビウムとなる。

「……とまあ、謎だらけの世代分類不明機体に乗っているのは！ 負け知らずで超ハイスペックな世界で数例の男性操縦者、尾白流星！」
彼が瞬間加速をしながらアリーナを一周していると一段と観客が沸く。

そして、機体はデユノアの横に移動する。

「これで、戦士が揃いました！ それでは、学年別トーナメント一年生部門決勝戦……」

「スタートっ!!」

4機は一斉に動き出した。

「最初はどちらが仕掛けるのでしょうか……おっと!? 簪選手いきなりあの巨大なチェンソーとナツクルを装備して流星選手にミサイルを撃ちながら迫っていく!」

あんな殺人チェンソーが追いかけてくるって怖すぎでしょ!

「それを援護しようとするロニイちゃん！ だけどそれをシャルルくんが妨害し、それを許さない!」

かんちゃん引き撃ちしている流星に接近し続けており、それを肩のT L Sで逃げ場を減らそうとしていたロニーちゃんをデユノアちゃんがショットガンで邪魔をさせないようにしている。

「さあ避けては避ける尾白選手に撃っては撃ちまくるかんちゃ……簪選手！　ここは……尾白選手の回避が上手いか!?　あの量のミサイルに対して命中している数は4分の1ほどです！」

「あの巨体で戦闘機並の速度を出しているというのになぜ動きができませんでしょうか!?　ますますあの機体の謎が深まる！」

かんちゃんの撃ったミサイルを、まるで水中にいる魚が自由に泳ぎ回るように空中を舞って流星はかなりの数を回避している……って

「急降下と急上昇を使って地面にミサイルを当てた!?　一歩間違えれば大ダメージ必須のことを平然とやってのけている！」

生徒や教員、来賓の誰もがこの試合に釘付けとなっている。

「そして彼は被弾し、S Eが減って駆動系統にダメージを負っても被害が最小限になるような飛行をしている！　一体どうなっているのか!?　私にはわかりません！」

本当にどうやって被害を抑えているの？　まるで戦闘機が空戦をしているような美しささえある。

でもあんな機動力ズルよ！」

「会長、声に出ています……」

「あっ……し、失礼。この場にいる誰もが手数が多さに自信がありません！　ここからどうなっていくのか、ってあー！」

「簪選手が地面に着陸しました！　S Eはゼロになってないということとは、エネルギー切れでしょうか!?」

スラスターの勢いが段々と落ちて、ついに地面に着陸するかんちゃん。それでもミサイルやチェンソーから換装したビッグウイグキャノンで流星を落とさんと対空戦闘をとる。そして……

「あの弾幕にやられたか!?　流星選手の左スラスターから火が出ている！　これは痛いダメージを貰いました！」

「おっと、尾白選手がイーデンドロビウムをパージする……おや？　ウエポンコンテナからなにか出てきました！」

白い箱の上部が観音開きに開くと、中から2つのグレーの人形の何かが現れる。

「あれは何でしょうか？ って流星選手の機体が光り出した!」
胸部や脛、肩の一部が赤く光りだす。

「2つの機械が動き始めました！ ツイマッド社の新しい武装でしようか!」

「その可能性が高いわね……ってばらばらになって撃ち始めた!」
その2つは10個に分裂して計20個の砲台になってかんちゃんを襲う。

「これには手も足も出ないか!? 大きな羽を閉じて防御しています
が、攻撃の手は止まりません！ SEは……ゼロになりました!」
ついにかんちゃんがやられたか……

流星は「絶好調である!」と叫びながら劣勢になっているデュノアちゃんの援護に向かっている。

「先程より戦闘しているロニイ選手とデュノア選手、スラスターや装甲が半壊してやばい所に流星選手が割って入る！ しかしSEの残量は依然ロニイ選手が優勢です！ どう巻き返すのでしょうか!」

刹那、対峙する黒と緑。その時間は一瞬で終わり、戦闘が再開される。

「両者一步も引かない熱い闘いが繰り広げられています！ 速すぎて姿を捉えるだけで精一杯です!」

「私はかろうじて目が追いついていますが……どちらもミサイルやビームをうちながら獲物を持って互いに何度もぶつかりあっています!」

流星の操っているであろう20機の機械が放つビームにデュノアちゃんとロニイちゃんが放つミサイルとT.L.S。それぞれは両者を狙っており、そちらで第2の戦闘も始まっている。

さながら国家代表同士が戦っているよう。いや、それ以上だ。

「今わたしたちは世界選手権の決勝を見ているのか!」 いや、これが今年の一年生の実力です!」

「両者のSEがどんどん削れていく！ これはどちらがやられてもお

「かしくありません！」

「結果は……！」

「さあどうなる……!?」

「アレックス、ブラックグリント両者のSEエンプティ！　しかし、ラファール・リヴァイブはSE残量8！　よって、

優勝はデュノア・尾白ペア！」

流星とロニイちゃんは同時に膝をつく。だが、デュノアちゃんが幸運にもほんの少しSEが残っていたので逆転勝利となった。にしても惜しかったなーかんちゃんとロニイちゃん。後で顔出しに行くでしょう。

会場はこの後、両者の健闘を称える歓声が絶えなかった。

第27話 古き……

学年別トーナメントは流星とシャルロットのペアが優勝。一夏はこの瞬間をラウラと見ていた……

side 一夏

「流星が勝ったか……」

ベッドの前についているで横になっているラウラと一緒に決勝の結果を見届けた。

「今年の一年生は粒ぞろいだな、将来が楽しみだ。」

「なに年寄りみたいなこと言ってるんだよラウラ……」

「わ、私は織斑と同じ年だぞ！……そういえばこれを尾白に言えばどんな反応するんだろうな？」

「そういやあいつの精神年齢……」

普通に3桁突入してるよな……？

「入っていてもいいですか？」

「どうぞー！」

そう言うのと失礼しますと言って山田先生と千冬姉が部屋に入ってくる。

「ボーデヴィツヒさん、体調の方は大丈夫ですか？」

「はい、問題ありません。」

「そうかしこまるなラウラ。ここでは一人の生徒だからな。」

「わかりましたき……お、織斑先生。」

「……それで、なにか連絡があるんですか？」

「はい！点検が早く終わったので、今日から大浴場を使えるようになりますよー！」

「いよっしやーっ！」

それを聞いた俺は思わずガッツポーズをする。

「む？織斑は風呂が好きなのか？」

「ああ、織斑は昔よく流星と銭湯に行ったりしたからな。」

「使用時間が決まっているので注意してくださいね。」

「分かりました！」

早速、今日から使うとしよう！

夜、夕食を食べた俺と流星は……

「気持ちいい……」

体を洗って大きな湯船に浸かる。二人だけのほぼ貸し切り状態のここでは声がよく響くなあ……

何を話そうか……そうだ。

「昨日見たあれ、本当なのか？」

昨日の流星の言動からして嘘ではないと思うが……すると流星は上を向いてポツポツと語りだす。

「……にわかには信じがたいと思うがな……本当なんだよ。」

「……やっぱりそうなんだな。」

「いろいろなことしてきた……」

人に向けて銃を撃ったり、

世界が荒廃する機械を乗り回したり、

人の住んでるコロニーを地球に落としたりもした。

……俺の手はとつくの昔から汚れてる。何千何万、いや何十億の人の命をこの手でやってきたんだ。

眼の前で、仲間が死ぬことも少なくなかったな……裏切られることも……

今もそいつらのことが責任っていうか罪というか……そんな感じで背中にのしかかってくる。

はあ……正直言っつていつも生まれ変わるのがなんで俺なんだよく思うな。」

流星が、半ばやけくそになったかのようにため息をついて肩まで浸かる。

「……それは、周りの人たちが流星に幸せになつてもらいたかったからじゃないか？」

「……何？」

「あの流星の過去を見たとき、それぞれの世界全てで誰かが流星のそれを望んでいた。」

荒廃^Aした世界で彼が力尽きる時、彼のオペレーター^Cを始めとする多くの同業者が来世で彼の安寧を祈っていた。

世界大戦^Mを食い止める任務^Gを任せられた世界、人工的に作られた彼は相棒や今まで共闘してきた仲間たちに囲まれながらクローンとして短すぎる寿命を迎えた。周りにいた者は次は天寿を人並みに全うできる人に生まれ変わって欲しいと願った。

宇宙^ガで機械^ダが戦闘^ムしている世界でも彼がその世界を去るとき、周りにいたクルーやパイロット、果てまではライバルや敵からも、こんな世界じゃない平和な世界で生きることを望んでいた。

「それは、どの世界でも、流星が幸せになれなかったから、周りの人が次こそはと想って来たからなんじゃないかな……よく分からないけど、直感的にそう思うんだ！」

流星の過去を見てから感じる第六感のようなものがそう感じている。

「スミカやアムロ、こっちに来たオタクン、キャスバル達が……」

「……だから、もしかしたらまた別の世界に行くかもしれないけど、今を大切にして、この世界だけでも周りのことだけじゃなくて、流星自身も幸せになってくれないか？」

それで、今までの重荷を下ろすことができるのなら……

「今を大切に、ね……もうこの話はやめだ。十分スッキリした。サンキュ、一夏。」

流星はこの時、始めて本当に笑っていた。

「楽になったならそれで何よりだよ。」

「それはそうとして……そういやラウラとはなんで面識あるんだ一夏？」

ラウラとか？

「2年前の第2回モンドグロツソの時にな……」

「織斑一夏の護衛を任せられました、ドイツ軍シュワルツハーゼ隊長のクラリツサ・ハルフオーフです。階級は大尉を拝命しています。」

「同じく担当します、副隊長のラウラ・ボーデヴィツヒです。階級は中

尉です。」

モンドグロツソで出場者である千冬姉を見に来た俺は護衛だという部隊の隊長格の二人から挨拶を受けた。

「織斑一夏です……よろしく、お願いします。」

「ではラウラが一夏殿の横で護衛をしてください。」

「はっ！」

殿……？とりあえず同じ年くらいの人が俺の横につく。

その後、彼女とは千冬姉の話題で盛り上がるが多かった。

んで事件が起きたのは決勝戦の始まる前にトイレをしているときだったな……

トイレが終わって廊下に出るとさつきまでいたラウラがいない。

「あれ？ラウラムグツ!?……………」

突然後ろから布を顔に押し当てられて意識が遠くなっていくのがわかった。

次に目を覚ましたのはどこかよくわからない機械が沢山置かれた建物の中。銃を持った人が6人。

横ではラウラが何かを諦めたかのように下を向いている。

椅子に座っているようだが、手は後ろで縛られ、足も椅子の足に縛られている。

体を動かそうにも椅子自体が柱に固定されているので何もできない。

「どうしてこんなことを……！」

「知りたいかア？俺たちの目当てはな、お前の姉を優勝させないことだ！そしてついさつき棄権したとの連絡が入った！」

リーダーのような男がこちらの問に答える。

「そんな……！」

「というわけでお前たちは用済みだ。」

額に冷たい何かが押し付けられる。

目を横に向けると、ラウラも同じことをされている。

「あばよー！」

殺されるっ……

「な、なにもんだ！」

……？

天井が割れ、一つの白くて青く光っている機械が地面に着地する。
あれは……白獅子？

それに答えることはなく、白獅子は俺たちを誘拐した犯人を次々と
右手だけで倒していく。

左胸から左手にかけては不自然にISの装甲がおらず、代わりにギ
プスのようなものがついている……怪我？

「野郎…このガキどもがどうなってもいいのか!？」

そう言っつてこちらに押し付ける強さが増す。銃口が額に食い込ん
で痛い。

それを聞いたのか、白獅子はとまる。そう、『は』だ。

「へへへ……そのままあ、っ!？」

直後、男の頭を一枚の大きな羽のようななにかで強打して、その男

は泡を吹いて倒れた。

「待って！」

その声は聞こえたのか聞こえていなかったのか……それはわからないけど、そのISは入ってきた天井からまた出ていった。

それとほぼ同時に、この建物の入口の扉が破壊され、ISをつけた千冬姉と軍が突入してきた。

「一夏！無事か!？」

「大丈夫だよ！」

ISを解除した姉はこちらに抱きつき、涙を流す。

「よかった……一夏までいなくなったら私は……！」

俺を抱きしめいていた千冬姉が改めて周りで拘束されている犯人を確認する。

「誰がやったのだ……？ボーデヴィツヒ中尉、あなたが？」

「いえ、私ではありません。恥ずかしながら私も誘拐されていました。」

「なら一体誰が……」

それは……

「千冬姉、白獅子だよ！青く光って悪いやつらを次々に倒していったんだ！」

「っ!?それは本当ですか!？」

ラウラの状態を確認していたクラリツサさんが驚く。

「間違いありません隊長。私もこの目で白獅子の存在を確認しました。決して幻ではありません。」

「そうか……2年前から行方をくらましていたのに……何故？」

それを答えることのできるものはその場にはいなかった。

その時、千冬姉はさつきよりもっと泣いていた。なんでだろう……？

「誘拐ねえ……」

昔の話を聞き終えた流星は一言こぼす。

「その時に来た白獅子は、誰が乗ってたんだろう……？」
「それは……どうだろうな？」

うわっ！とんでもなく含みのある言い方してくる！

「また絶対聞き出してやるからな……」

「ははっ……頑張つて聞き出してみな。」

その後、流星より先に上がって入口から出るところでデユノアさんと出会った。

「あれ？シャルルは今から入るのか？」

「うん、今から入ろうと思つてね。」

「今日の試合すごかったよな！優勝おめでとう！」

「ありがとう。お風呂で疲れを取るとするよ。」

シャルルが更衣室へと入っていった。

……あ、流星まだいること伝えるの忘れてた。

まあいいか。男だし。

side シャルロット

「わあ……」

これが日本のお風呂か……

「シャルロット!?!なんでいるうーっ!?!」

「流星!?!わっ!?!」

湯船から上がりかけだった流星とぼったり出くわした。

おどろくあまり、足が滑つてステーションツと後ろに転んでしまう。流星も足を滑らしたのか、お風呂に水柱が立った。

身体を洗ったボクは流星と同じ湯船に浸かり、彼に近づく。

流星はさつきからずっとボクの後ろ、壁を向いている。

こつちを向いてくれない流星にはこうしてやる！

「えいっ！」

「ちよっ!?!」

後ろから抱きつく。そういえば、この前とは逆だね……

彼は少し抵抗しようとしたが、観念したのかそのまま湯船に座った体勢で落ち着く。

彼の心臓の鼓動がわかる。

「ほんとにありがとう、会社のこととか、お父さん達のこと。」

「……どうってことないさ、一日寝そびれただけだし。」

「それでも、こうやって明日から普通に女子生徒として学校に来れるようにしてくれたじゃないか。」

特別な呼び方をしてほしいな……そうだ！

「……シャル。」

「……ん？」

「お母さんが、いつもそう呼んでくれてたんだ。流星も、そう読んでくれない、かな？」

「わかった、シャル……それじゃ、そろそろ上がるな。のぼせてきた。」

抱きしめていたその手を緩めると、彼が湯船で立ち上がる。

「……やっぱりすごい体だね。」

「そうか？たまにトレーニングするぐらいだが……」

嘘だ。彼の肉体は引き締まっており、鍛え抜かれた身体であることが一目見るだけでわかる。

そして、いつから巻いたのか大事な部分はタオルで隠れている

……ってどこ見てるのよボクは!?

とつさに上を見ると……

「……その傷はこの前の？」

この前の無人機騒ぎのものかな……？というのも、一年生の中では少し前に流星が大怪我をしたという話が出回っている。

「いや、そっちは消した。これは4年前に負ったもんだ。ハマやらかしたんだよ。」

彼の上半身左と肩から肘にかけて手術跡が大きくあった。

「それは……今は大丈夫なの？」

「最近やつとこさ本調子に戻ってきたところ。でもまだ完全には行かないな……勘も戻りきってないし。」

「そうなんだ……早く戻るといいね！」

「気にしてくれてどうも。先に部屋戻つとくぞ。」

そう言って彼は大浴場の入口の扉を閉めた。

さつき流星にやったことを思い返す。

彼に抱きついた……ここはお風呂、どちらも服を着ていない。
ということとは……

「ボクは何やってんだあー!？」

その後、顔を真っ赤にしながら湯船に何度も頭を打ち付けた。

第28話 合法〇〇〇〇

side 流星

……チャイムがなったが、シャルが来ないな。またあのスタイルで来るのか……？

「み、みなさん、おはようございます……」

そう思っていると、なにか衝撃的なことをついさつき聞いたような、少しグロッキーな山田先生が教室に入ってきて来る。

「ええと……今日は皆さんに転校生を紹介します。転校生というか既に紹介は済んでるというか……えつと……そのう……」

山田先生の訳の分からない説明にクラスがざわつき始める。

まああのことだろうな。

「見てもらった方が早いですね……入って下さい」

「失礼します」

扉が開き女子生徒の服を着たシャルが教室に入る。

「訳あって男として過ごしていましたが、それが解決したので改めて自己紹介をします。ボクはシャルロット・デュノア。デュノア社代表に加えてフランスの代表候補生になりました。皆さんよろしくお願ひします」

そう言つて一礼したあと、こちらにニコつとする。

あの後、代表候補生にも選ばれてたのか……フランスのお偉いさんのお目にかかったようだな。

クラス全員が時間が止まったようにぼかんとして固まっていた。

「デュノア君が……女？」

「ウソダドンドコドーンッ!？」

「狙ってたのに……!」

クラスメイトが次々に喋る中、誰かが次のように口零す。

「……あれ？ 昨日は男子が大浴場使ってたよね？」

「ということは……」

スウーツ……もしかしなくてもバレてるよな。(『……だろうな』)

クラスの女子全員が俺が一夏の方を見る。

「俺は風呂場から出る時にシャルロットとすれ違ったぞ！ だから違う！」

あつ……流星、まさかだが……」

一夏に向いていた視線もこちらに集まり、クラス全員の視線が刺さる。

「……否定はせん」

……殺気!?

とつさに後ろを向くと、青筋を立てたセシリアとロニーが後ろからどんどんと迫ってきている。

（『捕まった後の未来が見えない……逃げるべきだな』）

教室内で鬼ごっこが始まった。

なんとか挟み込まれないように机の隙間を縫って逃げる。

「オホホホ……流星さーん？ 何故お逃げになるのですか？」

「シャル、昨日は何もなかったよな？」

逃げながら教壇に立っているシャルに助けを願う。

これで収まるといいが……

「……流星のえっち」

なんでえ、そんな言い方するのお……？ 昨日は突然入ってきて、

しかも仕掛けてきたのはあなたでしょお……

クラスの目線がダインスレイヴのように鋭く刺さる。

「流星……どういふことか説明してくれない？」

そうやって逃げていると突然フードを誰かに掴まれて動きが止ま

る。誰が……つて!?

「ちよっ、のほほん!？」

なんつー反射神経。いつもののほほんとした表情から黒い何かが溢れている。

「ちよっと、かんちゃんとなつちちゃんとでOHANASHIしにいこうかりゅーりゅー?」

ここにもいたあーっ!?

そうしている間にも、こちらに二人が一步一步近づいてくる。

これは……マズイ……

……ん、どうした？　なんでラウラが一夏の前に行って……

「「キヤアアアアアッ!!」」

キス……か。

うわー大胆、そして長つ。追いかけて回してきた二人もその光景を見て思わず止まる。

「プハッ……お、お前は私の嫁にする！　異論は認めないぞ！」

「……嫁？」

……それならラウラが夫になるぞ？

「副官のクラリツサから日本では気に入ったものを嫁にすると聞いたのだ、お兄ちゃん！」

「なんでそうなったラウラ!？」

いまだラウラとゼロ距離にいる一夏がなぜそのポジに俺が入ったのかと驚く。

「む？　流星と嫁は義兄弟なのだろう？　ならばそう呼んで構わないはずだ」

間違つてはないが……色々とまずいからやめてほしいなあ……

クラスに微妙な雰囲気漂う中、待ち望んでいた先生がやってくる。

「なんだこの状況は……」

やっと来てくれたよ織斑先生……

——
なんとかロニイ達も落ち着いたことで、HRが本格的に始まる。

「織斑と尾白に重要な連絡がある」

俺たち向けの連絡……？

「国連で前々から出ていたとある案件がようやくお前たちの国籍である日本政府が法律化することを決定した」

「……その内容は？」

「男性搭乗者重婚適用法……つまり、尾白と織斑は複数人のものと籍を入れることができるようになるな」

「『ええええええええええつ!?』」

耳があつ!? この叫びに耐性ができるのはいつだろうか……

それよりも……マジで?」

『世界公認のハーレムとは……これからそつちの事を本格的に考えないといけなくなったな』

ほんとになんで……いや、彼女たち全員の想いに応えることができないようになったからありなのか……?」

というか……

「なんでみんなの前で言ったんですか……?」

「いやなに、1ヶ月もしない内に国会でその法律が通る方向だからな……少しの差だ」

「さいで……」

「だから、これからはハニートラップなどに十分気をつけるようになる」
「……はい」

これ世間に出回ったら世界中の男から恨まれるぞ……

時は昼、珍しく女子はおらず、男二人で昼食を摂っていた。

「重婚、ねえ……一夏は箒と鈴、ラウラあたりか? いや、ここは初恋の束も引き込むのか?」

「な、なんでそれを知ってるんだよ……」

一夏が顔を赤くする。別にいいじゃないか、誰でも恋はするものだからな。……そういうララアはどっちなんだ? 母親とか言ってたりにしてたが……新ジャンルか?」

『あの時はただただ導いてくれる者がいてほしかったからな……今はもうただの友人だ』

ほーん。

「ニュータイプの勘ってやつだよ。たまにしかしないけどな……最近一夏も感じるようになってきたんじゃないか?」

例えばハマーンが昔を見られたらガチギレするから乱用するのはほんとにおすすめてはできない。

「そういえばそうだな……なんか、別の感覚みたいなのが最近感じる

ようになってきた、かな……?」

そう言って炒め物を口にする。

「そのうち一夏も後ろに目ができるな……んで、箒達が告白してきたらどうするんだ?」

「……みんないつも訓練してくれたり色々手伝ってくれて、はつきり言って悪いイメージはないから、誰でも受け入れると思う。」

そういう流星はどうなんだ? 俺の倍くらいいるはずなんだが……」

今のところ……IS学園だけで8人、もしかしたら他にも……多いな。(『大丈夫か……?』)……やるしかない。

「俺ももとより受け入れるつもりだ……にしても、平等に愛さないといけないんだぞ……できるか?」

「やらなくちゃわからないけど……やってみるしかないよな」

ま、今はポジティブに受け止めたほうが楽か。

今日は金曜日で、放課後からすでに外出しており、毎週足を運んでいる喫茶店の扉を開ける。

「いらっしやいませーって流星!? 今日はずいぶんだよ!」

「何驚いてるんだ千束……学校終わったから来たまでだ。それよりも……なぜ束がいるんだ?」

そこには和席でクルミと話している束がいた。

そっちのほうに驚愕なんだが……

「あれ? りゅーくんじゃん! はろー! りゅーくんの行きつけの店がどんなところか見に来ただけで、なかなか面白い店員もいるんだねー!」

私はさつきまでくるちゃんとお話して、いい考えがいっぱい出てきたよー!」

くるちゃん……クルミのことか。ソフト面で強い者同士、気があったのだろうか?

束との談義で頭を回しすぎたのだろうか、頭から湯気が上がってクラクラしているクルミがこちらに気づく。

「やあ流星……」

「災難だったな……」

「……ミカさん、とりあえず氷水となんか甘いものいただけませんか？ クルミに奢ります」

「悪い……」

その後、いつものコーヒーと白玉を頼み、カウンターで、品が来るのを待っていると店の電話が鳴り、千束が受話器を手取る。

「はいこちら喫茶リコリコです！ ……なんんだ司令か……え？ 検査？ それは……アハハ……受けてないや。……うえっ!! ライセンスの更新明日までなの!! ……はい」

話し相手は誰だ？ 司令……DAと仮定すれば……楠木司令のことか？ んで検査するのは人間ドッグにくわえて、あつちの方も含まれる……んで何でマードーライセンス更新してないんだよ！ あれ無かったらクビなるだろ！

「千束……ちゃんと検査とかはしたほうがいいぞ」

特にその体の中にあるやつの検査とかいるに決まってるだろ……

「うー、注射嫌だなあ……」

「そっちかい!？」

「そうか、注射が怖いのか……」

「誰だって嫌いなものはあるからいいでしょ！ そういう流星の怖いものを言ってみなさいよ！」

千束は頬を赤く染めて話を逸らす。んで俺のか？ なんかあるかな……

「確かに一方的に聞くのは良くないな。怖いか……強いて言うなら、仲間がいなくなっちゃうってことが一番嫌だな」

それだけは本当に心が折れそうになるな。(『そうなのか……』) そうだよ。

「へえ〜ってそれは誰でもそうでしょ！」

千束がツツコミをいれる。だが正直な話、ほんとに嫌なんだがな。

「だが俺は、人一倍それが嫌いだという自信がある。誰も失いたくない……わがままだよな」

「そんなことないと思うよ！　だって流星は仲間思いのいい人なんだからー！」

後ろから束も「モチのロンだよ！」と肯定してくる。

「……そう言うかもな」

「……はい！　この話はおしまい！　白玉できたから、これ食べてりフレッシュしょー！」

「わかったよ……いただきます」

その後、閉店するまで話は続いた。そして、閉店後のボドゲ大会で……

「二戦いは数だよアニキー！」

俺と束、クルミの三人で人生ゲームという名の頂上決戦が繰り広げられていた。千束やたきなといった周りは俺達から絞りに絞られることにより、手元にたんまりとある約束手形……つまり借金まみれとなつてほぼ放心状態となっている。

「生命保険期間満了により10万ドル追加したよ！」

「なんの！　こっちは人間国宝で給料日を通過！　40万ドルゲットだー！」

「この宝くじが当たれば30万……当たったぞおおお！」

絶妙な力加減でルーレットを回して、運をコントロールしている束と俺に戦術眼で食らいついてくるクルミ。一方……

「出目は……1000ドルか……いつになったらここから出れるんだろうね、たきな」

「……おそろしくこの額を考えると最後までここにいることになりそうです」

「そんなあ……」

開拓地送りとなった二人は自分の番が回ってきたらルーレットを回し、雀の涙ほどのお金を貰うという借金地獄に遭っていた。

「ねえ流星？」

店が今度こそ閉まって常連と束が帰った後、家に戻ろうとしている

ところに千束が話しかけてくる。

「どうした千束？」

「明日、もし予定とかなかったら、一緒に本部に来てくれない？ 2つ頼みたくて……」

D Aの本部？ なんてそんな日本の対テロの防衛の要である場所に行かないといけないんだ……？

「予定はないが……なんのために？」

「たきなのことだね……」

曰く、明日たきなが本部に戻りたいと直談判しに行くので、俺に力添えしてほしいとのこと。

「明日は暇だから付いていく分には構わない。だがはつきり言って、俺が言っても望み薄だと思うがな……あの組織が判断するとは到底思えん」

「それはそうなんだけど……もしそれなら、それはそれでたきなに踏ん切りつけてもらいたいし」

「そうか……ま、俺は構わないぞ？」

「ありがと」

それじゃあ明日見せてもらうか、リコリスの本部とやらを！

「んでもう一つの理由って、やっぱり注射一人でするのが怖いのか？」

「うっ……はい」

千束、あんた注射に対して耐性なさすぎだろ。

第29話 DA本部

side 流星

「あの人の作ってくれるかりんとう、美味しいです」

「その人、元宮内庁の料理長だったらしいよ！」

東京から出てとある県の山に向かう電車に乗っている中、横のボックスシートに座っている千束とたきなが飴玉から始まった話に花を咲かせている。

寮の人が元宮内庁の料理人……絶対金がかかってるな。だが、味は保証されてる。

「オタコンなら、その料理人を雇いたいかな？」

こっちはこっちで俺とオタコンはずっとPCをいじって会社の業務をしているだけなので、こっちもなにか話したいと、話を振る。

「僕なら……雇うというよりかはその人の店の方がいいかな？」

「……その心は？」

「だいたい同じお金を払うくらいなら、自分の今食べたいものを食べれるからね」

「なるほどな……」

（『そういえば、どのような理由でカズヒラ氏を連れてきたんだ？』）

それは今からたきなが聞くからそれが答えだ。

「カズヒラさんは、なんで本部に行くのですか？」

「僕かい？ 僕は楠木司令から、ラジアータを見てほしいって言われてね」

（『また未来をみて……』）

たまにこっちも回してないといざという時困るだろ？

「ラジアータを……？」

「この前の通信障害の件だ。なんかまだ不具合あるかもしれんからな」

追加で説明を入れると微妙な表情になるたきな。前の事を思い出したな。

つーか、だいたいなんでピンポイントでハッキングされたんだ……

？ その後にラジャー・タがないと困る事態には、偶然的にしか起こってない。何がしたかった……いや、何がしたい？

「それならこの前来ていた、篠ノ之博士はどうなの？」

考えこんでいるとたきなに向かいあつて座っている白のボブカットがトングデモ発言をする。

あのなあ千束……

「確かに束はそっちにも強い。だが、束はここにいるだけで、大騒ぎになるだろ？ 俺でさえギリギリなんだから察せ……」

本部に向かっているとはいえ、途中までは一般の市民も使う路線を乗っている。こんなところで表世界の大物がいたら、いろいろ勘づかれる。

俺はマスクをしているので、なんとか横を通る人が「男性操縦者にそっくりな子……？」と思われてるくらいだ。

「今更だが、大丈夫かオタコン？」

「女性しかいない場所だけど、僕は大丈夫だよ。スネ……流星も毎日女子高に行ってるしね」

「言い方考えてくれ……」

「オタコン？」

たきなが首を傾げる。……そういや知らないんだっとな。

「ミラーのあだ名。日本のロボットアニメ好きだからな」

「こんにちは、尾白流星さん、カズヒラ・ミラーさん。本日はD A本部にお越しいただき、ありがとうございます。私は楠木といます。今日一日、よろしくおねがいます」

国有地と書かれた立札が立つ柵を通過し、エントランスに着いた。

車を降りると、白衣を着た女性がこちらに挨拶をする。彼女が司令ね……頭が切れそうだ。

「うわっ、楠木さんのそれ初めて見た……」

仮にも上司に対して言うことか千束……？

「こちらこそ、よろしくおねがいます楠木さん。それでは早速、ミラーを現場まで案内してください」

「わかりました。ではカズヒラさん、ついてきてください。尾白さんは予定通り、千束と行動を」

「はい」

そう言つてオタクンは司令の後ろに付き、おれは千束の後ろにつく。そのまま建物に入ろうとするがたきなが待ったをかけた。

「楠木司令、話があります！」

「……後でな」

が、それを払いのける司令。

これ絶対返事ノーのやつじゃん……

エントランスで仲間殺しのリコリスだの左遷されたのとか言つてるベージュや紺の服を着たりコリスを一睨みするだけで蜘蛛の子をちらすようにそそくさと逃げていった。

『流星、君のそれはいささか強すぎるから、よしたほうがいい……』
ちよつと殺意こめただけだぞ……？

「いいか？ 息を吹いて、筋肉を緩めろ。そんなに固まったらもつと痛くなる」

「そう言われてもお……」

医療棟という場所で採血検査の準備が進んでいる。診療室のような場所で、俺は注射する子を見守る親のような位置にいて、医者に出してない方の手はずつとこちらの手を握っている。

「いつもこんな感じなんですか？」

「ええ……まあいつもこんな感じですね。……それじゃ始めます」

そう言つてめくられた腕の上部にバンドを巻き、遂にその白い腕に銀の管が刺さる。

「いっ!?!」

刺さる瞬間、彼女の体が一瞬震え、こちらの手を握る力が強くなる。

「……はい、終わりです。お疲れ様でした」

直径1cmにも満たないような細い管に、血液がたまり千束にとつての地獄が終わった。

んで……

「さっさと手離してくれ。爪刺さって地味に痛いんだが……」

「だだだっ、大丈夫!？」

千束が手を離れた後に自分の手を見ると、5つの爪の跡がくつきりと残っていた。

「挟れてないからすぐ治ると思う」

「……ごめん」

「問題ないさ……さ、次行くぞ」

次に千束は着替えて身体能力の検査を受ける準備をしてる。俺も身軽な服にトイレで着替えた。

「それじゃあ始めよっか!」

さつきまであんなプルプルしてたやつがなにおう……

訓練棟ではリコリスの身体能力の測定をし、十分な能力があるか調べる場所としても使らしい。

ここでは、同年代の春川フキという別のファーストリコリスも更新のために検査をしていた。

俺もお試しということとで3人で検査を始める……春川さんの身体能力や反応速度は、ここにいるリコリスの上の中といったところか。んで千束の方フキよりも成績が上でこの反応速度は……

「目が良いのか？」

「御名答! ……と言いたところだけど、流星の成績を見たらね……」

「あなたは……本当に同じ人間か？」

「それはひどいなあ……」

ランニングマシンを平均20Km/hで走破し、垂直跳びで3Mを超えて計測不能、反射神経を測る機械もほぼノータイムでタッチしただけじゃないか……千束のスコアちよつとより良いくらいだぞ？

（『ちよつと……？ その時、目をそらしても打つてたじゃないか……普通光は肌で感じるものではない』）

その後、射撃場に向かうと、春川さんの部下というセカンドがやって来て、千束と口論になりどういうわけか模擬戦することになった。それを静観していたが、去り際に話しかける。

「春川さん。もうすこし、言葉を選んでやってくれ。確かにたきなの性格はここにあってないのは確かだが、君の連れが勘違いするよう
に、その言いようは良くない。ましてやファーストだから影響力も大きいことを考えてくれ」

「……それはそうなんですけど、あいつの顔見るとなんかいらつくんです」

「そうか？ 俺は仲のいい同僚にしか見えなかったんだが……ああやってわざと怒らすような言い方したのも、たきなに未練を残さないためだったりするんだろ？」

そう話すとやはり凶星だったのか、驚いた表情になる。

「まじっすか先輩、なんであいつを!？」

「サクラは一旦黙ってる!」

そう言っつてセカンドリコリスの頭上にげんこつが落とされた。

俺はその後司令と面談し先のラジャータについて話した。やはり何者かにハッキングされたようだが、後遺症は残ってないとのこと。次にたきなの処遇について意見したが、やはりここでもだめだった。まあ、彼女はリコリコの店員として頑張ってもらおうとしよう……

その後、2人を探すため歩いてみると噴水広場の方が騒がしいことに気付く。リコリス達が何やら見ている……その場に近づいてみると、千束が井ノ上さんを抱えて「嬉しい、嬉しい!」と言いながらくるくる回っている。

「私はいつも、やりたいこと最・優・先〜! まあ、それで失敗することもあるんだけどお。今は! たきなにひどいこと言ったあいつらを、ぶうちのめしたいちよつと行ってきますよー!」

そう言っつてキルハウスブーズという模擬戦場に千束が向かい、たきなが一人残される。

千束がこちらを一瞬見た。俺からもなんか言っつてほしいのか……?
?

たきなの横に腰掛けて話を切り出す。

「まだ暗い顔してるな」

「……流星さん。私は、これまで合理的に行動してきました……それ

がいけなかったのでしょうか」

それで悩んでるのか……第一、

「全然合理的じゃない行動が、多く見られてきたがな」

「……どういうことですか？」

まるで自分のことを否定されたかのような物言いにこちらをきくと睨む。

「確かに命令を聞くのは誰でもできる、幼稚園の子でもな。命令はたいてい合理的だ……だが、この前のあれは命令を無視してスタンドプレーしたな？」

「それは……はい」

「それがいい！」

たきなが突然の大声に目を丸くする。周囲でもこちらを見ていたリコリスもビクツツと肩が上がる。

「その行動は合理的ではなかった。自分で考えて、動いたのだからな。これは簡単にできることじゃない。」

いい証拠に、それによって結果仲間のリコリスを救うことができたろ？」

「でもその結果、武器商人を殺害し、左遷されました」

「……それがどうした？ 人生、完全な正解の選択肢なんてないぞ？」

「正解は、一つもないんですか……？」

つらそうな顔をして聞き返してくる。だが、それを否と答える。

「違う違う、後で正解にしたらいんだ、今みたいにマイナスでも次への糧にしたり教訓にして、次自分で選択するときには前回のぶんをとりかえせばいい。」

人生なんてもんは失敗して当然だ。失敗しないやつに限ってまともなやつはいないし、まともな人生を送ることはできない」

「その正解にする過程で失敗してしまったら？」

「失敗しても仲間がいるだろ？ 千東にミカさん、ミズキさんにクルミ……俺も入れると今挙げただけで5人もいるじゃないか。一緒に悩んで、悩んで、悩みまくって、いい方向にもっていこうじゃないか。合理的なんて考えはもうやめだ」

「そうですね……！」

彼女の目に光が灯る。……モヤが全部取れるまで、もうひと押しだな。

「……いま千束がさっきのリコリスと模擬戦をしている。自分で考えて動けるが……どうする？」

たきなは立ち上がる。

「わかりました、ありがとうございます！ 私、いつてきます！」

「当たって砕けてこい！」

どこに行くのかと聞くのは野暮だな。

「……気をつけてな」

俺はそんな彼女を見送り、模擬戦の行く末を見届けるためキルハウスブースの様子を見に行く。

模擬戦は既に始まっており、千束が相手のセカンドリコリスを死亡判定にしたところだった。

春川さんが乱入してきたたきなに強烈な一撃を浴びせられ、そのままきなが拾った銃から放たれたペイント弾は頭部に命中し、そのまま各急所がペイント弾の色で汚れる。

明らかな死亡判定だ。

「わあっ……！」

見下ろすガラスの横で声を上げたのはセカンドリコリス……

「ん……春先でビルにいた君か……」

「……あつ！ あの時は、本当にありがとうございます！」

名を蛇の目エリカというらしい。そのままあのビルの状況の話になる。

「……本音を言うと、あの時俺が助けなくても君は助かってたな」

「本当ですか!？」

「彼女の機銃掃射、全部犯人の上部を狙ってた。その上、君に銃を当てていたやつは頭に集中して弾が吸い込まれていたな。あれ程なら、ファーストになって本部に帰り咲きもおかしくないと思うが……」

「なら……！」

「けど、命令違反と捕獲対象の殺害のダブルパンチで本部戻りは厳しいだろうな。だが、これから彼女はそんなことは気にしなくなる」「というと……?」

「もっと強くなって逆スカウトされるくらいの大物になるだろう。彼女は強い」

「そうなんですネ……それが聞いてよかったです! このあとはどうするんですか?」

確かにこれで千束のやることはないからかえる……前に、

「すこし、面白いことをする」

この時、蛇の目さんからとてもワルな顔をしていたと聞いた。

side none

「エキシビジョンマッチイ?」

千束の問に楠木指令は是と答える。

「そうだ。DA本部にいるファーストとセカンドでも優秀なりコリス対尾白氏で、模擬戦をしてみよう。インカムによる連携やその他の実践の武器も使ってもいいとのことだ」

「……え? 聞き間違いじゃなければ、ただのリンチっすよね?」

サクラの質問に誰もが否定をしない。

「リコリスの全力を見たいとのことだ。くれぐれも、手を抜かないように」

模擬戦が始まり、模擬戦場に20を超えるリコリスが解き放たれる。

リコリス側には最初、余裕の空気が流れていたが……

「ダンボール? ……うっ!」

ある者はダンボールを素通りしたあとにダンボールの中からの銃弾で死亡判定となり、

「どこから……いたっ!」

別の者は音もなしに背後から、インクのついた刃のないナイフで首に線を描かれ、死亡判定となった。

次々にどこからともなく倒されていくリコリス。数が半分を切った頃、団体行動に移ったファーストリコリスとセカンドリコリスは現れた流星を囲んで彼の四方八方からペイント弾を発射する。だが、「なんで当たらないんだよっ、グワツ!!」

「フキ先輩!? ってかべ走ってる!?!」

まるで後ろにも目が付いてるかのように8人の銃撃をとつきに身を屈めたり、壁を走ったりしながら避けてリコリスを各個死亡させていく。

たきなの銃の正確さも、千束の銃を避ける能力も彼の完成したCQ C……近接格闘術の前には背中を地面に打つしかなかった。

模擬戦終了後ペイント弾まみれになったファーストリコリスが呟く。

「こんなのが、闇鍋にはうじゃうじゃいるのか……」

それは彼含めごく一部の人間? しかいなのだが、それを知る日は来るのだろうか……

電車内で撮られた写真、顔にペイントがまだ残っているリコリス二人と、それぞれ満足したという笑顔と苦笑いしている男性二人の写真が店でポドゲ大会をしている女性店員の携帯に映された。

「……何がどうしてこうなったの?」

福音戦編

第30話 買い物デートと残留思念

side 流星

学年別トーナメントの後日、ISのオーバーホールと代休を兼ねた平日の休日、ロニイが俺に頼んだことがある……それは買い物と一緒にしたいということだった。

いわゆる買い物デートというやつだな。

「おまたせ流星ー」

デニムパンツに薄手の長袖を着たロニイがやってくる。

彼女は保護してからすぐにこっちに来たので、これといったオシヤレな服は持っていない。この服も前の休日に俺が選んで渡したものだ。

「それじゃ、行きますか」

今日はかなりの量を買うことが見込まれるので、モノレールで移動する。バイクはお休みだ。

モノレールの車内、今日は何を買うかという話をしている。

「今日は何買いたいんだ？」

「えーと……新しい服と、流星の持つてる丸いロボットがほしいなー」

「ハロか。それなら電気屋にもいかないとな」

現在、隣り合わせに座っており、さり気なくロニイが俺の手の上に滑らかで小さな手を載せている。

周りには学園関係の人……ほぼ生徒がおり、いろいろな目で見られているが、今日は我慢だ。

モノレールの終点、お台場にある複合型ショッピングセンター『レゾナンス』にていろいろな服を見回っている。

「この店とかどうだ？」

「この服着てみたいなー」

ロニイが指差したのはある店の店頭に並んでいる服の一つだ。

「んじや、試着してみるか？」

「うん！」

店に入って店員に試着すると伝え、ロニーが試着を始める。
2分くらいたったところで、前の試着室の扉が開く。

「ど、どうかな……／＼／＼」

これは……綺麗だな。

「すごく似合ってるぞ。俺が払ってプレゼントする」

「ほんとに!? ありがと流星！」

同じ店で、随分とメタルなペアルックも買った。デザインはペンキをぶち撒けたような奇抜なものだ。

回った店が10を超えて、持っている紙袋が増えてきた頃、何やら簪やセシリアなどがこそこそとこちらを見ている……今日は純粋に買い物させてくれよお……

スマホを取り出し、各々のメールに今度同じことしてやると送る。

願いが通じたのか、彼女たちはこの場から去った。

「そういえばもうすぐ臨海学校だったよな……水着も買つとくか？」

「そうだね……見に行こっか！」

そう言っつて水着売り場に向かう。この時、空いてる手でさりげなく手を繋いでいた。

そしてその場には……

「む、流星か。今は……ロニーのエスコート中か？」

「尾白くんこんなところで合うなんて奇遇ですね！」

千冬と山田先生の教師陣も同じ場所に買い物に来ていた。

「まあ……そんなところですかね」

手をつないでる現場を目撃されかけたが、紙袋でなんとか隠せている。

あつぶねえ……

「私色々着てみるね！」

「ゆっくり選んでいいよ。俺はここらへんでうろついでる」

ロニイがいくつかの水着を持って試着室に消えていく。

俺は自分の会社で作ったやつがあるが、なにかいいものがないか探す……が、なかなか男性の水着は女性物より少ない。やはり、女尊男卑の影響か？

「流星、これならどちらが私に似合ってると思う？」

そんな中、千冬が白と黒の水着を持ってこちらに聞いてくる。

どっちも似合うと思うんだが、どちらかと言われれば……

「黒、ですかね？」

「ほう……なぜだ？」

「千冬は白より黒のほうが、大人の女性ってかんじがよく出ると思いますが、ですかね？」

「そうか……ならこちらを買うとしよう」

そう言っただけでレジへ歩いていく。

あれ、決定権俺が持ってたの？

（『女性が気になる男性に選んでもらったというのは随分と嬉しかっただろうな』）

なるほど。

「りゅーせいこつちに来てー！」

カーテンから顔だけを出してこちらを呼んでいる。

そちらに向かうと腕を引っ張られて試着室に引きずり込まれる。

中で見たものは、白のレースがついた大人びた水着を着たロニイが立っているものだ。

「うん、すごく似合ってるぞ」

「わかった、これにするね！」

そう言っただけで水着の紐をちよおおおお!!?

とつさに後ろを向き、視界を壁だけにする。

この場から出ることも一瞬頭によぎったが、それならロニイが外に晒されるのでその考えは捨てた。

「別にりゅーせいなら見てもいいのに……」

この場でやることですかあ!?

ちよつとトラブルはあつたが……大体のものは買えた。箱に入つたハ口も脇に抱えている。

「そろそろ昼だな……喫茶店、カフェに行かないか？」

「カフェ!? 行きたい!」

それではあそこへ行くでしょう。

週末にいつも訪れている目黒区の下町にある喫茶店の扉を開く。

「いらっしやいませーって流星!」

「ども、買い物ついでに昼飯食べに来た」

「へーん、ほんとは私に会いに来たかつたくせにー」

「言つてろ」

……ま、半分は間違つてないんだがな。

「おや、流星くんの後ろの子は？」

「今日一緒に買い物してた同級生ですよ」

「こ、こんにちは、ロニイです!」

「元気があつていい子じゃないか。それで、今日はどうするんだ？」

「まずは……ナポリタンを2つもらえるか? コーヒーは食後で」

「わかつた。たきなー! ナポリタン2つだ!」

「はーい!」

店の奥からたきなの声が聞こえる。厨房で料理を作っているようだ。

「何この子!? 可愛すぎない!」

「あう……むにやあく」

いつの間にかいたミズキにほつぺたをむにむにと揉まれるロニイ。

「この子、私がおもらつてもいいかしら!」

「やめろ。せめて彼氏作つてからにしろ」

別の道を開いた27歳独身にロニイを渡すわけにはいかん。

「それ全部ロニイちゃんのもの!」

「全部いるものだったからな。俺が買った」

千束が座布団の上でナポリタンを食べている俺の後ろに置かれた、

大量の紙袋を指差しながら驚いている。

ロニイはモキュモキュと口を動かしながらそれを聞いている。

「にしても臨海学校かあ……海行きたいな〜」

「ははーん、流星と海でデートしたいんでしょ？」

「な、何に行つてんじやいミズキい!？」

顔を真っ赤にして、ミズキをチョップする千束。ここにもいたんか

……

「ケプツ……ごちそうさまでした／＼／」

げっぷが少し出て、顔をあからめながらごちそうさまとロニイがいう。

「やっぱ、お持ち帰りしたら……」

「だめだ、諦めな」

そう言いながら、クルミが持ってきたコーヒーを飲む。

「んで、いつからその臨海学校とやらに行くんだ流星？」

「あと2週間くらいあとだよ。でも貸し切りだから来ることは難しいと思う」

「そうか……釣りしてみたかったな……」

「夏休みにみんなで行こうか？」

「それならまた予定をおしえてくれ」

その後釣り道具の話に発展し、たきながサメを釣りたいなどと言いつ出した。釣れないことはないが……

その日の夜、ベッドで悶絶するファーストリコリスとブリュンヒルデがいたそうさ。

それに対して、俺は奇妙な夢？ を見た……

「……………は？」

目の前には燃え盛るヨーロッパのような街が映っている……

『恐らくロニイのISCコアの深層空間だろう。だがこの惨事は……』

「ん……………あれは……ロニイ!?？」

道の真ん中に人影を確認した。

駆け寄ってみると、二人確認できる。

『地面で寝ているのがロニーか……？ ではもう一人は一体……』
《……誰だ？ よくここまで来れたね》

ロニーを見下ろしていた少年？ がこちらを向く。

「俺は尾白流星。ロニーの相棒だ」

《……へえ。アンタがこの子の相棒かい》

『君は一体誰だ？ ISコアの人格か？』

《いや？ ジョシユア……ISコアは現在おねんね中だ。僕は……なんて言ったら良いかな……。残留思念？》

「……どういふことだ？」

《正確に言うと、僕は一度死んでこの子の身体に憑依した一般転生者だよ》

「……ファツ!?？」

久々にこんな声出たわ！ 一般転生者って何だよ!?? んでもロニーからそんな感じはしなかったな……

『では何故自身を残留思念と表現した？』

《うーん……中々答えづらい質問してくるじゃないかシヤアさん。簡単に言うと、僕の転生前の記憶と脳を弄られたダメージに二元の子が、耐えられなかったんだよね。それを緩和する為に記憶やらを統合した結果、君たちの言うロニーが出来上がったワケ》

「ほう……資料で見た通り、結構アレなんだな」

あの資料はやっぱり千冬にも見せるべきか……？ 現にこのようにことが起こってるしな……

《ここにいる僕は死にかけのロニーを繋ぎとめるだけの杭さ。何時消えるか分かんないけど……僕がまだ残っていたらまた話そうよ》

「そうだな……ってかまだ出られる気配が無いがな」

『そうだな。君は、何と呼ばば良いかな？』

《ええ？ 僕の名前？ 前世の名前なんてもう忘れちゃったしなあ……適当にゼンセさんって呼んでよ》

安直すぎないか？ でも実際記憶の殆どを忘れてるらしいから仕方ない……か？

《……そろそろ彼女が目を覚ますようだよ。先に起きて待つてなよ》

体が引つ張られる感覚がする……

俺とシヤアの体が薄くなっている。

『……潮時か。すまん、勝手に来てしまつて』

『いやいや、逆にありがたいぐらいさ。久々に僕が僕として形を保てたんだから』

「また会えたら話そうか？」

『いいね！ アンタ、ACやってたんだろ？ ACの話でもしようや』

！』

リアルでリンクスやってたつて言つたら、びつくりするだろうな……？

（『恐ろくな……』）

目が覚める。外を見ると、七月の頭で日が登るのが早いはずだが、まだ地平線から少し頭が出ているだけだ。

横では一昨日またあつた部屋替えで、同室となつたロニイが昨日の夢でも見ているのか時折「えへへ……これどうかな……」などと寝言を言いながら気持ちよさそうに寝ている。

ロニイの過去の経歴、千冬に話すとするか……理解者が多い方がいい。

（『……そうだな』）

次の日から、ロニイは買った服を制服の上から着るようになって話題になった。

第31話 ロニイの過去

20■■■年■■■月■■■日

ISの生体兵器化実験：ファンタズマ計画を実行

多数のIS適合者の身体を■■■し、生体パーツとしてISに組み込むことで、絶対的な戦力にする計画である。

亡国機業の助力もあり、数年の内には実用化が望めるだろう。

20■■■年■■■月■■■日

多数の実験を行ってきた。被験者の数は■■■人となり、その内成功例は■■■人だけだった。その成功例達も従来の制御システムでは動かないことが確認されている。

そこで、今まで以上にIS適正のある者を探し出し、指揮官機となるように改造する「Project. NEXT」を実行。これが成功すれば大国にも遅れは取らないだろう。

20■■■年■■■月■■■日

「Project. NEXT」の被験体は■■■人しか集まらなかった。しかし、ファンタズマが■■■機しか製造出来ていないので、失敗は許されない。

「NEXT」達のコードネームも、ファンタズマ達と同じくCシリーズと呼称しよう。

20■■■年■■■月■■■日

「Project. NEXT」の生存者は2人となってしまった。C4. 620とC4. 621だ。これでは全部隊を制御出来ない。路線変更として全てのファンタズマを一括で管理するタイプに変更する。

メインシステムはC4. 620。サブコントロールはC4. 621とする。

20 ■■年■■月■■日

本日より亡国機業の本部で作業を行うことになった。本部での作業効率は素晴らしく早く、C4・621の改造は数日で終わりそうだ。

C4・620は迅速な指示をファンタズマにさせるため、傭兵会社『カレード』にて傭兵をやらせる。回収は■■年後だ。

20 ■■年■■月■■日

C4・621の改造及びファンタズマ指揮用IS「THE／NEXT」の建造が完了したようだ。C4・620の回収指示をし、本国に戻る。

……ついだ。このタブレットは本国のPCと繋げてこちらの責任者達も読めるようにしよう。セキュリティが一番高い所に置いてもらうつもりだから盗られないだろう……多分。

20 ■■年■■月■■日

本国に到着した。C4・621の組み込みは明日行うつもりらしい。悠長にしている時間は無いだろうに。

尚、C4・620の回収が少し遅れるので、先に組み込むようだ。脳は逆らえないように■■■したはずだが……本国の処置が甘かったか？

——データが破損しています——

■そっ ■■！ あ ■野 ■■！ 最 ■■に ■■りや ■■た！ ■■ ■■あ

い ■■ ISを ■■ ■■ 覚え ■■ 無いぞ!!

20 ■■年■■月■■日

C4・621の担当研究員の裏切りと謎のIS展開、施設の破壊により立て直しは困難になった。幸いTHE／NEXTとファンタズマ数機は無事だし、C4・620は数日後に帰還する。

計画の大幅な見直しが必要だ。 b y ■ ■ 博士

side 流星

「……日付が掠れてるのは、この資料の破壊作業中に回収したからだということらしい」

生徒指導室に集まった三人で亡国企業から回収された資料をタブレット上で見ている。

「……あなたの経歴もそうだけど、ロニイちゃんも大概よね……」

「なんで今年に限って、こんなに訳が多いのだ……」

心中お察しいたします、織斑先生……

「生徒のことは、ちゃんと知っておかないと後で後悔しかねませんか
らね……」

「それはそうだが……」

続けて「どこの国でもやってることに、変わりないか……」と愚痴る。

「流星、その『ファンタズマ』はどういったものなの？」

「人の脳みそと脳幹を直接マシンにつなげて動かす、殺戮兵器だな……設計図を見る限り、一度組み込んだら、そのままマシンの運命共同体となる。引き剥がすことは……できそうにないな」

タブレットをスライドし、ファンタズマの設計図や俯瞰図を見せる。

「何なのそれは……!」

「もう家のアレが潰したからないとは思うが……もう一つ、これはロニイから織斑先生たちには言っても構わないと言ってくれたものでな……彼女目線で何があったか、今から話す」

……意識がはつきりしない中、僕は目を開けた。

……ここは？ 確か僕は、ACVIを買った帰りに子供をかばって車に引かれたはず。

一応周りを見渡す……どこかの施設の中？ ぼやける視界には、白衣を着た人たちが話している。

何となーく、ヤバイ状況なのは分かった。でも身体は言うことを聞いてくれない……分かった。これACだな？ 僕は転生して早々ナニサレタのか……

そんなことをぼんやりと考えていると、突然僕の腕を引いていた白衣の男性が僕を突き放した。

「……ッ!!」

いったいなあ……ころんじやつたじゃないか？ しかし、これは好機だ。あの人は僕を逃がしてくれるみたいだ。急いで立って廊下を走る。

体の動きはぎこちない、けど走れないわけじゃない。ただひたすら走る。

しばらく走っていたらシャツターの前に着いた。この先に何かがある……けどどうにかできる物を持つてるはずもなく。

どうしよ……と考えていたら、何かが僕に語り掛けた。

《■■■■■■■■■■?》

「ッ!?!」

ちよつとびっくりしたし、何言ってるかわかんないけど、とりあえず力を貸してくれるってことは感覚で分かった。

「~~~~!!」

「~~~~!?!」

うげ……さっきの人たちがもうきた。ああはいはい、わかったわかった。せかささないでよ……

「スウ……ハア……よし。力を貸して……《N—W G I X / v》!!」

ズドオオオオオオオオン!!!

……空から落ちてきたのは、人間サイズの白栗（黒塗装）だった。現状一番好きなAC呼んだらスケールダウンした別機体が降ってくるか思わんじやん。予想外だよ、うん。

とりあえずアーマーみたいに纏えるらしいので装着して……おし、シャツターぶっ壊します〜

おっあいてんじやーん（自分で開けたんだよなあ……）お邪魔します……うっわ。ナニコレ。ファンタズマ？ A C P P の？ 趣味

わつる。これ量産しようとか……

じゃけんぶつ壊しましうね。ついでにここ（研究所？）全部ぶつ壊すか！

人類史の汚点は出荷よーつつつて。そんなノリで破壊して回ってるけど、実際はファンタズマ破壊するたびに吐き気が昇ってくるんだが……何？ もしや僕は転生ではなく憑依だった？ じゃあこのファンタズマは何？ きようだい何かか？

とりあえず壊せる所は全部壊したので、脱出してオサラバしますか。バイバ～イ

結構飛び続けて疲れたので、適当な所に降りて休むことにした。

解除つと……ありがとうね、黒栗。いや、この際ホワイトグリンの方が良いのか……？

まあいいや。現状を確認して……？

……あれ、何か気持ち悪い？ そういえば、あの時は気づかなかつたけど、声が高くなってるし、身長も全然低いし、だれかのきおくが

「……!? ウップ……おえええええええ……」

なにこれ!? 戦場まぢが燃えてるおかあさんあつやばいやつこれ白衣の人いかん！ そいつには手を出すな！ つかまったこれのうが死じぶんじやなくなる

「オ”エ……ゲツホゲホ……ウ……げええええええ……」

記憶の統合あなただれ？ わがんねわたしは？ 考えるなどうしようまとまろう楽になるしなない？ 今生きてる

「……ゲツホゲホ……ア”アアア」

……？ わたしは何をしていたんだっけ……？

生きなきゃ……何か探さなきゃ……

「……ごめんなさい。私……」

返事は無い。けれど、『私』はたぶんここにいる。

傭兵会社カレードにて一人の男が少女を連れて帰ってきた。

「……それで？ 黒い鳥、抱っこしている子供は誰だ？」

「いや、それがね、任務中に乱入してきたんすよ！ 腕も良くて、だれがやってんのかと思ったらこんな幼女だった訳ですよ!!」

「……それで？」

「ウチで働かせようぜ」

「却下だ」

「即答かよ!! 硬いなくオツツはよ！」

「硬い柔い以前の問題だ。そんな子供が傭兵まがいの事をやっている時点でアウトだが、どこかの差し金の可能性もある。更に本人の合意も無しにだな……」

「……しかしだなあ……せめて飯位は食わせてやろうぜ」

「……何故だ？」

「コイツ戦闘が終わった途端にぶっ倒れやがってよ。結構危険なんじゃないかって」

「それを先に言え馬鹿野郎!! 首輪付き！ さっさとこの子を寝かせろ!!」

「……了解」

横で話を聞いていた首輪付きと呼ばれるものが、彼女を来客用のベッドに寝かせた。

「黒い鳥……お前は説明不足過ぎるぞ」

「速攻で却下したオツツも、人のこと言えねえんじや……」

「オツツダルヴァ。彼女が目を覚ましました」

「ご苦労、首輪付き」

「……んう？」

「おはよう。私は傭兵会社カレードの創設者兼No.1のオツツダルヴァだ」

「俺は黒い鳥だ。よろしくな!! 嬢ちゃん！」

「……首輪付き。よろしく」

次々と自己紹介が流れていく。

「……んう。おとうさん？」

「ブッフオツ!？」

それを聞いた首輪付きが思わず吹き出す黒い鳥の方も方が震えていることからそうなる寸前だということがわかる。

「おやおや？ オツツウく親御さんと間違われてるぜ？」

「うるさい……ゴホン！ では、君の名は？」

「……う」

少女は何かを書いたものをオツツに手渡す。それは……

「……紙、でしょうか」

『C4・621』……それがお前の名前か」

「ん。わたし、ろくいいち……う？」

「……カラード、ヴェセラ、ロニイ。どうでしょうか？」

「首輪付き……結構ノリノリじゃねえか……」

「よくそんなすぐに思いつくな……」

「……う……かあど、うえせあ、ろにい……！ わたし、ろにい！」

「……色々やることが増えそうだな」

「……じゃあいいよな!? 正式にウチで働こうぜ！」

「う！」

「……やれやれだ。620との関係がありそうだな……」

「その後、亡国企業の息がかかった傭兵として尾白を襲撃、現在に至る。か……」

「転生ってそんなホイホイあるものなの？」

……概念は説明できなくもない。だが、

「もし完全に説明しようとしたら、十年以上かかることになるが……普通は、知らないほうがいい」

「それは、東でもか？」

「そうだな……彼女でも、最初は混乱すると思う」

(『それを理解している流星は一体何なのだ……?』)

そりゃあ、いろんな世界行ったら勝手に理解すると思う。シヤア

もなんとなくわかるだろう？

(『……わからん』)

さいいで……

「それで、ロニイの精神は今安定してるのか？」

「いいや、彼女の精神は今も不安定な所がある。だから、フラッシュバックがいつあってもおかしくないですね……その時は、なんとか宥めてみせますよ」

「そうか……話は変わるが、これからそっちのことがよくあるかもしれない……間違いは、起こすなよ？」

「ちよつ!? ……それくらいはちゃんとしてますって……」

目の前にこっちに気のある人の前でそれ言いますか……ほら、楯無があらぬことを想像し始めて、で体をくねくねし始めたぞ？

「流星とそんなこと……あつ」

あつ鼻血も出た。

side ロニイ

目の前に映るのは、真っ赤に燃える街。

たくさんの人がいたであろう箱庭。

もう、わたしにはかんけない。ただのおきもの。

「待ってくれ！ ロニイ!!」

……誰かがわたしを呼んでいる。けど彼じゃない。

《……何の用だ。織斑一夏》

「あいつはまだ死んだ訳じゃない!! だから、こんなことはやめるんだ!!」

……ただの戯言か。現実を受け入れられない、操り人形が。

《あいつは……私の相棒は死んだ。私には、もう何も無い。何も残っていない。ならば、相棒を殺した世界を壊そう》

「そんなこと……! 貴女こそ、自分の不甲斐なさを言い訳にして八つ当たりしているだけですわ!」

《黙れ。セシリア・オルコット。貴様らまでもが、アイツの死を受け入れられないのか。……貴様らは、狂っている》

「いいや、狂っているのは私達ではない。貴様だ、C4。621……この程度で、そこまで墜ちる奴だったとはな」

《……ラウラ・ボーデヴィツヒ……貴様なら、分かるだろう。アイツは永遠に目を覚まさない》

「ううん、それでもボク達は信じる。彼なら、必ず帰ってくる。それとも、貴女は彼を信じれないの？」

《シャルロット・デュノア……》

……私だって、わたしたちだって、そう信じていたよ……でも、もう……

《アイツは、もう帰ってこないんだ……わたしの、せいで……》

「ロニー……お前……」

それに、今のわたしたちには、彼の隣に立つ資格なんて無い……

《私の手は、朱く染まってしまった……こんな手で、アイツの手を取れない……》

「っ……！ そんなこと……！」

《慰めなんて要らない……ああ、そうさ。遠慮も、しがらみも、……今までの思い出も。何もいらぬ》

いっそのこと、わたしたちを、あの人と同じ場所に送って……

《私は、私達は、”人類種の天敵”……言葉は不要だ。見せてみる、貴様らの力を……!!》

「……ッ!! ロニー——ッ!!」

《戦いは良い!! 私達にはそれが必要だ!! もうそれしか残っていないっ!!》

ああ、そうだ。これでいい。これで、ワタシを……

「……ッああああああああああああ!!」

布団から飛び上がる………ということは、さっきのは？ ゆめ？ いや、そんなはずは……あの感覚は……

「ハアツ……ハアツ……ハアツ……ハッ……ハッ……ハッ……ハッ……ハッ……」

流星が、相棒が、死んだ？ そんなはずはない。相棒は今、隣にい

る。じゃあ、あれは？ わたしの手の中で、相棒は……

「……ひぐつ……ぐずうつ……」

「……どうした？ ロニー」

相棒が不安そうな表情でこちらを見ている。

「……えう？ あい、ぼう？」

やっぱり、あいぼうは、いきている。でも、こわい。ふあんがいつぱいで、ぐちゃぐちゃで……

「なんか悪い夢でも見たのkテストロイ!？」

横で寝ていた流星の胸に飛びつく……あいぼうは、生きてる……

「あゝいゝぼおゝー……あゝいゝぼう……グズツ……」

「……本当に、大丈夫か？」

「……スンツ……ズビツ……怖い夢をね、見たの。相棒が、いなくなっちゃう夢」

「……大丈夫だ。俺はどこにも行きやしないよ……」

「あいぼう、お願いがあるの……」

「……わたしを、ぐちゃぐちゃにして……ぜんぶわすれるくらいに、めちゃくちゃにして……？」

「ヴツ……いつか来るとは思っていたが、今か………本当に、それでいいのか？」

それで今の気持ちを忘れることができるのなら……

「……おねがい」

第32話 恋バナ

side 流星

「海、見えたあつー！」

誰かがそう叫ぶ。

トンネルを抜けて見えたのは青い海。東京の磯臭いイメージとは大違いだ。

（『……きつと近くで見たら同じだろうな』）

……んなことないわ。

海沿いを4台のバスが走っていくと、砂浜と建物が見えてきた。あれが今回お邪魔する「花月荘」、か……なんとも和風な旅館だな。

「マドカ、そろそろ着くから起きろー？」

「んう……そうか」

横ですやすやと寝ていたマドカを起こす。何故マドカが俺の横に座っているのか、それは前の日のこと……

「「「あいこで、しょー！」」」

「……何回続いてるんだ？」

「いまのあいこで162回目だ。一夏の方は一発でラウラになったのにな……いつ終わるのやら」

放課後、屋上で後に頂上決戦と名付けられた、乙女達の戦いが繰り広げられていた。ただ誰が俺の横に座るかというじゃんけんなのにな……かれこれ30分は続いている。

さあ163回目、これは……

「しやおらーっ！」

マドカが一人だけパーを出したか。

「そんな……ですが、まだ帰りの席は決まっていなくてよ？」

「そうだね、それじゃあそっちを始めるのでしょうか」

まだ続くの……？

「これが海か……流星、一日目は自由行動だったよな？」

「そうだな……二日目と三日目は作業だから、存分に楽しむとしようか」

時は少し進み、場所は変わって旅館の中。それも教員、織斑先生の部屋だ。なぜなら……

「良からぬことをさせないためだ」

「誰がそんなことをしますか……」

ハニトラ対策とのこと。一夏はともかく、俺はそんなに引つかからんよ……

「……まあいい。さつさと着替えて、一夏の後を追ってこい。私も準備ができたらすぐに向かう。流星の選んでくれた水着を着て、な」
「りよーかいです」

流星に肩のあれを見せながら歩くわけには行かないので、ラツシユガードを着ている。

「流星くんの凜々しい背中を見れると思ったのに……残念」

「でもこれはこれでありー」

さいですか……遠くの方ではタオルぐるぐる巻になったラウラが一夏の方に向かっていたり、こちらに水着を見せてくるセシリアにシャル、ロニイにマドカ、そして簪……誰も似合ってるな。

そして目の前に現れたのはほんが着ているのは……

「……何だそりゃ」

「何ってこれは水着だよー、りゅーりゅー！」

そう言っグポーンとモノアイが光る。

それはアツガイの水、着？ というよりは着ぐるみか……？ 確

かに側はジオン水泳部のそれだが……

「……脱ぐのしんどくない？」

「そんなことないよローロー、だってほらー！」

そしてアツガイのフェイスがパカツと開き、中からのほんの顔がひよこつと現れる。

「……それどうなってるの本音？」

どっちかという誰が作ったか気になるな……

「知らなくい。だってタバタバがくれたものだからねー！」

「タバタバ……篠ノ之博士ですか!」

あんたら、いつの間に仲よくなつたんだ……

(『私も束女史と本音氏は、仲が合いそうだと思うぞ?』)

……マジで?

その後、沖の方まで泳いだり、砂浜恒例のビーチバレーをした。千冬と俺で2個ずつボールを破裂させたのは、いい思い出だ。

「本音、外洋まで泳げるとは……」

「かるく泳いだだけなんだけどね?」

「あれがかるく……?」

のほほんの水着、というよりかは小型MSはやっぱりやばかった。水中で70キロも出せるとは……束も恐ろしいものを作る。

たまたまいたマグロを獲ってきたから、今日の晩御飯にマグロの刺身が急遽追加されている。うまい。

「やっぱり日本では生物を食べるんだ……この緑色のものを乗せて食べるんだね」

そう言つてこつちの食べてる様子を見ながら、赤い刺身に緑の山が築かれ、そのままシャルの口に運ばれる。

「ちよつ、漬けすぎ……」

「つ~~~~~~~~!!」

涙目になつて鼻を抑え、声にならない叫びをあげる。そんな量食うからだろ……

「ふ、風味があつておいひいね……」

「無理に感想言わんでいいから、さつさと茶を飲め……」

お茶を渡した後、セシリアが足つたといつたので変わりに食べさせる。と簪とロニイにも同じことをしてくれとせがまれた。

昔は、こんなことになるなんて、思いもしてなかつたな……

(『……そうか』)

風呂に入つて晩、布団を広げていると……

「久しぶりに、アレいいか?」

背中を天井に向けた千冬に、アレをしてほしいとお願いされる。

「アレ？ いいですよ」

そして俺と一夏は千冬の下へ行って……

「んっ……そこだ……」

「千冬姉、やっぱり疲れ溜まってないか？」

一夏が背中を親指でグツグツと押し、俺は千冬の足裏をふみふみしている。

……さつきから襖の奥で布の擦れる音が聞こえてるな。

side 千冬

「……ちよつとまってくれ」

「……どうした流星？」

一夏首をかしげる。さつきから聞き耳立ててる彼奴等にしびれを切らしたか。

「コソコソしてないで出てこ、いつ！」

『わああああっ!?!』

流星がふすまを解き放つと、もたれかかっていたであろう10人がなだれ込んでくる。やはり、一夏と流星を好きな奴等だったか。

「クククツ……私達が良からぬことを、しているとでも思っていたか？」

「いえ、そんなことは……」

「嘘つけセシリア。さつきまで「織斑先生の……先を越された!？」なんて言ってみたくせに」

「シャルロットさあん!?!」

暴露されたオルコットが顔を真っ赤にする……若いな。

「一夏に流星、これだなにか飲み物を買ってきてくれ」

「はいよ。そら、行くぞ一夏」

「おう！」

流星にお札を渡しておつかいに行かせる。

「さて、と……どうした？いつもの馬鹿騒ぎは。……ああ、先立つものがよいか。ほら、お前達で好きに交換しろ」

一夏達が部屋から出ていき、女子オンリーとなったところで、冷蔵

庫から10本の缶を取り出し、机の上に置く。

「ラムネとオレンジとスポドリ、コーヒーに紅茶に緑茶に烏龍茶……後……コーラだ。好きなのをとってくれ。束は、アルコールでいいな」

『い、いただきます……』

10人が飲み物を口にする。よし、

「飲んだな？」

「の、飲みましたが……」

「何か入っていましたの!?!」

「失礼なことを言うなセシリア。なに、ちよつとした口封じだ」

10人全員が飲んだことを確認した私はニヤリと笑い、缶ビールのプルタブを開け……飲む。

マツサージ後の一杯は、やはり旨い。

「……つぶは！……なんだお前たち、お化けでも見たような顔して？」

「い、いや……飲んでいいのか？」

何をわかりきったことを……

「気にするなマドカ。……お前たちも飲んだだろう？」

『あつ……』

そう言われて9人は声を漏らす。

「さて、前座はこのぐらいでいいだろう。そろそろ肝心の話をするか」

早速一本の缶を空けたので、二本目を冷蔵庫から取り出し、再び喉を鳴らす。

「篠ノ之、凰、ボーデヴィツヒに束。お前ら、あいつのどこがいいんだ……? ああ、流星組にも後でちゃんと、付き合ってもらおうぞ?」

『は、はい……』

私が言ったあいつ、というのはもちろん、一夏である。

「わ、私は別に……いつも流星を追いかけて日々頑張ってる所、ですかね。あと昔助けてくれたこともあるので……」

と、ラムネを傾けながら呷る筈。

「あたしも、箒と似たかんじ……あいつが酔豚のことをちゃんと謝ってくれたのは、嬉しかったな……」

烏龍茶の飲み口を指でなぞりながら、ボソボソと呟く鈴。

「よし、一夏に篠ノ之と凰がそう言っていたと伝えておこう」

「伝えなくていいですっ!」

「はっはっは! 冗談だ冗談。それで、お前はどうかんだラウラ?」

そんないつもとは正反対な口調で話す2人を、いい具合にアルコールの回ってきた私は豪快に笑う。

「っ、強いところが……でしようか……」

「……そうか? 私は、流星のほうが強いと思うぞ。全盛期だったあのときの私でも膝をつくだろうな……」

「織斑先生……りゅーりゅーがあなたよりも強い、ということですか?」

「そうだな布仏。なんなら、デュノアの高速換装や一夏、ロニイがよく使う瞬間加速、二重瞬間加速……今あるすべての技術は、流星が発案したものだ」

「ほ、本当ですか?! 織斑先生?」

知らなかったのかデュノア? 私も、彼の操縦を見て成長したのだが……

「ああ。ISの生みの親は束だが、育ての親は流星と言っても過言ではない……あいつは、対戦相手の未来を読んてるような動きをしてな……あいつの本来のISに乗ったとき、誰も勝つことができないだろうな」

「本来の……IS? 今のアレックスじゃないのですか?」

「あれではないな、更識妹。それは今どこにあるのやら……おっと、最後に束も話しとくか。お前はどこに惚れたんだ? 私は今まで、流星かと思っていたが……」

「りゅーくんは仲のいい研究者同士ってかんじ……? でもいつくんに対しての感情は、なんていうか……」

「超人スペックと自分で謳う束も、恋愛はうぶだな」

「ちよつとちーちゃん!」

珍しいの束を見ることができたな……おっと、酒が回ってきたな……早く本題に入ろう。

「で？ お前たち6人は流星のどこに惚れた？」

さて、答えを聞かせてもらおうかライバルどもよ？

「わたくしは……彼の誠実な所でしようか」

「いつもお菓子くれたり、あの時守ってくれたことかな？」

「僕は、お人好しなところ」

「……わ、私は、その……頼りになるところ……」

「この学びの場を提供してくれて、いつも弁当をもらってること……といったところか」

「流星がいつも優しくしてくれる所です！」

上から順にオルコット、布仏、デュノア、更識妹、マドカそしてロニイと立て続けに話す。

「そうか……あいつも、罪な男だな」

その言葉に、誰もが首肯する。

「ところで、ちーちゃんは？」

「私か？ もちろん流星だ。あいつに惚れない理由があると思うか？」

『うわぁ……』

なんでみんな引き気味になる？

「帰りましたよーっと……お話、盛り上がりましたか？」

と、ここで流星と一夏が部屋に戻ってくる。ほう、ツمامミも買ってきてくれたか。気の利く奴め。

……彼奴等ならちゃんと私達を愛してくれるだろうな。

第33話 赤

side 箒

臨海学校二日目、海岸でISの装備をクラスメイトと運んでいると、織斑先生から呼び出しがかかった。

「なんのようですか、織斑先生？」

「お前は今日から専用「ちいーちやあーんー」ということだ。」

織斑先生の声を遮った昨日聞いた声のする方向を見ると、崖から姉が砂煙をあげながら降りてきた。そして織斑先生の方へ飛びつ……

「昨日もあつたけど、会いたかったよちーちゃん！ さあハグを——
ぶべらっ!？」

「うるさい、束。」

く前にアイアンクローの迎撃を受けた私の姉、篠ノ之束。

「ぐぬぬ……相変わらず容赦がないねえ。昨日はずっとりゆーくんの——イダダダダダダ!?人の頭から聞こえてはいけない音が出るよ!?嫌だなーそんな照れなくてもー……」

「照れてなど、ないっ!」

「ピギヤアアアアア!？」

アイアンクローの力が更に強まり、こちらまでミシミシと聞こえてくる。それでもなんともないとは、さすが姉。

あのように言いつつも、織斑先生の頬が少し赤くなってるのは気の所為ではないだろう。

「あれ?その白衣は……」

シャルロットが姉の服を見て首を傾げる。

姉は、いつも着ている某不思議の国のようなフリルのついたドレスではなく、白衣を着ていた。機械チックなうさ耳はそのままだけ……

そして私並み、いやそれ以上かもしれない姉の豊満なその部分についてるポケットの表面のロゴ……

「イタタ……お、気づいたかい?前々からいたけど、りゅーくんの会社で研究をしてるんだ!」

「本当か、流星!？」

思わずロニイの機体を点検していた流星を見る。他の周りにいたみんなも彼を見る。

「……気づいたらいた。別にいても困ってないし、うちの科学者が喜んでるから気にしてない。」

しれっと受け入れてると流星が発言する、世界中追いかけて回されている姉の定住地が公開された。

「そんなさうつと言っているんですか、流星……」

「いつかわかることだしな……それで、今日は何の用でここに？」

「ふっふっふ……それはすでに準備済みだよ。さあ、ご覧あれえ！」

びしっと直上を指さす姉に、私や他のみんなも空を見上げると——
激しい衝撃と轟音を伴って落ちてきたのは、銀色をしたミョウバン結晶型の金属の塊だった。

「ついに、できたか……」

流星がふとこぼす。何かを秘密に作っていたのか。

その金属の塊の正面がぱたりと倒れると、中に入ったのは……

「IS……?」

マドカの口から漏れた言葉通り、中に入ったのは、赤い装甲のISであつた。

「じゃーん! これぞ箒ちゃん専用機こと「紅椿」! 全てのスペックが一つを除く現行のISを超える、束さんお手製のISだよ！」

こんなものを姉の一存でもらっても、いいのだろうか……

「……本当に、」

「ん?」

「本当に、私がこれほどのものを、貰ってもいいのですか?」

この疑問に、姉は「何をそんなかしこまってー」と言う。

「うん、これは、ほうきちゃん誕生日プレゼントなんだけどね……他の皆は専用機を持つてるけどほうきちゃんだけ持ってなかったでしよ?」

いざという時、お嬢さんを守れるようにね!」

「そうですか……」

姉なりに考えてくれたのかな……毎年プレゼントが進化していつてるけど、この調子だったら来年のプレゼントが怖い……

「それじゃあ箒ちゃん、今からフィッティングとパーソナライズを始めようか！」

「……それでは、頼みます。」

「堅いよ、実の姉妹で、どっちももうすぐいっくんと結ばれるし、もっとキヤッチーな呼び方で〜」

「は、早く、始めましょう！」

「はいはい。りゅーくん、手伝ってー！」

「はいよ。」

そうしてロニイの機体の点検を終えた流星と姉が空中にディスプレイを広げ、作業を進める。やはりというべきか、二人のそういった技術は目を見張るものがある。

「ほうきちゃんがいつも頑張っているから、最近適正がBになったことも知ってるからね〜！」

「……なぜそれを知ってるのですか？それは私しか知らないはずなのですが……」

「ギクッ!?いや、それはなんとというか、その……」

「束……後で話がある。」

side ラウラ

頭の上のたんこぶが、アイスクリームのように重なった束氏……この際、義姉になるから束姉さんと言うべきか。

そんな束姉さんとお兄ちゃんが専用機を次々と見回って点検、ISの評価をし回っている。

「俺としては、実体の近接装備……ラウラならコンバットナイフ型のものがあると思うぞ。戦闘スタイルと交戦距離を考えた時に、役に立つと思う。あと脚部の装甲はバイタル部以外9.5パーセント削れば、燃費が良くなる。」

「そうか……本国で提案しよう。」

「本来は、もう少し性能を底上げしたいんだがな……」

お兄ちゃんがやれやれというふうに手を広げる。

「……やっぱり、本来の目的ではないからか？」

「そうだな……まだ、軍用は自衛目的、通常のやつも競技で留まってるが、なんかのきっかけで戦争で使われかねんからな。紛争地域ではもう使われてるとも聞く。」

確かに、アフリカなどでは政府軍がISを使って民間人が虐殺されたという報告を聞いたことがある。

「この話を束姉さんが聞いたとき、悲しんだだろうな。」

「宇宙のためじゃない、人を殺すために使われてな……ラウラは、もしそうなたらどうする？」

彼がこちらの目をしっかりと見つめる。

そうとは……私がレーゲンを使って虐殺する状況になったらということか？

彼は……試してるのか？

「軍人の鑑としては、上層部からの司令は絶対だ……転校当時の私ならそうしてる。」

「……今は？」

「今なら、その作戦は辞退するだろうな。もちろん、そのような命令を下す上層部に反論も忘れない。」

「なら安心だ。」

真剣な表情が崩れてホツとしたような表情になる。お兄ちゃんの納得行く答えだったようだ。

「りゅーくんそっちは終わったー？」

あらかた終わったのであろう束姉さんが、ちょうど周りに広げていた配線を片付け終わったお兄ちゃんに話しかける。

「こっちも今終わった。ロニイの機体が、もうすぐフォームシフトしそうになつてたぞ？」

今のロニイが第二だったから……第三形態^{サードシフト}!?理論上でしか説明されてないものなの!?

「へえ……また変わったらデータ探ろうつと。あ!さつきかんちゃんのコア人格の声、ちよつとだけ聞こえるようになったよ!」

「ほう……またうちのアイツとも話させてみるか。」

コア人格まで……しかもお兄ちゃんはすでに出ているの、か……話してる内容が最先端すぎて理解が追いつかない。

「……そういえばりゅーくんの機体、そのままだと足を引っ張るだけだよ？ さつさとその意味ない装甲外したら？」

意味ない……？ 反応装甲や増加装甲ではなく、ハリボテだとも言うのか？

「どういうことだ、お兄ちゃん？」

「はずしたら色々めんどくさいことに……っ!? ラウラ、一瞬機体のコアネットワーク借りるぞ！」

微笑みから一変し、驚いた顔に変わったかと思うと突然レーゲンの周辺にディスプレイが飛び出して何かを探し出す。

「構わないが……何があつた？」

「……どうしたのりゅーくん？」

「……やっぱり。コアネットワークが一機オフラインになつてる。」

「それではその機体の位置情報がわからないじゃないか。つまり……」

「たたたつ、大変です！ おお、お、織斑先生！」

話している途中で、慌てて口がうまく回ってない山田先生が、教官の下に走っていった。

そして二人は口元を隠して読唇できないようにしながら、小声で話している。

流星の言ったことが関連しているのか……？

「生徒は今出している物を今すぐに、すべて片付けて自室で待機！ 専用機持ちと篠ノ之は来い！」

教官の声が海岸に響きわたり、一般生徒が慌てて道具やISを片付けていく。

そして、専用機持ちは、教官の後についていく。

side
???

『銀の福音、システム掌握。コアネットワークより切断。』

銀の福音の四方を取り囲む4機の赤の一機から機械じみた、しかしどこか人間の声を感じられる音声が出る。

『仕事だ。作戦通り、この前殺り損ねた尾白流星を今度こそその命を取る。616から619、付いてこい。』

『了解、620。』

第34話 戦闘開始

side 流星

「2時間前、ハワイ沖で試験稼働中だったアメリカ・イスラエル共同開発の軍用IS『銀の福音』シルバリオ・ゴスペルが暴走、監視空域より離脱したと連絡があった。また、衛星による追跡と進路予測の結果、福音はここから2km先の空域を通過することが分かった。そして、正体不明の大型機体……ISとは異なると思われるものが4機、付随している」
「……」

全員、厳しい顔をして黙り込む。

「織斑先生、まさか俺達に、その軍用ISを止めろとか言うんじゃないでしょうね……」

「そのまさかだ一夏。日本政府からの通達により、我々がこの事態に対処することになった。その際、教員は空域及び海域の封鎖を行う。よって、福音の迎撃は専用機持ちに行ってもらおう」

俺はともかく、なんで学生にこんなことやらせるんかね、日本政府はよ……」

（『どこの世界でも、正気を疑うようなことをする……』）

「本来なら教員や自衛隊がやる筈なのだがな。本当に申し訳ないと思っている……それでは作戦会議を行う。意見があるものは挙手するよように」

「はい。福音とアンノウンの詳細なスペックデータを要求します」

さっそくオルコットが手を挙げて、準備に取り掛かろうとする。

「分かった。ただし、これらは2カ国の最重要軍事機密だ。決して口外するな。情報漏洩した場合、諸君には裁判と最低2年の監視が付けられる。そしてそのアンノウンのことなんだが……」

「それは俺から話す」

さっさきうちの衛星から届いた写真と亡国機業で回収したデータを机に広げて、みんなが見えるようにする。

「なに、これ……」

「こいつは開発ネーム『ファンタズマ』とある秘密結社のデータとこ

の写真に瓜二つだったことから、こいつである可能性が高い。

このデータを読む限り……数種類のミサイルとレーザー、クローにバリアを持っている。複数人で一体ずつ狩る方法が無難になると思われるな」

「ファンタズマ……そうか」

マドカが苦虫を噛んだような表情になる。彼女、ファンタズマの乗り方を知ってるのか。

「後でタッグを決める。それでは銀の福音のデータを開示するぞ」

そして次に代表候補生達と教師陣は、開示された銀の福音のデータを元に相談を始めた。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……ホーミング弾を用いたオールレンジ攻撃が行えるようですね」

「攻撃と機動力特化ね。しかもスペック上ではあたしの甲龍を上回ってる……面倒くさい奴ね」

「この特殊武装が曲者だね……ちようどりヴァイヴ用の防御パッケージが来てるけど、連続しての防御は難しい気がするよ」

「……このデータでは格闘性能が未知数です。偵察は行えないのですか?」

「無理だな更識妹。この機体は現在超音速飛行を続けている。よつて、一撃必殺の力を持った者で銀の福音の搭乗者を救出。ファンタズマについてはできる限り無視、最悪の場合撃墜しろ」

これまた難しい注文をする……

（『ただの殲滅なら簡単だが、救出はな……』）

「1回だけのチャンス……ということはやはり、一撃必殺の能力を持った機体で当たるしか……」

山田先生の言葉に、全員がある方を見る。そう、一夏の方を。

「やっぱり俺の零落白夜かあ……やります、やってみせます!」

がっくりしたかと思えば、すぐに真剣な表情になる。……成長したな。

「いい心意気だ……だがやばいと思ったら、すぐに撤退しろ。あそこは待ったが効かない戦場だ。自分の命を最優先に、考えろ」

「……分かった」

「織斑先生、敵の攻撃はリミッターを解除してると思われます。せめてSEだけでも、最大値で運用してもいいですか？」

「……許可する、ロニイ。そして、誰が向かうかなのだが……」

「それでしたら、わたくしのブルー・ティアーズが、ちようど本国から強襲用高機動パッケージが……」

「だめだ、外国籍の者たちは待機だ」

「なんでわざわざ戦力を下げる……!?!」

「どうしてですか!」

オルコットが織斑先生に食い下がる。

「代表候補性に万が一があつたら困るとのことだ……ほんとに何がしたいのだ、上層部は……!」

「織斑先生、今愚痴を吐いたことで何も変わりませんよ……話を進めましょう」

「そうだな、真耶……では、誰か後付のロケットブースターを持つてるものはいないか? それでアプローチをするが……」

「ちよつと待ったあゝ!」

……天井から束が降ってきた。文字通り、降ってきた。

「ここは断然、紅椿の出番だと思うんだ」

「何?」

「見て、ちーちゃん。紅椿なら、すぐに超高速機動ができるんだ!」

束がそう言うのと、数枚のディスプレイが織斑先生の周りに現れる。

「なるほど……それで束、紅椿の調整にはどれぐらいの時間がかかる?」

「10分もあればいつでも出れるようになるよ。それに一人までなら殆ど速度を落とさずに高速移動ができる!」

「そうか……では一夏を同伴させる。それで、誰か持っている者はいるか?」

「拡張領域に入れておいた予備を使えば……シヤア、在庫はいくつだ?」

（『拡張領域の在庫は3つだ』）

ギリギリ足りたか……

「織斑先生、俺のデンドロビウムとVOBが3基あるのでこれで6人……日本籍全員を連れて行くことができます」

「……よし、では織斑二人と篠ノ之、尾白、更識妹、ロニイは出撃の準備を。その他の代表候補生はISを装着して作戦区域から10キロ離れた場所で待機。IS学園にも応援を要請しておいとく。それでは、頼んだぞ」

side 一夏

俺たち6人は、海上を移動している。先頭に俺と箒が、すぐ後ろに流星、そして流星の後ろで横に広がってマドカ、ロニイ、簪さんがついてきているいわゆる逆Tの形を取っている。

『接敵まであと1分。気引き締めろよ!』

流星から通信が入り、いよいよ戦闘が間近に近づいたことがわかる。

「箒、大丈夫か?」

「……正直言つて、少し怖いな。これから行くのは戦場なんだから」

数ヶ月前までは、ただの中学生だった俺と箒……流星たちはただの中学生じゃなかったけどな。

「俺も正直言つてあまり実感が無いというか……それでも、ちゃんと守るからな!」

「……そうか。言ってくれるのは嬉しいんだが……」

『さっきの話、筒抜けだぞく兄』

あれっ?! 通信ついたままだったか!?

『やれやれ……ゼロアワーになった! 各機VOBパージ、散開してそれぞれの相手を頼んだ!』

後ろでガコガコと何かを外れるような音がして、流星とマドカ、ロニイと簪がそれぞれファンタズマという流星のデンドロビウムより二回り大きな赤い機体に取り掛かっていく。

「ゴスペルが見えたっ、一夏!」

「いくぜえええええええ……っ!?!」

ヘッドオンヘッドで斬りかかる直前、通信のコールがかかる。

『おい、どうした一夏……通信?』

この通信は……旅館から!?

「……あつー!」

今の一瞬で避けられ、距離を取られたので追跡をする事にする。幸いさっきの急接近で速度を落としたことで、なんとか距離は一定だが……

『一夏! お前の前方右下に、逃げ遅れた民間の船がいる! 一度追跡をやめて護衛しろ!』

「ええっ!?! り、了解!」

千冬姉から通信が入り、福音の追跡をやめて海上に目を凝らす。

あれは……船?! 海上は封鎖しているはずなのに……!

船の上には、全員慌てた表情の5人が見える。

『千束……!?! なぜいる!?!』

しかも、流星の知り合いなのか!?

『一夏! 後ろ!』

背後に福音!?

まずい、油断し——

side 真耶

『一夏の機体のSEゼロ! 怪我をして意識がない! 現在は箒が持つてる!』

通信機器から時折爆発音が聞こえる中、流星さんの報告が入る。一夏さんが……

「……分かりました。箒さんは一夏さんと一緒に帰還してください」

『……了解です』

「流星さんたちはどうしますか!」

『……俺以外を撤退させる! その船と一夏を守って今すぐ撤退させる!』

「けど、それだったら流星さんが……! 5体の相手なんて……死ん

でしまいますよ!?!」

『俺はここで粘るから、SEが少ないロニイ達を引かせて増援を頼む! そうじゃないと、そっちにこいつらが行っちゃう……ぐうっ!』
今ここで判断しないと、遠く離れた海上で一人頑張っている彼の声を無駄にしたら船にいる5人を含めた8人の命が危ない。

心を鬼にするしか、ない。

「……分かりました。ロニイさん、マドカさん、簪さん、撤退を」

『……了解。行くぞ、ロニイ』

『マドカ! 流星は、流星をおいていくの!?!』

『命令だ、撤退するぞ!』

『嫌だ! 置いていくのは嫌だああああ!!』

ロニイさんの悲痛な声がインカムに聞こえる。

ごめんなさい……ロニイさん。

そして2分後……織斑先生がこちらに情報を伝えるのと、彼のバイタルに変化があるのは同時でした。

「銀の福音及びファンタズマの活動停止! 真耶! 流星は、どうなった!」

「アレックスのシグナル、及び流星さんの、バイタル……ロスト」

同時に外から、爆発音が聞こえてきました。音のする方向は……流星さんのいる場所。

「流星が……」

力なく膝をつく織斑先生。私も、頬を伝う水が止まらなくなりました。

男性登場者のそれぞれの状況

流星：海中で（ ）スヤア

一夏：箒の背中で（ ）スヤア

第35話 生存……？

side 千束

今日は店の定休日。私達は太平洋の上で、釣りを楽しんでいる。

「いよつしやあ、13匹目！」

水面近くまで上がってきた真つ赤な鯛を網ですくい、針を外していけすに放り込む。

借り物の船の上から釣り糸を垂らしてもうそろそろ3時間が経過しようとしていた。

「魚群探知機ではここから北西に、3キロ離れた場所に魚群があります。どうしますかミカさん？」

釣り竿を揚げて、モニターをずっと見ていたたきなが次のスポットに向かおうと進言する。

「わかった。そっちに進路を向けようか」

エンジンの振動が身体に伝わり、船の後ろから泡が立ち始める。船が動き出した。

「本当は、流星と釣りたかったんだけどなく……今頃臨海学校か」

「今頃同級生とキャツキャツしてるわよ」

「んなわけあるかつ！」

ミズキは店とは大して変わらず、「釣ったばかりの魚の刺身も中々いけるわね〜！」などと言いながら私とたきなが釣った魚を捌いて持ってきた日本酒の肴にしている。

もちろん、自分の分は取ってるけどね。

「にしても周りに全然船が見当たりませんね。釣り界限では有名な場所って聞いてますけど……海上が時化てる訳でもないですし……」

すると突然通信機器に音声が発生し、舵をとっている先生の横でクルミがマイクを手に持つ。

「どしたのクルミ？」

「通信だ……こちら第3彼岸丸だ。何かあったのか？」

『やつと繋がったか！ こちらはIS学園の者だ。その海域は現在封鎖されている！ 今すぐその海域から避難しろ！』

「IS学園から!? ミカさん、DAからなんか連絡来た?」

「いや、私の携帯は鳴ってないぞ?」

DAも感知してない? それじゃあなんで……

「それはまた急だな……何故ここからどこかないといけない?」

『それは機密事項だから話せない! その海域から今すぐ離れないと、貴方達の命が危ない!』

次の瞬間、船が大きく揺れて立ってその話を聞いていた4人は尻もちをつく。

「な、何事!」

お酒を飲んで座っていたミズキも盛大にコケた。

船が揺れた原因は何か。

「……何だ、あれは?」

先生の視線の先、そこにあるのは一つの銀と大きな4つの赤。

「一機はISみたいだが……残りのあれはなんだ?」

少なくとも攻撃してきたので味方ではない事は分かる。

空中で次々に爆発や銃撃音が聞こえて、戦闘が始まっているのがわかる。

すごいなあ……中でも、巨大な真つ白な機械に乗る深緑のISがずば抜けてすごい。

「……ん? あれ誰だろたきな?」

「あれは……男性搭乗者?!」

こちらを見て固まっていた白いISが、背後から襲ってきた光の球にぶつかって爆発し、纏っていた機械がどこかに消える。

そして、空中から落下する彼を赤い機体に乗る人が受け止めて、陸地の方へと飛んでいった。

「今のは……流星じゃなかった」

だいぶ不謹慎かもしれないが、今のが流星じゃなくてよかった……

「あれは……味方か?」

4枚の殻のような羽を持ったISがこちらに接近する。

「……皆さんの船は私達が護衛します。陸地に向かって全速力で向

かっってください！」

「わかった！」

先生がその青髪のこの呼びかけに反応して、速度のレバーを前に一杯に倒すと、エンジンが唸りだし、船がどんと増速していくのがわかる。

あれ？ あの青髪の子、どこかで見たことあるような……どこだっけ？

「命令だ、撤退するぞ！」

「嫌だ！ 置いていくのは嫌だああああ!!」

後ろでは、さっきの男性搭乗者にそっくりの女の子と、今尚戦っている白い機械を外した緑のISの所へ行こうとするロニイがいる……ロニイ!? この前来てた!?

「ロニイちゃん!? なんでここにいるの!?!」

アルコールが抜けたミズキも驚愕している。

「何でかはともかく、この場から離れましょう！ 船を速くするためには魚は投棄します！」

たきなの声で、呆気にとられていた私とミズキの意識が戻ってくる。

魚、海に返しちゃうの!? でも仕方ないか……

魚を海に放っているとゴツンという衝撃とともに、船が止まる。

先生!?

「なあんて止、め……る……」

眼の前にはさっきまで戦っていたあの巨大な赤と銀色のIS……

「アハハ……き、今日はいい天気ですね……」

これ、もしかしなくても絶体絶命……??

「そこをどけええええ——っ!!」

船の背後から現れたISが船を止めていた5機を押し、船から離れていく。

そのISに乗っている人の顔は一瞬見えた。それは……

「流星っ!?!」

みるみるうちに彼は遠のいていく。何をしようというのか。

「あいつ、もしかして……!」

「なにか知ってるの、クル——」

言葉を言い切る前に答え……爆発音と衝撃波が私達を襲う。

大きな爆煙と共に、海に落ちる流星。

その爆発のおかげか赤と銀の機体は、一部が黒焦げになって空中で完全に止まっている。

「何をしてるんですか、千束?」

たきなの声気づいたときには、船を降りてもう海の中にいた。

「おい待て、千束!」

クルミの声を聞かずにがむしゃらに、彼が落ちた場所へ泳いでいく。

どうか、間に合って……!

side ロニー

船を海岸まで護送してきたマドカ、簪、私の3人は、ISの補給作

業をしている。流星が止めてくれた福音とファンタズマは今でこそ止まっているらしいが、いつこちらに来るかわからないからだ。

そして近くでは、織斑先生とあの喫茶店の黒人さん……ミカさんが話をしている。

一夏は、旅館内で治療中とのことだ。

「どうして、あなた達と流星に面識があるのですか？」

「私達は、喫茶店を経営してまして……彼はよく週末に来てくれるんですよ。この間も、そこにいるロニイちゃんが彼と一緒に来てくれました」

「本当か、ロニイ？」

間違いではないので、首を縦に振って二人にサインを送る。

「……そうか。それで今から——」

はあ……なんであの時山田先生の指示に従わずに、マドカの静止を振り切らなかつたんだろ……

（『ロニイ、まだ決まってるからそんな気を落とさなくても……』）

「——それで、通信では5人いたと聞いてましたが……なぜ4人しかないのですか？」

ナナシ……流星は、あの爆発の真ん中にいたんだよ？　もうこの世にはいない。

（『彼はビームで背中がズタズタになっても、ケロっとしてるじゃない。今回も大丈夫よ』）

「一人は海に入って流星さんの下へ行ってしまった——」

今回は海に落ちてそのままなんだよ？　心臓が止まったのに、なんで生きてるって言い切れるの？

（『……それは』）

「——との連絡は？」

もうこんな世界なんか……

（『ロニイ、それだけはやめておきなさい』）

「——を持っていなくて……どこにいるのかもわかりません。連れが、本当に申し訳ない」

大人の話をとぎれとぎれに聞いていると、箒がこちらにやってくる

る。

「ロニイ……話がある」

「どうしたの、みんな揃って？」

ここで話せないようだと話して、織斑先生達が見えなくなる海岸沿いの岩の裏まで移動する。そこでは、一夏と流星を除く、専用機持ちの皆がいた。IS学園から急いでこっちに来たのか、楯無さんの姿も見える。

「ロニイ、私達は、福音とファンタズマを叩きに行くが……一緒に来るか？」

まずは流星の敵を取ろう。世界を壊すのは、それからでもいい。

「……もちろん」

これは、前奏(『ISに着信が入った、ロニイ。発信源は……流星のIS!』 ほら、言ったでしょ!)っ!?

「……プライベートチャンネルで!? ——流星!」
すぐに待機形態の首輪に触れて、通話を始める。彼は生きてた……?

『良かった〜起動してくれて! あなたロニイちゃんの間違いないよね!』

だが聞こえてきたのは、流星の声ではなく、少し前に聞いた……
「千束、さん? どうして流星のISを? 流星は、無事なんですか!」

大きな声で話しているせいか、ISを装着したみんなが何だ何だとこちらに寄ってくる。

「……流星と話してるの?」

「生きてる……なら流星の救出をまずしよう!」

「流星の位置を聞いて!」

「ちよつと落ち着いて！ ロニイちゃんが話せないでしょ！」
矢継ぎ早にみんなが話しかけてくる。

『さっきまで心臓止まってやばかったけど、今は動いてる。流星は無事。だけどまだ目は覚ましてない』

流星は千束がなんとかしてくれたか……よかった……にしても、

「……どうやって蘇生をしたの？」

『それは心臓マッサージと人口呼……やっぱし後で！』

「別にいいじゃん。私流星とそれ以上のことしたし」

「『『ファツ!』『』』」

周りど、どこか遠くにいる千束の空気が完全に凍りついた感じがする。

「いまロニイの口から……」

「最初にゴールインしたのは、まさかのキミだったか……」

「……ちくせう」

結局誰かが一番最初になるんだし、それが私だけただだよ。

「それで千束さん、今の位置はわかりますか？」

『ファーストだと思ってたのに……はっ！ そ、それで、今私がいる場所何だけど、暗礁にいるよ！ 位置は……シャアさん、ロニイの機体との距離は……ありがと。そこから北北東に13キロの位置にいます！ 私達から東北東に3キロの場所にあの赤と白のよくわからないのがあります！』

「わかった！ 今からそっちに行くから、流星を守ってね……！」

『あたぼうよ！ この千束に任せなさい！』

「ここで通信を終了し、私のISを展開する。」

「ロニイ、場所は分かったのか？」

「うん、北北東13キロにいるって……みんな、行こう！」

「『はいっ！』」

さっきまでこの世界がどうこうとか言ってたけど、流星がいるならそんなことしなくてもいい。

流星、待っててね。

第36話 再臨

side 流星

『なんだ、この初々しいこれは……』

『……私は蘇生術を教えただけなのだがな』

シヤアとともに見ているのは、顔を真っ赤にしながら自身の胸部を分間110回のペースで押ししたり、人工呼吸をしている千束。動きがぎこちない。

『それのおかげで、今心臓はまた動き出したんだろ？ ……あの押し方だったら肋骨何本か逝ってるだろうけど』

ちなみに心臓マッサージで肋骨が折れることはよくある。正しい押し方なら、折れても問題ない。痛いけど。

『あとは、流星がここから離れるだけだ……だが、アレックスはいま戦力にならない。その場で待っておこう』

アレックスはSE切れ……だが、まだ戦える。

『あれがもう修復済なんだろ？ ……シヤア、俺はもう逃げない。面倒事からもう逃げない』

『しかし……本当に、あれを使うのか？』

『無論だ。指をくわえて空見つめるなんて、できるはずがない』

『……これから忙しくなるな』

『そんなの、承知の上だ。じゃ、行ってくる。もうじきあんたの体もできるところから、次会うときは現実で』

『……勝利の栄光を君に』

そして自分の意志で、この空間を離れた。

「ん………いつつ………やっぱり折れてるか？」

心臓の前にある胸部に痛みを感じつつ身体を起こす。

周りを見渡すと、自分のいる岩の周りに広がる海。遠くに本州であろう陸地が見える。

そしてこちらを心配そうに見つめている千束と周辺を見張っているラウラ。そういうやシヤアが俺と千束の位置教えたって言ってたな。

「目が覚めたか、お兄ちゃん」

「……おかえり、流星」

「ただいま。助けてくれて、ありがとな千束……ファーストキスくれて」

「その節は……ってな、なあにいつてんじゃ——!!」

しんみりした空気から一変、あの空間で見たようにまた顔を真っ赤にする。やはり、千束は自分が押すのは強いが、誰かに押されるのは弱いな……

「ジョークを言える程には、大丈夫そうだな。にしても、お兄ちゃんのコア人格は他人とも話せるまで発達していたのか……」

「コア人格……さつき話してた、シヤアさんのこと？」

「そうだな……見た目は、金髪の高身長で顔つきはかなりいい。ラウラもみたら？」

発達というか、もともと完成してたけどな。

「そうか、あれがそうだったのか……いつからシヤアさんと話せていたのだ？」

「そーいやここにいるのはラウラだけ……他のみんなはどこに行った？」

「ロニイ達はなにしてる？」

「彼女たちは今、ファンタズマと交戦中だ」

耳を澄ますとなるほど確かに、戦闘の音が聞こえる……撤退したはずでは？

なんで無断で戦ってるんかねえ……俺の弔い合戦か？

「織斑先生の許可はとったのか？」

「……とってない」

「後で絶対怒られるな」

みんなで仲良くOSEKKYOUコースか……

「どんまい〜ラウラさん」

千束も千束で勝手な行動したのでは……？ まあ、俺を助けるためだったし、結局不問になるか。

にしても怒られるという言葉の前にいるものがある。それは……

「誰一人、死なずに戻ってこれたらな」

さつきからとつてもヤバそうなやつが来ると、頭がガンガン警報を鳴らしている。

これは……バルテウス？ 何じゃそりや？ 聞いたことない名前だが……このままだと全滅する未来を見せられている。

やつぱり、あいつを使うしかないか……シヤア、ISの起動を。もちろんあつちのほうで。

（『……了解。各種リミッターをアレの方まで引き上げる』）

そして、アレックスだったものを装着する。

「あれっ!? やられたはずじゃ……」

「確かにあの赤シャコと翼付きにやられたな……油断してた」

「そうなのか……ではなく!? なぜ具現維持限界を迎えているのに動かせる!?!」

「もとの姿に戻るからな……機体情報がリセット、つまり……」

機体中についたアーミーグリーンの意味のない増加装甲。その隙間からプシューツと音が聞こえるとそれらは機体から離れて地面に響く音を立てて次々に落ちる。

「へっ……うええええっ!?!」

そして現れるは、純白の装甲。そして、いままで拡張領域の門番をしていたスタビライザー付きのシールドスラスト——アームドアーマーDEを4つ、背中に装備させる。

（『この装甲が剥がれるのは2年ぶりだな……』）

最後に後頭部の大型インカムを外して、顔を一本の角が伸びるマスクですっぱりと覆う。

「(っ)う(っ)ことだ」

この世に、未来の特異点がまた降り立った。

「そ、れじゃあ十年前のあれと……」

「4年前のあの厄災を防いだのは……」
「そうだな。あれ、俺だった」

side 千冬

「……いっくんも行っちゃったね」
「まったたく……あいつらしいな」

一夏が二次移行した白式に乗って、箒やオルコットが今戦闘している区域に飛んで行った海を見つめる。時折閃光が見える水平線、あそこで戦闘が繰り広げられている。

「後で無断出撃したあいつらは怒るとして……今は私達にできることをしようか。束、もしよければ手伝ってもらえないか?」

「モチのロンだよ! さ、早く戦闘指揮所に行こう!」

「戦況はどうなってる?」

「福音が擬似的に二次移行しました! 少しこちらが押されていますが、依然全員のバイタルデータ安定してます」

「先程アメリカ軍の試作無人機、コードネーム『バルテウス』も暴走してこちらに向かっているとの通達がありました!」

新たにハッキングしてきたか!

「機数は! あと何分で来る!」

「機数2! これは……あと17分後でくる予定です!」

バルテウス……確か福音のサポートを目的として作られた全方位にミサイルを飛ばせるあの機体か。合流されると厄介なことになる。

「現場の生徒たちに増援が来ると伝えておけ! ファンタズマは!」

「二次以降したマドカさんとロニイさん、楯無さんで2機撃破! しかし、残りの2機のうち1機は動きが異常でダメージは少ししか与えられていません!」

モニターの前で状況を聞いている。このままバルテウスに合流されたら、ロニイたちが危ない……

「自衛隊と米軍は、来れないのか!」

「実害が出てからしか出動できないと……」

教師もIS学園上層部……実質国際IS委員会の指示によって交戦は禁止されている。

「真耶、流星の状況は？」

「流星さんのバイタルは復活したものの……つアレックスが再起動!? SEがゼロのはずなのに！」

流星の意識は戻ったか。だが、なぜアレックス再起動した……?

「待ってください! ISの情報が変わりました。機体番号は……ISRX-0-4?」

その番号……まさかっ!

「クルミ、ドローンの映像移せるか!」

「わかった……これはっ!」

機械に強いということ、協力してもらっているクルミが飛ばしているドローンの映像を、旅館に作った作戦室のスクリーンに映し出す。

そして、教師たちは騒然とした。

そこに写っているのは、ラウラと白髪の高校生ほどの女子と……

「白いIS……白獅子!」

「尾白さんの姿が見当たりませんが……あのISに乗ってるの?」

「IFF更新! 『アレス』に変わりました! 戦闘に参加する模様!」

アレックスは、アレスを隠すものだったのか……

「……厄災の時と、ほとんど変わらないな」

「……やっつと、それを使う決心がついたんだね、りゅーくん」

side 620

『617、及び616の生体反応ロスト。敵勢力に織斑一夏、参戦。機体が変わっている模様』

ミサイルを、脅威度の一番高いにミステリアス・レイディに向けて各種発射………2発命中。リロードを開始。

ファンタズマは2機落とされた。だが、ゴスペルは2次移行させたことで、こいつらはやりきれぬだろう。

『……わかった。バルテウスにハッキングをかけた。そちらに向かわせる。心強い味方になるだろう』

ようやくゴスペルの護衛機のハッキングも終わったか。あれが間に合うのは嬉しい誤算だ。バルテウスのスペックを見たとき、本当にISではない無人機かと思うほどで、むしろゴスペルが護衛していると勘違いをする。

……余計なことは後で考えよう。

『織斑マドカの機体、フォームシフト。脅威度を引き上げる』

全周囲レーザー弾発射……効果あり。甲龍の背部武装半壊、及びラファールリヴァイブ・カスタムの武装、スラスター一基の破壊を確認。その他も装甲の損傷の増加も確認。

織斑マドカの機体より反撃、敵性ビット6個射出……被弾。尾翼に損傷あり。戦闘継続に問題なし。

……どうした主よ？

『尾白流星の覚醒を確認。厄介な機体に乗っている。621と共に脅威度を最大にして、バルテウスを使い』

『了解。尾白流星、621の脅威度を最大に設定。バルテウス2機の操縦に変更する』

視点が変わり敵性ISが多く映る景色から、2つのまた別の景色になる。

武器構成……把握。各種能力……把握。機体操縦に問題なし。

『……勝負だ、621、尾白流星』

第37話 レイヴン

side 簪

「キヤアア——ッ!? SEが切れました……撤退します! 皆さん申し訳ありません!」

「セシリアもやられたか!? クソっ!」

こら織斑くん、口悪くなってるよ……

二次移行した織斑くんのISが来てから一時的に優勢になったものの、福音も二次移行したせいで今度はこっちの戦力が削られ始めた。

しかし、ファンタズマもさつきまでは異常な運動をしていたけど、元の運動に戻ったお陰で……倒せるのは時間の問題かな……?

そっちはマドカとお姉ちゃん、ロニイがやってくれてる。

なら私は……あれを使って福音を削り切るっ!

『不明なガザットがせざザツした』

GBを展開。一気にかたをつけるっ!

光の翼から光弾が放たれるが、バインダーで受け止める。

バインダーはもう使い物にならないほどズタズタだが、今だけでも盾になればいい。

「はああああ——っ!!」

距離300……200……100……今っ!

「当たれえ——っ!!」

振りかぶったチェンソーは、光の翼と脚部の装甲を福音もぎとる。

……やった! 搭乗者には当たってない!

福音が海に落ちていく。

それと同時に、ハマリングの出力が落ちていく。

実質相打ちだね。

そう言おうと、ふと一緒に落ちている福音を見ると……

落下していく福音のバイザーに……

また光がついていた。

落下をやめた福音は、私の頭上を取る。そして、先程より巨大な4枚の光の翼が広がり、光弾が私に向けて発射される。

……三次、移行？

空を埋め尽くす先程よりも大量の光弾の数々。避けきれぬはずがない。GBでエネルギーは枯渇。Iフィールドも破損してしまい、武器もない。

まだその手があつたんだね、福音さん。

「かんちゃんっ！」

お姉ちゃんが私の名前を叫ぶ。

ここで私は死んでしまうのか。

これから来る結末に目を瞑る。

流星にちゃんと好きって言いたかったな。

ズキユウウ——ンツ!!!

……いつまでも死が来ない。

目を開けると、2条の光線が全ての光弾を消し去っていた。

「作戦区域内に所属不明機侵入！ 速度は……マツハ4!? なにこれ!?」

また敵が増えたのか。

「あの出力……!? 尋常じゃないわよ！」

さっきのあの光弾が一つも残らず消えさっている。エネルギー兵器を無効化できるほどの出力？

「IFF ARRY……この反応は、味方？」

だとしても一体誰が……

「名前は……嘘でしょ……【白獅子】」

……え？ 誰がのって——

『——みんな、待たせたな』

流、星？

なんで、白獅子に……まさか、あの時も……

『随分とやられてしまっているようだな……遅れてすまない』

だんだんと近づいてくる青い光。

それを見て安心したのだろうか、体に力が入らずに下に落ちていく。

「……大丈夫か？」

「遅いよバカ」

落ちていく中、体を手で支えられて落下が止まり、近くの小島にゆっくりと降ろされる。横にはロニイも一緒に降りてきた。

「ラウラ、仕事増やしてすまないが……簪も、見てやってくれないか？」

「そのくらい、大丈夫だお兄ちゃん。しっかり努めを果たさせてもらう」

「ありがとう」

そう言つてラウラに一札をいれる流星。

「流星、もう大丈夫なの？」

「ああ、もう元気だよロニイ」

何が大丈夫なのよ。さつきまで心臓止まっていたのに。

「いつも……無茶ばかりして」

「……悪い。それは後でしつかり聞く」

………伝えよう。

「……私、伝えたいことあるから、ちゃんと戻ってきて」

「駆け抜け!! わ、私もあるからね流星！」

ロニイが慌てて私の後に話をつける……別に流星は逃げたりしないのに。

「分かった……それも後でまとめてちゃんと聞いてやる。今はここで待つといてくれ……さつきまでお疲れ様、簪」

「……それは帰ってきてから聞く」

彼が立ち上がり、さつきから出ていた緑色の光に加えて、かつて見たあの青くて心が落ち着く光が彼のISから溢れ出す。

「ロニイ、まだ行けるか？」

「もちろんだよ……始めよう！」

彼が空中に飛び出した途端、装甲が動き下から青く光る装甲が現れ、背中の翼のようなものも変形する。

嘗て私と世界を救った、あの形に。

「さあ、ペイバックタイムだ！」

「……行つたな。さて簪、一応護衛対象と顔合わせはしといてく「あ、あの……どこかで会つたことあります？」む？」

白髪ボブカットの人が恐る恐るこちらに訪ねてくる。

「アインクラッド、でしょうか……？」

「いいや、そこにはいなかったよ。たあしか、その時二人いたんだよねえ……確か大きい方の子に手当してもらったような……」

手当……？

「誰かにしたことは、ないです……」

「それでその後、さっきのISに助けてもらったんだよね」

「流星の……白獅子に？」

「誰が白いバンシイだ！」

「なんか聞こえたような……」

「というか、それなら私も……」

「旧電波塔で流星に降ろして貰ったことがあります……どうされました？」

「何故か彼女の顔がパアアアツと明るくなる。」

「やっぱりあの時の子だ〜！」

「ということは……」

「どんどんと芽づる式に蘇ってくる記憶。確か……」

「旧電波塔で、お姫様抱っこされてた人……！」

「ちよつとそれだけは言わないでえ！」

side ロニー

「誰が白いバンシイだ！」

「急にどうしたの、流星……？」

「なんかまた間違えられたような気がしてな……敵性機体2接近。どちらもコードネーム『バルテウス』と呼ばれる福音の護衛をしている無人機だ。ISじゃないとはいえ、ISの技術を応用したりロードで継戦能力に優れている」

「レーダー上に新たに赤点が2つ、追加されている。それがバルテウスというものだろう。」

「……分かった。後はナナシに行動パターンとか分析してもらおう」

「ナナシ、分析お願いね。」

『了解』

「俺は楯無とか一夏たちと戦っている、ファンタズマと福音もまとめて相手する」

「流星が4体も相手するの……？」

「流星、さっき簪が言ってたよね……無茶しないでっ」

「悪い……ならファンタズマは、一緒に頼めるか？」

「了解、相棒」

『聞こえてるか、その二人』

と、ここで敵から通信が入る。発信源は……バルテウス？

『俺の名は、620。勝負だ。尾白流星、621』

私と同じ、あの計画の……けどあれは無人機なんじゃ……

「……620、一連の出来事は誰の差金だ」

『それについては答える法がない……聞きたいのなら、俺を倒してみな』

「……上等だ」

流星が両手に特徴的な銃をコールして、手に持つ。

あの形状……さっきのビーム兵器？

『おそらく中央部にあるバックで撃っているのね』

「さっきの手筈通りだ。行くぞ、ロニー」

「……うん！」

流星が四方八方からやってくるミサイルとレーザーの弾幕をかいくぐり、ファンタズマにゼロ距離でビーム兵器を発射する。

「後ろにも目が付いているのか、流星？」

「……あながち間違いじゃない」

ビームが貫通し、ジエネレーターに当たったのか、爆散するファンタズマ。この時、すでに一夏たちのところまで移動している。

「流兄、その威力どうなってるのよ!?!」

「こいつじゃないと、腕が吹き飛ぶくらいだな」

アレックスとは違い、身軽になったそのISは常に瞬間加速以上の速度で移動している。体にかかる負荷は尋常じゃないに決まってる。

『計算してみたんだけど……ISの補助込みでも7Gがかかっているよ……どうなってるのよ』

やっぱり無理してるじゃんか。

「ロニーちゃん！ ファンタズマを引き寄せて！ 一夏くんを福音に近づけてさせる！」

おっと、楯無さんからのお願いか。

「わかりました！」

肩部と腰部のミサイルを斉射する。当たらないだろうから、目眩まじりに使って左手のパイルバンカーで……アラート！

「……ぐうッ！」

一瞬の警告音の後、鈍い音と共にいくつかの武装がやられた……バルテウス肩のキャノンに当たった!?

今のでSEが半分も……それよりも、該当武装をパージッ！

駆動系統にエラー発生……エネルギー配分再計算「ロニイ、下だ！」っ!?

『もらったぞ、621！』

いつのまにか真下にいた別のバルテウスが、火の剣を振りかぶってこちらに肉薄してくる。

そういえば、周りの確認を怠っていた。

まだ……死にたくない……！

そう思った次の瞬間、私の意識は別の場所に移った。

『やあ、レイヴン……君がああ機体を使ってるんだな』

ここは……前に一夏とラウラが言っていたISコアの、深層空間？

眼の前に現れた彼、その声は……

『ジョシユア……?』

その名前が間違っていないのか、彼は首を縦にふる。

『随分と懐かしい名前だ……昔にあいつに言われたきりだったか。アナトリアの傭兵だった彼……今は見る影もない』

「アナトリア……流星の過去を、知ってるの?」

『ほんの一部、という枕詞が付くがな……それで、話したい事はそれじゃないだろ?』

「……力が、ほしい」

そう言うと、ジョシユアの眉間に皺が寄る……そうか、なぜ力がほしいのか、知りたいのか。

『今の力を持ってしても、満足しないというのか』

「……うん、流星の横に立ち続けるにはもつと力がある！ その力がほしい！ 私は……死にたくないっ!!」

心なしか、眉間の皺が薄くなったジョジュアは口を開く。

『そうか……あいつのためもあるというのなら、主人の願いを聞き入れよう。』

……その力を、決して間違った使い方をしないようにな

『何っ!?!』

火の剣が緑から紫色になったコジマ粒子の発散によって弾かれた。だが、

『メインシステム、ダウン……でもなんで、ISが解除されてないの?』

それはね、ある人と話をしたから……かな。

『誰と話してたの?』

……秘密。

『はあ……またいつか教えてね』

わかったよ、またいつかね。

《メインシステム……戦闘モード、再起動。行くぞ、レイヴン》

『今の声……ISコア!? この光……トーナメントの時の!』

「これは……三次移行か!」

『面白くなってきたな、621!』

まだまだこれからだ……!」

「私は……621じゃない。

ロニイだっ!」

第38話 2つの決着

side 流星

3次移行、か……束はあると言ってたが、ロニーが世界初になるとは。

〔2次移行は数十例あると同胞が言ってたが……確かに3次は聞いたことがなかったな〕

変更点は……どこかアレサとナインボールの造形が増えたか？
んで武装がスッキリしたな。

両手に持つのはKARASAWAの……Mk2か。肩の箱はマイクロミサイルか？

そして一番気になるのはコジマ粒子が、薄紫になつてることか……
毒素はないだろうな？

汚染物質を測定………今のとこ無し、ね。また束と研究者達で調べ必要があるか。

「……いけるか、ロニー？」

「……うん」

この間にも、もう一つのバルテウスが全方位にミサイルを発射。すべてこちらに向かってくるが、それをビームマグナムから持ち替えたビームガトリングで迎撃する。

ロニーが頑張るといふのなら、俺ももっと頑張る法がある。

機動力が下がるが、サイコフレームを斥力に回せばどうにかなるし……あれ使うか。

「フアンネル!!」

背中についていた4つのアームドアーマーDEが外れ、それぞれが俺の意思によって空を駆け抜ける。

「そのISって本体だけなら随分スッキリしてるな。というか、これは……BTか？」

箒のISからエネルギーを供給してもらっているので、一旦前線から引いている一夏から話しかけられた。

というか、箒ももう単一能力出たのな。

「いや、それよりもいくつか機能が多いし、他にも………今はいいか。とりあえずこいつらは俺が動かしてるから、便利な盾でも思っ
といてくれ」

モノホンのＩフィールドで光弾とかビーム弾けるし、今のサイコフ
レームで本来より固くなった装甲でミサイル直撃でも少なくない数
耐えられるだろうな。

「……シールドビットとは言い切らないのね」

だってDEは防御機能の拡大……つまりいろいろな能力を持たせ
たものだからな。

「楯無、そいつに掴まって移動するのもよし、メガ粒子砲付いてるから
追撃させるもよしだからな。使いたくなったら勝手に近づく」

「さらつとんでもない事言ってる……？ それって僕たちの思考
を読んでるんじゃない……」

「……必要なこと以外は見えないようにしてるから、安心しろシャル」
流石にそんなことしたらデリカシー無いしな。

「エネルギー補給が完了したぞ……本当に、行くのか？」

お、一夏の準備が整ったか。

「ああ……福音の搭乗者を助けないと、いけないから………だけど安心
してくれ！ さつきみたいなへマはしないからな！」

「そ、そうか……絶対にケガはするなよ！」

……何かわからんが一夏と箒もイチャつけるようになったんだな。

「行け、一夏！」

箒の声援を後ろに、白式・雪羅となったISが擬似的に形態移行し
たであろう福音の元へ肉薄していく。

もちろん、福音もやられまいと反撃をするが……DEで一夏に襲う
光弾を弾いたり吸収したりで、反撃が当たる様子がない。

決めろ、一夏！

「いっけえええ——っ！」

白く流れるISは、雪片式型を福音の胴体に押し付ける。

零落白夜を起動した状態で斬れば、搭乗者ごとぼっさり逝くから
……いい判断をしたな。

SEがみるみる減っていき、ついに福音がこの場から消えた。そして搭乗者露出したのを一夏が受け止める。

そっちは終わったな。あとは……

バキーン！ という音がさつきから戦っている2機のバルテウスの方から聞こえた。何かを機体周辺に纏っているな。

あれはパルスアーマーか……？ 少なくともあれが剥がれないか、ゼロ距離のアーマー内でぶたないとあいつは落とせないことは分かる。

だから俺は次の言葉を発した。

「全員、ありったけの武器をバルテウスに当てろ！ 俺とロニイには当てるなよ！」

その言葉に応じたのか、福音の搭乗者を持つている一夏を除いた専用機持ちは次々に蒼流旋やら龍砲やらを彼奴等に向けて発射する。

時々変則的に移動……OB？ を使うので、命中率は決して高いとは言えない。だが、確実にダメージは蓄積していき……

『機体が……動かないだ?!』

ロニイが相手をしていたバルテウスのパルスアーマーが剥がれると同時にその動きを止めた。

ISならその程度でスタンはしないが……その点は、まだまだだな。

それを好機と見たであろうロニイは背後に回り込み、ブースターに蹴りをお見舞いする。

金属のひしやげる音とともに、ファンタズマのメインブースターであろう箇所が破壊された。

かと思うと、ロニイの持つKARASAWAや持ち替えたであろうとつつきによってバルテウスは原型を無くし、鉄塊となって海に落ちた。

そして俺が相手している方も、パルスアーマーが剥がれる。

俺もロニイと同じように肉薄しようとするが、残っていたファンタズマが一直線に突進して来た。しかし様子が変だ……

『待て……ファンタズマの出力が異常に上がってるぞ！ これは

……』

まさか、特攻する気か!?

「死なばもろともってか……生憎、まだ死にたくないのぞな!」

眼の前まで来たファンタズマを腕と足でいなす。金属の擦れる嫌な音と共に遠ざかった目標に、DE4機によるオールレンジ攻撃をお見舞いした。

さつき撃破したファンタズマよりも大きな火球を作って、最後のこいつをが倒れた。

『618、生体反応ロスト……残ったのは私だけ……だが!』

またパルスアーマーが展開された。何回でも張り直せるやつなのか……面倒だったらありやしないな。

次で決めようか。

もう一度皆でバルテウスを攻撃しパルスアーマーがもう一度剥がれた瞬間、機体のスラスタというスラスタとPICの出力を最大する。

ビームトンファアを両手分展開し、ミサイルが発射されない下からバルテウスに接近し……

「おらああああ——っ!!」

制御を担っているであろう人形の本体に突き刺した。

『くそっ……だが次は……』

トンファアを引き抜いてバルテウスを蹴っ飛ばすと、なんか意味ありな言葉を残して最後のバルテウスは爆散する。

というか……最後まで言えよな。

「「いやったああ——!!」」

(『任務、終了……お疲れ様だ』)

ああ、お疲れ、様……

「……眠っ!」

「……大丈夫か?」

「問題ない、マドカ。疲れた、ただだから……」

「そーいや俺、肋骨折れてるし、さつきまで心臓止まってたんだっけ……無理に体動かしたか。」

久しぶりに、疲れたよ――

side 束

「最後の敵も撃破！ 作戦成功です！」

IS学園の山田先生オパライ星人の一言で、作戦室が湧いた。

やっと終わったよ………いつくんのスタンドプレー悪くなかったね！

「くるちゃんおつかれサマンサー！」

「ああ、お疲れ……最後に一つ。流星が疲れてるようだから、受け入れの体制だけ整えたほうがいいんじゃないか？ あと………これを見てくれ」

「何タイツ!?!」

くるちゃんのドローンに写ってるこれは……

おうふ、思わず素っ頓狂な言葉が出ちまったぜい……りゅーくんのこの安心した寝顔、いつくんの笑顔並みに破壊力高いね……

「束、迎えに行くぞ」

「お迎え!?! 行く行くくく！」

「紅椿と白式の稼働データも十二分に取れたし、りゅーくんのアレスも復活したしで、私は大満足だよ！」

今私は空中投影のディスプレイを操作しながら、今回の整理をしている……うんうん、箒ちゃんのワンオフも発動出来てるね！

「……今回の件、お前が福音を暴走させたのか？」

「まさか……みんなを危険な目に遭わせたやつをけちよんけちよんにしたいくらいだよー！」

「悪い……愚問だったな」

もう、ちーちゃんじゃなかったらもっとポンプンだったよ？

まあ……最初にああいった私も悪いかもしれないけどさ。

「……ねえ、ちーちゃん。今の世界は楽しい？」

「そこそこ……いや、これから楽しみだ」

「ほうほう……そうなんだ！」

「そういうお前はどんなんだ？」

私？ 私はね……

「……私は今の世界がとっても楽しい」

何びっくりした顔してるのちーちゃん……私初めてそんな顔見たよ？

つまらないと言うとでも思った？

「それは……何故だ？」

「もちろん、りゅーくんがいることもあるけど……宇宙の研究もできるし、何よりもうすぐ恋人になるいつくんがいるからね！」

「そうか……お前が義妹になるのか。なんとというか……あまり実感が湧かないな」

そういえば、ロニイちゃん達がりゅーくんに告白するって言ってたね……ちーちゃんは どうするんだろ？

乗るのかな、このビックウエーブに？

「ねえ、ちーちゃん？ ロニイやかんちゃん達はもうすぐここでりゅーくんに告るみたいだけど……ちーちゃんは どうするの？」

「……別に今日や明日じゃなくてもいいだろう」

……え？ マジでつか、ちーちゃん？

「りゅーくんに告らないの?」

「別に一番になろうというわけではないからな……あいつに寄り添って
いれるのなら、後日になっても構わない」

ふーん……ちーちゃんにしては、珍しい回答だね。

「いつもより大人びてるね……あ! 見えた見えた!」

西日とともに、彼らの姿が見え始めた。

side 流星

ついにこの時が来たか……

(『……ああ、気を引き締めろよ』)

目の前にいるのは、ロニイ・簪・シャル・セシリア・のほほん・マ
ドカ・楯無の7人。これから何が始まるのかは……彼女たちの真剣な
顔を見ればすぐに解る。

臨海学校3日目の朝、朝食後にこの8人から呼び出され、今に至つ
た。

気を利かせてくれたのか、千冬は席を外してくれているのがせめて
もの救い……なのか?

彼女達は、同時に口を開き――

『私達と、結婚を前提に付き合ってください!!』

マジでつか……

一夏も一夏で向こうで箒たち4人に言われてる……一つの部屋で同時に告白されてるとか、何だこのカオス……

「……というか、誰か一人だけ……みたいな事にはならなかったのか？」

それぞれの口から、異口同音が出てくる。

「そんなことは……思いもしなかったよ？」

「それはみんなが損するから却下」

「それよりも、これならWIN—WINだしね！」

「流星さんなら、わたくし達を平等に愛してくれるはずなので……」

「りゅーりゅー、よろしく！」

「それでいがみ合うよりも、こっちの方がスマートだぞ？」

「流星は皆の共有財産だからね！」

共有財産で楯無は……でもまあ、

「……………こんな俺で、良ければ……よろしくお願い、します。

ありがとう……！」

(『流星、それは……』)

これは……涙か。本当に流したのはどれほど前だったけな。

『はい(うん)ー!』

今はただ本当に、嬉しい……………

幕間 ツイマツドの愉快的仲間たち4

ツイマツド社のIS製造所のある一室で、二人の男女がISを作りながら話をしている……

「そーいえぱりゆーくんのあ前のとき話にあんなに泣いてる顔……初めて見たね」

「嬉しかったんだよ……嬉し泣きはいつぶりだか……」

確か、前にそんな事あったのは……

最初の方でゼットというやつがいた頃だっけか。何の世界かは……だめだ、思い出せん。

……ただ、ある約束は覚えてるがな。

「……あ、その工具とって」

「これか? 「うん」ほい」

「ありがと……そういえば、いつくんは今何してるの?」

「あいつか? 今は……荷造りしてるぞ。ほら、ラウラと鈴の国元に挨拶に行かなきゃだろ?」

「ええ〜? あの嘘くさい国に? 裏で何してるかわからないよ?」

手を何故かワキワキしながら、そう話す束。まあ、実際怪しいことは否定しないな。

『『実際、ラウラがいい例だな。中国は……フルコースだったりするかもな』』

「そんな時はそんな時だ……何なら束も行くか?」

「うーん……今回はパスで。帰ってきたらた〜つぷり可愛がつてあげることにするよ」

「せいぜい、一夏とどんなプレイするか考えときな」

「うえっ!? プレイって……どうしよつか……」

顔を赤くしてもじもじし始める束。やっぱり天災といえど、そつちはまだまだ初心者だな。

ちなみに一夏は……見た目によらない、意外なあれがストライク
だったりするんだが……ヒットする日は来るんだろうか。

「そういうりゅーくんは、ロニイちゃんとどうだったのさ？」

「……ノーコメントで」

そんなの、人に言うもんじゃねえ。

「ちやくんと、皆を抱かないといけないよ？」

「言われなくても、皆を愛するつもりだ」

「うわ……ストレートに宣言したね」

宣言して何が悪い？ 相思相愛だぞ？

「はあく……なんだかんだ言って、いっくんという時間少ないんだよ
な……イチカニウム不足だあく」

イチカニウムで……新しい物質作るんじゃねえ。

ま、立場が立場だからしょうがないってのもあるがな……

「……IS学園の特別教師とかそれに類する者なら、合法的に近づけ
るんじゃ？」

「……いいね、それ。頼める？」

思いつきで言ってみたんだが……そんなにもイチカニウムを補給
したいのか？

「わかった。多分夏休み明けからになると思うぞ？」

ついでに暇してるスコールとオータムも引きずっていくか……？

（『……今彼女達の端末に情報を送っておいた。後で返事が来るだろ
う』）

仕事が速いな、助かる。

他にも雑談しながら、どちらもキーボードで入力しながら話してい
ると扉がノックされる。

「どうぞー」

「失礼する」

二人で最後の仕上げをしていると、部屋に副社長であるマ・クベ^{壺好}が
入って来た。

あいつはキョロキョロとしてから、俺を見つけて、口を開ける。

「ここにいたか、流星……して、この機体は？」

「お！ 久しぶりくまーくん！ この機体はねく……『ホワイト・グリント』！ りゅーくんの乗ったことのある機体を、ISサイズで再現してみました〜！」

「もしも、アレスが封印された時に、な。そいつが使えなくなっても、専用機乗れ……なんて言われそうだろう？」

「……なるほど。して、性能の方は？ 流星にアレス程ではないだろう？」

「第3世代機以上第4世代機と同等くらいか少し下だ。そりゃあな。作れんことないが……混乱招くだけだし」

「これでも随分抑えたほうだ。何なら紅椿に勝つてるところもあるほどだ。」

「というか、アレスは自分が使つててあまり言えないかもしれないが、いささか強すぎる。」

「アレスは機体の分類こそISとなっているが、性能を見れば現行のISが霞んで見える。」

「確かにねく……展開装甲をすべて速度に回したとしても、追いつけないもんね！」

「そう言ってるが……束なら、後数年すればアレスに追いつく機体とか作りそうだな。」

「……また登録の手続きを進めておく。それで、私が見る限りほとんど完成しているようだが？」

「ロニイの機体情報をもたらったんだよ。おかげでデザインがすぐに終わったし、あとは調整するだけだ」

「一番手間かかったのは、ISコアともう一つだもんね〜」

「実際一番手間かかったのはISコアとコジマジエネレーターで、作るのに半日掛かった。」

「……感覚がおかしい気がするが、気の所為と思いたい。」

（『気の所為ではない。半日でIS一機を組み立てれることは、普通の人はできないぞ？』）

うそん。

「……またISの教科書、改定しないといけませんね」

「467から468に、な」

実際は束が無人機を動かすためにもうちよつと作ってるが、それはご愛嬌だ。

パシユウ——……

ん？ 何の音だ？

「……あれ？」

「どうしました、束さん？」

「もう……誰か乗ってる？」

顔を元の位置に戻すと……確かに、さつきはなかった人と思われる体がISの中に見られる。

「……なんかやったか？」

「いやいやいやいや!! 私今コア載せたただけだよ! ほんとに何もしてないよ!?!」

『……ここは……どこだ?』

話せる、のか……??

「あー……もすもすひねもす?」

「それ私のセリフ……」

早いもんがちだよ。

『もすもす……心なしか、声も高くなってるし、変な機械身につけてる……どうなってるんだ?』

ホワイト・グリントは辺りを見渡し、キョトンと首を傾げる。

『さつきは……道路でトラックに轢かれたのに……どうして部屋の中にいる?』

トラックに轢かれた……? まさかとは思うが……俺とかロニー

達の、同類か?

「まず、解除……できるか? 出来なかったら解除って言ってみ?」

『……解除』

ホワイト・グリントが解除され、彼女の姿が顕になる。

とりあえず……

「……服、着ようか」

出てきたのは、高校生くらいの年齢であろう彼女は彼女でも、一糸纏わぬ彼女だった。

――

――

――

――

――

「つまりここは……異世界ってことお!？」

「そ。ISっていう後ろの人「どもく!」が作った機械がある世界だな。転生とか言うやつだ」

急遽売り物の服を渡した後、服を着た彼女とさつきと同じ部屋で話している。

ありがとう、繊維部門の方。

「くそう……AC6やっとなら買ったのに……」

立ち直るのに、時間かかって……待て。

「AC、6だと……!? 最新版が出たのか!？」

俺の最初の世界では、VDが最新作だったのに……!

「おう、10年ぶりにFROMが出したぞ!」

「また今度、詳しく聞こう……」

一方束とマは……

「なんでさらっと説明できるのか……?」

「そんなこと言ったら、まーくんも社員も、軒並み転生してるでしょ?」

「それはそうだが……普通は口では言い表せない物だろう? 一度死んでるんだぞ?」

「そうかもね……」

現在、かなり高度な話をしながら、すでに関係各所への発表準備を進めたり、論文を作っている。

こいつら仕事早すぎないか……?」

「…………この世界って、俺みたいな人多かったりするんですかね？」
「何を基準にしたらいいかわからないが…………うちの社員、半分くらいはそうだとと言えるな」

把握してるのはそれだけだが…………もつといたら問題とか起こって
そうだし。

「へえ…………自分から聞いててあれなんですけど、結構いますね」

「そうかも、な…………というかあんた、元は男だったんか？ 口調からして…………」

TSとかいうものか？

「おう。だから違和感が半端ないんだよ…………おまけにこのISもちよつと考えただけで…………」

眼の前の元男性がホワイト・グリントを展開し、「こういうふうにな」と言葉を続ける。

「そこは慣れだ。ガイノイドモドキのあんたが町中でIS出されたら問題になりかねん。絶対に慣れろ」

「ええ…………」

というか、人として成り立ってるこいつに戸籍持たせれるか？

見た目…………というよりか、ISの待機形態(?)であるこいつ完全な人であるし、何なら中身は転生者ときた。

どうせ、国から研究でデータ取れって言われるだけだし…………行けるか。うん。

無理なときはゴリ押そう。

(『…………羨ましい』)

シヤアの身体はもうすぐだ、待っつけ。

…………その時、禁忌を犯すことになるかな？

「名前、決めとかないか？ 流石にホワイト・グリーン子とかは嫌だろ？」

「それは嫌だよ！」

「だよな…………なら、『白隼 閃光』なんてのはどうだ？」

白い閃光と、元愛機のエンブレムのホルスの目Ⅱハヤブサから連想してみたんだが…………

「しろはや、せんこ……それに、しようかな？」

「というわけで、できたのがこの娘だ」

「よろしく、お願いします！」

『よろしくお願いしますっ！』

ツイマッド社まずは会社に今いる皆に挨拶をさせる。ちなみにI S製造所には全員は入り切らないので、一部はリモートで参加している。

「いやどういわけだよ!？」

「オータム……考え込むだけ無駄よ。素直に受け入れなさい」

「でもよお、スコール……I S作ったら人もできましたーってあり得るのかよ!？」

「この会社だもの……できてもおかしくないでしょう？」

「それ言われたら何も言い返せないじゃないか……」

先ほど送ったI S学園に行つてほしいことを承諾してくれたオータムとスコールが、何やら漫才を繰り広げている。

実際……他の世界から来たマッドで愉快的仲間がえつぐいジエネレーターとか作つてたりするからな。

「オータムとスコールは、閃光の訓練を頼んでもいいか？ 他の人も頼む予定なんだがな」

（『他の人とは……?』）

例えば……ロニイとか一緒にこつちに来た元MS乗りとかにな。

「私は構わないけど……」

「なんで俺達に頼むんだ？」

「機体が世界トップクラスに強くても、乗り手が強くなければ意味ないだろ? I Sを持つてるうちの中でも、手空いてるし」

「夏休み終わってからまた忙しくなるけどな」

夏休みが終わるまで30日強……できるな。

「そんだけあつたら十分だ。というわけで鍛えてもらいたい。最終的

には……国家代表候補クラス以上には仕立て上げたいな」

「国家、代表候補……ちよつと!? 俺に期待かけ過ぎじゃないか!?」

なーにびっくりしてんだよ……もともとAC乗りだったんだろ?

コントローラーだが。

「ホワイト・グリーン強いやつ持ってたんだ。それくらいの自衛力を持ってた方がいい」

「……」期待に添えるように、頑張ります」

今日、世界で初めてISガイノイドが発見され……後にISを擬人化したものが歌う流行があるのだが、それに閃光が「俺が……初○ミクになれるのでは?」と興味を持ち始めたのはまた別のお話。

夏休み編

第39話 お買い物

side 流星

今日は夏休み初頭の平日。千束とたきなはもう帰ったらしい……

『なぜ話すの楽しみにしてるんだ……』

喫茶リコリコにある小さなテレビを見てみると、福音 バルテウス戦この前のことがニュースになっていた。

だが、話している内容はというと、太平洋沿岸で爆発音が多く聞こえただの、青い光を見ただの、なにかの破片を見つけただの……これらは花火ということで落ち着いている。

情報処理、頑張ってるようだね……お疲れ様、ラジャータ。

というか……

「なぜDAから退避の司令が出てなかったんだミカさん？ あの司令が把握してないわけないだろう？」

「それが……楠木は私達の状況を知っていたようだが、上から何も言うなと言われたようだな」

「上層部、か……」

最近DAがISの抑止力を欲しがっていると巷の噂で聞くようになってきたが……

『ISは企業や国が管理しているはずだが、まさか暗部で使うのか？』

IS学園に入らざるを得ない状況を……まさか、な。

「まさかあんたが、千束の白馬の王子様だったとはねえ……ちやうど真つ白な機械使ってるし」

「……そういう言い方も、あるかもな」

テレビを見てみると、通常運転でお酒をグビグビ飲んでいるミズキから言葉が飛んでくる。いっつもほぼ決まった品種飲んでるが……たまには差し入れしてみるか？

「それで、いつ暴露しちゃうのよ？」

いつ、か……

「まだ完全に世間に公表したわけじゃないが、直に広まるだろうしな……そういえば、箝口令は言い渡されたのか？」

「あのよくわからない赤い機械ファンタズマと流星のISスについてねえ……あの感じだと、赤い方はDAでも確認できたみたいだけど、ISの方まではわかってなさそうね」

「まだ知られてないが……10年以上もいたら、どこかでボロが出てもおかしくないし……」

「……ということは、10年前の白騎士・白獅子事件から、あのISを使っていたのか？」

この喫茶内にあるお風呂から上がってきたのだろうか、風呂上がり感満載のクルミが先程から話を聞いており、こちらからも質問が飛んでくる。

「御名答、クルミ。相方は公表することはできないがな」

「お、おお……あっさり認めたな……ということは、ISの黎明期から動かせること知ってたんだな」

「……まあな」

「叩けば叩くほど情報がボロボロ落ちてくるわね……」

「今更中途半端に隠したところで……ちなみに、クルミは10年前、何歳だったんだ？」

「……ノーコメントで」

実際、クルミの見た目からしてネットの黎明期からいそう……じゃないよな。

その辺も後々にわかるのだろう「なあにみんなで辛気臭い話してるの？」か？

あり？　なんで千束がいる？

「んお？　なんでいるんだ、そんな可愛い服着て？」

「ナチュラルに褒め言葉吐くね……」

事実なんだ……そういうのは言ってもいいだろう？

（『……誑し』）

うつせえ。あんたは言えんだろ、ロリコン。

「……今日は、もうシフト終わったんじゃないのか？」

「忘れ物を取りにね。ほら、このカバン」

そう言っただけでさっき持ったかばんを持ち上げる。

「あー！ それとそれと……」

ん？ まだなにかあるのか？

「明日、たきなの服を見に行くんだけど……流星ももし良かったら、どうかな？」

「そういや海外に持っていく服、新調したほうがいいよな？」

（『そうだな……ついでに済ませるか』）

それよりも、そんな顔で見られたら断ることもできん。

「俺もついでにどうか。こっちも服買いたいし」

「ありがと！ ところで……」

たきなのパンツって、見たことない？」

いや、いつ見るんだよ。

翌日、北押上駅前であと千束はたきなを待っていた。

千束は白のショートパンツに黒のシャツ、ロング丈の赤いアウターを着ている。

対する俺は、デニムパンツに白いTシャツ、黒い薄手の上着を腰に巻いている。ちなみにサングラスで目元は隠している。

「お待たせしました」

声がる方に顔を向けると私服姿のたきながいたが……

私服は私服でも、部屋着。

こりゃあ面白い物に誘われる訳だ。

んでんで、何やら重心に偏りがあるけど……

「銃、持ってきたな。貴様」

「駄目でしたか？」

そりやあな。リコリスの服着てる時以外は、普通にアウトだろ。

「抜くんじゃねえぞ」

「千束と流星さんは、その衣装は自分で？」

「……衣装じゃなくて、れっきとした服だ。日常で着る、な」

目的の道中や洋服店で、周りからすぐくすごい目線が刺さってくる

……許せ、男共……

その目線に耐えること数十分、本来の目的を行うために一旦別行動を取る。

「適当に服見ておくから、そっちの服とか選んどいてくれ」

「うん！　また後でね！」

そこから数分……

「銃撃戦向けのランジェリーですかあ……ってそんなもんあるかあ
っつ！」

かなり離れてるはずなんだが……

あっちは何してるんだ？

服を選んでいると、シヤアから話しかけられる。

（『ミラーからメールが届いたぞ』）

オタコンから？

「ブラックマーケットには出回ってない、か」

オタコンから届いたメールを確認すると、それは銃や怪しい薬を
売っているブラックマーケットの相場一覧だった。特に春の事件以
降変化がないことがわかる。

……どっかの集団が叩き売りするのか、はたまたばらまくのか……

「その通りだよ。何で見せたの私!!」

……ほんとに何してるんだ？

目的を終えた二人が戻ってきたところに、俺からお願いをする。

「もしよければ、もうすぐ海外行くんだが……その時の服、一緒に選ん
でくれないか？」

「もちろん、よろこんで！」

その後、自分で候補を上げたものを一緒に選んでもらったり、いろいろな店をまわったが……千束のファッションセンスはかなりあった。

時は昼。

「フランボワーズ&ギリシャヨーグレットリコッタダッチベイビーケーキとホールグレイトハニーカムバターウィズジンジャーチップス……流星はどうする?」

「俺はこの莓ティラミスのミルクレープ、フランボワーズジャム仕立てでお願いします」

俺たちがそう注文すると店員は「かしこまりました」といい、店の中に入っていく。

「というか、なんだ。この長つたらしい名前は。よく一気に言い切れるな。」

「名前からしてカロリーが高そうですね」

「野暮なこと言わない。女子は甘いものに食欲でいいのだ」

「寮の食事も美味しいですけどね」

「あの料理長、元宮内庁の総料理長だったらしいよ」

「それってすごいんですか?」

たきなはこの事実がどれだけすごいことかいまいち分かっていないようだが……世界でも指折りの実力者だぞ?」

「当たり前だ。モノホンの皇族に料理振る舞ってた人だぞ……つまり、リコリスは天皇后陛下たちと同じ食事を食べてるってことだ」

「そう考えるとすごいですね」

「わかったか?」

「でも、スイーツ作ってくれないからなあ。永久にかりんとうだから」

それは……ちょっと損だな?

(『その者が作る和菓子など、美味いに決まってるだろうに……』)

「わたし、あのかりんとう好きです」

「そりやあなた、最近来たからだよ。10年あれだけは飽きるよ」
そんな会話をしていると俺たちの料理が運ばれてくる。

他のお客さんが少なかつたのか、思ったよりも早く運ばれてきたな。

「お待たせいたしました」

料理がテーブルに並べられると千束のボルテージが上がる。

甘いものが嫌いな女性はいない。甘いものを我慢できる女性はもつといない。

いや、これは偏見か。

「おほお〜〜！ 美味しそう!!」

「これは糖質の塊ですね」

「そりやそうだ。旨いものの構成物質は何かと体に溜まりやすいからな」

千束はたきなに軽く頭をぶつける。

「たきな！ 人間一生で食べられる回数は決まってるんだよ。全ての食事は美味しく楽しく幸せであれ！」

それはそうだ。密林で蛇とか熊食つてた俺に聞かせてやりたい。

「美味しいのは良いことですが、リコリスとして余分な脂肪はデメリットになります」

「その分走る！ その価値はこれにはあるよお。おいひい〜」

旨そうに食うなあ……誰かの金で食う飯は旨いって言うくらいだもんな。

俺も料理を口に運んだ時に、後ろの席で欧州系のふたり組がメニューを見ながら困っていた。言葉からしてフランス人……夫婦だろうか？

千束はそれに気付き、「ちよつと行ってくるね」と俺とたきなに断りを入れてからフランス人たちに助け船を出しに行く。

「……あの、流星さん」

「ん？ どうした？」

テーブルにたきなど二人つきりになったときにたきなが尋ねてくる。

「流星さんはどうやってそれだけの力を付けたんです？」

「それは……どの分野においてだ？」

CCCか、ガンダム、ACなどなど乗^り物か……いろいろあるんだが？

「DA本部での模擬戦で、全方位から発射される弾丸を避けることを可能にする異常な身体能力、接近戦の強さ……千束をなぜ圧倒出来る力を持つてるのですか？」

「ああ、それか……」

まず、だが……あれは、勘と経験

「それだけ……？」

「そう、避けるのは千束と同じように色々見てるからな。勘の方も戦場に何回も放り込まれたら嫌でも身につく」

「……それでも、十二分に異常なんですけど」

それは……そうだな。

「後、千束にどうやって勝つか、だが……」

「どうやって勝つんですか？」

「とにかく、相手が思いつかないことやってみな？ 所謂逆転のくつ

てやつだ。他にも色々なわけじゃないが……まずはそっからだ」

「……なるほど、逆転の発想。勉強になります」

「うん、そして後は俺がどうやって力を付けたということだが……」

たきなが真剣な目で俺を見ている……ここからファンタジックな事実になるが、受け入れるだろうか？

「……実はな、たきな。俺の記憶には核戦争を何度も止めたり、宇宙で戦争をしたものがあるんだ」

そう言った瞬間、たきなが疑惑の目を向ける。

「真剣に聞こうとした自分がバカみたいですよ。あなたも千束と一緒に映画の見すぎなんじゃないですか？」

そんな見てないんだが……

（『学園の方で簪と結構見てなかったか？』）

oh……ずいぶんとご立腹のようだ。

「嘘じゃないんだが……」

「……え？」

そんなときに千束が席に戻ってきた。

「ふたりで何話してたの？　ってたきな？　なんか怒ってる？」

「千束は流星さんがどうやって今の技術を身につけたか見当が付きま
すか？」

「ええ、流星のこと……私もさっぱり」

その言葉の後、「そうですか」とたきなはこれ以上は聞いてこなかつ
た。

少し、空気が悪くなってしまったがそれを千束が手を叩いて打ち消
す。

「はい！　この話しは終わり！　食べ終わったら良いところへ行きま
す」

千束はそう言って自分の料理を口に運ぶ。ホントに旨そうに食べ
る。

守りたい、この笑顔。

次に向かった良いところは、水族館。

「いいところってここですか？」

「うん、綺麗でしょ。ここ。好き」

「よく来るんですか？」

たきなのその問いに千束はポーチから自慢げにあるものを取り出
す。

「年パス。気に入ったらふたりもどうぞ」

それねえ……年に何十回も行くなら買うけどな……

そんなことをいいながら、三人で水族館を回る。

そんな中で、たきなはタツノオトシゴが気になったようだ。

「どうしたの？」

「これ、魚なんですって」

「まじ！　ウオだったのか、こいつ」

「この姿になった合理的理由があるんでしょうか？」

「ご、合理？　り、理由？　え？」

「何かあるでしょ」

「タツノオトシゴはまだ解明できていない部分があつて諸説あるがこの姿が、一番プランクトンや小エビといった餌を捕食しやすいからだとされている」

「そうなんですネ」

「後、味は悪くない。卵持ちなら、最高だな」

「……食べたことあるの？」

ウゲツとした顔で見ないでくれ。

「その時は食べるもの無かつたんだ。許せ」

次に見えてきたのはチンアナゴだった。たきなはまた、スマホで調べて「これも魚ですか」と呟く。

勉強熱心だな、たきなは。俺の隣で両手をあげてゆらゆらと揺れているこいつと違って。

「……何をやってるんだ？」

「え？ チンアナゴだけど？」

「人が見てますよ、目立つ行動は……」

「なんで？」

「何でってわたしたちリコリスですよ」

「制服来てないときはリコリスじゃありません」

リコリス関係なく、他の客がいる……羞恥心というものが無いのか？

「たきな、お前の相棒だぞ。あいつに羞恥心というものを教えてやれ」

「……流星さん」

「ん？」

「わたしはもう既にちよつと諦めています」

たきなは既にそこまで来てしまっていたのか……

別の場所でも、千束はゆらゆらと揺れている。

そろそろ止めてほしい。恥ずかしいから。

たきなはそんな千束に話しかける。

「千束」

「ん〜？」

「あの弾、いつから使ってるんです」

あの弾とは……非殺傷弾か。

千束はゆらゆらするのを止めてたきな隣の隣に座る。

それにしても、たきなはどうした？ さつきもカフェで俺のことを聞いてきたし。

「なあ〜に、急に？」

「旧電波塔の時は？」

「あの時、先生に作ってもらったんだ」

「何か理由があるんですか？」

「なに？ 私に興味あんのお？ 流星にもカフェで聞いてたし」

「タツノオトシゴ以上には」

「チンアナゴよりも！」

「茶化すならもう良いです」

たきなは呆れたような声で返事をする。

俺がさつきカフェでちゃんと答えなかつたことが尾を引いているようだが……いやあれちゃんと答えたよな？

そんなたきなに千束は自分の気持ちを正直に話し始める。

「気分がよくない。誰かの時間を奪うのは気分がよくない。それだけだよ」

「気分？」

「そう！ 悪人にそんな気持ちにさせられるのはもおっとムカつく。

だから、死なない程度にブツ飛ばす！ あれ当たるとめちやくちや痛いよ〜。死んだ方がましかもお」

そんな千束の答えにたきは笑う。

「なあんだよ。変？」

「いえ、もつと博愛的な理由かと。千束は謎だらけです。流星さんもですけど」

「mysterious girl! そうかあ、そんな魅力もあったか私い。でも、そんな難しい話しじゃないよ」

「したいこと最優先、か？」

「そうそう！ わかつてきたね〜？」

と、ここでききなから質問が飛んでくる。

「千束はどうしてDAを出たのですか？ 殺さないだけならDAでも出来たでしょ？」

「うん、それもあるんだけどお……」

「それも？ そうしたいって全部それだけ？」

「人探しい。二人いて、一人はもう横にいるんだけどお……」

俺？ ……旧電波塔のことか。

「……その節はどうも」

「……もう一人は？」

「その人は、大事な……大事な人。その人を探したくて」

千束は目をつぶり首から下げている梟のペンダントに手を当てながら話す。

その後、直ぐにたきなに梟のペンダントを見せる。

「知ってる？ コレ？」

それは……アランの。

休憩所で座りながらたきながネットに載っているアランチルドレインのチャームと千束が持っているものが同じであることを確かめていた。

かなり長いこといるので、飲み物を二人に渡している。

「確かに、同じですね。何の才能があるんですか？」

「わからなあ〜い？」

千束は壁に貼つてあるポスターの女優と同じポーズをとる。

うん、それじゃないのは確かだ。

「それじゃないのはわかります」

「右に同じ。さっさと座れ」

「ウグツ!？」

俺とたきなのダブルコンボをくらった千束はテーブルに伏せる。

「自分の才能が何とか分かるう〜？」

「何かあると良いですけど」

「そんな感じですよ」

「何言つてんだ。二人共才能ならあるぞ?」

「へ?」

ふたりが俺に目を向ける。

「たきなは正確無比な射撃だろ?」

「いえ……あれは、訓練したからであつて才能というわけでは……」

「いいや、あれだけは正確な射撃は並の練習じゃ手に入らない。相当、訓練を積んだと思うし、何かに一生懸命になれることはそれ自体が才能だよ」

実際、腕は今まで見てきた中でも、最上位クラスだからな。

「あ、ありがとうございます」

たきなの顔が少し紅くなっている。

何だ? 風邪か?

「ねえ、流星! 私は!」

千束が目をキラキラさせて聞いてくるが……

「千束の才能は、バカ正直なところか?」

「なつんだと〜!」

まあまあ、そんなむきにならなくても……

「……というのは冗談で、目の良さじゃないか? 筋肉の動きを服越

しで見れる人つてそうそういないし」

「そつか、やっぱりその部分なのかな? ……あーあ、ほんとにどこにいるんだろ……」

千束がぐでぐとなった時、たきなはおもむろに立ち上がり、水槽の前で両手を合わせてつき出すように前にだし、片足を後ろに上げ魚のポーズをとる。

「さかなあ〜!!」

千束を励ますためだろうか。そんなたきなに千束は近づきたきなの隣でチンアナゴの真似をする。

「チンアナゴ〜!!」

「ほらほら、流星も一緒に!」

俺もか? それなら……

「イツカク!!」

ISの頭部、それもアンテナの部分だけを展開して魚の方のイツカクをまねてみる。

（『……使用方法を間違えてるぞ』）

……何してんだ俺は。

うん、思った以上に恥ずかしい、がなぜか笑みが溢れる。

千束も笑っているようだ。

そんな俺たちに釣られてたきなも笑顔になる。

「それ、隠さない方がいいですよ」

「え？ そう？」

「ええ、めっちゃ可愛いですよ」

どこか別の場所で千束が言ったことの意趣返しか、千束がその言葉に反応する。

「ああ〜！ こおいつ〜。ほら！ ペンギン島いくぞお〜！」

「ペンギン!?!」

千束の後にたきなは続く。

「流星も〜！ そんなどこにいないで早くう〜！」

「今いく」

……ユニコーンツ！ って何でかわからんが、言いたかったな。

水族館からの帰り道、あることに気づいた。

……リコリス？ それも、サードばかりでセカンドやファーストは見当たらない。

千束とたきなの顔も険しくなっている。

「リコリス？」

「何だか多いですね」

「駅が使えんな」

ISでひとつ飛びするか？

（『問題しかないぞ』）

駅が封鎖されていることで駅前に人だかりができているがその時、地下から爆発音が響いた。

「何かあったんでしょうか?!」

たきなが私服のまま事件現場へ行こうとするので千束が止める。

「私服で銃出すと警察に捕まるよ。制服来てないときはリコリスじゃないって言ったでしょ。今日は帰ろう。ほら、戦利品も多いし」

爆発音と共に地面が揺れ、入り口から粉塵や瓦礫が吹き出している。

「大丈夫、なのでしょうか……」

「大丈夫さ……」

ダグザ達がいるからな」

side ダグザ

「あ、あの……ここまでする必要ってあったんでしょうか？」

「……正直言つて、わからない」

「ええ……」

俺と隊員、サードリコリス達が乗っている、地下鉄車両の壁が異常に盛り上がっている。うちの技術者変態が作った強化フレームらしいが……俺も正直これがあるのか疑問だ。

だが、流星の勘が間違ってることは少ない。

目標のいる駅に近づき始めたのか、列車が減速を始める。

窓ガラスは蜂の巣になり……かと思ったらすぐに砕け散って車両にはフレームだけが残る。

全員扉の横や座席の下で、これをやり過すのは織り込み済みだ。

敵の一掃射が終わったところで、俺達は身を乗り出して目標に発砲する。

「何っ!? お前たちだけじゃないのか!？」

次々に倒れていくつなぎを着た男が血を吹き出しながら次々に倒れていく……しかしコートを着た緑髪の男が、腕に被弾しながらも柱の後ろに逃げ込んだ。

……グレネードでも放り投げるつもりか？

『隊長、上を……！』

あれは……リモコン爆弾！

『各員、車両に逃げ込め！』

その言葉を聞いた部下は、周りのリコリスを引き連れて車両に駆け込む。

柱の向こうにいる男はその言葉を聞いてボタンを押したのか、天井が炸裂する。

『何呆けてる!? 巻き込まれるぞ！』

「……きやつ!？」

呆然と立っていたサードリコリスの腕を引っ張って俺も車内に転がり込んだ。

さつきまでサードのいた場所に、天井が落ちてくる。この世界では、できる限り死体は見たくないのな。

もちろん、俺達の入り込んだ列車の上にも砕けた天井が降ってくる……が、

『こいつ補強してなかったら、今頃ペしゃんこになってましたね……』

「……ああ、そうだな」

列車の一部が凹んだだけで、サンドイツチになることはなかった。

「……ありがとうございます。引っ張ってもらえなかったら今頃……」

「それはすべて終わってから聞く。ここから撤収するぞ」

作戦は失敗、目標を完全に仕留め切れなかったようだ……

『こちらブラボー！ 華が一輪も潰れることはなかったぞ！ ちよつとだけ傷んだやつもいるが……そっちはどうだ？』

「こちらアルファ。こっちはほとんど傷がない。負傷者の手当をしておけ」

ランバ隊から死者なしと報告が入ったのでこちらも死者なしと報告する。

『ブラボー了解！ お前たち、動けるやつはリコリスの手当をしろ！

慎重にな！』

生きて帰って何が起こったか報告することができ……どうやら、
今回も流星に助けられたようだ。

side none

同時刻 BAR Forbiddenにて……

吉松シンジは旧友であるミカと行きつけであるこのバーで待ち合
わせていた。

「何故戻ってきた？」

ミカの問いにシンジ冗談交じりに答えるとミカは直ぐに本題を切
り出してきた。

「ミカに会いたかったからさ」

「からかうんじゃない。千束だろ？」

シンジはまだ幼かった頃のあの子達の顔を思い浮かべる。

「千束も私を覚えていなかったな」

「千束はあの時一度見ただけだ。無理もない。シンジ、何故言っ
てやらない？ 千束はずっと君を探してるんだぞ」

「アラン機関は支援した対象に関わることを禁じている。話したろ」

「矛盾してるじゃないか。それなら店にだって来るべきじゃない」

「消えろ……と」

その言葉にミカは慌てて否定する。

「そう言うつもりじゃ……」

「……ミカ、約束は守れているのか？」

「ああ、もちろんだ」

「天才は神からのギフトだ。必ず世界に届けねばならん。類希なる
……殺しの天才をな」

シンジは、ミカの店で出会った成長した彼女の顔を思い起こす。

そして……

「尾白、流星か……彼も、類稀なる才能を数多く持っているようだ」

「……流星にもアランの施しをかけるのか」

「いや、まだ決まっては無いがね」

side 千束

翌日 喫茶リコリコにて……

私はたきなのロッカーを漁る。いや、漁っているという言い方には語弊がある。たきなのロッカー内にある男物のトランクスを処分するため、朝早くから出勤し、たきなの許可も得て処分しているところだ。私は次々にたきなのトランクスをゴミ袋に入れていく。

「はい、捨てます。捨てます。これも捨てます。捨てます。捨てます……す」

最後の一枚を手を取ったときにたきなのセリフを思い出す。

(これ、いいんですけどね。通気性もよくて動きやすい)

……別に、いいよね？

今、はいているパンツを脱ぎトランクスを履く。

「おお、これは!!」

「良い!」と言う前に更衣室のドアがミズキによって開けられた。

よりにもよってミズキに。

「千束〜! サボってないd」

私はなんとか言い訳を出そうとするが……

「いやあの、これは」

これには深い理由がありましたね？

「いやああああ!! ハアレエンチイイイ!!」

違うと何度も訴えるがミズキは私の首を締めて何かを吐かせようとする。

「おまつ!! 男のところに泊まってきたな。流星だろ!! やっぱりあんた達、もうそう言う関係でっ! あたしへの当て付けか!? そうだろ、あたしより先には行かせないからっ! 不潔よく、不潔!!」

ミズキの勘違いをどうやって解こうかと思っているとたきなが私

の前に現れた。こんな時は正直に言う他ない。

「たきなの！ たきなのだから！」

私はそう言いたきなを指差す。

それを見たミズキはたきなの方向に向かい遠慮なくスカートをたくし上げた。

「可愛いじゃねえか」

たきなは早速、昨日買った下着を付けているのだろう。それは嬉しい限りだが、この瞬間だけはトランクスを履いていて欲しかった。

「いや、だから、それを昨日買った……？」

どこに行くの!？」

ミズキは店の方に移動してしまう。

「え？ あつちよいちよいちよいどこへ？」

「みなさあん、このお店に裏切り者の嘘つきやろうがいますわよお」
「うわああああ、止める止める止める止める！」

そう言いながら走ってミズキを止めようとするがミズキにかわされてしまい、スカートをまくられる。

「ひらり、らっしやいやせえ」

今度は羽交い締め合い、目の前に扇風機をクルミに置かれ風でスカートが捲れる。

お客さんにも見られて恥ずかしい中、喫茶店の扉が開かれ特徴的な黒髪が見える。こういうときに頼りになる彼がやってきた！

「おはようございます、今日は早めに……」

挨拶をして流星は店に入ってくるなり私たちに目を向ける。

「流星！ 早く助けて、お願いします!!」

流星はそんな私を見て、数回瞬きした後、

「……おじやました」

店に入らずにそつと扉を閉める。

「いやいやいやいや、なんで!! 助けてよ!! たきなも笑ってないでさあ〜!!」

第40話 世界旅行 in ドイツ

side 流星

「ファーストクラスって、なんだか緊張するな……」

「今更だ、もっとリラックスしとけ」

ヨーロッパに向かう機内、なんだか落ち着きのない一夏と話す。

俺たちはまだ数年先だが、正式に国際結婚をする……それもかなり政治的にも意味のあるものだ。

「まずはラウラのいるドイツか……」

「ラウラの部隊との挨拶と、閣僚の話になるだろうな」

「うーん……また緊張してきた。入ったばかりの時はこんなことになるなんて思ってもなかったし……」

「まだつくまで時間あるんだ、気が持たなくなるぞ？」

「向こうでは朝につくんだっただけ？」

「そうだ。今のうちに寝とけ」

なぜ俺たちが海外に行くことになったのか。

それは、相手が所属している国に顔合わせしてほしいと政府やら国連やらに懇願されて、今に至る。

ほんと、入学した時の俺に行ったらどんな反応するのやら。

（『驚くことに、違くないな。して、どうやって驚くのだろうか……』）
イギリスやドイツが俺達を国賓として迎えるといったもので、移動

費は向こうが持つてくれる。そんな高待遇しなくてもいいって
言っただのに……

フィアンセ達は代表候補生。本国に帰ってデータの提出などをして
いるはず……楽しみだ。

「ドイツはどっちも2年ちよつとぶりか」

ちようど、第2回で一夏が誘拐されたときだったな。

「そういえば、あの時助けに来てくれたのちゃんと手続きしてから入
国したか？」

「……そのことは言うな」

side 一夏

「待つてたぞ！ 嫁とお兄ちゃん！」

空港で待つていたのは、いかにも軍人といった服装をしているラウラ。しかしその顔だけは、軍人とは思えないほどにっこにこしている。

「ラウラ！ 元気にしてたか！」

「うむ、元気そのものだぞ！ そつちこそ、夏風邪など引いてないだらうな！」

「当然だ！ ラウラを待たせるなんてできるか！」

「そ、それは……嬉しいな……」

ラウラはモジモジして……なんか、別の世界に行きかけてないか？

「……一夏もそういうことと言えるようになったんだな」

「もとから言えるわ！」

……まあ、好意には気づかなかったんだけどな。

「……ハッ！ ……ま、まずは大統領のところへ挨拶に行かなくてはな！ 車をロータリーに用意しているから、ついてきてくれ！」

持つてきた荷物をトランクに載せ、大統領が待つているという官邸に車が走っていく。

「失礼します！」

さつき廊下ですれ違った初老の男性を見て、流星が何度もまばたきをしてたけど……そんなにびつくりする人なのか？

確か何代か前の大統領で名前は……デギンさん、だったっけ？

「一旦見張りはよいておくれ。4人で話したい」

椅子が後ろを向いていて、まだ顔は見えない大統領が執務室を4人だけにする。

「どうか、なんかヘルメットかぶってないか……？」

「ようこそ、ドイツへ。あなたたちのことは、よくマから話は聞いていますよ……キヤスバルの方も、元気かい？」

椅子が回転し、大統領の素顔が見え……なかった。何やら鼻まで隠れる布を着けている。

流星の、コア人格のことを知ってる……!？」

「……………」

『……あなたもいたとは、キシリア』

「どうしたんだ、シヤアさんにお兄ちゃん？」

流星のISにいるあまり話さないシヤアさんが喋った!？」

それに流星が……フリーズしている!？」

「元上司との再開に、言葉も出ないとは……昔と変わらないようだな、尾白」

「……………恐縮です……キシリア閣下」

口をパクパクしつつも、かろうじて言葉をひねり出した。

「今はそんな大層な肩書を持ってない。キヤスバルの様にもっと砕けた言い方で構わないさ」

「……はい、キシリアさん」

元上司に、閣下……？」

「……ああ、私も元々は流星がいた世界からやってきたのだよ」

ここにもいたんですね、転生者。

「そうだったのですか、大統領……!？」

「くれぐれも……このことは内密にな、ボーデヴィツヒ」

大統領っていうくらいだから、もっとガチガチな人だと思ってたんだけど……

思ってたより、話しやすい人なのかな？

「ボーデヴィツヒと共に、そこにいるビビリの昔を見たのだろうか？」

「はい……今まで流星がどんな経験をしたか、見ました」

今まで、流星がどれだけ耐えてきたかも……

「それで、そんな彼を受け入れるのだな。ボーデヴィツヒは受け入れるとすでに聞いているが」

「もとよりそのつもりです」

その言葉を聞くと、少し表情を柔らかくしてキシリアさんは流星の方を見る。

「……いい仲間を持ったな、流星」

「……はい」

「2年前にISで入国したことも、目を瞑つといてやろう」

「……すみません」

何かとこの人に弱いな、流星？

「さて、本題に入ろうか」

キシリアさんがまたこちらを向いて、本題の話始める。

「ラウラと、結婚したのだろう？ 早いものだな。ギレンもさつさと

気付けばいいものを……」

「法律的にはまだ……ですけど」

ギレンさん？ ご兄弟か何かだろうか……？

「どっちみち変わらん。」

ちやんと、愛せるのだろうか？」

っ！ この圧……流星の戦闘時に似た……！

「……キシリアさん、それはよした方が」

「こっちの話だ。今は首を突っ込まないでくれ、尾白」

流星の助け舟も切り捨てられる。

ここは俺一人でなんとかしないと……

「そんなこと……聞くまでもないです、大統領」

そう言つてラウラが俺の手を握る。彼女は、本気なんだ……！

「ドイツの冷水と言われたボーデヴィツヒが……」

自分の思いを、伝えればいい！

「俺は……どんなことがあっても、ラウラを離しません！」

流星は固唾を飲み込んで、キシリアさんの結果を待ち、ラウラの耳が真っ赤になる。

……俺も、恥ずかしくなってきた。

「その覚悟があるなら……ラウラを幸せにしなさい、織斑一夏。流星も、頼んだよ」

数秒の沈黙の後、キシリアさんがそう言って微笑む。

「は、はいー!」

これで、良かったみたいだ……

「はっ!」

「だからそうかしこまらなくて良いとittedらろう、流星」

次に向かったのはラウラの所属している『シユヴァルツエア・ハーゲン』のいる基地だ。和名は黒兎部隊という。

基地自体の構成は、他の部隊もいるようで、滑走路があつたりユーロファイター、トーネードという戦闘機や攻撃機が格納庫から顔を覗かせている。

他にも戦車や野砲が入ってそんな建物があちらこちらにあり、いかにも軍事基地という感じだ。

そんな場所の入り口に並んでいる隊員さん達、その中でも一際大きな男性……

「歓迎するぞー! ラウラのお婿さんに尾白中s……流星! 私はドズル・ザビだ、よろしく頼む!」

ここの長であるというドズルさんから歓迎の言葉が大声で飛んでくる。

かなりいかつい人だな……顔の傷とか。

「あつちこつちに知ってる人がいる……」

ドズルさんは、キシリアさんのお兄さん……そういうことか。

「今日一日は、二人共ゆつくりしていつてくれ! 辺鄙な軍事基地で周囲の街を観光してくれればいいが……良ければヘリコプターや戦闘機に乗ってもいいぞ!」

……そんなのに乗っていいのか? 空飛ぶ国家予算なんて言われてるのにな?

でもこんな機会ないから……後で乗せてもらおうかな?

「もし良かったら……後で乗せてもらえませんか？」

「もちろんだ！　ここドイツのナイトフライトの夜景が素晴らしいのでぜひ見せよう！」

「ありがとうございますー！」

夕食前に、またお願いしようか。

「……凄かったな、夜景」

食後に酔い覚まして夜風に当たりながら基地をラウラと歩いている。

……基地デートっていうのかな、こういうの。

「ロマンチックだっただろう？」

「うん、すごく綺麗だったな」

そういえばヘリコプターは流星、ドズルさんが一緒に操縦してたけど……

すんごいドズルさん泣いてたよな。昔話でもしてたのか？

「初めてのビールは、どうだった？」

「うーん……苦いことしかわからなかったよ」

初めて飲んだビールのアルコール？　がまだ身体で廻ってるのかわかる。（ドイツでは16歳から飲酒OK）

体が、ちよつと火照ってる感じがする……変な気分だ。

「にしても流星……ジョッキのイッキ飲み、何回してた？」

「10回以上はしてたな。17歳であれほどの酒豪とは……お兄ちゃんはやっぱり凄いな」

あれで酔っ払ってなくて、まだ隊員達と飲んでる。

ホントはやっっちゃいけませんよ、そんなこと。

「あなたは……」

他にも基地を回っていると、ラウラに似た眼帯をしている女性と出会う。巡回してるのか？

最初の時にもいた彼女は……

「私は黒兎部隊副隊長、クラリツサ・ハルフォーフです！　この度は隊長の嫁になっていただきありがとうございますー！」

「……どういたしまして？」

「なぜ疑問形なんだ？」

……この人がラウラに色々間違ったこと吹き込んだ張本人だな？

「あの……日本の知識はどこで学びましたか？」

「日本のマンガやアニメから学びました！ 日本の文化はすごいですね！ 人のまま空を飛んだり手からビームが出るんですよね！」

うん……そんなわけないな。

「あの、後で本を渡すので一度……学びなおしてください」

『にほんのぶんか』と銘打たれた本をクラリツサさんに手渡すために持ってきたのだ。

「わかりました、後でじっくり読ませてもらいます！」

そう言って、別の場所へと歩いていくクラリツサさん。

これで治るといいけどな……

と、思っているとラウラの歩みが止まる。

「……一夏」

「どうしたんだラウラ？」

「世話の焼ける部下と一緒に……」

……これから、よろしく頼むぞ

「もちろんだよ」

そのまま自然な成り行きで二つの影は一時、一つに重なった。

「ありがとうございます、ガルマ外交官。本来の業務を先に済ませて
いただいて……」

「礼に及ばないさ、こんな時くらいは……一夏くん達と旅行を楽しん

でくるといい」

そのまま基地で一泊した翌日、ベルリン駅。フランス方面へと行く列車の扉で外交官のガルマさんが見送りに来てくれた。

この人も、キシリアさんやドズルさんと一緒……だな。流星と仲良さそうだし。

「日本に来たときは、ぜひこっちの会社に来てくれ。歓迎する」

「ああ、楽しみにしとくよ。その時には……もうひとりの旧友の顔も見れるだろうね」

うん、ずっと昔から知ってるような話の内容だな。

「一夏くん、これは私的なお願いなんだけどね……」

「……どんな内容ですか？」

「ミネバという僕の姪がちょうど旅行中で……もし見かけたらよろしく頼む」

……本当に私的な内容だった。ザビ家の人たちって……案外、

……ファミコン？

「わかりました、その時は任せてください」

「ありがとう」

そうこうしている内に列車は発車時刻に。荷物を列車内に運び終えて手を降つてくれるガルマさんに手を振り返す。

「バナージ君に声そっくりだったな……」

……ん？ 扉閉まる音でわからなかったけど、なにか言ったのか？

………まあいいか。

次に向かうのは……

フランス。

シャルロットが待ってる地だ。

基地で撮った集合写真の時、俺たちのIS出す中で流星のIS見た人びつくりしてたな……

話題になりすぎるから、写真の方にもほんのちよつとしか映らないようにしたけど。

一方その頃、日本にいる白隼閃光は……

「ねえ、この大群何？」

「……頑張ってください」

『愉快的遠足の始まりだ！ 役立たず共！』

フルダイブの仮想空間で量産型IS、50機の相手をしていた。

第41話 世界旅行 in フランス

side 流星

『流星、今からあの準備に取り掛かる。ISは起動できるが……話す
ことができなくなる』

了解。失敗はするなよ。

『……ああ』

ベルリン中央駅から出て、パリ北駅行きの列車に揺られること約9
時間。

途中、ドイツを出るときにガルマからもらった昼食をはさんで、向
こうについたのは17時。

「起きろ一夏、もう着いたぞ」

「ふあ………んあ………着いた、か」

寝ていた一夏は大きくあくびをして、背中をパキパキと鳴らす。

「うむ。もうここはフランスだぞ。降りる準備はもうしてある」

「サンキュ、ラウラ」

そして俺たちは列車を降りる……

「いらっしやい、織斑くんにボーデヴィツヒさん……そして流星くん」

降りた先で待っていたのは、スーツ姿の恰幅のいい男性、アルベ
ヌさんと……

「フランスによるこそ、流星！」

「やあ、シャル……似合ってるな」

ドレスのような服装をして出迎えてくれるシャル。

「えへへ……流星もその服、にあってるよ」

「どうも。そういつてもらえると、選んだ甲斐があるものだ……アル
ベヌさん、このあとはどうしますか？」

「今日はもう遅い……ディナーとホテルを用意してるから、ゆっくり
していつてくれ」

ミシユランのマスコットキャラクター

マシユマロマンモドキが星を3つ付けたレストラン。

冗談抜きで、一皿一皿が洒落にならない値段の料理が前にいくつも

置かれている。

そのためだろうか、一夏の動きはぎこちない。あいつだけFPS10の世界になってる。

「一夏くん……そんなカチカチにならなくても……」

「……一夏、こういうところには来たことないからな」

そんな一夏を、ラウラがテーブルマナーを教えている。

……ほのぼのとした雰囲気だ。

「……そういえば、ストライクの方は順調ですか社長？」

「今は試作機の試験中だ。もうすぐで、その試験も終わるところだよ」
アルバーヌさんの見せてくれた映像では、オレンジ色のストライクが宙をいろいろな機動で飛び回っている。

ラファールそっくりな4枚のスラスターをつけてるが……新造したのか？

「出来ればこれを見て、改善点があれば教えてもらいたいのだが……」
そう言われてもう一度画面を見直す。

「うーむ……もう少し、リンクの感度を落としてもいいかもしれない」
「その心は？」

「心なしか、登場者が機体に振り回されている傾向が見られます」

よくよく見ると旋回が内側に食い込みすぎたり、急加速、急減速が見れる。

「この操縦者はそれでもかなり技量がありますが……彼女基準なら、8%くらい落としたり使いこなせると思えますよ」

「……なるほどな。これで、シャルロットの機体開発が進むよ。ありがとう」

待て……この操縦者、シャルだったのか!?

「随分と腕が上がってるじゃないか……見違えたぞ」

「うん。こつちでも、訓練は頑張ってるからね。流星に負けてられないよ」

あれを見てたら、その上達具合が実感できるが……

「俺も休んでる暇はなさそうだな」

「……もう一端の夫婦だね、二人とも」

「……そう、ですかね」

他人からそう言われるのは少し照れる……な。

「シャルロットもだが……私達も負けていられない……」

そこで、独自で第3世代機の開発を進めているんだ」

「へえ……自信の程は？」

ヤンキー精神……それ、嫌いじゃありませんよ。

「流星くんあのアイデアに負けない、傑作だ！」

かなり自身のあることで……

「……良ければどんな内容か、聞かせてもらっても？」

「それは……流星くんでも秘密にして置いとこう。完成したら、真っ先に教える」

流星にリークするのは無理か。でも、

「……楽しみにしますよ」

「ああ……そろそろ本題に入ろうか」

アルベールさんは椅子を座り直して、こちらをまっすぐ見つめる。

「シャルのことですか……」

「お父さん……」

「……早速結論を言おう。一人の女性すら、愛することもできなかつた私だ……とやかく言う権利はない。」

むしろ、シャルをお願いしたい。私からはそれだけだ」

……あれ？　なんか一悶着あると思ったが……

「……案外あっさり終わりましたね」

さっきの第3世代機の方が長かったよ？

「……これ以上の言葉が見つからなかったのだよ」

「お父さん……」

「なんだい、シャルロット……？」

「ありがと、認めてくれて」

……ほっこりするなあ……シャルが来たときのままだった「流星くん」ら？

「何でしょうか、アルベールさん？」

「もう私のことはお義父さんとよんでくれてもいいぞ……そしてここ」

からは、私的なお願いなのだが……

次の日、イギリスに行くのだろうか？」

たしかに明日は、オルコットのいるイギリスに向かう予定だが……

「……何か依頼でも？」

「君の御両親に、花を送りたくてね……このお礼をしたいんだ」

俺の両親に……そうか。

「……わかりました。イギリスに向かう前に受け取ります」

「ありがとう……君の御両親にも同じように伝えてくれ」

食後、レストランの上にあるホテルに入り、荷物の整理を済ませた。

「同じ部屋で寝るのは、1ヶ月ぶりかな？」

「だいたい……そうだな」

気を利かせてくれたのか、シャルとは同室になった。

一夏も同じく。

「先にバスルームを使って。僕は後で入るよ」

「ほいよ」

シャルの言葉に返事をして、浴室に入る。

ホテルでジャグ付きのものとは……かなーりいいところをとって

くれたんだな、アルベールさん。

身体を洗う準備………む？

浴室の扉に、人影がある……

「………入るよ、流星」

………今回は確信犯か、シャル。

「………どうぞ」

扉が開いて、タオルを持ったシャルが入ってくる。

今の関係となつては、セクハラとか、わいせつとかは関係なくなつたが……

「一緒に入りたかったのか？」

「……うん」

「素直に言ってくれたらいいものを……」

「あんまり、そういうのは進んで言うものじゃないよ？」

「……それはそうかもしれない」

「背中を洗うよ」

「ん、ありがとな」

シャカシャカと石鹸とタオルを使って、泡立つ音が聞こえる。
そして、背中にそのタオルが擦られる。

「このくらいで……いいかな？」

いつも自分で擦るより、力が入ってるので気持ちがいい。

「ああ、丁度いい感じだ」

少しすると洗い終わり……シャワーで流しながら、一度なくなり自分の細胞で作り返した左肩を擦ってくる。

「流星の、この傷は……世界を救った証拠だったんだね」

「……そんな大層なことじゃない」

実際、原作開始前編 最終話あのときに焦らずに変化に気づいてたら回避できていた筈なのだ。

この傷は恥の象徴である。

「そんなことない……流星がやってくれなかったら……僕たちの明日が無かったんだよ？」

「……そうか」

「……それに、僕とお父さん達を助けてくれたしね」

「目の前に助けられる人がいただけだ」

「無愛想だね……こういうときは、恥ずかしがりになるんだから……
……何気に俺の弱点の一つ分かっているな？」

でもずつとこうだったら……気づくか。

「……僕も、背中を洗ってもらっていいかな？」

「もちろんだ……？」

……待て、何だその手は。俺のどこに伸びていつてる。

「……今日は……遅くなりそうだね。流星」

「……今日は大丈夫そうか？」

「ちよつと違和感があるけど……今日は大丈夫かな」

イギリスに向かう飛行機は、今日のナイトフライト……まだ時間があるのでパリ観光をする。

シャルがガイドをしてくれるようだ。

「エッフェル塔には、入れない部屋があつて——」

「凱旋門は一度、全部布で覆われたことが——」

「この傘によつて地面に透ける光が——」

4人でパリの名所という名所を見て回る。

そして……

「「一夏（嫁は）どこに行った？」」

一夏がはぐれてどっか行つた。つまり迷子ということ。

どこらへんからはぐれたんだ……？

「嫁が……私の不手際で……」

ラウラが今にも泣きそうな顔をして、下を見る。

「大丈夫だ。今から連絡するから、それで来るだろう。ISの位置共有の通知も送つとく」

いまシヤアはいないから手動で一夏にメッセージを送り……
「携帯を……使うまでもないな」

一夏に連絡を取ろうとしたが、それをまたポケットに戻した。

一夏の姿が見えた。そしてこちらに気づき、やつてくる。

どうやらあの男性に教えてもらったようだ。

「ちゃんとお礼は言つたか？」

「……ああ。悪い、よそ見してたらはぐれてた」

「迷路みたいな場所が結構多かつたりするからね……はぐれないよう

にしない」と

なにかいい案はないものか……ラウラ？

「はぐれないいい方法を知ってるぞ！ こうするんだ！」

そう言うのと彼女は、一夏の手をいわゆる恋人繋ぎという握り方でしっかりと握る。

「……確かにそれなら、迷子になる心配はなさそうだな。また迷子にならんように、しっかりと握ってやれ」

ラウラはさっきの表情から一変。ウキウキしながら、一夏の手を引つ張っている。

傍から見ればただの高校生カップル。

「その……僕も手を繋いでもいいかな？」

「よろこんで、シャル」

……それは俺も同じか。

そう答えて手を握るとシャルはニコツと喜んで、繋いだ手を絡めてくる。

「そろそろ12時だ……ご飯にしないか、お兄ちゃん？」

「そうだな……美味しそうなところ探しながら歩いて、あつたら入ってみるか」

そうして二組のカップルとして再開するパリ観光。

一夏がフランス料理に舌鼓を打つ中、さっきのことをふと思い返す。

……さっき一夏を送ってくれたやつ、名前はぱつとは出てこない

……が、

既視感しかなかったんだが……

その後、シャルにお義父さんとその奥さん、デュノア社の多くの社員達が見送る中、俺たち3人の乗る飛行機は次なる地、イギリスへと向かった。

side ???

「あの人たちじゃないかな？」

「……あつ、あれだ！　ありがとうございました！」

そう言つて黒髪の青年は、友人達と思われる人達の元に走つていく。

一人は銀髪ロングの小さな女性、もう一人は金髪のミドルショート
の女性。

そして最後の一人は……

「……あれは」

リュウセイ、さん……？

……いや、こんなところにいるわけ……ないか。

彼の行った方向の近くには、飲食店のショーケースを見つめる彼女が。

「ここにいたのか……ミネバ」

「ええ……すこし気になるお店があつて。今日は、この店で昼食を取りませんか？」

「……そうしようか。そろそろお昼だしね」

「さつき通り過ぎた学生の人、あなたに何を聞いてたのですか？」

「ちよつと迷子だったみたいだね……俺の声にそっくりの人だったよ」

本当に、瓜二つの声色だった。

「……世界には、そういうこともあるのでしょうね、バナージ」

一方その頃……

『リテイク4回……まだまだ精進が必要だな、閃光!』

腕の武器や肩の装備をやりくりすること四回。やっと戦闘が終わっていた。

「これで……訓練は、終わり?」

『今のは準備運動だ! 50機の役立たず共はAIだったからな!

次から本番開始だ!』

「……うっそ」

『明日はオータム、スコール、マドカの旧使用機体部隊、「モノクローム・アバター」の再現をしたものだ! それぞれ本人の思考を再現したものだから、一筋縄ではいかないぞ!』

「まだ続くのお!？」

『といっても明日からだ! 今日はずっと休み、閃光!』

一応休みはくれる教官? のような者の言葉で、閃光は瞼を閉じた。

第42話 世界旅行 in イギリス

side 流星

俺の目的としては最終の場、イギリス。

空港のエントランスでは、俺を待っているいつもとは違う、一人の女性がいた。

「お待ちしてましたわ、流星さん」

いつも着てるIS学園のドレスみたいな服とは違い、七分丈の裾が広がったズボンに黒の半袖とキマった服装をしている。

「似合ってるじゃないか、セシリア」

「流星さんこそ、ロックで整った服装が素敵ですわよ？」

……千束、やっぱリセンスあるな。

んでセシリアの横にいるのは……？

「私はチエルシー・ブランケットと申します……今日はよろしくお願
いします」

チエルシーさん、いつも聞いているイメージと全然違うな……多分お
客様の態度になっちゃってるか？

「こちらこそよろしく頼む……セシリアからいつも聞いているから、そ
んな堅苦しくなくていいよ」

「……ありがとうございます！」

そう言って彼女の表情が溶ける。うん、人はラフなままが一番だ
な。

何百人もの名前を書いた石碑が立っている。その中には、俺の親の
名前も2つ……

アルバーヌさんから託された花束と、自分達が持ってきたものを
しゃがんでそれぞれその石碑の下に置く。

「親父と仲良くしていたアルベールさんから、お礼に渡したいんだとさ……全く、俺もこんなことになるなんて想像も付いてなかったよ」
何人も婚約者ができるなんて想像できたか……？

NTの未来予知でも、そんなこと教えてくれなかったよ。

「……ありがとな、俺を産んでくれて」

5歳の時に、今までの世界の情報が俺にインストールされたときには……もうこの世からいなくなってた。

だから……はつきりとは俺の親については、わからない。

……だが、この世界に産んでくれたこと。それだけは感謝しきれない。

「流星の親は、ここで……」

「……現場はちよつと離れたところに、あるがな」

一夏は一夏で、幼い頃に俺の親が保護したことになにか思うところがあるのだろうか……目をつむって思いを馳せている。

「一夏のお義父さんが、ここに………挨拶させてもらってもいいだろうか？」

「もちろんだ。息子の嫁さんの顔が見れて、喜んでるだろうな」

俺の言葉を聞いたラウラが、石碑を前に何かをつぶやき始める……その声、届くといいな。

一夏や千冬達を家族に迎え入れてた時、息子と娘が増えたついで喜んでた……それは、数少ない今の俺の記憶が上書きされる前から覚えているものの一つだ。

「流星さんのご両親も……」

「……そうだな」

今世の両親はここイギリスに、眠っている。セシリアの両親も……そうか。

オルコットさん夫妻の名前も、ここに刻まれている。

「……IS学園でお会いしたときにはすっかり忘れてましたわ……あの時は、あんな態度を取ってしまい……」

「いや、あの時は仕方なかった……家を守るためだったんだろ？」

遺産目当てに、今まで関係が薄かった奴らが突然こちらにすり寄っ

てくるのだから……

遺産を守るために必死で、その人達と相手しないといけなのだ。

「……あなたには、何も隠せませんね」

「いやなに、俺も同じ状況になったことがあるだけだよ」

「あなたとは……何かと、縁を感じますわね」

「……確かにな」

似ている境遇が多い……こうやってくつつくのも、運命だったのだろうか。

横では……しっかりと親に伝えることができたのだろうか、一夏とラウラがしっかりと手を握っている。

「……俺も、ちゃんと言わないとな。セシリアの両親に」

立ち上がって、石碑に向かい直す。

「かなり……いや、とても罪な男かもしれない」

「流星さん……」

「それでも、宣言させてもらいます……」

もう彼女を一人にはさせない……貴方達の娘さんを……頂きます
！」

………これで、届いただろうか……？

だが少なくとも……

「……流星さん、これからよろしくお願いしますね？」

目に涙を溜めたセシリアには、届いたようだ。

「よろしく、セシリア」

風が一つ、吹き抜けていった。

「さっきのお話ですが……先程の親戚の中でも一人だけ、周りの人から守ってくれたお方がいます」

「……今その人はどうしてるんだ？」

「今日は顔を覗かせてくれるみたいですわ」

「サラ・ウエルキンさん、今日はよろしくお願ひしますね」

「いいえこちらこそ……いつも後輩がお世話になってます、流星さん」
次に来たのはオルコット家の庭。

元々ここで待っていたのだろうか、IS学園2年生の先輩であるウエルキンがそこにいた。

「……ここ全部、セシリアの家の敷地なのか？」

「はい。セシリアの家は、イギリスでも名門なので……」

同感だ、一夏………でかい。ただただ庭がでかすぎる。

「………ここだけでツイマッド本社（ビル）が3戸建つくらいにはでかい。

「……それはこつちもだ。俺が倒れた時、ずっと看病してくれたのはセシリアだからな」

「あの時から、私は確信してたのです……流星さんが好きだとー」

「……セシリアの熱は、かなり熱いのですね」

ウエルキンさんは顔を赤くしてるが、セシリアは全然恥ずかしがる様子すらない。

対する俺もそんなに恥ずかしくない。むしろ誇りに思ってる……うん、これが惚気だな。

「それで、ここでは何をするんだ？」

集められたのはもはや宮殿の庭。周りには多くの植物や構造物があるから、ここらへんから観光するのか……？

「ロンドン上空をISで飛行する許可が降りてるので、今日は一味違う視点から観光してもらいます」

……なんか思ってたのと違った。

「なるほど……範囲、上昇制限や下降制限は？」

「少々お待ちを………はい、ええっ!? ……わかりました、そう伝えます。……特に制約はないそうです。皆さんは高い技術を持つてるので、そのような鎖はつけなくて良いと……」

スマホを取り出したウエルキンさんが、どこかに確認を取った。

下降制限なし……？ まあ人の迷惑にならないようにすればいいか。

というか、一夏にもそれが当てはまるのか……腕を上げて認められた良い証拠だな。

「良かったな一夏。イギリスはお前の実力認めてるようだぞ？」

「……何か言い方良くないな」

「そりやそうだろ。この中で一番経験浅いの一夏なんだぞ？」

「それは……言い返せない……」

「では早速、準備を勧めますね。まずは私から……！！」

ウエルキンさんのISの外見は、後ろのスラスタがまるで青い蝶のような……

「ティアーズ2号機か……」

ブルーティアーズ2号機のサイレント・ゼルフィス……

ティアーズとは違い、シールドビットが装備されているのが大きな違いか。

「はい。この度、私もイギリス政府より専用機が渡されました！」

ちよつと前までマド力が使っていたISが、ウエルキンさんの専用機になったのか……

マド力達が此方側になってからうまくイギリスに渡すことができただようだ。

……ISコアは、違うやつになってるがな。

「……流星さんも、ISを展開してくださいまし」

「ん……おっと、すまない。今から展開する」

周りを見ると、俺以外はもうISを展開していた。

ちよつと一人語りが過ぎたか……

「たしか、尾白さんのISはアレックスで……し……」

こちらをみて、まるで俺がゴルゴンかのように固まるウエルキンさん。

……そういえば、あんまり知られてないんだっただな。

「……オオオ、オ、オルコットさん？ ここの、このISは!？」

「見ての通り、アレス……世間一般では『白獅子』と呼ばれている機体

ですわよ?」

「……ええええええええええつ!?!」

オルコット家の庭に、ウエルキンさんの驚きの声が響いた。

side バナージ

ミネバとの旅行、というか国際デートというか……その目的地であるイギリスのビックベンの下にいる。

「バナージ、あそこにISが……」

ミネバの指差す先、複数のISが飛行している。

かなり距離が近い。何かのイベントだろうか……

「結構な数、飛んでるな……」

青い2つのISは、確かイギリスの姉妹機で黒はドイツの軍人が持ってた……確かキシリアさんが言ってた、ボーデヴィツヒさんが乗ってるのかな?

「お父さんドズルの基地にいる、ラウラさんがここに来てるって言ってたので間違いないかと……」

白いISは……雑誌に載ってた、白式か? 少し形が変わってたけど……男性操縦者がここに来てるのか。

「織斑一夏くんも、ここに居るみたいだね」

「なら、あれが白式……初めて見ました……」

っ?! 待ってください、あれは……!」

4機のISを追いかけるように、青い光を放つさらにもう一つの白いISが飛んでいった。

「ユニコーン、ガンダム……!?!」

それも、4機のアームドアーマーD Eが付いてるから……

「やはり……あの流星さんで間違いなさそうですね」

「フランスで見たのは、見間違いじゃなかったんだ……」

またどこかで、会える。

朧気なる確信が芽生えた気がした。

side 流星

ISを纏ってイギリス上空からの観光を終えて、オルコット邸に戻ってきた。

ウエルキンさんとは庭で別れ、俺たちはセシリア案内の元、家に邪魔させてもらう。

そこで待っていたのは……

「久しいわね、アナトリアの傭兵さん。リリウムは、貴方が来るのを待ってました……理由はお分かりですね？」

一人称がリリウム、それにその二つ名ということとは……

「……アーマードコアがある世界にいた、リリウムか」

「まさかつ、叔母様も流星の……!」

リリウムは話してなかったのか。

前世あるっていつても、あまり信用されないだろうから……

「ここでも名前呼びとは……貴方は変わらないですね」

「リリウムの方が、年上ですよ?」

「そんなもの……俺のほうが長く生きてんだ。有って無いようなものだよ」

あつちで先に逝っちまったのは、リリウムの方だろ?

それに、リリウムがどうかは分からないが、俺は何重もの世界を

渡ってきてるしな……

「……こうやって張り合うのも、変わりませんね」

「セシリアと婚約する流星に向けて、私からは一つ……

姪を、離してはいけませんよ?」

……あんまり俺とのそういう話長くする人いないな。

「承知しました、リリウム」

「依頼受領確認……こんなこと話すのはいつぶりでしょうか」

「さあな……俺は数えるのが億劫になるくらい前だな」

「そうですか……」と言いなながらリリウムは紅茶の用意を始める。

「……今日は私の家で泊まっていってください。おもてなしいたしませんわ」

話が一段落ついたところで、セシリアが伝えてくる。
今日泊まるのはここか……

「ありがとな、セシリア」

そういえば、リリウムの料理の腕はセシリア並ってチエルシーさんが言ってたけど……

セシリアと一緒に寝るのは、これが初めてか……

そう思いつつ、寝室の扉を開けると、

「お待ちしました、流星さん」

ネグリジエ姿のセシリアがそこに立っていた。

いや、なんでそこに立ってるんだ……？

「今日からは頂いてくれるのでしょうか、流星さん？」

……そういう意味で言ったんじゃないが。

というか、

「いいのか……？」

「もちろんですわ……さあ、こちらにいらしてください」

—
—
—

翌日の空港、セシリアとリリウム、チエルシーさんの3人が俺たちを見送りに来てくれた。

「もう行かれてしまうのですね、流星さん……」

「でも、数日後に日本に来るんだろう？」

「その時はぜひお願い致しますわ！」

ハグを交わしてしばしの別れを惜しむ。

もう一つ、なにかしてあげたいな……そうだ！

「最後に……」

軽く唇を重ねる。

「……………ありがとうございます……………また、日本でお会いしましょうね！」

「……………またな！」

そして飛行機に乗り込み、イギリスを離れる。

次なる地は中国。

今旅行では最期の地で、鈴が待っている地だ。

一方その頃、日本では……

「対人戦は得意だよ！」

『ほう、そっちの方はなかなかやるようだな……………だがこの機体を前にしても同じことが言えるか？』

次に現れた戦闘データは、真っ白な4枚羽を持つ……………

「なんでクシャトリヤがグラインドブレード引っ提げてんだよ!？」

「まて！ そのミサイルの量はなんだああああ!?!」

『口を動かす前に機体を動かせ！ もう訓練は始まってるぞ!』

「バルテウスの2倍はあるぞ!?! 待て！ その物騒なチェンソーをあ
ああああああ……………」

『……………リテイク1回目だ』

第43話 世界旅行 in 中国

side 一夏

今旅行最後の地、中国。そこにある北京国際空港に三人は降り立った。

「流石人口世界2位の国……人がそこら中にいるな」

「……そうだな、ラウラ」

まあ早速感想なんだが……人が多い。

見渡す限りの人、人、人。成田空港でも人は多かつたけど、ここまですでは無かつた。

搭乗口を出ると、役人と名乗る男性が空港の外まで連れて行ってくれた。その人の名前は……

「俺は張チャン・ウーファイ五飛、鈴音の監督官を任されてる……最も、そこで目がお皿になつてる流星には『ぶひ』って言われてたから、好きな方で呼んでくれ」

……なんかもう驚かなくなってきたな。別世界での流星の知り合いが多すぎて……

チャンさん、か『ぶひ』さん……ぶひさんのほうがしっくりくるかな？

「よろしくお願いします、五飛ごびさん！」

「こちらこそよろしく、一夏くん」

五飛さんが差し出した右手を握り、確かに握手をした。

「して、鈴音はどこに……」

「あそこにいるぞ、ラウラ」

「待ってたわよ、一夏！」

五飛さんの後ろでは、腕を組んで仁王立ちしてる鈴がいた。

何か既視感を感じる。学園でもこんなことあったような……

「……やっぱり似合っついてないぞ、それ」

「今回に限ってはそんなことないわよ!」

あれ? じゃあ純粹に待っていてくれてた……ってことなのか?

「悪い、ありがとな」

「ふ、ふん！ やつと一夏もわかるようになってきたじゃない」
ほんとにやつとだよ……

昔のこんな自分なんてって思ってた自分を殴りたい。

「仲は、良さそうだね二人共」

「はい……もともと小学校の時からだだったので……」

昔は弾や数馬と一緒にの悪友だったんだけどな。今思えばその時から始まっていたんだ……

「ふふつ、それはいいことだ。鈴音を守ってあげるんだぞ？」

「それはもちろんです！」

「……お父さんとお母さんにいい報告ができるな、鳳さん」

「はいっ！」

「ちなみに流星はそのくらいの時……」

隕石押し返して
「アクシズってた」

なんか新しい動詞作ってないか？

……あの映画とほぼ同じこととしてたから、間違いじゃあないんだけど。

「アクシズ？ ……逆シャアの……そうか」

やつぱり昔からの付き合いなら……これで通じるんだな。

「4年前のあれだ。分かったか？」

「……流星自身がそれを世間に言うまでしまっておくよ。

とところで……

君たち、料理に自身はあるかい？」

「……へ？」

できないことはないけど……

「今日も始めました！ 中華料理の超人！」

ところ変わってテレビ局。セットされたキッチンを前に俺は立つた。

料理人の格好になった3人に所狭しとカメラがこちらに視線を寄せている……

初めてIS学園に行った時よりかは緊張がゆるい……のかな？

普通スタジオには多くても8台くらいだと思っただけ……

30台くらいあるぞ？

「なーんか、料理番組始まったな……」

「そうだな……海外のテレビも混ざってないか？」

……ほんとだ。B〇CイギリスとかA R 〇ドイツとか……待て、二〇動のあのテレビ

の顔もしれっと混じってないか？

今頃なんて言われるのかな……？

「今回は特別ゲストとして！ 世界に2人だけのIS男性操縦者も来てくれています！」

「鳳さん曰く、どちらも一流シェフ顔負けの腕前を持つということ。毎回挑戦者を負かし続けている張さんにどこまで食いついていくのか！ 期待が集まります！」

五飛さん、鈴の事だけじゃなくてテレビの仕事もあるんだな。

横では、流星と五飛さんがヒソヒソと話している。

「五飛、料理できるのか？」

「妹蘭と一緒に作ったりするからな、人並み以上にはできる自信はあるぞ？」

「妹蘭が……その指輪を見る限り、幸せそうだな」

……
そう言つて五飛さんが手を上げたそこには、左薬指には光るものが……

「司会はいつものカミィユ・ビタンがお送りします！」

審査員はいつもおなじみの竜妹蘭と、花園麗フェア・ユイリイさん、そして！

中国代表候補生の鳳鈴音さんと、ドイツよりいらした代表候補生のラウラ・ボーデヴィツヒさんです！」

「ファ!? ……カミィユも……!?」

流星の視線の先には手を振る一人の女性……そして、手を振ってい

る司会者がいる。

……流星が心なしか、反応にもう疲れてる気がする。

「今日のゲストになぜボーデヴィツヒさんが？」

それは……

「ラウラと鈴は、フィアンセなので……」

『……へ？』

途端に凍りつく会場内。流星と五飛さんはあちやーって顔をしてる。

「一夏さん……その情報はまだ発表されてない……」

「……その発表3日後だぞ、一夏」

……あれ、俺なんかやっちゃったか？

その答えとしてか、スタジオには驚きの声が響いていた。

「一夏さんの唐突なリークがありました、少し事態の収束を必要としましたが……改めまして、今回のルールを確認していききたいと思います！」

……それから10分くらいはさっきの騒動が続いてた……申し訳ない……

「この番組のタイトル通り、中華料理を作っていただき、その味を審査員にジャッジしてもらい誰の料理が美味しかったかを選んでもらいます！」

中華料理か……テーブルにはありとあらゆる中華料理の調味料やら食材やらが並んでるけど……何作ろうかな？

「制限時間は45分！ それでは……はじめ！」

始まったんだけど、何作ろうか……

流星と五飛さんはもう作るものが決まってるようで、小麦粉をこねたりもう鍋に火を入れ始めていたりする。

……というか、道具が本格的過ぎて使ったことないようなものが多いんだよな。

自分の顔より2周り大きい中華鍋とか、ISのブレードみたいな分厚くて胴が長い包丁とか。

使えないわけじゃないけど……

「……一夏あ！ 迷ってるなら、あれの作り方くらいはわかるでしょ！」

少し離れたところで座っている鈴から声が飛んでくる。

……そうか、少し前に鈴が『毎日一緒に作れるように』って教えてくれたものがあるか！

では作っていいこう。

まずは以下の材料を用意する。

豚肩肉

(下味用：しょうゆ こしょう、紹興酒 水)

(衣用：サラダ油、水溶性片栗粉各少々 片栗粉)

ピーマン

パプリカ(赤)

たけのこの水煮

干し椎茸

玉ねぎ

じゃがいも

【合わせ調味料】

・ しょうゆ

・ 酢

・ 砂糖

・ 塩

・ 水

水溶性片栗粉(片栗粉と水を1：1の割合で溶いたもの)

サラダ油

揚げ油

ここではあえてケチャップを使わない。鈴の作る酢豚は、これだけでも十分に美味しいからだ。

なんで水があるかは……すぐに分かる。

豚肉は脂身と筋を除き、ひと口大に切り、ボウルに豚肉を入れ、しょうゆ、こしょう、紹興酒を加え、手でもみ込む。

そして、ここからが一味違う。それは……

下味をつけた豚肉に分量の水を加え、手でもみ込む。

「水、ですか……？」

意外だったのだろうか、司会者のカミーユさんが尋ねてくる。

「はい。水を加えて手でもみ込むと、水分が豚肉に入ってよりジュシーにやわらかく仕上がるので」

「へえ……知らなかった……」

豚肉にサラダ油、片栗粉と水を1:1の割合で溶いた水溶き片栗粉を加え、手でもみ込む。

サラダ油は衣をカリツとさせる効果がある。そして水溶き片栗粉は、このあと片栗粉を豚肉にまぶすための、のりのようなものだ。

片栗粉をたっぷりまぶして馴染ませたら、中華鍋に豚肉がつからくらいの揚げ油を入れて180℃に熱し、さっきの豚肉を入れる。

これはころころと油の中で転がしながら、表面がカリツとするまで1分ほど揚げる。

ここでお玉で転がしながら周りを見てみると……

「……みんなすごいなあ〜」

五飛さんの鍋の上でチャーハンが踊っており、流星は鍋をかき混ぜながら小麦粉の塊を整形している。

というか、流星は何作ってるんだ……？

いい感じにカラツと揚がったので網に取り出して、油をきる。玉じやくしで軽く表面を叩いて衣にひびを入れる。

この一手間で、食べやすく、美味しくなるのだ。

170℃まで油を冷ましたらまずじゃがいもを3分揚げる。そして、豚肉とたけのこを入れて更に1分揚げる。

「……この順番には、なにか意味があるのですか？」

「じゃがいもとたけのここの2つは、火が通りにくいので……」

1分ほど経ったら玉ねぎ、ピーマン、パプリカを加え、さつと揚げてピーマンの色が鮮やかになったら、すべてザルに取り出して油をきる。

「そして、玉ねぎはシャキツとした食感を残すため、ピーマン、パプリ

力は色味をきれいに保つために、最後に加えます」

「参考になります……」

ここまで来たらあと一息だ。

油を鍋から取り出して、一番最初の混ぜた【合わせ調味料】を中火で熱す。

……………そして、沸騰したら水溶き片栗粉をいれて、具材を1分満なくくらい混ぜ……

「……完成しました！」

鈴に教えてもらった通りにできた……

「織斑さん、ここで完成！ あとの二人も、もうすぐ完成しそうです！」

そして、制限時間いっぱいになり、3人の調理が終わった。

4人の審査員の前には、それぞれ3つの皿が並んでいる。

「まずは織斑さんから、酢豚！ これ！ といった点はありますか？」
「豚肉に色々工夫したので……柔らかくて、食べやすくなってると思います！」

それを聞いていた鈴は、まるで弟子の成長を見るかのようにウンウンと頷き、ラウラは「ほーう……」と言いながらいろいろな視点で料理を眺めている。

「次に張さんは……炒飯ですね！」

「俺の炒飯は、コンロの大火力でパラツと仕上げてるから、余分な調味料を入れてない素材本来の味を楽しめると思う」

「新婚の妹蘭さんのお口に会うといいですね！」

そして最後は……

「尾白さんは、刀削麺！ どこかこだわったところとかありますか？」

途中、手元が見えない程の速さで麺を削いでいた流星は、やはり刀削麺。

「四川料理ということで、花椒ホワッポを多くの場所に使いました。その上、多くの野菜や肉を煮込んだスープと多くの具材の掛け合わせにより、辛くて美味しいと言える一皿ができましたと思います」

流星の皿を見るが……

……一人だけクオリティが違う。

俺と五飛さんは、いかにも家庭といった盛り付けなのに対し……流星のものだけ高級店のそれになってる。

カミューさん
司会者も苦笑いしちゃってる。

「流星さんだけすごい……といっても勝敗を決めるのはやはり、味です！ 審査員の皆さん、召し上がってください！」

四人のは口を動かして料理を食べていく……

が

「ゲホツ……流兄のこれ、香辛料使いすぎ……」

「なん……だと……!？」

「……張さん、味が……ほとんどしません……」

「ファさん!?! 馬鹿な……!?! こんなことが……!?!」

何やら二人の雲行きが怪しい。

もしかして俺のも……

「……普通に美味しいぞ？ そうだと思わないか、妹蘭さん？」
「ああ、他の二人のものよりずっと美味しい。家庭的な味だな」
その後、満場一致で俺が選ばれた。

「なんで……あの味気に入らなかつたんだろ……」

「お兄ちゃん、もう過去のことは過去のことだ……」

「……ありがとうラウラ」

その夜、ホテルで流星と分かれる前に、珍しくしおらしくなった流星がラウラに慰められている。

そんなにシヨックだつたんか……

「もう大丈夫そうか……？」

「……まあな。ありがとうラウラ」

「お兄ちゃんのためならこれくらいどうってことないぞ！」

「あれだけ見ると……ほんとの兄妹見たいわね」

「……そうだな」

そして、部屋に入った。

三人部屋と聞いているが……横に広いベッドが一つしかない。

「……どうしたんだ二人共？」

そしてその上に座る二人。

「今日の酔豚の……お礼よ！」

「今晚は、よろしく頼む！」

そうやって鈴とラウラにベットに引っ張りこまれた。

翌日の空港。鈴と五飛さん、カミーユさんが見送りに来てくれた。
なにやら訳のわからない単語が飛びかって、時折笑っている。

そしてそれを興味深々に聞くラウラ。

やっぱり流星の昔いた世界の人たちで間違いなさそうだな……

と思っっていたら、流星がこちらにやって来る。

そして俺以外に聞こえないような声量で、こちらに小声で話しかけ
てきた。

「二人まとめてまぐわったのか……?」

ちよつ……!?

「もうちよつとこう、オブラートに……」

「何今更遠慮してる……ちゃんと日本に帰ったら、箒とか束も相手し
てやるんだぞ?」

「……それくらい分かってるよ!」

「二人共、何話してるのよ?」

「ん? ……今後の予定」

間違いじゃあないけど……すごい回避したな。

「そ……一夏! もうすぐ私も日本に戻るけど、それまで元気にして
なさいよ!」

「おう! そっちこそ、夏風邪とかには気をつけろよ!」

「帰ろうか……日本に」

「……ああ」

一方その頃、ツイマッド社研究所では……

「……これはなにかの拷問ですか、ロニイさん？」

目の前に浮くのは背部に大きな武装コンテナとジェネレーターを載せたバルテウス。

それも2機。

「いや、貴方にはこれくらい乗り越えてもらわないと困る」

「ロニイさんと流星も、これを……」

「うん。流星に至っては、20秒でできる。とつても無茶してたけどね」

「ガンビット20機の完全制御での飽和攻撃なんてできないでしょ？」と続けた言葉に閃光は激しく首を縦に降る。

「そこまでしろとは言わないけど……乗り越えて。あなたならできる」

「……やります！」

『遠足は帰るまでが遠足だ！ 最後の総仕上げといこうじゃないか！』

閃光の訓練ももうあと少し……

第44話 5人の帰宅

side 一夏

「ラウラは一旦IS学園に行くのか？」

5日間の海外旅行の末、ついに成田空港に降り立った俺と流星、そしてラウラ。

「うむ。ガルマさんにくつつかの仕事をやって貰ったものの、自分でないとできないものがあるからな。後日お邪魔させてもらう」

「そっか……それじゃあまた会おうな」

IS学園方面のモノレール方面へと歩き始めるラウラ。

だが、ふと立ち止まる。

「さよならとは言わない……また会おう……嫁、お兄ちゃん！」

「そうか……またな、ラウラ！」

ラウラはこちらに振り向き、一礼して降り口を後にする。

そして、見えなくなったところでふと口をこぼす。

「……なーにカッコつけてたんだろな」

「結婚相手には、かっこいいとこ見せたかったんだろ」

「そんなものなのかなあ……？」

「……直にわかるさ」

俺たちも、キャリーケースを転がして別方向降り口に出る。

するとすぐに……

「流星――！」

突撃してきたロニーにタツクルを貰う流星。

「ゼクツヴァイ!?……ロニー！ 元気にしてたか？」

こっちはもう若々しいカップルになっちゃってるな……

「流星が待ち遠しくてもう……」

「……また家に帰ってからな。マドカも迎えに来てくれてありがとう」

うん……流星も砂糖ばら撒けるようになったんだな。後でコーヒ―買うか。

「夫婦としては当然のことだろう？ ……ツイマッド社での試験が遅

れてたまたま今来たところなんだが」

「それでもだよ……ツイマツドのことは後で聞く」

何かあったのか……？

「そんな重大なことではないと思うがな。それよりも、よく無事だったな2人共」

「まあな……特にトラブルは無かったよ」

「あつたら面白かったのに……」

それはそれで面白かったかもしれないけど……あつた方が困る。

そして迎えに来てくれたのはもう1人……

その知名度故に、道ゆく人は二度見以上をしている。

「学園の仕事は大丈夫なのか、千冬姉？」

「お前たちが戻ってくるのだから……張り切っておわらせたさ。

おかえり、一夏、流星」

「おう、ただいま！」

「ただいま千冬」

ここで立ち話をしていると、段々と俺たちを中心に人が寄って来る。

……世界で2人だけの男性搭乗者と元世界最強の称号を持つてる人が、ここに集まったらこうなるか。

「流星、そろそろ……」

「ああ……後で、お土産と一緒に旅行の話をしようか」

「そうか……最近海外に行けてないから、ぜひ教えてくれ」

千冬姉が流星の方を見ると、僅かながら頬が赤くなっているのが見える。

もしかして……やっとな姉にも春が来たというのか。

私とロニーだけでなく一夏や千冬の目線は、目線はこれから我が家となる目の前の家ではなく……

「ここがメテオ……流星のお家なんだ……」

いつの間にか流星にピツタリくつついてる女子に向けられていた。名前を紺野木綿季と言うそうだ。

「……彼女も流星の愛人なの？」

「いや、そういうわけじゃない……かも」

かも……？

「むー……ちゃんといいなよ……」

という子がそれを聞いてプクツと頬を膨らませる。

……恐らく私とロニーに近い感情を持っているのだろうか。

「では……彼女は流星のなんだというのだ？」

「それは……その……また説明する」

珍しいな……言い切ることがないとは。

なぜ言い切ることができないのだ？ 別に言い切ってもいいのに

……

「あのことは……仕方ない、のか？ 引き取る人が居ないって言ってたし……」

「あれについてはな……無理もないだろう」

どうやら一夏と千冬は事情を知ってるようだが……

「とにかく今はまだ荷物があるし……後でにしないか？」

完全に凍りついた空気、それを一夏が破る。

「ああ……家上がるるか」

――

――

――

「この玄関をくぐるのも、4年ぶりか……」

「……アインクラッドをクリアしても、帰ってこなかったからな」

アインクラッド……2年前にここ日本で起きたあの事件が終わっ

ても帰ってなかったのか……ちゃんと帰ってあげれば良いものを。

「……木綿季のこととかALLOで忙しかったんだよ」

「ALLO……？ 何かの略称か？」

「アルヴ Heim オンラインの略だ。VRMMOっていうジャンルに入るゲームだな。マド力達がさつきまでやってた訓練もその技術を応用してる」

たまにCMや広告で見かけるあれのことか。

「……興味しか湧かないのだが」

「そういうと思ってもう準備してるよ。また夜にやろうか」

「そのように言ってるが……お得意の未来予知でもしたのか？」

「そんなとこだな」

こういう時は、それは役に立つ……羨ましいな。

「言ってるうちにももしかしたらマド力も……あるかもしれないぞ？」

そういえば一夏も最近はその訓練を計画していると聞く。

私もまだまだ負けてられんからな。

「……うえええっ!!? そんなことほんぽん出来るの……?」

木綿季は知らなかったようで、素っ頓狂な声をあげて驚く。

「まあ……もしかしたら、あるかもな」

「あつたらいいなあ……」

流星はその後、「懐かしつ」といいながら、一夏と共に靴を脱いで私達の荷物を運び込んでいってる。

「どうしたお前たち？ 早く上がらないか」

「「お邪魔、します……」」

「……ここは他人の家じゃないから、そうかしこまらなくていい。マドカ、ロニイ、綿木の家なんだ。もっといい言葉があるんじゃないか？」

間違えてるぞ、というのか。

確か自宅に変えるときに言う言葉は……

「「……ただいまー」」

「「おかえりー！」」

……そうか、これが家族なのか。

「それは……善処する」

「いや、そこは言い切りましょうよ」

「くっ……わ、わかった！ これ以降は散らかさない！」

「約束ですよ……？」

あまり考えたくないが、もし破った時のことも考えとかないとな
……

グウ「私ではないぞー！」 ウウー

……誰かさんの腹の虫が鳴ったようだ。

そろそろご飯作り始めるか……

「一夏を呼んでくれ。今日は……タコライスにしようか」

「っ作ってくれるのか!?？今すぐ呼んでくるー！」

ここから逃げるように千冬が部屋を出た。

こういうところは……ほんとにくるものがあるな。

「流星の読み通り、マドカのISは『ペイルライダー』から『トリス
リッター』へと名前が変わっていたな」

マドカのISの調査結果が載った資料に目を通す。

やっぱりその系譜でくるか……

「インコムの特訓とかをぼちぼち始めるとしようか」

「わかった」

夕食後、ベッドが3つ増えてかなり狭くなった自分の部屋で会社の
仕事をこなしていた。

3人の部屋は用意してたものの、彼女たちの要望でこうなってる。

その3人というのは、マドカとロニー、そして……

「会社はかなり重要な話だと思っただけ……私も聞いててよかった
の？」

寝巻に着替えた木綿季。寝巻を着るのは実に6年ぶりらしい。

「別に木綿季はそんなことしないだろう？」

「それは……どう捉えたらいいのかな？」

「普通に信じてる。家族だから」

「っっ!??! くっくっく!!?!」

木綿季の顔が急に赤くなつたかと思うと顔をベッド埋めて、何かを叫びだす。

あり……ちよつと言葉間違えたか……？

「流星……それ私にも言つて欲しいなあ〜？」

「やはり流星は女性ホイホイで間違いないようだな」

ロニイとマドカが半目でこちらを見て来る。ちよつと黒いオーラが出ているのは錯覚……であつてほしい。

「……もちろんロニイとマドカにも当てはまることだからな」

「……もちろんだよ！」

同時に頷くと共に、オーラが消えた。

「話が変わるが、なんで予定よりかなり長引いた……閃光の訓練は？」

「コリア人格 ジョシユアがしゃしゃり出てきてね……」

「ジョシユアが？」

どうしてあいつが……

「終わった……全身が痛い……」

「最後のバルデウス二体同時撃破はリテイク5回……私や簪より少ない……なかなかやるね」

「つしや……！ これでもう……『アナトリアの傭兵』に……」

《……残念だが、これで終わりではない》

「……は？ ジョシユア・オブライエン？」

《騙して悪いが、これは私からの個人的な勝負だ。貴様がラインアークの守護神……『アナトリアの傭兵』を名乗るのならば、私を越えてみせろ》

「……ウソだろ？ なあロニイさん、嘘だと言つて……」

「私もそう思つてた。アナトリアの傭兵と言つたら、ジョシユアつて流星も言つてた。彼が言つたのなら、仕方ない」

「……もしかしなくても俺、詰んだ？」

《実力次第だ。貴様は候補者であり、アナトリアの傭兵を継ぐ者だ……既に言葉など意味を成さない。見せてみる、貴様の力……！》

「ああもう分かつたよ！ やつてやるよ！ ラインアークの守護神を

……継いで見せる!!」

「閃光はいいやつだったよ……」

「いや勝手に殺すな」

「そもそも仮想空間内だからそんな概念ないはずだが……」

「いや、現実で戦闘してたぞ?」

「かなりバトルジャンキーになったんだな……ジョシユア。おかげで……」

「……修繕費がすごいことになってそうだな」

別にコア人格の訓練で押し通したら国から貰えんことはないと思うが……」

「なんか……ごめんね」

「構わないさ……さ、こつちの仕事も終わったし、そろそろALOを始めようか」

「これが……アミュスファイアなのか……」

「これで、仮想世界に行けるのか?」

一夏とマドカは似たような顔をしてペタペタをアミュスファイアを触っている。

「流星、私は準備できたよ」

ロニイはIS学園の同室で一度見たことがあるのもう装着して先に寝転がる。

「俺は一夏達がちゃんと付けてるか見てからにする」

木綿季も使ってたメデュキボイドからデータは引き継いでるので慣れた手つきでアミュスファイアを装着する。

「付け方と言っても……一本線をさして、そのヘルメットを被つてとある合言葉を言うだけだ」

「へえー……これでいいのか?」

一夏とマドカがアミュスファイアをつけた状態でこちらを見る。

「そうだ……じゃあ行くでしょうか。『リンクスタート』が合言葉だ。」「わかった」

一夏が俺のベッドに転がり、俺はロニイとマドカのベッドを繋いだ間に招かれて、2人の間に寝そべる。

そして上に乗っかる綿木。

どこでやるんだよ……まあいいけど……

「それじゃあいくぞ……」

『リンクスタート!!?』

そして、意識が現実から離れた。

第45話 ALO訪問

side 流星／メテオラ

ALOに入った俺達は、あらかじめ指定していたとある宿に集まった。

「……全員揃ったな？」

「おう、これで全員だな」

「それじゃあ、さつきも話していた通り、そっちの二人はそれぞれ一夏とマドカで間違いないな？」

「問題ない……けど、ちよつと前と体の感覚が違うのは慣れないな……」

「右に同じく。どうやったらこの違和感は消えるのだ？」

「うーん……それは慣れるしかないかな……」

「慣れしかない……だが、どっちもIS動かしてるなら、今日中には慣れると思うぞ？」

「なら大丈夫かな……？」

やはり兄妹というべきか、選んだ種族はどちらもシルフ……風妖精族と呼ばれる、速度に特化した種族だ。

だが、一つ気になる点がある。

「色調、一夏のISと結構似てるな？」

シルフのやつは、大半が緑がかった容姿を持っているが……髪が真っ白で、服の方もどちらかといえば白が多い。

なんで初期から……？

「ああ、空を飛べるって言うから、入るときに白式の色をイメージしてみたんだけど……こうやって変わるんだな」

……まさかとは思うが、束がシステム弄ったか？

「……普通はそうはならん」

「そうなのか？ でも、流星と被っちゃったな……」

「そのくらい気にしない……だが、ここVRMMO内で本名を名乗るのはご法度だからそれだけ気をつけてくれ」

人がいない場所で良かった……

「げっ!?　じゃあ、なんて呼べば……」

「俺の場合は『メテオラ』。さつき設定してもらったゲーム内のネームを使う。まずは一夏から、どんなのにしたんだ?」

「俺はとりあえず、『ワンサマ』にしてみました……」

一夏……半分ネタみたいな名前に仕上がってたな。

一瞬こみあがったものを飲み直して口を開く。

「構わないが、安直すぎないか……?」

「やっぱり、不味かったかな?」

やっちゃったか?　と目に見えてリアクションをする。

「まあ、それは個人の自由だから気にしなくていい。変えたい時は名前変えられるクエストあるし」

「そっか……また気が向いたらやるよ」

「その時はまた教える……それで、マドカはどんなのにしたんだ?」

服装は、リーファにかなり似てるが……リーファと同じで……

現実よりも出るところが出ている気がする。

なぜこんなことするんだろうな……?

『『ロンド』にしたが……マトモだよな?』

マドカは、漢字にすると『円』になるから、それを英語にして弄ったのか。

なんかちよつと心配そうだが……

「問題ない、いいと思うぞ?」

「……そう言ってもらえて何よりだ」

少し安心したような、照れているような表情になる。

「ボク達のことも一応……」

「……そうだな、ロニイと木綿季もしとくか。どっちからする?」

「それじゃあボクから。こっちでは、ボクの事は『ユウキ』!　種族は闇妖精^{インプ}だよ!」

いえ〜いとピースして、ワンサマとロンドにアピールする。

結構ちやらけてるが、ああ見えて結構強いのが意外だが……

「む〜……なにか、失礼なこと考えてないメテオラ?」

「……別に?　じゃあ次はロニイ、頼めるか?」

「うん……私はシャデイ。シャデイ・ストレンジスっていう名前で種族はケットシーにしてる」

グレー基調のかなり攻めた服装……場面によったら目のやり場に困る。

「シャデイ……名前の由来とかああるのか？」

「それは……ヒミツ」

とは言っているが、とあるキャラクターにそっくりだからつけたらしい……

なんのキャラなんだ……？

「さつきから気になってたんだけど流……メテオラの種族ってなんだ？」

「俺か？ 名目上は『アルフ』っていう種族になってる。別の種族であることはわかってるんだが……」

自分のウィンドウを展開して、皆に見えるようにする。

「これ……なんて書いてるか読めるか？」

『A R E S』……こいつ、何語かさえわからん。

「うげっ……これはたしかにわからないな……」

「高位妖精とかっていう別名を謳ってるが……正直言って器用貧乏としかいえん。それに羽の形も……」

そう言いつつ、飛行するための翼……？ を出す。

アームドアーマーDEの形をラフにしたものが4つ、背中から生えてくる。

「流星のISにそっくりだな!!」

「配置さえもか。これは……もはや……」

ワンサマとロンドはそれぞれ半歩下がって驚愕したり、言葉を失っている。

「まあ……結構世間では有名すぎる、『白獅子』のものだからね……」

「そんなに驚くことかな……？」

対して、こつちでは見たことのあるシャデイとユウキはその二人の反応に反応している。

シャディはIS学園でALOやったことあるから、この件は知っていた。

「というか……」

「そろそろ出発しないか？」

「ああ、そろそろ……どうやって飛べばいいんだ？」

「そーいやワンサマ初めてだったよな。」

「行きたい方向に向かって飛ぶ……ISでもやっただろ？ わからん

ときは自分をなにか飛ぶものに置き換えろ。ロンドもそれで頼む」

「心得た」

「ここからは本当にゲーム内のネームで頼むぞ？」

「風が気持ちい〜！」

「……いい景色だな」

その後、ワンサマとロンドは飛べるようになったので、5人は空を飛んでいく。

ISとは違い、風を直に感じる。俺のISに至っては全身装甲だから……尚更だ。

「これがゲームの中ってんだから、尚更びつくりするよな」

人の手によって作られたもの……だが、それでも現実にいるかのよう錯覚してしまう。

「それで……どこに行くんだ？」

「直にわかる」

着いてからのお楽しみだ。

「メテオラ、あのでっかい木みたいなのは……」

左前方に見えてきた巨大なオブジェクトを指さしてマドカが訪ねてくる。

「あれは世界樹。ちよつと前にいざこざがあつたところだ」

今日行くところはそこじゃないが。

主に元黒ボッチ（現リア充）がバカ凸したところだ。

恋人のためといえど、あれはやりすぎてたな……

「あそこをメインにしたグラウンドクエストが終わって、今はただのモ

「二ユメントだから……」

あそこを使ったイベント……また考えとかなないといけないか。

「にしても……思ったより、人が少ないな」

「そんなことはない。今から行く場所に人が集まってるだけだ」

多分全プレイヤーの半分はあそこに籠もってる。

「半年くらい前から出てきた、あつちのでかい構造物に結構人行ってるからね」

「……あつちの宙に浮いてるあれに？」

「御名答。見えてきたな……」

「かつて、ボクたち10000人が2年位かけてクリアした」

「浮遊城、新生インクラッドだ……75層までだけだな」

「つ……ちよつと締まりの悪い言い方するね……」

別にいいだろう？ 間違いじゃないんだから。

「メテオラ！ あそこに行くのか！」

「ああ……一層だけ、今日は覗いてみるとするか」

「いつ来ても懐かしいな……ここは」

インクラッドの中に到着したらまずつくのが……

「ホントの最初の場所、始まりの街だよ！」

「ここが……なんか中世の町みたいだな」

「たしかにここには人が多いな……」

「NPCもいるが、大抵はプレイヤーだな」

今のところ、15層までクリアされている模様で、転移門も15番目までの扉から人が行き来している。

「本来なら……もうちよつとペースが早かったんだけどな」

「あの時は皆クリアするので躍起だったからね……そういえば、シャアは今日一緒にじゃないよね……？」

「シャア……!? コア人格の!?!」

ワンサマとユウキ達で情報の知ってる度合いが違うから、どうして

もこういった場面が多くなるな……

「こればかりは、仕方ないか……」

「あー……あいつも訳あってこっちに來れるようになってるんだよ」

「そういえばジョシユアもみてないって心配してた……どこ行ってるの?」

「あいつは今……」

「サプライズの準備中だ」

side プロスペラ

「……これで準備は整ったわね」

眼の前の培養ポッドに存在する完成した2体を見上げる。どちらも高校生ほどの大きさで、それぞれの性別は、男と女になっている。

「ほとんど人と同じ……いえ、遺伝子も人と同じにしているからフラケンシユタイン以上の存在になるかしら……」

「どうやらキリスト教などでは、このような行為は神々への背徳行為とされているようだが……流星が気にしている様子はない。」

かくいう私もそんなことは気にしてないのだけだ。

「明日起こることは、遠く昔に一度やったことがある。」

「それは……嘗てエリーを自由にするために、スレッタを使ってやろうとしたこと。」

「あの時は、流星は止める側だったけど……今度はパーメットスコアの可能性を利用しようとしている」

「……皮肉なものだな」

「ただの独り言の続きを、聞いたことがあるおっさん声が続けた。」

「なんでここにいいのかしら、デリング? あなたは経理のはずでしょう?」

「聞かなくても、わかりきってるけど……」

「決して悪用しているわけではないわよ？」

「それは見ればわかる。ましてや、尾白がそのようなことをするとは思えない……ただ、あの技術がどのように使われるか下見に來ただけだ」

「そう……なら少し、この2人について話さない？」

「暇だったら付き合おうとしよう……2人、こっちにインストールするのは誰と誰なんだ？」

インストール……あながち間違いじゃないけど、もう少しい言ひ方なかったのかしら？

「二人は元人間の流星のコア人格用、もう一人はロニイちゃんのA I用」

「二人はまだわかるが、人体にA Iを乗せるのか……？」

「さあ……でも、性格は確立していて、特異点も突破しているそうよ？」

「しれつと言ってるが……どこでそんなものを？」

また流星の仕業かと思っているようだけど、これだけについては……

「彼が作ったわけじゃない。恐らくはロニイちゃんが『621』だったときの補助A I……それ以上はさっぱり」

多分、もつと深いなにかがあるのでしようけどね。

「彼がトラブルを呼んでいるのか、トラブルが寄ってくるのか……どちらにせよ、またなにかありそうだな」

「器はできていて、心臓までもが動いてる……だが、脳に情報が何もない……不気味だな」

「全く……まるでここが悪の人体実験場みたいになっている自覚はあるわよ」

……と言っても、実際には被験者は尾白流星ただ一人だけ。

その時の応用でいきなり人体を作るなんて、彼はいつも無茶をする。

「どう転ぶかは明日、流星がパラメットスコア8以上を2回耐えられる。」

かどうかね」

「一般人なら、スコアが4の時点で即死だが……なぜ彼は耐えられるの
だろうな」

「それについては、ここの研究員はお手上げ………だけど、一つだけ
引つかかることを言ってたのよ」

確か……縛り、か呪いにちかいことをいっていたかしら……

「……尾白に1000年以上かかっている呪い、か。彼は……」

この話は、きつと今夜だけで終わりそうにない話題なので、切り上
げるとしましようか。

「今日はもう遅いわ。さて、今日もあの動画を始めましょう？」

どこからともなくカメラを取り出して、色々なガンダムが描かれた
ボードを取り出す。

「あついやちよつ、今?! ……あれはガンダムではない!」

これはこれで、面白い呪いね……これは呪いというよりか、癖のよ
うなものだけど。

「これ、ガンダムなの」

「……はあ」

いつも通り、デリングが大きいため息を吐くことで、今日のガンダ
ム検定が始まった。

第46話 コンバート

side 束

いつくんからイチカニウムを搾り取った数時間後、ツイマッド社本社で神を冒瀆する手引をしていた。

神って言っても、ほんとにだめって言ったか怪しいけどね？

「……そういえばこの世界だと、束がシャアの親になるのか」

「なんで私だけになるのさ？」

「通算ⁱⁿ3番は、束が作ったんだろ？ その時はまだ俺は関与してなかったし」

りゅーくんの装着しているISに、ありとあらゆるケーブルをつなぎながら、駄弁っている。

これから起こることを知っていないのでは？ と、思えないほど落ち着いている。

だって今からりゅーくんとの子どもが生まれるんだよ？

私でも、嬉しすぎて今すぐはっちゃけたいぐらいなんだよ？

「なくに言ってるんだいりゅーくん？ シャアくんも、りゅーくんが育てたに決まってるじゃない！」

誰よりも長く、そのコアが入ったISを動かしてるからね！

「だけど……元々人格として完成していたというか……」

「そこからも、成長してるからね……私が生みの親で、りゅーくんが育ての親だよ！ あ、でも一緒に子作り^{ISコア作り}してた時期もあったね！」

育ての親というのも実際、ISの動作技術の基本を確立したのも、りゅーくんだしね！

りゅーくんが考えた二重瞬間加速を、ちーちゃんが愛用しているのはここだけの話！

「言い方……そういえば、大体どれくらいの子を^{ISコア}一緒に作ったんだっけか？」

「りゅーくんが5歳の時から一緒に作ってたから……シャアくんの3番と40番から432番までがりゅーくんとの子だねっ！」

それ以降は、^{4年前}いなくなっちゃったから今一番新しい子までは、私

だけで作っている。

……うん、多いね！　これだけでサッカーチームだけじゃなくて応援団も作れちゃうよ！

「子ども多いなおい……後言い方考えろ？　一夏に捉え方間違えられたら、俺刺されるぞ？」

「大丈夫だよ！　いつくんのことだから、そんなことは絶対にならないぜい！　あと5年で……ね」

「まさか束、もしかしなくても……」

「もちろんそれは計画済みだよ？　いつ、いつくんの子どもを授かるのか」

いつくんとは、男の子と女の子一人ずつがいいかなあ……でも、姉妹もありかも……？」

「ゆとり持たせてやれよ……千冬がそれ聞いたらどうなる？」

……それだけは困るね！

これ以上ボ口を出さない内に話を微妙にそらしてみる。

「かく言うりゅーくんも、今までそれくらい流星の子供いたんじやないの〜？」

「……右手で足りるくらいしかない」

およ？　結構少なかったのね……

少なくとも30は超えてると思ってたぜい。

「ちなみにお名前は？」

「それだけは絶対言わん。自白剤を使っても口は割らない」

声色を強めて、強く否定する。

……あら、これだけは譲れないみたい。

珍しいね……りゅーくんの前世達は、あっさり言ったのに。

「……でも、いつかは聞き出してみせるよ〜？」

「まあ、頑張ってくれ……それよりもっととコンバートを済ませよう、シヤアとナナシが待ってる」

彼の顔が横に向くと、ジャージを着たそれぞれ高校生くらいの男女が横たわっていた。

「息子とロニイちゃんとりゅーくんとの子どもの顔も、早く見たいし

ね！ ……準備完了！」

「……なーんか、情報増えてないか？」

ある意味間違つてないから、いいんじゃない？ ロニイちゃんが望んだことだし。

ツッコむりゅーくんを背に、パソコンを置いた元へと歩いていく。少し離れた場所では、ロニイちゃんと閃光せんこうちゃんがこちらを心配そうに見ていた。

「ナナシ……」

「流星、大丈夫か……？」

「大丈夫だよ、二人共。りゅーくんは……死なせないから」

「パーメットスコア……8！」

りゅーくんの装着している『アレス』。NT-Dを始めたその子についているサイコフレームと呼ばれるところに、パーメット粒子が流れ始める。

いつも見ている青い光と混じって、別の光がそこに混じっている。本当は、この子には付いていない、別の専用の装甲があつてらしいけど……

こつちのほうが色々と便利、ということらしい。

「副作用は大丈夫？」

「ちよつと吐き気とめまいがするくらいだ。問題ない」

「……その程度の副作用収まっているのも、おかしいらしいけどね……」

本来なら、情報を処理しきれなくて脳みそが焼けるそうさ。そう、文字通り脳が頭の中で焼ける。

今より遥かに少ない量のパーメット粒子で。

「だがしんどいのはここからだ。ここで止まる訳にはいかないだろ

？」

りゅーくんの脳にどつと情報が流れ始めたのか、彼のバイタル値が目に見えて異常値を示し始める。

「……ウプツ……コンバートを……はやくー！」

「つ……コンパート、始めたよー！」

今のうちにしゃーくとナナシの情報をあつちの素体に……！

持っているパソコンの冷却ファンが唸りを上げ、演算の補助をしてもらっているこの会社のサーバーにも負荷がかかり始める。

ヴェーダっていう束さんでもびつくりのスペックを持つものでも、使用領域が8割を超えてる……！

これも人間自体の神秘か、シャアさんとナナシちゃんの情報量が多いのか……

それはわからないけど今、ツイマツド社全体でネットが繋がりにくくなっていることは確実だ。

「……シンギュラリティを超えてたら、これほどの情報とは……！」

今のりゅーくんの頭の中には、とんでもない情報量が処理されてる……

繋いでいるコードでさえも多くの熱を持ち始めて、煙が出始めている。

「束………後何分だ？」

「コンバート完了まで、あと1分！」

それまで耐え……？

りゅーくんのISが淡く青に光り始め、サイコフレームが白く、更に強く光を強める。

こんな機能は、知らない……これは……一体!?

その次の瞬間に感じたのは、人生で初めての感覚だった。

『……感謝する。束女史……いや、束さん』

頭の中に、直接声が聞こえる……!?

……これは……シャア、くんの声？

『さうやって話すのは、いつぶりだろうな……10年前に話したきりだったか？』

原作開始前編

……ああ、私が研究がーとか言っていた時期だったね。

あの時にりゅうくんとシヤアくんが支えてくれていなかったら

……

『過去のことはもういい……それよりも、これについて束さんは知っ
ているのか?』

これについて、シヤアくんは知ってる……?

りゅうくんは、大丈夫なの?

『問題ない……この現象は、サイコフレームの共振が起きたようだ
な』

サイコフレームの共振……?

機動戦士ガンダムUC
あのアニメでよく起こっている?

なんというか……神秘的だね。

『今回は……あくまでも予測だが、パーメット粒子との作用で起きた
ようだ……もしかすればNTへの覚醒も……』

……私が、NTに?

『もしかすれば、な……もうすぐ、現実で会うことができる——』
ピピツ!!

コンバート完了の合図である電子音と共に、意識が引き戻された。

パーメット粒子が流入していた証拠である、サイコフレームの発光
が終了し、りゅうくんのISが解除される。

それは……ISの補助がなくなった、フラフラのりゅうくんを支え
るものはなくなったことと同じ。

「りゅうくんっ!」

手に持っていたパソコンを投げ出して、いま倒れゆく彼の下に駆け
出す。

ロニイちゃんと閃光ちゃんも後ろからついてくる。

だけど、それを目の前のジャージを着る青年が支えた。

彼は……いや、あの子は、さっきまではただの抜け殻だったはずの
子。

「……今世では、流星と束さんが私の……妙な感じだな。親が同世代
とは……」

「……………もう、動けるんだな」

「脳内トレーニングですすでに準備万端だったからな。この素体も、よく馴染んでくれる」

「……………さつきまでI Sコア、だったやつが……………よく言う」

あの子は……………!!

「シャアくくん!!」

思わず2人に飛びついた。

……………この時、涙が流れていたことを、隠すかもしれない。

「当たっている……………何がとは言わんが……………!」

「やわっ……………!?!」

りゅーくん、息も絶え絶え……………だけど、話せる力はあるみたいだね。

ということは、結構調子が戻ってきたみたい。

さつきまで、ひいひい言ってたのにこれほどの回復力とは……………

「なんだかんだ言って、りゅーくんも束さん並の細胞を持つてるみたいだね!」

「認めたくなかったが……………どうやらその可能性がありそうだな……………」

なんで不服なのさ……………?

悪いことはないはずだけど……………もしかして、嬉しくて恥ずかしがっているのかな!

「……………束さん……………そろそろ息が……………」

「おっと失礼……………」

シャアくんが窒息しかけた……………危ない危ない。

「え……………? は? うっそ?! ……シャア・アズナブル!?!」

どうやら閃光ちゃんは彼をご存知のようで、何度も目を瞬いている。

……………この世界にも、シャアくんが出てくるアニメはあるけど、前世がある元彼だからけーっこうびっくりしてるんだらうね。

「これが……………体の感覚……………」

そしてもうひとりのジャージを着た女子高校生くらいの人? が

……………

「……………あんたが……………『ナナシ』だな?」

「……間違いないです。この度、私の体をくれた事に深く感謝します、お義兄さん」

「「……ん？」「」

ちよつと聞き入れづらいところを聞いた気がするなあ？

この元AIが、私の義理の妹になるってこと？

「私は、『尾白名無（みようむ）』と名乗らせてもらいます」

「「……あ？」「」

……さては、りゅうくんがそう言われたら断りにくいのは知ってるな？

「……今まで、『家族』はどういうものか知りたかった……」

理由をほつりほつりと話し始める。

AIが……完全に自我を持つてるね。シンギュラリティは伊達じゃないか……

道理で話していて、違和感が少ないわけだよ……

「ロニイは私のことを『お姉ちゃん』と呼ぶ……けど、私も年上の、頼れる存在に恋い焦がれているの」

「……まあ、構わないが」

ほらね。りゅうくんは……優しすぎる。

いつか、それが仇にならないといいけど……

「ありがとう……これからよろしくね、お義兄さん！」

「……よろしくな」

りゅうくんの家族、どんどん増えていくね……予定も含めたらもう20人近くに到達するよ……？

「……それで、見たところ名無ちゃんとシャアくんはもう大丈夫そうだね」

今日のこのあとの予定も、問題なさそうだね。

「もう走ることも、できるぞ」

「はい……問題ありません。このあとの予定は？」

「早速だが……リコリコに行くか。もうあっちには話をつけてるし」

side シヤア

「わあ〜！ シヤアさんだ〜！」

生まれた当日、私と名無は早速流星に率いられて喫茶リコリコを訪れている。

入店すると、早速千束氏がお出迎えをしている。

「千束か……あの時の蘇生術は見事なものだったぞ」

「ここではやめてえ!？」

……相変わらず、あのことは恥ずかしいようだな。

ただ評価しようとしただけだが……

「話にあったAIは……この子が？」

「ああ……といっても、構成は人そのものだからな？」

「うん、私のオペレーター……いや、お姉ちゃんだよ！」

「……ロニイ」

あちらでは店長と流星がロニイ氏と名無氏と話の輪を広げていて、

「やだ……ハンサムがハンサムを背負ってきた！」

「こいつは今んとこフリーだから、狙えるみたいだよ？」

「よっしや来たあ！」

閃光と話すミズキが獲物を見る目でこちらを見ている。

私が……狙われているのか？

「彼……コア人格だよな……!？」

「うん、実体もたせてみた」

「……キュウ」

「大丈夫ですかクルミ……?」

クルミに至っては、カミングアウトした束さんの言動のオーバーヒートして、たきな氏に介護をされている。

この場所は……

「……悪くないな、ここは」

できれば……ここで働くのも……

「……ここで働きたいか？」

「また心を読んで……しかし、本当に、いいのか？」

「いいじゃないか。別に離れてても、ISコアの機能とか、意思疎通とかはできるんだろ？」

（『さういふふうに』）

と次の言葉は、流星の声が直接聞こえてくる。

「こうやって、また人生があるんだ……やりたいことを、やってくれよし……決めろ。」

「……ミカさん！」

「なんだい、シヤアくん？」

「この私……」

シヤア・アズナブルを、ここで雇ってもらえないだろうか！

「シヤアさんほんとに?! いいよね先生！」

いきなりの千束からの猛プッシュにミカさんは……

「……よろしく頼もう」

「本日より、シヤア・アズナブル……喫茶リコリコの店員に着任します！」

心機一転、これからは色々なことを……

「……あ、キシリアから電話だ」

……先にそつちを済ませようか。

第47話 護衛任務①

side none

『まだ完治していなかった流星を載せてドイツに来たな、ん?』

「……その節は、流星がどうしてもいったので……」

『もしその時に傷口が開いていたらどうしたんだ?』

「そんなことはない。ISの絶対防御搭乗者の保護機能で傷は開かないように……」

『厄災のときには、その絶対防御を切って登場者の左肩を失くしたよ
うだが?』

「……………スミマセン」

尾白流星のスマホを持って、何度もペコペコしているシャアを遠目
に見ているその持ち主。

横には、今日のシャアへの講習が終わって寛ぐ千束と、こちらもレ
ジ打ちを終えて、座布団に座ってまかないの団子を食べているたきな
がいる。

「……………シャアさんは誰とはなしてるの?」

「キシリアドイツの大統領」

「……………だいたいりよお!?!」

「そんなに驚くことですか千束?」

「その国のトップだよ!?! 日本で言ったら楠木より偉い総理大臣って
ことー!」

「なら、総理大臣に直接言えば私はDA本部に戻れましたね」

「それは言っちゃだめなやつ! 2つの意味で!!」

「……………いまは、もう戻る気にはなりませんけどね」

「それじゃあ、明日のブリーフィングを始めようか!」

シャアを帰らしたその夜、千束の声が店内に響き渡る。

流石にまだあいつを危険な目にあわせる訳にはいかないからな。

〔『本当に、大丈夫だったのか?』〕

大丈夫だよ。それよりも、もうすぐ家に着くんだろ?

一夏をびつくりさせてやりな。

〔『……もうすぐ家に着く。それまで、どうサプライズするか考えておくでしょう』〕

……随分と、楽しそうな声だことで。

続きを話そうとしている千束に視線を戻す。

「依頼人は72歳男性、日本人。過去に妻子を何者かに殺害され、自分も命を狙われた為に、アメリカで長らく避難していた。現在は……きん……きき、きき、きん……?」

「……筋萎縮性側索硬化症、難病だ」

言葉に詰まる千束の横から口を出して助言する。

漢字に少し弱くないですかねえ……

「……ALSのことか」

「クルミも、知ってるんですか?」

たきなが驚いた様に此方を見る。千束やミズキも同様に視線を寄越してきた。

「……指定難病の一つで、筋肉を動かす神経系……つまり、運動ニューロンが障害を受ける病気だ。こいつになつたら脳から体を動かすのに必要な信号が伝わらなくなって筋肉が無くなっていく。発症率で言えば大体10万人に1人から2・5人。原因は十分解明されていない……だが、実はバグったタンパク質が細胞に溜まって神経炎症を引き起こす事で……「わ、分かった! 分かんないけど、分かった!」なんだ、まだ最後まで言っていないんだが……」

我に返って顔を上げると、錦木がヘンテコな顔をしている……多分此方の話の半分も理解してないだろう。

……俺も話し過ぎたか?

「……よく覚えてますね」

「なぜそこまでスラスラと言えるんだ……?」

「軍医やったりとか、病原菌だらけの密林に放り込まれたことあるか

らな……」

座敷でたきなが、二階でクルミがそれぞれふーんと言いながら関心していた。

喫茶リコリコのメンツは、俺の過去を知ら^{数多くの前世}ない。これくらいではバレないと思うが……

「しかし……流星さんの言い様だと、自分では動けないのでは？」

「そう！ 去年余命宣告を受けた事で最後に故郷の日本、それも東京を見て回りたいって！」

「……観光、ですか」

「泣ける話でしょおく？ 要するに、まだ命を狙われている可能性がある為、Bodyguardします！」

「……発音合ってるそれ？」

急になんちやってネイティブとは……仕事終わりだつてのにやたらと元気だな。何故そんなに明るい……もしかしなくても報酬が良いな？

「その何者かつてのが襲うかもしれなから、喫茶リコリコここを頼つたのか」

「that's right クルミ！」

「何故狙われているのですか？」

続けざまにたきなが千束に聞く……が、答えたのは……

「それがサツパリ。大企業の重役で敵が多過ぎるのよおく、その分報酬はタツプリだから♡」

たきなの質問にゲスイとしか言いようのない恍惚とした表情を見せるミズキさん。

……やっぱ報酬良いんじゃないやねえか。ミズキさんのゲスな笑顔見る前から明らかだったわ。

その人も数ある場所からよくリコリコを選んだものだ、とまで考えてふと思った。

こつち系の仕事を知っているのは……いささか出来過ぎんじゃないのか？

「千束、結構ハードな任務をこなせることを知っているのはなんなんだ？」

リコリスって機密機関で一般には知られてない。なら、リコリスに依頼する人達ってどういう経路で此処を見付けてくるんだらうか。

「さあ……う？ 重役だから、顔が広いんじゃないの？」

その違和感を無視するとしても、そもそも今回の依頼主はアメリカに避難していた。その時だって命を狙われている危険は伴っていたはずで、なら既にボディガードが存在しているはず。態々日本に来て錦木達とそれを差し替える理由が分からない。

それに加え、観光中はこちら側に一任だという。命を狙われている自覚があるなら……大した度胸をお持ちの方のようで、初対面の錦木やたきなに対しての警戒心が無さ過ぎる。

……ボディガードを依頼する人間性と矛盾するのだ。

「日本に来てすぐに狙われるとも思えないけどねー。行く場所はこっちに任せるらしくて、私がバッチリプラン考えるから！」

「……………今から？」

松下さんくるの明日だぞ？

「そう、今から！」

そのことを指摘すると、悪びれもなくどこに行こうかと考え出す千束。

今から彼女が考えたら日が変わるのが目に見えてるので……

「旅のしおりでも作ろうか？」

「それだ！ ナイスクルマミ、早速取り掛かろう！ あー時間が無さ過ぎる！ 流星コーヒー作ってよ！」

……俺、店員じゃないんだが。店員あんだらろ？

ここの店長であるミカさんの方に向くと、どうぞと言ってキッチンを開けた。

まじで俺が作るのか……？

「……ほんとに徹夜する気か、おい？ ……手伝うから、少なくとも5時間は寝ろよ？」

「分かってるって！ 早速作業を始めよー！」

その後、作業をしている千束達に淹れたコーヒーを差し出したが

……

悪くなかったそうだ。

それよりも……千束、この行き先は……自分の行きたいとこだよな？

「お待ちしてりましたー！……あ」

翌日。お出迎えをした千束の言葉尻が詰まる。

何故ならば……サングラスの黒服に守られながら、ゆっくりと店の中に入ってきた車椅子の客人は、やはりこの空間では一際異彩を放っていたからだった。

千束やたきなが依頼主のその姿を見た瞬間に固まって動けなかった中でも、ミカと俺だけは変わらざるの態度で挨拶を交わしていた。

「松下さん、いらっしやいませ」

「……遠いところ、ようこそきてくれましたね」

『少し早かったですかね。楽しみだったもので……尾白流星くん？』

「ええ……今日は飛び入りでね」

依頼主……松下というご老人から発せられたのは、やはり千束が先日伝えた通りの合成音声。

……にしては、流暢に話せるな。この世界の技術では脳波を言葉に変換する時は、もうちよつと片言になると思うんだが。

だが、その完全に納得できない感情は松下の状態を見ると、そのことは片隅においてしまう。

自動で動く車椅子に、視力を補助する目的であろう機械的なゴォグル。筋肉は衰え瘦せこけており、人工呼吸器特有の空気の排出音が静かな部屋によく響く。無表情に見えるその顔も、筋肉が動かせないが故のもの。

余命宣告を受けているとの事だが……難病^{ALS}なのが目に見えて分かる深刻さだった。

……して、それとは別にほのかに臭うこの匂いは……？

「……あ、いえ、準備万端ですよ！ 旅のしおりも完璧でえす！ 流星！」

千束の呼びかけでこちらに引き戻されて、カウンターに置いてあるパソコンに向き直す。

「PDFにしたやつ用意する。松下さん、アドレスだけお伺いしても？」

『ありがとうございます、助かります……後はこの方達にお願いするので下がって良いですよ』

俺にお礼を言った後、松下の自動車椅子の向きが黒服へと移動する。彼の言葉を聞くと、素直に黒服は表に停めていた車に乗って早々にそこから離れて行ってしまった。

俺はカウンターに腰掛けて、松下氏の為にPDFをしおりの順に並び替えてセッティングする……千束にそれを覗かれていてなんとなくやりにくい。

その間、今回の依頼主である松下を中心になんとも言えない空気が漂っていた。特にたきな達は、松下という痛ましい姿をした存在の扱いに困るかの如く、何も言えずにただ彼を見つめる事しかできないでいる。

……すると松下当人もそれを感じたのか、俺と千束へとその車椅子の向きを傾けて呟いた。

『今や機械に生かされているのです。おかしく思うでしょう？』

「そんな事無いですよ。私も同じですから。ここに」

機械に生かされている事を恥じるような松下の発言を、千束は両手を胸元で振って否定する。そして、その胸の前でハートの形を作ってみせた。

……それは自分の胸にも、私を生かしてくれる機械があるのだと暗に伝えていた。

『ペースメーカーですか？』

「いえ、丸ごと機械なんです」

「……え？」

たきなはずわらず声を漏らし、クルミも視線が千束に向いた。彼女の言葉に困惑したその反応は、傍から見れば新顔である三人が何も聞かされていなかったであろう事が伺えた。

俺はミカさんから聞いていたから、特に驚くことはなかったがな。

『人工心臓ですか』

「アンタのは毛でも生えてんだろうね」

「機械に毛は生えねえっての……!」

当然の如く、10年前からDAにいたミズキも知っている。

やはり驚きを隠せないきなは、固まった表情のまま千束を見つめていて……

「ど、どういう……」

「流星、まだ送付終わんないのか?」

「……今終わった。松下さん、今送ります」

偶然たきなの言葉に重ねる様にクルミから急かされ、俺は息を吐く。完成したものをそのまま貰ったアドレスへと転送する。

……恐らく松下の身に付けた視力補助のゴーグルに、昨日夜なべして作った千束達の手掛けた旅のしおりが表示されている事だろう。それを閲覧したのか、松下からまた驚きの声があがる。

『おお……! これは素晴らしい』

……喜んで貰えた様で何より。

千束のしおりが無駄にならなくて良かったと、そう心の中で思っていると、いつの間にか千束がすぐ近くにまで寄って来ていた。

「……ありがとねっ流星!」

「……礼はいい」

嬉しそうに、楽しそうに笑う千束。

夜遅くまで準備した割には千束は元気そうだ……松下が此処に来るまでも、彼女は自作のしおりを何度も読み返しては、今日一日の予定を頭の中で楽しく復習していた事だろう。

その顔を見ただけで、提案して、手伝って、喜んで貰えて良かった。頑張つて良かったと、今はただ切に思った。

「では! 東京観光、出発しまーす! 行ってくるね!」

千束が松下の車椅子の取っ手を掴む。このまま運ぶつもりなのだろうが、松下もそれに対して特に何も言っていない。行先は千束に任せるといふ話だったし、彼女がそのまま出口へと向かう事に対しても

身を委ねていた。

だが……この中で唯一、たきなだけは完全に置き去り状態で立ち尽くしていた。原因は言わずがもがな、千束の人工心臓の話をまだ咀嚼できていないのか……突拍子も無い話である為、当然だろうが……

「あの、千束の今の話って」

「たきな行くよー！ ミズキも車ー！」

「っ、あ、はい！」

千束に急かされ、慌てて駆け出すたきな。

ミズキと俺はその後を追う形で後ろを歩く。

千束は景色を見たいからと運転席の横に座っているが、「流星の横座りたかったー!!」と愚痴をこぼしているが今は走行中……もう席を変えることはできない。

つまり……乗り込んだ車の中で隣になったたきながいる。

何も話さないわけではなく……

「千束は、どうして今まで言わなかったんでしょか……」

「たきな……人は、隠し事の1つや2つはあるもんだ」

「なら、流星さんも……」

「まあな、逆に多すぎて忘れたものもあるかもしれん」

戦争だらけの空を飛んだ記憶とかは、まだ誰にも話さないでいたり……とかな。

「それ問題では？」

「……………言ってる」

水上バスを乗ったり、浅草寺の雷門の下をくぐったりしていると、時計はもうそろそろ真上で長針と短針が重なるうとしている。

ショッピングモールをあれこれ歩き回っていると、ふいに千束が

「今日行くのはここお!!」と、ある店を指さした。

「ここは……」

「@クルーズ……有名なのですか？」

「メイド（&執事）喫茶、その筋では有名らしいよ？」

「は、はあ……」

まさかのメイド喫茶……もうちよつとちやんとしたところで食べないか？

『……は……う？』

「いわゆるサブカルってところですよー」

ほんとに自分の行きたいところ選んだだけじゃねえか……

……カラカララララ

「お客様、@クルーズへようこそ、そ……」

「……え？」

思わず疑問の音が出る。

店に入ると、執事服姿のスタッフに声を掛けられた……それはいい。メイド喫茶はそういうものだからな。

……だが問題は、そこではない。

「シャル、何やってんだ……？」

「りりりり、流星っ!？」

なぜフランスの代表候補生であり、先日フランスから戻って来たご連絡していた……シャルロット・デュノアが、執事服姿で接客してるのかってことだ。

「……まあ、その服は似合ってるがな」

「それは嬉しい……んだけど！ その付いてきている人達は……？」

「何をしている、次のオーダーが来て……」

「……」

……本日2回目の絶句。今回は千束も顔が引きつっている。

千束も、ラウラのことは福音の一件で知ってるからか……

「ラウラ、お前もか……」

ドイツのIS部隊を指揮する現役軍人かつ一夏のお嫁さんが、なぜかフリフリのメイド服で現れたら絶句しないか、いやする。(反語)

「お、お兄ちゃんと錦木氏……み、みみ……!」

「まあ……これがギャップ萌えてやつ？」

「見るなあ!?! 私をそんな目で見るなあ!!」

ボーデヴィツヒが顔真っ赤にしてしやがみ込んじまった。

「……とりあえず、席に案内してくれ」

このまま店先で立つても邪魔なだけだし……松下さん待たせてるからな？

働いてる以上、仕事はしてくれ。

『尾白くん、あの店員とはなにか面識が？』

「……学校の知り合いです」

「お、お待たせしました。オムそばです……」

注文した料理を持ってきたデユノアだが……声の上擦っている。

「……にしても、困ってそうな人に声かけたらそのままバイトに誘われて執事服とはな……」

「デユノアちゃんも、ラウラに負けないくらい似合ってるねえ……」

やめてやれ千束……シャルのライフはもう0だ。

「もう止めてってばあ！ どうぞぐゅっくりー！」

半泣きになりながらもマニュアル通りのセリフを言つて、デユノアが逃げるように去る。

ほらな……死○撃ちはやめてやれ。

……IS学園は、基本バイトは禁止じゃなかったか？

以前織斑先生に、そう言われた記憶がある。

俺は……バイトじゃない。働いてるからな。

……黙っててあげよう、執事服とメイド服のことも含めて。それがせめてもの情けか……

「それよりも……」

ラウラのメイド服の写真をコツソリ撮って、一夏に送つといた。

結果、ものすごい喜んでいた。

side none

ところ変わり、尾白家……

「ラウラ……つてええええええ！」

流星から送られたラウラの画像で悶ている一夏。

その画像を見て歩き、タンスの角に小指けて2つの意味で悶絶している。

「名無、敵ミリ！ 詰めてくれ！」

「りよーかい！ こんのっ！ 早く倒れて！」

一夏の状態には目もくれず、流星の部屋からゲームを持ち出し、それを使って実況配信しているマドカと名無。

名無はシンギュラリティをしているAIとはいえ、行動が人そのものになっている。

「木綿季、そろそろ機嫌を……」

「シヤアが、シヨタじやなかつたなんて……！」

「……カハッ」

この世に絶望したかのように落ち込む木綿季と宥めるロニイ、そして見えてはいけないものが口から出かけているシヤア。

シヨタじやないからという理由で傷つくシヤアもおかしいが……

こっちはこっちで少しカオスな状態になっていた。

第48話 護衛任務②

side 流星

「ありがとうございます……」

「また学校でな」

ラウラが会計をし、シャルが店先まで見送りをしてくれた。

終始、どちらもドギマギしていたな……

「まさかあの子が働いていたなんてねえ……ん？ 通信？」

「もしも先生？ なにかあつた？」

『のんきにメイドカフェ行ってるんじゃない……追手が現れた！ サ

イレント・ジンだ！』

サイレント・ジン……？ なにかのコードネームか？

初めて聞く名である以上、何を使ってくるかわからない。

なので有識者……いや、裏に詳しいあいつに右耳に付けているインカムを使ってCALLLをする……

時間外労働だが、出てくれるだろうか……？

——プルルツプルルツ……ガザツ

「なにか知りたいことがあるのか、流星？」

「イーライ、いきなりだがサイレント・ジンについて教えてくれ」

出てくれたCALLLの相手はイーライ。結構世界を飛び回っているあいつは今は国内にいるらしい。こういった事情にはあいつ詳しい……

「サイレント・ジンか……中々に厄介なやつだな」

「ほう……それで、なぜその名前になってるんだ？」

「サイレント・ジン。その寡黙な暗殺がそのまま異名になるほどの口無しっぷりらしい。15年前までは警備会社の裏稼業をしていたみたいだが……」

「……実力の程は？」

「裏では結構有名らしい……もしかして、そいつが来ているのか!？」

「そのもしかしてだ……面倒なことになった」

「本当に面倒だな……今リコリスと任務中だっけか？」

【ああ、ファーストとセカンド一人ずつで老人の護衛中だ】

【……なら、今すぐ安全な場所に逃げろ。加えて一人、殿をしたほうが成功率は上がるだろうな。お前の実力を知ってない訳では無いが……護衛対象がいるなら、分が悪い】

【わかった、注意して対応する。それと……松下という老人について調べてくれ。ALSで会社の重鎮らしいんだが……なぜジンに狙われてるか、気になるしな】

【松下、だな。カズに聞いて、データバンクを参照しとく】

【こちらからは以上だ。急にすまなかつたな】

【問題ないさ、兄弟】

『……ミズキと連絡が途絶えた。ジンが仕掛けてくるぞ』

イーライとの通信を終えると、クルミがこちらに悪い知らせを寄越してきた。

ミズキが……行方不明 MIA、ジンにやられたのか……？

ミカからの報告で、千束の気が引き締まったことがよく分かる。MIAのミズキが無事だと思いたいが……最悪のケース、であったとしても今は感傷に浸っている場合などではない。任務はまだ続いており、脅威はこれからやってくる。

ならば千束とたきなにはリコリスとして、何より松下の安全を預かる者としてやるべきことが残っている。

「——私に任せて下さい」

たきなは、まず問題の根源を叩くことを望む、か……

答えとしては一つ、間違っていない。

「ちよっ、たきなー！」

サプレッサーを銃に取り付けたたきなが、駆け出す。

一方向ということは……ジンの居場所をクルミあたりにも、聞いているのだろうか。

その後、それが答えであるかのようにサプレッサーの付いた銃特有の音が、響いた。

side たきな

『たきな、朗報だ。ミズキが生きてた。今依頼者を迎えに東京駅に向かっているから、それまで持ち堪えてくれ』

「っ……分かりました！」

防弾コートを着たジンを追いかけている最中、クルミから朗報が入る。

ミズキが生きてる。素直に安心した。

しかしこれでミズキが松下の護衛に付いてくれれば、千束、もしくは流星さんと合わせて二対一。もしくはどちらも参戦して三対一……ジンを追い詰める事ができる。

それまで、自分はジンを千束達から引き離すように立ち回りつつ、かつ千束と合流しやすい場所へと誘導できれば。

『ジンの動きが止まった。十五メートル先の室外機の裏に居るぞ』

「止まった……！」

その報告と同時に足を緩め、音を立てないよう別の室外機から覗き込む。真夏に全身黒装備という特徴的な身なりの為、室外機の先ではみ出る黒いコートがよく見える。

様子見か、休憩か……立ち止まっている理由は何でもいい。千束や誉の方へジ人が向かう前に、ここで決着を付ける。

たきなは銃を持って、静かに回り込む。クルミにジンの動向を監視してもらいながら、移動してない事を確認し、奴の背後にまで位置取り、気取られる前に角から飛び出して、その拳銃を突き付けた。

「なっ……!?!」

そこには、ジンの羽織っていたコートだけが取り残されていた。思わず拳銃を下ろす。慌てて近付いて見れば、コートの襟首に光る小さな粒が……恐らくミズキが付けた発信機だろう。

……まずい、発信機を気取られ、脱ぎ捨てられたのだ。発信機の付

いたコートはダミーとしての役割を十二分に果たされ……完全にジンを見失った。

「クルミ！ 見失いました！ コートだけです！」

『……分かった。千束達は東京駅の近くだ。アイツにも情報は伝えとく。たきなも急いでくれ』

「くっ……い！」

齒軋りしながらも、その身を翻して駆け出す……目の前だと思っていたのに、逃げられた。

ジンが標的である松下の位置を既に知っているなら、千束や流星さんの居る東京駅へと向かうのが必定。クルミの指示は的確だった。

それに松下は車椅子……だけど千束はおろか、流星さんの実力は計り知れない。

だが、こういう任務は、いつも襲う側が有利。油断はできない。

ミズキが二人を迎えに行く前に狙われでもすれば、千束が護衛対象を守り切れる確証がない。単独行動が完全に裏目に出ってしまった。

急げ………急げ!!

ミズキがジンにやられてしまったかもしれないと、そんな報告を聞いただけでも鳥肌が立つほどに恐怖したのだ、千束と流星さんの訃報を聞いたたりなどすれば………そう考えるだけで心臓が煩い。そんな事させるものかと脳裏が警報が鳴り響く。

失う事に、これ程までに恐怖している。千束と流星さんの顔ばかりがチラつく。

これが……流星さんの恐れていること。いや、もつと彼は怖いのかもしれない。

「………あ」

ふと……私の視線は、ある方向で固まった。

東京駅の屋根の上。改修工事途中で鉄骨などの骨組みで出来上がった足場の先……巨大な時計の真上で、長髪を風に揺らしながらサプレッサー付きの拳銃を下に向けているジンの姿を視認する。

その拳銃の先には……

千束と、流星と、彼女たちに向き合う車椅子の依頼者、松下の姿。

三人ともジンがいることには気づいていない。

……ドクン、と心臓が音を立てたように強く、脈打つ。

目を見開き、足を懸命に動かしながら、両腕を上げて拳銃を構えて……咄嗟に、叫ぶように、その名を呼ぶ。

「千束、流星さんっ!!」

「……っ!?!」

放つ、ただ一撃を。

それはジンの拳銃をピンポイントで直撃し、同時に放ったジンの弾丸の軌道を僅かに逸らす。松下の頭蓋を貫くはずだったその弾は、車椅子の取っ手に直撃し、弾かれ火花を散らした。

たきなは思い切り床を踏み抜き、その体勢を崩す程の勢いでジンの腰付近にその身をタツクルさせる。そして上体をよろめかせ、床を踏み外したジンと共に、東京駅の屋根から落下していく。

「たきなあああああああっ!!」

「受け身を取れ、たきな!!」

千束の叫び声が遠くなっていく。それでも、彼女と流星を守る事ができた事の安堵の方が大きかった。何枚もの床板を重力によって貫きながら、下へ下へとジンと共に落ちていき——重ねられた工事現場用土嚢袋の山をクツションに、その身一つで激突した。

「……ぐっー!」

受け身を取って……すぐにはできない。土嚢でなんとか衝撃は吸収されたものの……

痛みで足が纏れ、身体を地面に打ち付けた。

掠っただけでも動けなくなるほどの痛みには、その表情が苦痛に歪む。

転んだと同時に足も捻ったのか、痛みですぐに起き上がれない。その間も、敵からの銃弾の雨は止まず、たきなの息の根を止めに来る。たきなは慌てて上体を起こし、動かない足を庇いながらどうにかコンテナへとその身を隠す。

「………いたい

痛い、どうしようもない程に。」

すぐに動かなくてはならないのに、足が動かない。この場で迎撃する為の攻撃手段も先程落としてしまった。チエックメイトが、死神が足音を立てて近づいてくるような幻覚が視界を襲う。

こまめに場所を変更しながら千束、もしくは流星さんが来るまでの時間を稼ぎ、どちらかが来たタイミングで落とした銃を回収して二人で攻める……はずのプランだったが、そんな追いかけてここにジンは付き合う気は無かったようだ。

此方が拳銃を使わず逃げに徹していることから、予備の拳銃が無い事も理解しているのだろう。最後の方は、ジンは隠れもせず此方を追いかけてきていた。

……まずい、このままでは死ぬ。

それだけじゃない、千束がジンを見失えば松下が狙われる事は見えている。それに流星さんも……それだけは、それだけは絶対に阻止しなければならぬ。

しかし、そんな考えも潰されるかの如く、鉄骨を踏み抜き床を駆け抜く音がした。

「……………つ、あ」

ジンは、改修工事によって組み立てられた鉄骨によって敷き詰められた床を利用して上を取り、物陰に隠れた私を視認して、銃口を向けていた。

足を貫かれて動けずに隠れていた事も予測済みだったのだろうか、ここに来るまでの行動に迷いの一つも見られない。

私はそれを見上げながらも、反撃の術が無い……それを眺める事しかできないかった。隠れようにも、もう間に合わない。外して貰える様な距離じゃない。

その銃口が、私の頭蓋を見据える。

ジンの手に持つ拳銃の引き金が、段々と引かれ始める。

弾が放たれるその銃口が死神の眼のようで、それに何故か魅入られて……固まり、視界が揺れる。

私は……ここで……あと数秒で……

「たきな!!」

その声と同時に、ジンの銃声が響いた。

私とジンの前に躍り出る黒い影が、私に覆い被さるように現れて、そのまま私を抱えて飛ぶ。

その人物は私を抱いたまま二人して転がり、ジンの銃弾の死角になる場所まで移動する。

土煙が舞い、ジンからも、そして此方からも互いを視認できないようになって漸く……自分を抱える存在を見上げる事ができた。

「見たところ……左大腿部の銃創と、落下時の打ち身だけだな？」

「流星、さん……さつきまであそこにいたのに……」

「たきなが落ちるの見て、ここ登ってきたんだ」

いつの間にか、全身が特徴的……まるでタイツに装備を加えた服装になっている。

そんな彼の左の手の平から、血が滴って……

あの時に……

「流星さん、血が……」

この言葉で自覚したのか、彼はガーゼでその部分を強く巻いた。

それでも、彼の巻くガーゼが赤く染まる。

「俺は掠っただけだ。たきなのその怪我に比べたら、どうってことない……神経もやられてないしな」

……そんなわけない。私とおなじくらい、痛いはずなのに……

「手当をする……ちよつとしみるぞ」

「つつ……やってから言わないでください」

流星さんはポーチから取り出した消毒薬を私の患部に吹き付け、ガーゼを巻きつける。

……処置が、速い。

「すみません……出しゃばった真似を、して……」

「いや、よく頑張ってくれたよ……護衛対象はもうミスキに任せて安全な場所に逃げる事ができた。ありがとう、たきな」

「っ……はい」

彼がこちらに少し微笑む……そして何故か、身体が少し熱くなる。

これは………なんで熱くなるんだろう？

いや、それよりもなんで敵の前で私の手当を……

「ジンの相手は……？」

「千束が牽制している……もうすぐリロード挟みにこっちに来るだろう」

千束もここに……？

「たきなっ！ 大丈夫!?!」

これが噂をすれば、というものか。

千束がマガジンを落としながら、こちらに転がりこんできた。

「流星さんに処置してもらったので、なんとか……」

その場所を見せると、千束はふう……と、少し息をつく。

「なら、引き続きジンを……」

「待て千束、たきなを頼む……選手交代だ」

そう言って流星さんがどこからともなく取り出した大型拳銃……

デザートイーグル……50AE……!

まさか……

「殺すのはナシね!?!」

「わかってる……俺のお目当ては……」

まばたきした瞬間、すでに物影から飛び出していた彼の狙ったのは

……

バチイイインツ!!

「なっ……!?!」

ジンの持つ得物^{拳銃}だった。決して遠くない距離で大口径の弾丸を食らったら、金属の塊でもひとたまりもない。

スライド部分を破壊されたそれは誰が見ても使い物にならなくなる。

「これだよ……これで脅威度が非常に下がる」

「ふうくん……やるねえ……」

流れるように、次は投擲武器のなくなったジンに近づく。

だが、相手はプロの暗殺者。殴打武器、または刃物を持っているに違いない。

それにも関わらず、彼は恐れることなくジンに近づく。

相手が武器を出す前に近づき切った流星さんは……

「ジン、これで詰みだ……投降しろ。ミカの友人と聞いている……手荒な真似はしたくない」

千束と同じ弾丸を詰めたコルト1911をジンの脳天に突きつけて、ジンの動きを完全に封じた。

「……………投降する」

「喋れたんかい……一応拘束するからな」

このやり取りだけで、この場の空気がどつと緩んだ。

そして流星さんがジンに縄を巻いていると……

『……………殺すんだ!』

side 流星

『……………殺すんだ!』

ジンを拘束していると……ふと、離れた距離から機械音声の響いた。

たきなはそちらに顔を向け、千束も振り返る。そこには、安全な場所に逃げたはずの松下が此方に向かって車椅子を動かしてきていた。

よく見たら後方には疲弊し座り込んでいるミズキの姿もある。

『そいつは私の家族の命を奪った男だ。殺してくれ!』

「殺し、た……って」

たきなは初耳なのか……情報に目を丸くする。千束は何も言わずに近付いてくる松下を見て悲しげに目を細めた。

千束はジンがやったことを知っていたのか……

『本来なら、あの時私の手でやるべきだった。家族を殺された二十年前に……!』

以前、松下の家族を殺したのも、目の前で項垂れ意識を失っている黒髪長髪の暗殺者だという。そこにどれだけの信憑性があるかは分からないが、彼を殺し、家族の仇を討つのが松下の目的だったのだ。なるほど、日本に来たのは暗殺に特化したリコリス、及びDAに助力を乞う事が目的だったのだとすると確かに辻褄が合う。

アメリカでのボディガードでは自分の身は守れど反撃はできないと踏んで、リコリスの中でも最強と名高い錦木千束に暗殺者を手にかけさせようと……

という、よくできたカバーストーリーを考えられたものだな。

『君の手で殺してくれ。君は『アラン・チルドレン』のはずだ!』

「松下さん……」

……アラン・チルドレン。

彼……いや、そいつが今口から出た言葉で、たきなのもとへ来る前に来たイーライからの調査結果が嘘ではないことがわかった。

『何の為に命を貰ったんだ! その意味を良く考えるんだ! 早くその男を殺せ!』

「待て松下……いや、お前は誰だ?」

『「つ?」』

この言葉で、首を傾げるたきなを除いて全員が息を飲む音がある。

「まずこいつから臭う特徴的な……千束、あいつはポン中だ。ALSなんか患ってない」

「……ポン中? どここの中学校?」

「覚せい剤中毒者。ALS患者にしては、まだ肉付きが良かった」

ちなみにポンは昔のヒロポンのことを指す。

知らない人が多いのは、世代交代が進んでいる証拠だろうか。

「じ……じゃあ、この人は……」

「この世に、会社の重役という肩書を持つ松下なんて人は居ない。

それに、絶え間なくこの車椅子がどこかとやり取りしているようだな……?」

『何を言っ……千束、それではアラン機関は君をつ……その命をつ……!』

男性のその言葉を遮るように、遠くからサイレンの音……このサイレンはパトカーか。恐らく此処でのやり取りを目撃した第三者からの通報が入ったのだろう。

ミズキは音源の方向へと振り返って、焦った様な顔で呼び掛けた。

「うわヤバ……面倒な事になる前に逃げちゃお、ほらほら!」

「たきな、立てるか?」

「ありがとうございます……」

千束は振り返り、男性に向かっていく。

「あの、取り敢えず場所を変えて一度落ち着……あ、あれ松下さん?」

「千束……?」

呼びかける千束の反応がどこかおかしい。たきなと顔を見合わせ

千束の方へと歩いていくと、そこには物言わぬ松下が項垂れていた。

……逃げたか。

翌日、クリーナーから男性が病棟から逃げ出した男性で違いないということを知らされた。

今は虫の息だという。

人を利用してまで、アラン機関は才能を……

「なあにいつまでもムスツとしてるのよ流星!」

「いや、昨日のことだな……」

あの喋っていたやつという言葉から考えるに……彼女は、アラン機関に

殺しの才能を見出されている。

千束自身は、不殺を貫いているというのに……

「あのことならもう大丈夫だよ！ 流星もさっさと立ち直りなつて！
ほら、千束スペシャル奢るから！」

そうして目の前に置かれる、甘味の集合体。

「ありがと……ポジティブっていいな」

「そうだよ、人生ポジティブが一番だからね！」

それはそうかもしれない……どうしようもなく、絶望しているときでもそれを持つてれば……案外どうにかなる。

一年戦争と2年前の俺に教えていやりたい。

「それで、次はなんでケータイ見てるの？」

「千冬から依頼が来てな……それでどうしようかと思ってるんだ」

「あのモンド・グロッソ初代優勝者の人から？」

「海の時にいただろ？ 代表候補生達と一夏に怒ってた人」

まあ……あの後に彼女たちがやることを知っていたのか、結構手短かに終わったけどな。

千束はこのことを知らない。

そろそろ発表されるはずだが……

「ああ〜！ あの人か！ それで、どんな内容なの？」

「もうすぐIS学園で学園祭をするんだが……飲食店がどうも集まらないらしくてな」

「もしかして、私達臨時収入のチャンス!？」

「……そんなとこだ」

「先生〜！ 9月にIS学園で出張店しない〜？」

「IS学園で？ ……楠木司令が許したらな」

「いよっしやあーっ！」

千束がピョンピョンと飛び跳ねる……まだ確定じゃないんだがな。
店内に目を傾けると、昨日まで暗殺業サイレント・シンをしていたジンがコーヒーを運んできた人……シャア・アズナブルに目を開いている。

……あんな細目で、よく開くな。

たきなは大事を取って今日は休んでいるが……今日この場にいた

らどうなっただらうか。

——カランカランッ

「おはようございます。もう怪我は大丈夫なの……ジン!?」

あっ……これデジ既ャヴ視ュ感が……

「たきなステイ!! 今その人敵じゃないから!! 銃構えないで!!」

「落ち着けたきな……ジンはただの客だ」

「ですがそいつは……!」

たきなの続きの言葉は、あるテレビの音が聞こえるとともにか細くなっていく。

『……速報です! ISの男性操縦者の重婚が適用される法律が、国会で承認されました!」

それを受けて各国が次々と男性操縦者との婚約を発表しています!

確認されただけでも、イギリス、ドイツ、フランス……」

……どうして、天はカオスな状況を作るのが好きなのだろうか。

「なっ……!!」

「はあっ!」

「こやつっ……ハーレムを!!」

「えっ!? どどどどっ……どっ!?」

「……ラウラさんが流星の!」

「はあ……やっぱりこうなるか」

ジンに向きかけていたヘイトが視線とともに、すべてこちらに向いてくる。

テレビエ……なんで今なんだよ。

「……いや、ラウラは一夏だ」

「そうだとしても、流星……何人、すでに決まってるんだ?」

「聞いて驚くなよ、クルミ……」

何故か7人だ」

それもこれから増えるかもしれん。

「「7人っ!!」」

東京の下町に、驚きの声が響き渡った。

幕間 ツイマツドの愉快的仲間たち5

side 流星

「この機体は……クロスボーン・ガンダムX-2、『ハーフクロス』。ベースはX-1の姉妹機であるX-2に、もともとツイマツドに保管されていたフルクロスについてたバインダーを一部移植したものですね」

黒をベースに所々紫色のラインが入ったボディに、特徴的なX型のバーニア。そして、半身をマントのように覆っている……だが、何よりも目を引くのは人間で言うところの額に当たる場所にあるドクロだ。

「……ってことは、フルクロスだったらあの左についてるマントみたいなやつが、両方についてるのか？」

このISを主導して作っていた、トビア・アロナスクという青年から説明を受けながら、今回試乗するISを観察する。

このマント状のバインダーは防御面でかなり優秀との報告を受けたことがあるが……だいたい機動性とかの問題で半分になっているのだろうか？

「武装とかも違いますけど……ざっとそんな感じですよ」

「武装……具体的には？」

「本来、X-2はショットランサーを持ってるとはんですけど、それだと近距離になるので……クジャクっていうマルチウエポンと、バタフライバスターに武装を変更してます」

右手に持っている穴が横に並んだ銃みたいなやつがクジャクで、腰に挿している柄だけの棒？ がバタフライバスターというらしい。

クジャクの横についている穴、横に開いて斉射したり、ビーム刃を形成したりすることができそうさだ。

「たしかにそっちのほうが使いやすそうさだ。流星に飛び道具のあるISで、一次移行の時の一夏みたいなのはゴメンだな……」

バルカンあるとはいえ、近接オンリーだったら色々面倒になる。

（『勝てないと否定しきらないところが、もう怖いんだが……』）

まあファンネル後付して飛ばせばな……というか、聞いてたのか
シヤア。仕事はどうした？

『今ちようどリコリコで休憩をしてるからな。ISの待機形態から
聞かせてもらった』

ほーか……まあ、楽しく頑張れや。

『……そうさせてもらおう』

この話をしていると、トビアが「変えといてよかったあ……」とい
いながら、続けて話す。

「ですよね……ところで、流星さんはクロスボーンを見ること自体始
めてなんですか？」

「ああ……実機を見るのはこれが初めてだ。マフティー動乱の後、M
Sは一気に小型化したと聞いていたが……流星にこつちでの反映は
難しいか」

「少なくとも人の身長は必要な設計だから……流星にそつちは無理で
した」

原作ガンダム

アニメを見ていてもわかるが、106年のオデュッセウスとかク
シイーとかを境に、MSは2/3位のサイズにダウンサイズしてい
る。

それでも性能が上がっているから……驚きだ。

「話は変わりますが……ちよつと失礼なことを聞いてもいいですか
？」

「別に構わんが？」

トビアは何を聞きたいんだ……？

「ほんとに流星さんは、UC106年にあつちの世界でいなくなつた
んですか？」

……そんなことか。それくらいなら、全然話しても構わないしな。

「……まあな。今使ってるISがMSだったときのやつと同化して、
そのまま……」

『軍神伝説』の童話そのままですね」

「……軍神伝説？」

初耳だぞそれ……あの世界線のUCで俺が、何かの伝記になってた

宇宙世紀

のか？

「ユニコーンガンダムの4号機でしたっけ？ それを『アレス』っていう馬に見立てて、それに乗る一人の騎士……流星さんの話です。例えば、赤い巨人ネオ・ジオングに2人の白と黒の騎士と一緒に立ち向かったり、いろんなお姫様を助けたりする話です」

「……たしか、連邦とアナハイムは機密情報にしてたはずなんですが……」

「何十年も経てば、自然にどこからか情報が漏れると思うんですけどね」

「……それもそうか。でかい組織が隠し通せる事柄は少ない。」

「これは、多くの経験則から言えることだ。」

「僕は好きでしたよ、そのお話。地球よりも、木星とか宇宙の方が有名だったと思います」

「アースノイドよりも、スペースノイドの方が、ね……」

「またその話は詳しく聞く……それよりも、トビアはクロスボーンは乗っていたらしいな？」

「クロスボーンの色々な派生や後継機に乗ったことがあるって、初めて会ったときに聞いたが……」

「ですね……僕もまた乗りたかったなあ……」

「それはどうすることもできん……俺とか一夏がなんで乗れるか、まだわからないことだらけだからな」

「……それが分かればワンチャン？」

「まだそれについては、あと10年以上はかかるんじゃないか？ フルダイブのVRに実装させとくから、それで我慢しといてくれ」

「実装してくれるんですか!？」

「ちよつとここで、商品紹介。」

「うちの会社では、IT部門でレクトから引き受けた（乗っ取った）アルヴァイム・オンライン」

「A L Oと、自社で開発したガンゲイル・オンラインのVRMMOの運営に加え、ISを男性でも操縦できるフルダイブ型のシミュレーション……というか、シミュレーションに近いのゲームを開発した。」

「色々なISを使えて、SAO譲りの現実とほぼ遜色のないリアリ

テイを売りにしている。

白騎士やアレスも使えないことはないが……

使用条件は非常に難しいものとなっているがな。

それはそれとして
閑話休題。

「一週間以内に実装させとく……それじゃあ、テストを始めるか。閃光も待つてるしな」

——
——
——
——
ハーフクロスを装着して実験場の空に上がると、向こうではすでに嘗て乗っていたAC……今は白隼閃光が駆るホワイトグリン트가ホバリングをしていた。

「閃光、テストの相手頼んだぞ」

「任せてくださいー!」

ちやんと手当出すから……と言えば、すぐに飛んできてくれた。

……はつきり言つてチヨロかった。

「……失礼なこと考えてない?」

「いや、別に?」

「というか、手加減しなくてもいいの?」

「大丈夫だ……初めて乗るし、武装も説明受けただけだから安心しな」

「全然大丈夫じゃなかった!」

「いきなりザクに乗らされて、核弾頭ついたバズーカ撃つたことに比べたらマシだ」

「か……核!?! とんでもないこと聞こえたんですが!?!」

自分の撃つた後は、他の人のやつ奪って撃つてたからな……辛い思いをさせないっていう意思に駆らされて。

そんな時の俺、SAOのことを知ったらどうなるだろうな?

……今はいいか。テストが先だ。

「その司令室で俺たちの話を聞いてた主任、合図を頼む」

『……わかった。X―2ハーフクロス対ホワイト・グリント……始め！』

刹那、ホワイトグリントは背部のバーニアを展開し、OBを使用する。

そしてその後を追いかけないようにハーフクロスの瞬間加速を使って、最高速に到達。そのまま閃光の後を追う形に入る。

こちらは最高速を出しっぱなしだというのに、ホワイトグリントはぐんぐんとこちらとの差を伸ばしていく。

やっぱりコジマを使ってるあつちのほうが早いか……

「このくらい距離を取れば……！」

2段階のQBをして一気に距離をとったこちらに振り向いたホワイトグリントは、レーザーライフルとリニアライフルをこちらに向けて射撃してくる。

そして、肩に載せたドローンも展開し、こちらを挟撃せんと飛び回り、すきあらばこちらを狙ってくる。

避けれるものは避けるが、どうしてもと言うものは左半身のマントで受ける。

かなり弾いてくれる……重量は増えるが、確かにこれはあつたほうが便利だな。

引き撃ちに、オールレンジ攻撃……それにホワイト・グリントを使いこなせてるように……

「なかなかやるようになったな！ ドローンと機体の操縦の併用ができるとは！」

セシリアが羨ましがるぞ……？ いや、でも最近並列思考^{マルチタスク}頑張ってるって言ってたし、セシリアができる日もそう遠くはないのかもしれない。

「ジョシユアにしごかれたからね……！」

ジョシユアとは最近勝ち越している。そう閃光は言ってるが……
「まだドローンの操作がなってない！」

展開したクジヤクで何もない空間にビームを照射し、そこにドロインが突っ込んでくる。

いわゆる見越し射撃というものだ。この際、目標に対してロックアシストの機能がついてるがそれは使っていない。

使ったら狙われてるって気づくからな。

「ノーロックで……!? そんなの聞いてない!？」

「システムに頼りすぎないことも大事だ! 覚えとけ!」

動揺しているうちにバタフライバスターを左手に持ちバレルロールをしながら接近する。

「近接戦……対処を!」

ホワイト・グリントリニアライフルを放り投げ、新たにエナジーブレードに持ち替えた。

確かにそうするのは一つの答えとして正解。だが今回は……

「こっちは想定してたか?」

「嘘っ……イダダダダッ!? ……ISで関節技あ!? そんなのありい!？」

バタフライバスターは、相手の背部ユニットと地面を縫い付けるために使う。

そして相手の足を絡ませて、相手の動きを封じた。

生身の体より、色々引つかかったり太かったりする分……やりやすい。

「やっちゃいけない法は無い……これで終わりだ」

「ギヤアアアアアッ!？」

閃光の関節を極めると何故か絶対防御が発動し、まだまだあつたはずのSEが急に0になった。

……これある一種の裏道では?

「一回捕まっただけで即死とかありかよ……あの時にアサルトアーマー貼っとけば良かったあ〜」

戦闘後、食堂で奢った『S O M 井』という横幅が20cmになるカツを6枚放射状に載せた中心に、海老天が載せられた……どこか見覚えのある構造物を閃光は食べながらさっすきの戦闘の振り返りをしていった。

「束に話してみたら、後でそれは治すだつてさ……あとあの時、アサルトアーマーは間に合わなかったぞ。OB後でコジマ粒子の絶対量が足りてなかった。あと20秒あれば……つてどこか?」

「なんでそこまでわかるの?」

「俺がもともと乗ってたやつだ。癖もわかってる……現物はもつとデカかったがな」

「……パードウン?」

口からエビの尻尾が飛び出た閃光が素っ頓狂な声で聞き返してくる。

なんかまずいことでも行つたか?

「ホワイト・グリントに乗ってた、それだけだ」

「まあた、さらつととんでもないことを……にしても、初めてのモビル……ISで、よくあそこまで動けたね?」

「トビアが頑張つて作ってたんだろ。整備も完璧で武装面でも優秀。乗りやすかつたぞ」

なんか終わったあとにコンセプトと違う! ……つて言われたけど。

アレ持久戦をメインに作つたらしいが、別に汎用だと思っただけな。

「……なんかガンダムの主人公の名前聞こえた気がしたけど、もういいや」

閃光も、随分とこの世界に慣れてきたようで……

「あ、そうそう。最近初音〇クをまねてボカロみたいな動画投稿したら、結構伸びが良くてね……」

「ほう……どんなジャンルだ——」

こうしてお昼時の転生者達の話は続いた。

学園祭編

第49話 始まり

side 一夏

「——轡木学園長、ありがとうございます。では次に織斑先生からいくつかの連絡があります……驚かないほうが不思議だと思っけど……」

二期期の初め……IS学園の体育館で始業式をしていた。轡木さんの言葉が終わって、司会の更識さんで次は千冬姉が話すと言う。

横にいる流星と、体育館のすみっこにいる用務員の服装をした本当の学園長以外、周りは女性ばかりだけど……慣れてきたと思うな。

「諸君、夏休みは有意義に過ごせたか？ 夏休み中には、かなり大きなニュースもあったことは知っているだろう……もつとも、織斑が中国でリークしたために発表は前倒しになったが」

千冬姉が体育館の壇上に立って生徒に向けて話し始める。

……間違って中国でリークしちゃった重婚の発表か。多くの生徒は知っていたみたいで、驚く人は少ない……というかいらない。

体育館の一番後ろでは、俺と流星のことについて記事にしたいだろう報道陣が、大きな三脚の上にかいカメラを乗せて撮影している。

千冬姉は、授業中にはないけど、放課後にも報道陣がいてるって言うってたから……変なことがないように気をつけないといけない。

「少し境遇の変わった尾白流星と織斑一夏だが……今まで通り、接してもらいたい」

箒とか、鈴と付き合うことになって……夏休みに家によく遊びに来てくれて、距離がちよつと近くなったっていう感じかな？

でも、一番嬉しいのは暴力が一切なくなったことだ……一学期はすごかったからな……

わざわざ言ってくれるのか千冬姉……弟としてただただうれしい……！

「だが……尾白、もしくは織斑と付き合いたいと考えているものは、ま

「ず私に話を通すように」

「……だけど、ちよつとそこまではしなくていいと思う。」

「……次だ。今学期から、ここIS学園で新たに3人教員が就くことになった……巻紙さんとミューゼルさん、挨拶を頼む」

「次の内容は、新任の教員がつくという話。というか、教員が3人も……？」

「職業上この卒業生か、ISに機業で携わっていた人などがこの教員になることが多いって流星は言ってたけど……」

「千冬姉の紹介で、教員がいた場所から2人立ち上がって千冬姉の横につく。」

「オレは巻紙礼子！ ISの実習を担当することになってる。わからないことがあればいつでも聞きに来てくれよな！ 模擬戦闘も待ってるぞ！」

「ブロンズの人が巻紙さん……見た目によらない、結構アグレッシブな口調だな……」

「私はスコールミューゼル、日本とアメリカのハーフよ。礼子と同じくISの実習を主にやらせてもらうわ……これからよろしく、可能性の卵たち」

「もう一人の金髪の人がスコールさんというらしい。」

「大人のお姉さんが二人も……」

「どっちが受けでどっちが攻めかな!？」

「あれ……もう一人は？」

「なんでここにいるんだよスコール姉さん……!」

「二人とも生徒受けはいいみたいだ……いろんな意味で。」

「なんか2年生で一人頭を抱えてるが……知り合いかな？」

「そしてもうひとりだが……東、一夏の後ろにいないでさっさとこっちに来い」

「俺の後ろに……？」

「ぐえっ!？」

「あっぱれた」

ばれたじゃない!? 今俺からでたとは思えない声が出てきたんですか!? いつからいたんですか!?

「姉さんっ!?!」

「ISの生みの親……私でも見逃しちゃったね」

「アイエエエ!? ナンデ!? 篠ノ之博士ナンデ!?!」

周りも騒然としてるし、カメラも一斉にこちらに向く……けど、東さんらしい登場の仕方と思ったら妥当かな……??

「やあいつくん!」

「ど、どうも。ちふy……織斑先生、東さんがIS学園に?」

「そのことについては、尾白から聞いたほうが早い」

「……流星、知ってたのか?」

はあ……と流星はため息をついて、ほぼ全員からの視線に答える。

「一夏に会いたいから、らしい」

夏休みに毎日電話で話すか、家に来て甘えに来てた上……学校にまでついてくるほどなのか?。

「まじで?」

「嘘じゃないんだよな……」

「私の考えを代弁してくれてありがとうとりゅーくん!」

間違つてないのかよ!?

「東さんは何を教えてくれるのだ?」

でもこの教員になるからには理由が必要だけど……

「メインはもちろんISの理論とか、ISの整備とかだね! ……狭

き門を通ってきた君たちには期待してるよ?」

ちゃんとした理由だった……というか、結構人を信用するようになったな。なんなら臨海学校のときよりも、軟化してないか?。

「もちろんここに来たからには……夜はいつくんの部屋に突撃するね!」

……そして爆弾を落とさないでくれ。

始業式の後、諸連絡があつて3限目から授業が始まったけど……

「今日はここで受けるのか本音……?」

閃光の時はこれほどとは思えなかったが……夏休みで随分と成長したみたいだ。

「流星さん、頼みたいことが……」

「……なんだ？」

「ご褒美で……な、撫でてもらえませんか？」

……それくらいのことか。

「そんな事頼まれなくても……よくできたな、セシリア」

そう言いつつ、頬が火照ったセシリアの頭を撫でる……サラサラで、よく手入れされていて撫で心地がいい。

「うふふ……ありがとうございます」

いつまでも撫でていたいくらいだ。

そして……

『ウボアツ……』

周りで練習していた生徒に……無差別で砂糖の爆撃をしたことは心の中で謝つといた。

「夏休み並列思考をできるようになったら……次は偏光射撃が目標だな」
フレキシブル

並列思考の次は偏光射撃を習得するのが、イギリスでは通らしないのでそれに則つて、タブレットでどういうふうな軌道を描くかを見た。

難易度は跳ね上がるが、セシリアならできるだろう……習得が難しい分、それをモノにしたときの見返りは大きいからな。

「頑張りますわ！……して、そのような高等技術をできるお方はここには……っ？」

「……マドカを見てみな」

ちよつと離れたところで鈴と練習しているマドカの方に指をさすと、ちよつと……

「いけっ、インコム！」

「たまがおいかけてくるーっ！」

……トリスリッターのインコムで全方位攻撃オールレンジアタックをしていた。

「あれが……偏光射撃、本当にできましようか……」

偏光射撃もあって、完全にセシリアを勝っているように見えるが……

「インコムの操作がまだおざなりだな……その分偏光射撃で補っている。インコム……セシリアはビットか。その操作の精度はセシリアのほうが勝ってる」

「では……」

それについては彼女の努力の賜物としか言えないだろう。

「マドカは偏光射撃はできるが、ビットの操作がセシリアと比べるとまだまだ……だから2人で教え合うといいかもな」

「なるほど……けど、流星さんはできるのですか?」

「できるが……あんまり進んでは、やらないな」

I Sを展開し、出力を落としたビーム・マグナムで実践してみる。適当に撃つて……星型を空に作ってみた。

「まあ……」

「要はイメージだ。この弾が、どういうふうに飛ぶか自分でイメージをする……」

「これ程の事ができるのでに何故……」

「俺自身は……あんまり実践だとイメージしづらいんだ、弾を曲げることががな。だからもしかしたら、セシリアが偏光射撃をマスターすれば俺が負けるかもしれない」

基本的にミサイル以外のやつは結構考えて、なにか見落とすこととかあるかもしれないから……

「……では、流星に勝てるように『流星!』あら、デユノアさんから?」

コアネットワークから、シャルの通信が?

（『周りを見て!』）

周り……?」

ハイパーセンサーによって全方位に視界が広まったその中に、取材に来ていたカメラマンや、I Sの学生がぞろぞろとアリーナの観客席

に雪崩込んで来ているのが見えた。

その中には、こちらと通信をしているシャルの姿もいる。

「あれ……白獅子!？」

「カメラ回せ! はやく!」

「あれには誰が乗ってるの!」

「尾白さんだ! 尾白さんがあれに乗ってる!」

「あつ……」

そういえば臨海学校以降アレスのまんまだったな……てつきりアレックスでやって得るものと思ってたが……

「……やっちゃったか?」

『やっちゃったみたいだね……』

IS学園の2学期初日、それは尾白流星Ⅱ白獅子が世界に広まった日でもあった。

—————
—————
—————
—————

side ???

「これからは、ここに戻ってくるようなことはないように……お迎えの人はいますか?」

「ええ……一人、入口で待っていてくれる人がいるので……」

目標を達成した時にはまたお世話になるかもね。

そう思いつつ刑務官と話した後、門を抜けて駐車場に向けて歩く。

目標をいつ達成できるかわからない、それまでの間だけ……やつと、狭い檻の中から出てくるのができた……空が、青い。

視線を落とすと、白いバンにもたれかかっている緑の天パが卵をミラーの上の一つ、直立させていた。

「よお……待ってたぞ」

僕が歩いてきたことを耳で聞いていた彼は、2つ目の卵を1つ目の

卵の上に乗せ始める。

「……真島、3年経ってもやってること変わらないね」

「俺の性は知ってるだろう？」

「……まあね」

短く言葉を交わした後、車に乗り込んで話の続きを始める。

さっきの卵は後で目玉焼きにして食べるそうだな。

「お前さんの探してる『白獅子』の搭乗者、見つかったらしいな」

尾白流星だったっけか……でかい会社の社長もしてるっていう

……

「さつきムシヨの中でも聞いたよ……まさか、世界の英雄さんが学生だったとはねえ……」

ま、僕にとつたら恨みの対象でしかないけどね。

……だけど、今頃受けているだろうマスコミの質問のウザさ。その心中だけは察する。

「あともう一人の赤い服のリコリスは見つかった？」

「まだだ……というか、お前が出て来るのを待ってたんだぞ？ リコリスを殺るのを我慢してたんだからよお……」

「悪い悪い……まあでも、これからだよね」

尾白流星と、赤服のリコリスへの復讐は……

「……なんでそこまでそいつらにこだわる？」

「なに、ちよつとした因縁だよ……10年前のあの事件」

君もいたって話してたよね？

「電波塔の……俺も興味が湧いてきたな」

第50話 出し物

「フキ先輩っ!」

「どうしたサクラ、そんなに慌てて?」

「ここここ、これっ! 尾白が白獅子だったってマジっすか!」

「……はあ? そんなわけ……は?」

side 流星

俺がアレスの操縦者であることが世界中にバレた昨日は各国とのやり取りや、日本や菊岡から自衛隊のお誘いの電話が絶え間なかった。100回以上は電話にでたんじゃないか……?

その翌日。IS学園の全校生徒は今月半ばに催される文化祭についての話が為される全校集會に出席している。

「それでは、生徒会長から説明があります」

壇上に姿を現した、俺の横に座っている本音を凄まじくキリツとさせたような人……というか付き合っている人が上げた声が響くともにもさつきまでのざわめきがすうっと引き、それを待って舞台の袖から現れた一人の女生徒がマイクの前へと進み出る。

二年生であることを示すリボンを締めた制服に青い髪。

余裕綽々の笑みを浮かべた上級生の出現に、俺の前にいた生徒たちのほとんどは息を飲む。

「みんな、おはよう。今年を立てこみ続けていたから挨拶がまだだったけど、私の名前は更識楯無。このIS学園の生徒会長、つまりあなたたち生徒の長よ」

「楯無様あーっ!」

「いつもふつくしい……」

「ちくわ大明神」

「ああ……神々しい……」

「誰今の!？」

……さすがは生徒会長、大人気だな。

なにやら名乗った直後に、色々聞こえてきたが……楯無はやたらめつたら満足そうな顔をしているようだが気にしない。

とにかく……今は彼女が語るだろう今年の学園祭についての話を聞かねば。

……まあ、俺は既にだいたい聞かされていたりするんだがな。

「……みんな、悲しんでいると思うわ。今年はどういうわけだかIS学園で何がしかのイベントがある度に騒動が起きて、そのことごとくが中止に追い込まれている。クラス代表対抗戦も、学年別トーナメントも、一年生は臨海学校も途中から問題が起きちゃうし……ね?」
「うっ」

……どうしてそこで俺と一夏に目配せをするんだ。

悲しげに目を伏せて、まるで楯無が捨てられた子犬のような悲壮感を漂わせながら一つ一つ、俺達がIS学園に入学してからの思い出を数えるように中止されたイベントを上げる会長。

だが、だいたい俺たち絡みでなにかあったのは間違いじゃないんだから、否定はできない。

その言葉の節々でちらりちらりと視線を向けられる一夏は、俺と同じくか、それ以上にその全てに自分が関わっているという自覚があるからか無駄な罪悪感を感じているらしく、胸を抑えている。

いいセンスだ、会長。一夏をピンポイントで攻撃できる人はあんまりみたことがない……しかも、それがこの後の話に繋がるからなおのこと。

「だから、私達生徒会役員共は考えたわ。誰が悪いわけでもない、本当に誰かのせいってわけでもないこの不幸を払拭するための一大イベント。……それこそがっ!」

叫びと共に手慣れた所作で水平に振り抜かれた扇子の先に、特大の空間投影ディスプレイが展開。

ディスプレイ起動に伴う一瞬の閃光に眩んだ俺達の目が回復した

時、そこに現れたのは。

「名付けて……『各部対抗織斑一夏争奪戦』!!」

『「っしやあああああ!!」』

投影されたのは達筆な文字と一夏の小学校入学の時の写真。く女子の雄叫びを添えてく

やっぱすげえなIS学園、というかIS学園の生徒……それも今の声の中で特にデカかったのは箒と鈴とラウラ。

体育館が人の声で文字通り震えたぞ？

……ちなみに一夏の写真には見切れてるが箒と束も、写ってたりする。

「いいかしら。……ルールは簡単。基本的にやることは例年通り、各部活動ごとに行う催し物に対して投票を行うだけ。ただし、景品はこれまでの特別助成金では……ないわ」

「……くくり」

少しだけ前かがみになり、マイク越しにも声をひそめた楯無の演説手腕にあっさりと乗った生徒一同は生唾を飲んでその後の言葉に耳を澄ます。

今も空間投影ディスプレイで眩しすぎるイケメンっぷりを振りまいている幼少期の一夏の写真に、さきほど会長の言っていた言葉から推測される景品。

ひよっとするともしかして、現在超有望物件たるアレなのでは、という希望と欲望と愛しさと切なさど心強さが渦を巻き、その緊張が頂点に達する瞬間を正確に見切った会長はパーフェクトなタイミングで叫ぶのだ。

「織斑一夏を、一位となった部活に強制入部させましょう！ 私にはできる！ なぜなら私は、IS学園生徒会長だからよ!!」

「きやあああああああ!!」

「さすが生徒会長！」

「私達にはできないことを平然とやってのけてる！」

「そこにシビれる！」

「アコガれるうっ!!」

盛り上がり、に盛り上がった生徒達の勢いはもはや止めることなど不可能な域に達し、完全に寝耳に水状態だった一夏は口を閉じることすら忘れたまま呆然と会長に視線を向け、ぱちりとウインクを返されている。

まあ諦めろ、一夏。

会長がやろうと決めてしまった時点で、お前の未来は決まっていたのだよ。

「今回の学園祭は、そ・れ・だ・けじゃないわよ……？」

『……どう？』

「こう思った人はいないかしら……流星には何もイベントはないのか、と」

……これ以降はなにも伝えられてないんだが、俺もなにかあるんか？

本音と虚さんも把握してないらしくて、楯無の方を見て固まっている。

「もちろん、用意してるわよ。こっちは、来賓の投票で票が一番多かったら。その部活には……」

『……ゴクッ』

「特別顧問として今年度中ずっと派遣させるわ！」

『キタアアアアアアアアッ!!!』

……もう体育館の強度が心配になってくるレベルで生徒たちの声がすごい。

今度は……主に俺と付き合ってる人の声が目立っていた。

「……どういふことだ楯無、俺生徒会辞めることになるのか？」

「いえ、これはあくまでも『派遣』……いつもどおり生徒会の仕事頑張ってるね！」

「はあ……」

「もちろん生徒会も本気で狙いに行くから、よろしく！」

……じゃあなんで俺を景品に出した？

「誰得だよこんなの!？」

「超得に決まってるじゃない! 織斑ちゃんと尾白くんに触れ合えるんだから!」

生徒大会の勢いは衰えず、HR。

クラス代表の一夏は教壇に立ってクラスメイトという名のJK軍団と議論が白熱していた。

主な議題は、学園祭の出し物として伝家の宝刀「織斑一夏の○○」シリーズ、あるいは「尾白流星の○○」シリーズをやるか否か。

クラス代表としての権限で一人健気に全てを却下しようとする一夏と、一つ却下されれば十の候補を出してやるわいとばかりの物量作戦で挑む女子連合との熾烈な争いが繰り広げられている。

ちなみに俺は一つに絞ってから聞くようにって伝えている。だからものすごく俺の候補も上がっていつてる。

例としてこれまで提案されたものを挙げてみると、「織斑一夏とポツキーゲーム」「尾白流星の握手会」「織斑一夏と尾白流星のアーリーナライブ」「織斑一夏と恋バナ」「尾白流星がご奉仕するZOY☆」などなど……おい何だ最後の。

俺がこんな事するのか？

別にできなくはないが……案が出るだけで、なかなか決まらない。なぜなら……

「なんか他の人に流星がしてると思うとなあ……」

「……」

シャルがふとこぼした言葉でわかっていただけただろうか。主に俺もしくは一夏と付き合ってる人からの圧がやばい。

……ラウラとロニイに至っては黒いオーラがにじみ出てるもん。

「……ねえねえ尾白くん?」

「どうした相川さん？」

「尾白くんの白獅子とか、展示できないかな？」

とんでもなくタイムリーだな……それだけで人がホイホイ集まってくるのが目に見えてるし、集客の謳い文句としてはこの上ないものになるか。

「俺のISの展示……については、できなくはない」

「私が提案しといていうのもあれなんだけど、セキュリティとかは……」

「やばいときは勝手に動いてこつちに来るから大丈夫だ」

遠隔操作か、シェアに言ったら動かしてくれるしな。

「ISが自分で……？　なんかもうわからないよ……」

……そういえばまだISの自我とかまだ学校だと概念段階だったんだな。失敬。

「で、それだけだったらな……このクラスにIS一つってのは味気ないと思うんだが、どうする一夏？」

「うーん……VRはどうだ？　それもシミュレーター型のやつとかは……」

……興味深いことを言うな？

「詳しく言ってみてくれ」

「例えば流星の会社のアニメを体験できる！　……とか面白そうかな？」

「何それ面白そう！」

「ISの操縦とかも、できるようにしたらいいかも！」

一夏の妙案にどんどんと賛同の声が上がっていく。

多くの生徒がガヤガヤしてきたところで、まとめ役の一夏が声を上げた。

「時間も迫ってきてるから……今出たもので多数決をとるぞ？」

……まあ結果は、ほとんどの生徒がVRシミュレーターとISの展示を選んだ。

一人、ラウラだけは「ご奉仕喫茶」というものを選んで……それが選ばれることはなく、頭を机に突っ伏して何かブツブツ言ってい

る。

後で聞いてみるか……

クラスの出し物の方向性は決まった。だが……いくつか問題がある。

「二夏、もし仮にそれを採用するならVRの筐体がある……それも複数台。それ、誰がやるんだ？」

仮にもし一個10万くらいだとして、客を回すには少なくとも20台くらい……予備も合わせるともつと必要になる。

「あー……やっぱりそういうのは……」

「まさか……俺の会社に頼もう！　なんて思ってなかったか？」

「ぐはっ!？」

凶星……だがまあいいか。まあ会社のアプリにもなるし、面白そうだし……一石二鳥どころか三鳥以上ある美味しい案だからな。

「……いいぞ」

「……マジで？」

「ハード面は提供しよう。ソフト面は……俺たちで作らないと、面白くないだろ！」

流星に全部カンパニーメイドだったら、学園祭で出す意味がない。

『おーっ!』

クラスの士気も上々、いいものができる予感がする……この感じ。

「流星、著作権とかは……」

「著作権は気にしなくていいぞロニー。うちのアニメは好きに使ってくれ！　何なら会社のやつに言って新しいCGとかせびってもいい！」

その時は、作ってるやつに特別手当を出さんといけないがな。そんなことくらい別にいいだろう。

……この光景が、記憶に残るからな。

HR終了後……

「二夏の執事服姿見てみたかった……」

「……どんまいラウラ。一応服はあるから、今日の夜にでも見せても

「らいな」

「おお、ありがたい……がなぜこんなものを持っている？」

第51話 学園祭の準備と……

side 流星

「このMSの動作を見てくれない？」

「見せてくれ……足の動きがちよつと不自然だな。もうちよつと動きを減らして見るといいと思うぞ」

「このNPCの動きなんだけど、どうしても単調になちゃって……」

「……ふむ、このプログラミングのミスでループしてる。ここを直せば戻ると思うが、それでも問題あったらもう一回言いに来てもらいたい」

授業の放課後……教室にほとんどの生徒が残り、各々がパソコンやら、すでにツイマッドから持ってきたシミュレーターを使ってテストしたりと、学園祭に向けて準備が進められている。

そんな中、俺が色々できることもあって……開発の中心となりいろいろなサポートに現在徹しているところだ。

今は本音の横で何段階かに分けられたNPCの動きを見ている。

「りゅーりゅー、難易度をいくつかに分けといたほうがいかな〜？」
見せてもらっている画面には10段階あるが……そんなに多くなくていいかもしれない。

多すぎても、どれをやるか迷うだろうしな。

「3か、4くらいでどうだ？ 一番下はどれだけ当たっても死ななくてなおかつ敵の数を少なく、一番上はリアル準拠……当たりどころが悪ければ即死で四方八方から弾が飛んでくる……なら丁度いいと思うが？」

「なるほど、じゃあ4段階に分けてみるね〜！」

「よろしく頼むぞ、本音」

そう言うとな彼女は前向きな返事をして、早速キーボードを叩き始める。

やっぱり整備科である以上、ISのソフト面をメンテナンスするこ

とのある本音などにとつたらいい練習にもなるんだらうな。

「後でナデナデして〜」

「……いいだらう」

ついぞと言わんばかりに砂糖をばら撒くことを忘れてない本音。

これを見た複数人の生徒が逃げるように教室を出ても俺は悪くない……よな？

「流星、少しいいか？」

次に、マドカとロニーが製作途中のアクシズのあのシーンを見せてくる……なかなかの出来だな。

具体的には「ロンドベルだけにいい思いはさせませんよ！」「やってみる価値ありますぜ！」の辺り。

「こんな感じのムービーを作ってて、この人たちの音声が欲しいんだけど……声の人とかは……」

「ちようど声と同じやつがいる……そいつらに任せとこう」

意識共有でシャアを呼び出し、その旨を伝える。ツイマツドにも当事者がいたはずだから後で話をつけとく。

問題ないよな、シャア？ アクシズの台詞もう一回言うことになるけど……でもアムロだけはいないからな……アムロは誰か声が似ている人を探すか。

（『了解した……前にいるアムロにも協力を仰いでおく』）

それはどうも……アムロにもありがとうって……

………アムロがいる？

………あの天パがシャアの前にいる??

……ん——???

なあ、シャア……まじでアムロ見つけたの？

（『見つけたも何も、目の前で私が淹れたコーヒーを飲んでる』）

………はーっ!? アムロこの世界にいたのっ!?

しかも喫茶リコリコにピンポイントで出てくるってどういう奇跡だよ!?

『誰かと待ち合わせしている『ちょうど今来た』……アルテイシア?!?』

アムロの声が聞こえたと思った瞬間、シヤアの叫び声で誰が来たかがその場にいないのにわかる。

アルテイシアまでいるのか……喫茶リコリコの店内がカオスになっっている状況が目には浮かぶ。

『何?!? 付きあつゴホツ……』

おお、アムロとアルテイシアが……というか大丈夫か?

『……コヒュー……コヒュー……』

過呼吸しか聞こえなくなった……よっぽどショックだったんだろうな。

喫茶リコリコの中がめちゃくちゃになってないといいが……

「……どうしたの流星?」

「コア人格と話してたら過呼吸になって喋らなくなったんだ……」

コア人格シヤアと喋っているときは周りから見れば完全に固まっているようにしか見えない

「何話してたらそうなるのだ……?」

「……そいつがかつてのライバルが妹と付き合ってるって知つたらそうなった。あ、音声については明日以降になるが……それでもいいか?」

「はあ……」

二人とも、前半部分をあまり理解してない状態でさつきまでいた場所に戻っていく。

……また後で詳しく話しとくか。

「流星、宇宙デブリの3Dデータがあればいいんだけど……」

その次に来たシヤルが頼んできたのは、宇宙デブリの3Dデータ……アニメの奴は大体2次元だから、新造しないといけないが……

「そつちのデータは時間がかかるな……4年前の隕石で代用するか」
そつちなら腐るほどサンプルもあるだろうし、ランダムで出せば毎

回新鮮なゲームになるだろう。

「えっ……そのデータあるの?」

「一応、4年前のあの時に観測機アイザックで採った隕石のデータは残ってる……あ、そっちの疑似体験も、出来るようにするか?」

「……それも入れちゃうの?」

シャルの声はちよつと疑問系……シミュレーターの容量は問題ないが、流石に今から1から作るのは厳しいか……

「言い出しっぺは俺だ。そのコンテンツは俺が作ることにする」

大体、2徹くらいすれば出来るか。ちよつと寝る時間が削られるだけだ。

それで作れるなら……

「流星、ボクの作業が終わったらそのコンテンツ手伝うよ?」

……と思っていた時期(3秒前)が俺にもありました。全然協力してくれるじゃんか。

「悪いな……助かる」

「それくらい良いってことよ!」

シャルの微笑みに元気づけられ、早速コンテンツの作業を始める。

その後……作業を始めて30分くらい経ったところで織斑先生が様子を見に来た。

「お前達……作業に励むのもいいが、遅くなりすぎないようにな」

『はーい!』

「それと尾白、少しいいか?」

「……いいですよ」

そして……お呼び出しをくらったので廊下に出る。

「あの厄災の時のデータ、国には渡さないのだな……」

開口一番それは……何か裏があるのか?

「結局国とかに渡ったところですよ。映ってるガンビットとかが兵器の開発に使われる未来しか見えないから……」

……ただ聞きたかっただけ。心配してただけか……杞憂だったよ
うだ。それで次が本題と。

「……そうか。いや、ただ疑問に思っただだから特にどうということ

はない。それはそれとして、ここからが本題だが……一夏と流星には、無制限で招待チケットが渡される予定だ。もしかしたら流星たちの周りに、第3の操縦者がいるかも知れないなんて、考えているのだろうか？」

何人誘おうか……というかその中に男性の適正者いるのか……？

「そんなポンポン出ていいものじゃないでしょうけど……まあ出ないでしょ」

(『それフラグ……にはならないか?』)

お、復活したか。グロッキーな状態から戻ってきたであろうシヤアが、いきなり何やら不穏な言葉を投げってくる。

……ならない事を祈るしかない。

「確かに伝えたぞ? 一夏に会ったときに伝えておいてくれ」

「それなら……これからちよつと練習があるから、そのときに伝えときますよ」

「練習? ……一体何を企んでるんだ?」

何か怪しんだ目でこつちを見るが……そんなに卑しいものじゃないから問題ない。

「学園祭が始まってからののお楽しみですよ」

「よつと……だいぶ上達してきたかな?」

「いい感じだ……今日の練習はこれで終わるか。順調だな一夏」

今日の学園祭のサプライズの練習を終えて、スポドリを一夏に投げ渡すと「サンキュ」と言って受け取った。

ふと窓を見ると外はもう暗い……日が短くなってきたな。

「さすがはいつくんとりゅーくん!」

「……そつちもいけるクチなんだな」

前ではいつからかいた観客の束とオータムがパチパチと拍手していたので軽く会釈しとく。

オータムは束に引きずり回されてる最中なのだろうか……ちよつとやつれた表情が見える。

「さー！ 次の場所に行こー！」

「ちよつ！ どこ引っ張ってるんですか博士!? 一人で歩けますからああああ！」

……やっぱりそうだった。ドナドナされていくオータムに心の中で合掌し、片付けの続きにあたる。

「束さん、学園祭楽しみにしてそうだな……」

「それで招待人数無制限のチケットは、誰に渡すんだ？」

「マさんと、弾、蘭もかな……あとは御手洗とかも連絡取れたら送ってみる。でもマさんはツイマッドの方で来るのか？」

マを一夏が誘うのか？

俺がない間は、一夏達の面倒を見てくれたからその恩とかもあるんだろうか。多分マ自身も会いたがっていた筈だ。でも……

「そうだな。マに関しては、あいつはIS企業枠で来るだろうさ。にしても弾か……最近ずつとあつてないな」

今度学園祭であつたときにちよつと話してみるか。

「最近どころかもう4年もあつてないはずだぞ。俺は夏に会ったけどさ……蘭と厳さんも元気にしてたぞ！ 相変わらず、食べてるときに喋ったらお玉が飛んできたよ……」

「その様子じゃ、まだまだ元気そうだな」

あと20年はデイサービスの世話になりそうにもないな。

「それで、流星は誰に渡すんだ？」

「メインはSAOでお世話になった奴らにな。結構な数がいるから、渡し忘れがないようにしたいが……」

「……何人に渡したいんだ？」

キリトにアスナ、ミトに……まあクラインもいれてやるか。その他にもギルドに入ってたメンバー423人……それにキバオウやディアベルとかも入れて……そこに加えて家の人も招待するとなる

と……

「ざつと450人だ」

「……普通に多いな!? 流石にそこまでは想定してないと思うぞ……せめて10人までにしようぜ?」

「ううむ……」

45分の1まで削り落とさないといけないのか……

どうしようか……

……

……こうするか。

「……10人に絞れた」

「一応、内訳を聞いても?」

「SAOでお世話になった六人とその従姉妹一人、あと最近GGOで知り合った一人。木綿季とさつき連絡取れた知人二人で合わせて十人……これでどうだ?」

具体的には和人、明日奈、蓮(ゼータ)、帆坂(アルゴ)と直葉に詩乃だな。あとアムロとアルテイシア。名無はロニイが誘うつて言つてたから、そつちは大丈夫だろう。

「それでいいと思うけど……GGOで知り合った人つて、家に新しく来た人か? あの朝田さんつていう……」

「ああ、あの人だ。ちよつと前に色々あつた人」

詩乃は、和人と一緒に解決した一件で家に来ることになった。まさか彼女が5年前の郵便局から、俺を探してたなんて思わなんだ。

「まーたフラグ立てたよな。気づけば木綿季も流星に気があるみたいだし……これで何人だ?」

「……ついに二桁になりました」

これでもまだ一夏に言つてない人いるからもうちよい増えるつていうね……一応簪やロニイなどの彼女たちには伝えてる……一夏にも今度伝えるか。

「まじかよ……流星のことだから関係とかは大丈夫だろうけど……」

……何故か言い淀む一夏。何か問題でも起きるのか?

何かを疑問に感じたのか、一夏は首を傾げる。

「あれ、シヤアさんは誘わなくていいのわ？」

「……確かに今の話からすればシヤアは誘ってないことになる。だがその心配はいらないな。」

「あいつは喫茶リコリコの出張店の店員で来るから問題ない」

「……店員？」

「いつつも俺が週末に行ってる店があるんだが、その出張店が学園祭でやる予定なんだとよ」

少し前に聞いたところ、DAからもOKが出たそう。学園祭に来ているときの人員の埋め合わせはうちの部隊から出すっていう条件付きだな。

「ここに外からの店が？ 珍しいな……」

「……なんか色々あるんだろうさ」

主にDAとか政府の云々が……ほんとに千束達をここに入学させるなんて考えてないだろうな……？

「……なんでそこでシヤアさんが働いてるんだ？」

「本人希望だ。今のとこ特に問題は起こってないから別にいいだろう？」

「ふーん……それから、さっきの朝田さんの話に戻るけど……そろそろ家の拡張工事しないと、狭くなってきたくないか？」

「そういえば……そうだな。そろそろ限界かもしれない。」

夏休みに一度、全員が同時に来たことがあるけど……何人かはリビングで寝ることになったからな……

「あー……そろそろ検討して、来年には工事できるようにしようか？」

side シヤア

「いま流星から、アムロとアルテイシア宛に招待状を贈りたいと届いた……どうする？」

スマホに届いた流星からのメッセージを伝えた。その表情はかなり綻んで見える。

「シヤア、尾白流星とは……リュウセイさんで間違いないんだな？」

「間違いない。彼そのものが、学生生活を謳歌してる」

千東スペシャルを頬張りつつ、アムロはふうむ……と唸る。

「また彼と会いたいな……あの人の姿をまた見れるとは、これも何かのめぐり合わせか？」

「……だろうな」

ラファあたりがやってくれたのだろう。

「流星さん、元気にしてるかしら……」

そう言っただけで過去を懐かしむアルティシア……妹と私が小さい頃には、彼にお世話になったな……

そんな彼女が今現在、かつてのライバルと付き合っているというのは、兄にとってはかなりくるものがあるが……妹が幸せなら、それで良いのだろうか……？

「色々あったが……今は元気にしてるぞ」

「その色々って、具体的には？」

……いかん、地雷を踏んだかもしれない。

しかしここで嘘をつくわけにも行かない……押し通るっ！

「具体的には隕石を押し返したり、背中が焼けたり……」

「兄さん……どうして流星さんがそんな目にあってるんですか？」

分かってはいたが怒るだろうな……アルティシアの背後から黒い

オーラ……見えてはいけないものがっ……！

「ドレモ仕方ナイ状況ダツタンデス……」

「セイラさん、まあ落ち着いて……というか流星さんも僕と似たようなことをしたんだな……」

「……まあ実際に流星さんと会ってみるとしましょう」

アムロに諫められ、なんとか落ち着きを取り戻したアルティシアも、学園祭に来る意を示す。

流星に二人とも来ることを確認したとISの通信機能を用いて伝える……とすぐに返信が来た。

『りよーかい、二人分のチケットを俺の家に速達で送つとくから、明後日以降にまたあつて渡しといてくれ……あと、二人とも再会を楽しみにしてるって伝えといてもらいたい』

随分楽しみなようだな……了解。伝えておいとこう。

『サンキュー』

「明後日以降、またここに来たときに二人にチケットを渡す……それと、流星から『二人とも再会を楽しみにしてる』とのことだ」

「……では2日後にまたここに来ましよう……アムロもそれでいい？」

「それで構わない」

「アムロさんとセイラさん、千束スペシヤル美味しかったですか！」

二人とその後もう少し喋り、千束スペシヤルを食べ終えた後……珍しく千束が会計を打ちつつ、彼らに質問を投げかける。

「ああ、美味しかったよ」

「また食べたいわ……次来たときも頼もうかしら」

「それは良かったー！……シヤアさんとは知り合いみたいだけど、三人はどんな関係なの？」

「……かつての流星の知り合い達だよ」

少しためを置いてアムロが喋った言葉は、いかにも……そして心に來るものがあった。

「流星っているんな人と面識あるんですね〜！」

「「ありがとうございます！」」

会計を終えて店から出ていく、手を繋いだ彼らの若い後ろ姿を見送る……いかん、涙が……

「なに感傷に浸ってるのよシヤアさん？」

「……少し物思いに耽けさしてくれ」

第52話 いざ学園祭

「今頃千束は学園で先生と一緒に出店をやっているのか……やばい奴らに目をつけられるリスクを解ってないのかよ……」

「……って言いながらフキ先輩、携帯でIS学園祭の概要見てたじゃないですか?」

「べ、別にどんな感じか確認してるだけだ……あ、新商品もあるのか……」

「もしかして先輩も行きたかったんじゃない?……イテツ!? 無言で殴らないでくださいー!」

side 流星

学園祭初日の朝……学園祭では色々予定が詰まっているのでシフトは早めに設定してもらっている。

シフトと言っても、操作説明とかメインと想っていたが……

「尾白さん、一緒に写真撮ってもいいですか!」

「いいですよ……どんな写真がいいですか? ツーショットとかIS^{アレス}を挟んでか……」

「じゃあ全部で!」

「了解。あそこに置いてるISの方で……」

こんな感じで写真を撮ることのほうが多かった。ある人はISの方を何枚も撮ったり、ツーショットをお願いしてきたり。

ISを見に来た人はほぼ全員聞いてきた上に、VRをやりに来た人も8割方要求してきた。

「それでは……ハイ、チーズ………どうです?」

「いい感じ! ありがとうございます!」

……これがマスコットの気分なんだろうな。

もうこれで何人目だろう……

「流星くん、そろそろ交代だからセツシー達と遊んできてもいいよー」
相川さんに言われて時計を見ると、自分のシフト時間がもう過ぎていたことに気づく。

同じシフトを振られていたセシリアからも声がかかってきた。

「流星さん、シャルロットさんや簪さんがその入り口で待ってましてよ？」

「ああ……悪いがちよつと待ってくれ、この人のプレイが終わるまでいるつもりだ」

「あの茶髪の人ともうひとりのことは……知り合いなのですか？」

「まあな、セシリア……そんな所だ」

扉の方で覗いているシャルと簪に、口パクで少し遅れると伝えると……少し目付きが鋭くなったので、説明のために手招きするとこちらに寄ってくる。

「今インフェルノ最高難度やってるのが俺の招待したやつだからな……ちよつと話したいんだ」

視線の先にいるのはVRゴーグルをつけて操縦桿を忙しく動かしている人……とそのプレイ映像のモニターを眺めている金色の髪を持つ女性。こちらには気づいてない。

「……流星並に上手いね、この人」

「さっきやったけど、ファーストでそんなに動けるんだ……」

モニターに映っているのは、一年戦争の最後の闘いと言ってもいいアオ・バー・クーの戦いの中を縦横無尽に駆け巡って、無双しているのはトリコロルカラーの所謂素のガンダム。

ただひたすらに敵を打ち倒し、このストーリー上のボスであるジオングと交戦している。

洗練された動きに、たまに入るトリッキーな戦術。それに加えてほぼ全盛期と言ってもいい程のニュータイプの実質……一年戦争の状態がああであれば俺は彼にやられていたかもしれない。いや、もうやられていてもおかしくないか。

「あの人、よくあそこまで操縦できますわね……」

「あいつのフアンネルもすごいぞ？ 操作の正確さと奇抜さで言えば、俺が負けてる点が多いからな……」

「流星がそれほど言うくらいなの!？」

そのガンダムがたつた今ジオングの胴体ではなく……頭部を撃ち抜いた。それを残骸になったあとでも……何度も。

確かにコクピットはそこにあるけど……

「かなり入念に撃ちますわね……?」

「……最後の悪意ないか?」

「本当に無慈悲だな」

して、最後の声二人……シヤアとガルマはいつから横にいたんだよ。

「あれ、シヤアさんと……この人は?」

俺の言葉にウンウン頷いてるが……さっきまで気配がしなかったぞ?」

「おはようございます、ガルマ大使!」

「これはドイツのガルマ・ザビ日本大使、ごきげんよう」

簪は知らないようだが、ヨーロッパ勢にとっては結構有名なようだ。

……とかいつの間にか日本大使なったんだよ。外交官つて一番下のはずだったが、数週間でトップになるって……出世スピードどうなってるんだ?」

「おはよう、代表候補生たち……ラウラから君たちの評判はよく聞いてるよ。でも、あんまり流星のお嫁さんたちに言ったら流星が怒るかもしれないから俺からはこれだけ」

「「はい」」

ガルマの頭の中で俺のイメージはどうなってるんだよ。

「いつの間にトップになってた……それよりも、そんなことしないわっ!」

「流星、タメ口だけど……」

「いいんだよデュノアさん。こういう間柄なんだ……それよりも流星、俺はもともと大使だったぞ?」

「隠してたのかよ……」

果たしてそんな事をしてたとはキシリア……待てよ？ 前ガルマについて聞いたとき、マからもそんなこと言われてなかったよな……てことはグルだったんかよ……

あいつのほくそ笑みでる姿が脳裏に浮かんできたよ。

「……ちよつとでも驚かせたくてね」

「じゃあ、ガルマは政府の関係で来たのはわかるが……シヤアの方は、シフトの休憩時間か？」

「私は昼からにしてもらっている。それと伝言だ……午後からは千束氏とたきな氏が合流したいと言っていた。場所は携帯に送る、と付け加えていたから後で見るといい」

「それは構わないが……結構連れいるが良かったのか？」

このあと、ロニィや本音と回る予定をしている。

だが、楯無だけは何か企画があるのでそれが終わってからと言っていた。

ダブルはやったことあるが……シクリプルデート^重なんてどうすればわからないぞ……？

その上、キリトやアスナ達も来るし、一つのクラス並みに人がいるんだが……

「そうなることも承知の上のようだぞ？」

「……じゃあ後で連絡しておく」

「できるだけ早くにな……私からは以上だ。流星、このあとガルマといっしょに回るつもりだが……」

だいたい想像していたが、やっぱり二人で話したいことがあるか。

「俺に聞くもんじゃないだろ……二人で積もる話でも『ハイスコア更新おめでとーっ！ 係の人に伝えて景品を受け取ってください！』……今終わったのか」

シヤアと話し始めている前からプレイしていた人が話しているとちよつとクリアした時の音声が響き渡る。

「……これ最高難易度だよ!？」

「ほとんどノーダメージってこの人は、一体……」

ジオングを倒した時点で終わりという設定にはしていない。

このアオ・バー・クーは、ジオングを倒して自陣に返ってくるのがクリア条件に設定しているので、母艦に着艦して初めてクリアになる。クラスメイトがツイマツドの社員に聞いたときに『帰るまでが遠足だ！』と言っていたことから考えたらしい。

「あれが連邦の白い悪魔の実力……いや、こんな昔話はよくないな」
「だろうよ……シヤアと話し終わったら、ミネバにも沢山お土産を買つといてやれ。喜んでくれるだろう」

その最後を見届けた二人はクリアの音をバックに教室を出ていく。
そしてやつとこき、話す予定だった人と話せる……これが一番難易度が高いモードの初クリア者であり、モニターに映されたその名前は……

「ほぼ理論値の最速を取れるとは……腕は鈍ってないようだな、アムロ？」

「流星、さん……」

VRを取り外して椅子から立ち上がった彼は、こちらの姿を認めると言葉を失ってしまう。

……そんなにびつくりすることか？

「アルティシアも、グリプス戦役以来久しぶり……元気にしてたか？」

「はい、流星兄さ……あつ……今はなんて呼べば……」

モニターに釘付けだったアルティシアもこちらに気づき、俺の呼び方を悩んでいる。別になんだったっていいんだが……

最後に会った時より、二人とも随分と背が伸びたんだ……というもの、どっちも今年で成人になったらしい。

今ではアムロのほうがちょっと高くくらいだ。

「俺も今はこんななりで、今は二人のほうが年上だ……呼び捨てでいい」

「……でも、流星兄さんのほうがしつくりくるので、そう呼ばさせてもらいますね」

アルティシアも成長したな……見た目は最後見たときと同じくらいだが、随分と達観して見える。

「流星、今度は……？」

「簪は知ってるかもしれないな」

「……そういう事ね」

昔アインクラッドと一緒にいた簪には、多少話したことがある……それを覚えていたならこのように関係性は知っている筈だ。

「簪が知ってて、ボクたちが知らないことって……」

「またシャルとセシリアには説明する……ここいらの話は結構ややこしいんだよ」

また学園祭が終わったら全員に説明するか……

「リックディアスにリ・ガズィ、コアファイターまで……他のMSの操縦桿一つ一つが再現できる、こっちも驚きだよ。よく作れたな……」

「これが一番しんどかったまでであるからな、これを手抜きとは言わせないぞ？」

「……言うつもりはないよ」

機体操作を忠実に再現するためにこの操縦桿をVRの数だけ準備した。差し替えたり変形させることで殆どのMSのコクピットを再現できる。

……流星に無人機とサイコザク、阿頼耶識システムみたいな神経接続とかは無理だったが。

「とにかく、これが景品だ。遠慮なく受け取れ」

「これは……ハロか！ 懐かしいな……」

ハロの入った箱を渡すと結構喜ぶ……また改造とかするんだろうが。

「……流星兄さんの専用機はどれですか？」

「あそこのISの真ん中にあるやつ。デザインが結構浮いてるだろう？」

「これが、ユニコーンガンダムの4号機……シヤアの反乱の後フルサイコフレームの機体も作られていたのだな」

打鉄や、グレイズなどの複数のISの中央に置かれている俺の専用機を眺めるアムロ……

ユニコーンモードだからガンダムフェイスは見えてないが、あれが

ガンダムだと察したのだろう。サイコフレームも察してるようだし。

「サイコフレームたっぷりのおかげで機体強度は上がるわ、コロニーレーザーを止めれる……それに人の思いをすべて受け止める……」

「最後の……もう大丈夫なのか？」

「もう克服済だ、問題ない……あ、このI Sで思い出したよ。厄災のコンテンツもやってみるか？」

自分で作っというて忘れてるなんてな……少し恥ずかしい。

「……それもあるのか？」

「第一に最高難易度は、ガンビットの操作を自分でやらないといけないのだが……」

「ガンビット……ファンネルみたいなものなのか？」

「いや、MSをそのまま動かすんだ……200機分な。ガンビットのスラスター管理に、位置とそれぞれの武装の把握、1万4千を超える隕石の早期破壊……」

「……よくできたな？」

……よくよく考えたら脳味噌焼けててもおかしくない状況だったな。

「シャアが手伝ってくれたこともあるが……当時でも盛大にガバをしていたから、いまならもうちよつとダメージを減らしつつできると思う」

あのかきは焦って回避を怠ったから……

「試さしてもらおう。俺がどこまで君に近づけるか……」

……そういえば、待たせているフィアンセたち、沢山いるんだったじゃないのか？」

『む……』

後ろを振り向くと……セシリア達が膨れっ面をしている。

「そうだったな……そろそろ彼女たちの下へ行つてくるよアルティシアも、良ければやってくれていいぞ」

「わかりました。流星兄さんも、楽しんできてくださいいね」

こちらに手を振ったその後、またもやVRを被ってゲームを始めるアム口と、生徒からVRの説明を受けるアルティシア……このあと上

から2つ目まではクリアできた連絡が入った。

side 一夏

「……遅いな鈴のやつ」

待ち合わせの時間からもう5分経つけど……現れる気配がない。

「さつき遅れるっていう連絡来てたぞ?」

「ほんとか箒? ならそれまで待つとくか……」

箒はもう来てるけど……まあ待っても5分くらいか。

待っている間、彼女になにか話を振ろうと思っただけど……なにか言いたげなので、先に聞いてみることにする。

「……一夏、この場で話すようなことではないのかもしれないが……」

「……どうしたんだ箒?」

なんか、ちよつと落ち込み気味だけど……

「本当に、私が一夏の臨海学校の答えがホントか信じられなくて……」

……女性つてたまにこんなことで悩んでるよな。

俺とかが気にしてないことをこうやって心配して……

「理由はどうであれ、箒は俺が好きなんだろ?」

「一夏……」

箒の頬が赤くなってきた……というか、俺の顔も赤くなってる気がする。

「つ……」

流星っていつもこんなこと言ってるけど、ここまで恥ずかしいのか……

「あのー……ちよつと良いですか?」

この凍りついた状況を砕くように、一人の声が聞こえてきた。

見た目は俺と同年代か、ちよつと下くらいの男子学生らしき人だ。

「……あ、いいですよ」

「待ち合わせ場所で待ってたのに来てくれなくて……ここ、第3アリーナの西口であってます？」

その男性が差し出したパンフレットには、IS学園の地図が書いてあるけど、指してるのは……

「あ……ここ第2アリーナの東口なんで、方面真逆ですよ？」

「うそ……やっちゃった……？」

俺も1学期に間違えたことあるミスをしてるなこの人……

「ここからだど8分くらいだから、走ればなんとか……なると思うぞ？」

その時は、流星に探してもらったんだっけ……これも今じゃ懐かしい記憶だな。

「なら今すぐ走っていたら……ありがとうございます！ 教えてください……織斑一夏くんですか？ 男性操縦者の……」

「ああ……君の名前を聞くのを忘れてた……名前はなんていうんだ？」

「灰垣しようせい。照らすに星と書いて照星つて言うんだ！ ありがとう一夏くん！ また会う機会があればぜひ！」

そう言うと、照星は人混みの中へと走って入っていった。

「……彼を誘ったのは誰だったんだろうな箒？」

「さあ、見つかるといいな……む、一夏。鈴が来たぞ？」

「一夏あー！」

照星さんと入れ替わるように、鈴の姿が見えた。

別の方では流星以下の軍団が大移動してるのも見えるし、俺達もそろそろ……

「鈴の方に行きながら移動するか、箒」

「……ああー！」

箒の方に手を出すと、その手をしっかりと握って彼女は横につく。……やっぱり、彼女は今のほうが素敵だ。

ここからは設定資料なので、『興味ないね』という人は、一番下のあとがきまで飛ばしてください。何卒宜しくお願いします。

生徒制作VR『機動戦士ガンダム リアルシミュレーター』概要

装置：

頭を覆うような形状のVRゴーグルで、演算装置は椅子の下で纏められているのでゴーグルは軽い。つまり首をブンブン回すけど安心。そのくせに、サイコフレームもわずかながら錆込んでいるので何が起るかわからない。(おい)

椅子は状況に応じて振動する。学園祭を成功させるがべく、多くの耐久試験を突破したツイマッド謹製の逸品。

操縦桿は変形、または置き換えることで殆どすべてのMSに対応するようになっている。

出来るストーリー：

一年戦争最終戦

星の屑作戦

第1次ネオジオン抗争

第2次ネオジオン抗争

ラプラス戦争

生徒制作と時間の関係上、宇宙世紀の制作にとどまっている。と言っても、リアル演算システムをのほほんとマドカが頑張って作ったのでクオリティは侮れない。

後で二人は十分に甘えてもらえた模様。

使用可能機体：

特殊な操縦方法を取る機体(サイコシステムや阿頼耶識)を除く、多くのMS。

だが月光蝶やクアンタムバーストなどの特殊能力を持つ機体はバランス調整の為、非常に弱体化している。

難易度

：easy……弾無限、FFなしでほぼ死なない、Botよわよわ

で小さい子供向け。

・nomal……弾実質無限（ACくらい）、FFなしだけど立ちっぱなしだと流石にやられる、Botはぼちぼちで一般の大人とか学生向け。

・hard……弾制限はここからキツくなる、考えないと詰むくらいの体力、FFは一定回以上は無効、Botは訓練を受けた一般兵くらいで専門ゲーマーとかガチ勢、軍人向け。

・infernos……弾体力は現実のガンダムと同じやられるときは一瞬。しょっちゅう弾がカツカツになるかつFFあり、Botが全員熟練パイロット、死ぬのが当たり前。廃人もしくはニュータイプ向け。

これをクリアしたらツイマッド社の色々なものが貰える。

infernosは冗談抜きでツイマッドが難しいと認めているので、クリア者にはツイマッド社のスカウトが入るとか入らないとか……

Extra 『厄災の記憶』

厄災の白獅子を追体験出来る。ガンビット200機の自動操作率をメインに難易度は上の通りに変わるが、流星監修の完全自動をするeasy以外クリアするのはまず無理。

参加したら展示しているISをあしらったステツカーを貰えるうえに、クリア出来た難易度に応じて粗品が貰える。

最高難易度では金色のステツカーに加え、ISアレスの1/8模型が貰えるが……まず最初の10秒で失敗判定になる鬼畜仕様。作った本人でも稀に失敗する。

第53話 シンデレラという名の鬼ごっこ

side 流星

「お前一回合うごとに、色々とんでもないことバレルよな?」

喫茶リコリコのIS学園出張店、その店の前にいくつか広げられたパラソルの一つの下で俺が招待した人たちと話していると、ふと和人が俺にこんなことを言ってきた。

「……そうか和人?」

そう溢しつつ、ミカさんの淹れたコーヒーをすする……今日の味は苦味が強め。

ルワンダあたりの豆を結構な時間かけて煎ったようだ。だがその味も、周囲の声であまり楽しむ余裕がない。

「世界で二人だけの男性操縦者かと思ったら、世界公認のハーレムが出来上がってるのよ?」

「……ぐぬぬ」

確かに和人達と会うときには何かしらのことが世間に知られているし、明日菜の言ってることも間違いじゃない……

カップに残っているコーヒーの量が減るのと同時に、自分のライフが削られていく感じがする。

「それに、10年くらい前の白騎士・白獅子事件も、4年半前の隕石をのかしたのも流星だったって……流星にもう、隠してることはない?」

「ぐふっ……!?!」

もうやめてくれ詩乃、俺のライフはもうゼロに近い……というかさっきの一撃でライフが飲み干したと同時に無くなったようなものだ。

「……人間、知らないことは1つや2つは少なくともあるはずだろ?」

「その隠し事のスケールが全部おかしいんだよナ、流星の場合ハ……」

「流星の隠し事尋常じゃないことだらけだト思う人ー!」とテーブル席の前に座っている帆坂が声を上げて周囲に聞いてみると、この付近にいる全員が手を挙げた。

なんか誘いきれなかったはずの人達猫崎一行なども見えたのは、気のせい……
ということにしておこう。

「満場一致ダナ！ ……彼女たち、全員幸せにできるのか？」

「……それは「大丈夫だよ！ 流星はみんなのことちゃんと愛せてるんだから！」ロニイ……本当か？」

横でほっぺたにクリームのついたロニイが、俺の横で声を大きくあげた。

「みんな嬉しいって思ってる！ さつき流星に会う前にも、マドカが流星の惚け話をしてたよ！」

「ロニイっ!? ……まあ……な」

突然のカミングアウトで、マドカの肩が思いつきり跳ねた。

そして、そっぽを向いてポリポリと頬をかいているマドカ。

「みんな、流星で良かったって絶対思ってるよ！」

その言葉に嘘はないことを裏付けるように、セシリアや本音……他の人も否定や疑問の顔は見えないし、感じもしない……

「……ありがとう、ロニイ。自信をもてた」

「ふふん……！」

そつとロニイの頭を撫でると目を細めて、嬉しそうにする。

それを見ている帆坂は「……よし」と言って俺の目をしっかりと見た。

「……心配してたけど、これなら流星に伝えてもいいかも」

「何か、あるのか？」

「オレっち……いや、私も流星に対して簪やその人と同じ気持ちを
持っていると思うんだ、だけド……」

まだそれを言う勇気がない、迷惑かけちゃうかもってどこかで思っているんだ。その言葉を続けた帆坂はしゅん……とした。

……実質8人目か。守るべき人が、また一人増える……

博愛主義……ではないが、できる限りのことは尽くすと決めてる。

「……帆坂の用意ができたなら、聞く。安心しろ、いつでも待つとくからな」

「流星………ありがとうナ！」

さつきとは一転、もとの明るい顔に戻った。

彼女の少し赤くなつた頬と……

「なんだろう。蓮、これってブラツクのはずなのに砂糖誰か入れた？」

「木綿季……そんなはずは、って甘っ!？」

「これより苦いもしくは非常に辛い食べ物はありませんか、千束？」

「いやあ、その気持ちは解るけど……それ以上は身体よくないよたきな……」

……燃料^F気化^A爆弾^Bのように周囲に深刻な被害を添えて。

「また一人、犠牲者が……」

犠牲者ってどんな言い回しの仕方だよ明日奈……

「……いつもすまん」

「まだ自覚できてるようになっただけ、マシっちゃマシか……付き合っている人が多いって、苦勞するんだな」

「お前もIS乗れるようになったらわかるよ……って言ったら和人も乗れる気がしてきたな？」

「なんか……それ、フラグになつてないか？」

もう立てたものは仕方ない……このフラグが折れるか成立するかの二択だ。

鬼が出るか蛇が出るか……

「招待券はお持ちですか？」

「それを妹に預けちゃって……」

「では妹さんを、呼んでください」

「……携帯は家に忘れました」

「ならば、付いてきてください。然るべき場所に連行します」

どつちに賭けようかと考えていたところに虚さんに呼び止められている、赤髪でバンダナを巻いた人がその視界に入った。

「既視感が……でも、あいつじゃない？」

「すごいクラインみたいな人がいるけど……」

「あれは……一夏が誘ったやつの人だ」

ちよつと話してくる。と周りに伝えて席を立ち上がると、話しているところに向かつて歩く……

あと3メートルといった場所で、布仏さんが俺の事に気がついた。「尾白さんの知り合いですか？」

「そんなところです、布仏さん……弾、本当に携帯忘れたのか？」

「おおっ、流星さんか！ 冗談抜きで携帯は家に置き忘れて、蘭はこの校門くぐったらどこか行っちゃって……」

「……なら、蘭ちゃんにメッセージ送るからちよつと待つとけ」

蘭ちゃんにメッセージを送信すると、今は教室棟の入り口にいると返信があった……迷惑かけたお詫びに後で兄はシメとくという追伸付きで。

その場で待つといってくれと、更に返信すると了解というスタンプが送られてくる。

「……連絡はついた。後で覚悟しとけだつてさ」

「げっ……」

そんな露骨な顔をしなくても……そんなビビる必要はないと思うが？

「悪い虚さん、こいつを教室棟の入り口にいる蘭ちゃんのとこまで連れて行ってもらってもいいですか？」

「了解しましたが……尾白さん、そろそろ生徒会の出し物で演劇の準備をしてもらいたく……」

腕時計をふと見ると公演時間の30分前までに迫っていた……もうそんな時間か。

「……この後、何かあるのか？」

「まあ……来ればわかるさ和人」

「一夏、準備の方は？ 随分と似合っているようだが……」

「服はできてるけど、心の方が……もうちよい時間掛かりそう」

着替えた一夏の恰好は……白いズボンに肩章の付いた青いジャ

ケット、白い手袋をして頭には王冠が乗っている。紛うことなき王子様スタイル。対する俺は……

「タキシードに、王冠と以外に似合うんだな」

「……いいセンスだろ？」

主にソ連とかソ連とかソ連で使ってた物のレプリカだ。

これを着ると、よく警備兵をおちよくった日が懐かしく思える。

『それでは、『シンデレラ』開演です！』

ブザー音と共に観客席の照明が弱くなり、対照的に舞台が少し明るくなる。

「ここまで来た以上、後戻りは出来ない……行くぞ」

「……ああ」

この後ライトが点灯するから、そこに向かって歩けばいいと……

今回の劇、楯無から脚本や台本の類は無いらしいと聞いている。大体はアナウンス通りに話を進めて、セリフに至ってはアドリブ。それは、本当に劇なのか……

「むかしむかしあるところに、シンデレラという少女がいました」

セット全体にかかっていた幕が上がり、アリーナのライトが点灯して舞台中央を照らす。あそこに行けばいいんだな。

シンデレラ役、何人いるんだろうな？ と考えつつ、指示通りライトが照らす場所……セットされた舞踏会エリアに一夏と共に向かう。観客席の方に目をほんの少し傾けてみると和人や木綿季、蓮がこちらを見ていることがわかる。

こいつらの前で、劇をするのか……

「否、それはただの名前に非ず。幾多の戦場を駆け、群がる敵の軍勢をなぎ倒し、返り血を纏うことさえ厭わぬ地上最強の兵士。それこそが『シンデレラ』の称号！」

……知ってはいたが、なんだこのナレーション？

「今宵もまた、シンデレラ達の夜が始まる。王子の冠に隠された国の機密情報を狙い、舞踏会という名の死地に少女たちが舞い踊る！」

「はっ!?!」

『もらったああ!』

そこからシンデレラ・ドレスを身に纏ったロニイを先頭に、俺もしくは一夏と付き合っている人が襲い掛かって来た。

だが箒……その服装は、結構攻めすぎてないか？

俺達のやることは決まっているな……回れ右をして逃げる。それだけだ。

捕まったらこの冠が……威力を知っているんで、あまり想像したくない。

「王冠を手に入れたシンデレラには、織斑一夏もしくは尾白流星と同室になる権利をあげちゃいます！」

とか言い出すし、何考えてるんだ楯無は？

しかもそれを聞いたあとの、ね……もう、全員目が怖いです。追いかけている全員目がEXAMシステムの時みたいに真っ赤になってる。さっきの表情はどこに行ったのか……

いつもよく部屋に來たりしてるのに、この権利だけは欲しいと見えた。

今すぐ王冠を投げて終わらせたいが……

「あ、二人共、面倒だからって適当な人にあげちゃダメよ。それ、外すと電流が流れるようになってるから」

……早く終わらせることもできないと。

「さて、そろそろ私も参加させてもらおうわよ！」

いつの間にかもう着替えていた彼女も、俺の後を追いかけてきている。

「楯無!? あんたも参加するのか……?」

どっちかというと、審判とかをやるべきではないのか？

「当然じゃないの! このビッグチャンスに乗らないわけじゃないじゃない!」

追いかける人が、一名追加と……取り敢えず、今はここから逃げることに集中したほうがいいか。

そして多分一夏と一緒に逃げたら、追いかける人が協力することが目に見えている。

「一夏……後のあれに影響でなくらいにしとけよ?」

「……そうだな」

一夏もそれを分かっていたらしく、俺と真反対の方へ走り始めた。人数比がおかしい鬼ごっこの開始である。

side 一夏

「はあ……はあ………流石にもうまけたか？」

「……一旦はな」

10分ははしつたかな……途中から一般生徒も参加し始めて、そのいざこざの時に巻紙さんがアリーナの更衣室まで誘導してもらったおかげで今一息つくことができている。

「なんで木綿季と詩乃も追いかけてくるんだ!？」

「ボクは予約だよ! 来年から、流星と同じ部屋で生活するためのね!」

「ツイマツドでISの適正測ったことあるでしょ? その時に適正が流星並みに高かったから、IS学園に転入することになったんだ!」
「どれも初耳なんだがあああつ!？」

遠くで、流星が招待した人も参加していることがわかる。なんか転入っていう二文字も聞こえたけど……?

あつちはまだまだ追いかけてこの真つ最中のようで……

「元々は、お前を襲ってISコアを奪う計画があつた筈だつたんだが……」

俺を襲う……いきなり何を?

「えっ……?」

「剥離剤リムーバーなんかも使つて、こうやって一人にさせて……襲う予定があつた」

「……巻紙さん?」

まさか本当に俺を……襲うために?

暫しの静かな時間……

「これ以上逃げるのなら……これを喰らえ！」

「トリモチランチャー!? それを使うのはナシだろおおお！」

「……ま、もう足を洗ったから今は関係ないけどな！」

「はあ……」

流星の悲鳴に近い声が聞こえると、敵ではないと巻紙さんは両手を上げて喋った。

敵かと思っただじゃんか……一瞬ISを使おうとも考えて、待機形態のガントレットを取り出そうとしたし……

「……でも、どうして巻紙さんは足を洗ったんだ？」

「……私にも色々思うところがあったんだよ。元々エム……今はマドカと一緒に、胸糞悪い職場に退職届を叩きつけたさ！」

「千束は絶対関係ないだろお!？」

「なんか面白そうだもーん！」

俺を襲う目的があった職場って、どんな職場だったんだろう……

「……もうこの話はやめだ。思い出しただけでムカムカする」

かなり、恨みも持っているようだし。

「アリーナ内もくまなく調べるのよー！」

「……こつちにも搜索の目が来そうだ。この後のサプライズの為に、体力を残しとけ」

「……わかりました」

そろそろ、隠れ場所を移動する必要があるな。

一礼しようと、巻紙さんを見ると……何か感心した表情を見せている。

「ほお……最初はクソガキかと思っていたが……お前、成長してるな」「成長？」

「自分では成長はわかりにくいもんだ……お前は確かに伸びてる。篠

ノ之姉妹や、中国とドイツの娘を守るっていう覚悟を持った顔だな」
人は思いが表情に出るって言うけど……本当に、他の人からそう思われる顔になるのか。

「……ありがとうございました、巻紙さん」

「じゃあな……」

「……待て」

「え？ なにか忘れ物でも……」

「あいつに、なにかされなかったか？」

「あいつって……？」

いきなり……誰のことだ？

「……いや、なにもなかったらいいんだ。忘れてくれ」

なんか気になることを言ったけど、何も無いなら……いいか。

「アバツバババツ!?」

「これ王冠持つてる人5人いるんだけど、誰が勝ちになるの?」

「ここは……じゃんけんでしょ!」

「……お前がその頭に付けてるの取られるときは、優しく取ってもらえよ」

「それは……頼んでみます」

第54話 本当の3人目

「流星と同じ部屋になりたかったなあ〜……」

「今更言つても、仕方ないよロニイ……また次の機会を狙ったらどう？」

「でもね、名無。次がいつになるのか……『只今、ユナさんによるコンサートが開催されています。興味のある方は是非……ちよ、ちよつと?! 尾白さんと織斑くん達まで参加するの!』 山田先生……?」

「……流星と一夏がなにかするみたいだし、先にそれ見に行ってみる？」

side 一夏

「結局、流星の持ってた冠は誰が取ったんだ？」

今はもう大丈夫そうだけど、さっきまで黒煙でてたけど……

「1番が千束だが……あいつはIS学園に来てないからパスで2番の木綿季だった。だがあいつが入学するのはもうちよつと先だから、それまでの間の一人を決めることになって……」

「私が1番だったのにい〜……」

『あいこでしょっ!』

「千束はそもそも無理だろ……また何かあげるから待つときな」

『あいこでしょっ!』

「……その言葉、期待しとくね?」

『あいこでしょっ……「いよーっしやあ!」 あーっ!』

「……決まったか?」

「ボクに決まったよ! よろしくね、流星!」

冒頭の怪しげな言葉はともかく……

「じゃんけんで……デユノアさんになったと」

「いつもはあんなことないんだが、こういうときに限っては積極的というか、熱狂的というか………大事に思ってくれているだけ、嬉しいけどな」

……ほんと、なんでこんなときに限って箒達もあなるんだろかな。

それはともかく……

「彼女達がいらないところでも、惚け話かよ……」

「……とにかく、そういう一夏は誰になったんだ？」

「俺は……鈴だった」

まさかアリーナから出た出合い頭にぶつかるとは予想できなかつた……

その後、電気が走らないように優しく外してもらったけど。

「でも絶対ラウラが裸で布団に潜ってる未来が見えるんだよ……束さんも、なんだかんだでいそいだし」

「あー……なんとなく想像つくなそれ」

『時間になっちゃった……みんなありがとー!』

「……そろそろだな。一夏、準備の方は？」

「こっちの準備は出来てるぞ。そういう流星はどうなんだ？」

「一つ、物足りないなと思ったことがあるんだ」

「物足りない？」

「これまで準備してきて……何か忘れてたこととかあったか？」

「スピーカーからの音源と、俺達だけだと味気ないと思つて……助っ人を用意してる」

カチツと流星が指を鳴らすと、色々な楽器を持った人達がどこからともなく現れた。

全員MAIを着ていて、腕には黄色とグレーのワシのが描かれたワッペンがついていて、いかにも軍人という雰囲気……

「あなた達は……」

「黄色中隊だ。今回はよろしく頼むぞ、一夏くん……そして、まさかお前と協力する日が来るとはな……メビウス1」

「お前の方こそ、本業の腕が落ちてんじゃないだろうな、黄色の13？」

見た感じ結構年は離れてるけど、こうやって会った瞬間から仲良さそうに話している辺り……まあ、この人たちもそういうことだろう。

でも黄色の13って……そんな変な名前の本名なのか？

「えつと……それが本名なんですか？」

「リアルネームは明かしたらまずいからな……呼びにくいかもしれないが、これで頼む」

このプレッシャー、流星の怒ってる時……最近だと臨海学校のとさくらいじやないけど、結構押される感じがするし、何より名前を晒せないって……

「この人たちって、すごいパイロットなんじゃ……」

「それはそうだが……任務が少なすぎて、趣味で音楽も始めたんだとさ。行く先々で必要な楽器の得意なやつを、毎回選んでるらしい。空でも地上でも、やることは変わらないな……」

「はつきり言ってる……ISに仕事を取られかけている。お陰でこんな趣味ができてしまった」

そう言ってる、黄色の13さんは愛用のものであろうバイオリンやエレクトーンを見せてくる。

でも……そんなことはないと思う。紛争地域でこの人たちが戦闘機でISに勝ったっていうニュースを聞いたことがあるんだけど？

「戦闘機の腕前もだが……こいつらの演奏の腕の方も安心しな。こいつらが俺たちに合わせてくれるさ」

「お疲れ、悠那さん。シメは俺たちに任せてくれ」

「……お、流星くん達もライブする感じ？ 頑張つてねー！」

さつきまで歌っていたユナさんとハイタッチして、入れ替わるようにアリーナに設置された会場のステージに向かう。

ユナさんが退場するときとは打って変わって、しん……と静まり返る。

機材を拵げ終えた後、流星がギターを提げてマイクを持って、一番前で話し始めた。

『……なんで俺たちがここにいるのかって思う人が大半だと思う。こうみえて、夏休みからちよくちよく練習してたんだ。ぜひ、俺たちのライブを見てほしい』

ステイックを叩いて合図を出し、黄色中隊さんの弦楽器が音色を奏で始める。

『まずは……』did you see the sunrise?』
から入らせてもらう。俺たちの成果を、ぜひ見てほしい』

『Did you see the sunrise?』

Black shining sadness

Tell me, tell me

Why was it born?』

ステージの前には、500人を超える人が見ている。

こんな大勢の緊張するけど、落ち着いて……

『Waiting, waiting

Believe in promise

Even if this body decays

Waiting over time』

「感情と 記憶のゆらぎ」

特別な何かに選ばれたとして
神のみぞ知る命のエビデンス
月明かり陰る」

今の所、歌詞を間違えてない。

よし、このまま、この調子で……

『雑踏に響く叫び』

絡まった亡霊^{オバケ}

振り払えない

癒えない痛み・恨み・涙

堪えたままで』

『終わることない Destiny

届くことない Message

もう抜け出せないの？ I don't know

過去に戻れはしない

この胸が産み出した偶像』

段々と、会場で手拍子が始まって、会場の雰囲気盛り上がっていき。

そして俺と、多分流星も調子が上がっていく。

『鳴り止まない雷鳴』

いつまでも脳内再生

もう抜け出せないの？ I don't know

この闇に答えはない

もがくほど落ちてく Don't cry anymore

Oh, tell me destroyed?

Or protect it without destroy

ing it?』

『感情と記憶がもつれ特別な

何かをうばったとして

逸脱してく セントラルドグマ

月明かり陰る』

『混沌に響く祈り』

絡まってく ^{ジャスティス}正義

敗北の意味

進むため戦うしかない

見張られたままで』

『終わることない Destiny

届くことない Message

もう抜け出せないの？ I don't know
過去に戻りはしない

この胸に掲げてた称号』

『途切れることない 生命

いつまでも存在証明

もう抜け出せないの？ I don't know

この闇に答えはない

永遠に抗って Don't cry anymore

Oh, tell me destroyed?

Or protect it without destroy

ing it?』

『Did you see the sunrise?

Black shining sadness

Tell me, tell me

Why was it born?

Waiting, waiting

Believe in promise

Eventually this body decays

Fall into the "BLACK"』

……まず一曲。

拍手の嵐が巻き起こり、会場のボルテージは今も尚上がり続けてい
る。

「さあ、このまま続けて2曲目に突入するぞー！」

エレクトーンに変えた黄色の13さんがメロディを取り始めて、流
星もそれに応じてギターを弾き始める。

他の黄色中隊の人も、それぞれの楽器で演奏を始める。

『scary.

fantasy.

allis fantasy』

この、ノイズの入った独特な旋律は……

「次は『mechanized memories』だ！ どんどん盛り上がっていきこう！」

『scary』

「scary」

『scary』

さつきと同じように交互で歌詞を歌いつつ、ベースでリズムを取りながら曲は進んでいく。

「so, I, m scary. scary. scary」

『so, I, m scary. scary. scary』

『scary』

「oh, I, m scary」

「so, I, m scary」

『all that I see』

「now, I, m scary」

『all is fantasy』

「oh, I, m scary」

『all is fantasy』

「oh, I, m scary」

最初にこの曲を聞いた時、かなり癖のある……いい曲だなんて思った。

これを歌いたいって言ったのも、俺からなんだ。

『Minute of the end, and doze it

still hurt.

In a rainy day, let, s fight fo

r counter.

On the silent way, when do you

get a callin'g?

look into the void, it, s scar

y.

Minute of the end, and doze it

still hurt.

In a rainy day, let's fight for
counter.
On the silent way, when do you
get a calling?
look into the void, it's scary
y

よくよく見たら、何人かはノリノリで踊っている。

この曲はなんでか走らないけど……タオルをブンブン回して踊つてみたい。

『all is fantasy』

「fantasy」

『all is fantasy』

『all is fantasy』

……脳裏に浮かぶのは、戦ってきたファンタズマやバルテウス、無人機。

『scary』

その中でも一番怖かったのは……流星だった。でも怖い意味が違う。

『Minute of the end, and doze it
still hurt.

In a rainy day, let's fight for
counter.

On the silent way, when do you
get a calling?

look into the void, it's scary.
y.

Minute of the end, and doze it
still hurt.

In a rainy day, let's fight for
counter.

On the silent way, when do you

get a calling?
look into the void, it's scary
y』

この曲に多く使われている『scary』……直訳すると『怖い』という日本語が当てはまる。そこから、いろいろな解釈ができる。だから流星の強さとかを、尊敬の意味とかも込めて歌っているつもりだけど……

少し前で歌っている流星の方を見ると、彼は少し頷いた。

さっきまでの心の話を聞いていたかのような反応を………分かってきているようだ。

『oh, I'm scary』

『so I'm scary』

『all that I see』

『now, I'm scary』

『all is fantasy』

『oh, I'm scary』

『all is fantasy』

『oh, I'm scary. scary. scary』

もっと、歌っていたかったけど……この曲はもう終わりを迎える。

……またこの曲を歌える機会があることを願おう。

『scary』

scary……』

歌を終えた直後、編隊飛行をしている黄色の翼端を持ったジェット機が上空を通過した。

先頭は片方の翼が赤の特徴的な飛行機……F-15っていう機体の名前だったはず。

その機体が俺たちの真上で一度バレルロールし、空にぐんぐんと登っていく。

「……ラリー」

流星はボソリと呟きながら彼方に飛び去っていく、翼が赤い機体を見つめている。

……その目は、懐かしいものを見ているときの目だった。

side 流星

「次で3曲目だが……もう最後の曲になった。この曲は、俺だけで歌わさせてもらおう……」『day after day』

黄色中隊が持ち替えたバイオリンやエレクトーンの音色を奏でていく。

一夏のベースと俺のギターが徐々に強まっていくと、自然と演奏に力がこもることがわかる。

……思いをぶちまけるとしよう。

『Don't forget a hole in the wall
I

I like ghost to turn in on the
load

Day after day, I stay around o
n far away』

……今思い返せば、俺の人生の周りには死というものがつきまとっている。

何回死んでも、どこかの世界で生まれ落ちる。それを繰り返してきた人生。

『Day after I've got it

I'm going to stand on the floor
r

By the way, I found a flower a
little way away』

演奏して、歌いながらさらに思う。

『Oh, Way away』

今まで……いつまでも意識が亡くなることを知らずに、周りの奴らだけが死んでいった。

その世界で、記憶される人はいい……存在したことさえ、その情報かき消されたやつもいる。

『To give surrender, my soul is wandering
To back on safe ground I'm calling
ling on far away』

何回死んでも、また別の世界に飛ばされてばかりの人生だったな。俺の魂は一体何に導かれているのか……不安で押しつぶされるときもあった。

『How far away?』

これは、誰かにかけてられた呪いなのかもしれないと、ふと考えた。俺は……生きた証を残しているのか。もしかしたら俺の存在は、幻なのかもしれない。

『How far away?』

だが、そんな訳あってたまるものか……俺は、ここにいる。今を全力で生きることが俺の生きた証。

『How far away?』

まだだ……俺はまだ終わってたまるか！

ここが！ この世界そのものが！ 俺の魂の場所だ！！

『Don't forget a hole in the wall
I like ghost to turn in on the
load
Day after day, I stay around
far away』

今までの想いをすべてぶちまける……吐き捨てるように、清算する
ように。

これからも乗り越えるために。

『Day after I love got it
I'm going to stand on the floor
By the way, I found a flower a
little way away
Day after day things are roll
ing on
Day after day things are roll
ing on』

『……ワアアアアアアアアアッ!!』

歌い終えて、数秒後……拍手とともに歓声が上がる。

これで、俺達のライブは終わり……すっきりした。

「文字通り、魂がこもった見事な歌だった……やはりリボン付きの名
は伊達ではないか……」

「……だろ?」

そう言いながら、黄色の13とグータッチをした。

side キリト

「……普通に上手だったな、流星」

「ありがとうさん、和人。そう言われると、歌った甲斐があるもんだ」

30分前まで歌っていた流星が、もう一度俺たちと合流してIS学
園を回っている。

さつき爆弾の解除ゲームをしてきたところだ。

「ほんとに、何でもできるってあの事を指すんだろうね」

簪さんが、わたあめを頬張りながら俺の意見を肯定する。

「昔は恋愛に鈍感だったから、そんなことはないと思うが……」

「……今は？」

「ちやんと、簪達の想いは理解している」

そう言つて流星は簪の頭をワシヤワシヤと撫でた……もうツツコまないでおこう。

簪さんと流星の学年『は』こう見えて、一緒……だけど、10センチ以上身長が離れていて、年の差カップルという感じがすごく感じる。

「……流星つて2歳年上で俺よりひとつ下の学年なのが違和感、感じるな？」

……SAO事件に、厄災。なにかと流星つて中学校と高校まともにいけてなかったんだよな、流星つて……

それにIS学園に入ることになって、年はひとつ上なのに学年は高1は

「青春をその分楽しめるなら、それはそれでありじゃない？」

「青春真つ青過ぎないか明日奈……？」

付き合つてる彼女が何人もいて、それも公認とかいう……

「……その自覚はある。ところで、俺たちのクラスもう見に来てくれたか？」

……そういえば。

「まだ流星のクラス見に行つてなかったな……帰る前に、見に行つてみるか」

1年1組……流星が通っているクラスルームに移動した。

打鉄やラファール、レギングレイズという名前の量産型ISの他にも、イギリスやドイツ、フランスの代表候補生の機体も並べられている中……

中央に置かれた流星の専用機である白獅子、その横にしているISに目が偏る。

「なんかSAOで戦つたやつと似てるやつもあるし……」

「……あれか。あれについては、本当に悪いと思ってる」

フォールダウン

白獅子の横においているブラックグリント・F Dという名前の I Sは、どことなく……かつてメテオラが化けたときのあれにデザインが似ている。加えて大ききさも似ている。

「……確かに、似てないわけじゃないよね」

「まだ、あの緑色の爆発は忘れられないよ……」

「あの件か……」

明日奈や木綿季、蓮はうんうんと首を縦に振るが……

「SAOで戦ったやつって？ これの白っぽいのは見た気がしないわけでもないけど……」

「さあ……これに似た敵がいたってことじゃない？」

直葉や詩乃は、知らない様子だけどな。まだ新生アインクラッドにも出て来たっていう情報がないし、あの戦闘にいたプレイヤーの誰かがうっかり零すまで知ることはずいぶん無いただろう。

……その話ともかく、こうやって色々な I Sの種類があつて……どれに乗ってみたら面白そうだ。

……良いよな I S って。自分の思うように空を自由に飛べるんだぞ？

ALOでも似たようなことは出来るけど、これを使ったら現実でも飛べるようになる。

それに女性だけっていうのも、なんかずるいな……

「和人、触ってみないか？」

「……いいのか？」

「いや……興味深そうにみてるからさ」

こういうふうには、と言いながら流星は白獅子にペタッと触れると、白獅子から青い光が出て形が変わった。

「触るだけなら、問題ないだろ。ましてや動かさないだろうし」

「……じゃあお言葉に甘えて」

流星が乗る時って、どんな感じなんだろうと思いつつ目を閉じながら目の前にあるラファールという機体に触れてみた。

これをつけて、空を飛ぶ自分を想像してみる。

うん……楽しいに決まってるな、やっぱり。

『……あ』

多くの人が息を呑む音が聞こえた。

なんでだ？　と思いつつ、目を開けてみると……

「明日奈が……ちっちゃくなつた？」

「じゃなくて、キリトくんの目線が高くなつたの！

ISに乗ってるから！」

……what？　今俺が、ISに……？

「冗談だよな、流星……？」

「……確かに、乗れてるな」

流星の方を見ても、顔が引きつりながらそう答えるだけ。

「「「ええええええええええっ!?!」「」」」

「……半年前と状況が真逆になったな、和人」

教室に響く驚きの声と、遅れて聞こえてくる流星のやれやれといった声。

この日……俺は3人目の男性操縦者になった、らしい。

第55話 伏兵

「どうした、さっきまでの勢いは？」

「ちっ、こいつは分が悪いか……退くぞ！」

「彼奴等は一体……とにかく場所を移動するぞ。動けるか？」

「その服、は……リリ、ベルの？」

「いや、俺はツイマツドから派遣された、ただのDAの訓練教官に過ぎないが、呼ぶときはそうだな……リキッドと呼んでくれ」

side キリト

俺がISに乗れてしまったことで……学園祭が終わっても、俺は家に帰ることができずに学園祭を見に来ていた政府の人たちにドナドナされたその夜。

「えっと……よろしくお願いします。篠ノ之束さん」

「まあまあそんな固くならずにく私は束って気軽に呼んでくれていいよ？ よろしくね、きつくん！」

場所はIS学園の生徒指導室でメカメカしいうさ耳をつけた篠ノ之束博士……本人の希望で束さんと呼ぶことにする。

「学園祭終わって、初めてやる仕事がまさかの男性操縦者のカウンセリングとはね……」

そう喋る紫色の髪を持った束さんの後ろには緑色の髪をした人が録音機を持って、興味深そうにこちらを見ている人……

「わ、私は……この教師をしている山田真耶ですっ！ どどっとうかお気になさらずっ」

……カチコチに固まって緊張している山田先生が束さんの後ろにいる構図だ。

「じゃあきつくんの自己紹介をお願いしますよ！ これまでのことを、

大雑把に話してくれたらいいだけだし、無理して話す必要はないから……情報と垂らし合わせるだけだからね！」

ゆつくりでいいよと加えて言われたので、頭の中で話すべきことを整理し、ぽつりぽつりと話し始めることにする。

「……まず、今の年齢は16。流星の一つ下で——」

「——GGOの死銃^{デス・ガン}事件に遭遇。りゅーくんとしてののんを中心に複数人で解決して、今に至ると……」

おおよそ20分くらいにまとめて、俺のことを東さんに話した。

こうやって今GGOの話をしている時、山田先生の顔が青くなったり赤くなったりでコロコロ変わっていたけど……

「あの……山田先生は、GGOとなにか関係が？」

「ああ、やまびーね、トップランカーだよ？ ジョイ^{ザ・ボス}とか

シヤラ^{オセ}シヤ^{ロッ}シカと渡り合えるくらいの実力を持つてるし、伊達に元日本代表候補じゃないってことだね！ ……流星にりゅーくん相手は分が悪いみたいだけど」

「ご、ご謙遜を……」

ISの教師をできるほどの手腕を持っているなら、彼女が俺の今まで見た中で……どれだけ屈強な胸部装甲を持っていてもそつちのほうかすごいと思える。

「なにか今の説明で、疑問を持ったこととかありませんでしたか？」

「んー……特にないよ。SAO^{サバ}帰還者^{イバ}かつ攻略組と呼ばれるきつくんの経歴……りゅーくんやかんちゃんからたまに聞いていたこととあまり変わらないようだし。でも、強いて言うなら……」

言うなら……？

「……1年前は、ありがとう。りゅーくんを立ち直らせてくれて」

そのこと、か……

東さんが知っているという事実には、当時のSAOへの干渉をした人物を察しつつ、彼女の言葉に返事をする。

「それについては、もう大丈夫ですよ……というか俺も、ALOで色々助けて貰ったので……」

「ああ〜！ あの須郷とかいうやつが支配していたところね！」

「……須郷がどうなったかを、知ってるんですか？」

まるで彼を見たかのような口ぶり。束さんは須郷についてなにか知っているのか？

病院で、どこかに逃げ出した後から行方不明になってるけど……

「聞きたい……あのゴミがどうなったか？」

いきなり、態度が変わって……一気に束さんの周りの空気の温度がっ!?

まずい……地雷を踏んだか？

「イエ……キカナクテダイジョウブデス」

「……答えてもいいけど、あまりスツキリしない内容だし、そっちのほうがいいかもね！ もうあのゴミを思い出したくもないよ！」

とつきに否定すると、またさつきの調子に戻った束さん。

須郷のことは……もう何があっても気にしないでおう。それが見のためでもあると、心が叫んでいる。

「よいしょ……さて、本題に入ろうか」

束さんが椅子に座り直して、改めてこちらに向き合った。

さて、ここから何が始まるのか……と身構える。

「本題と言っても……どんなことを話すんですか？」

「話すことと言っても、きつくくんがどのようなにしてISに乗れることがわかったかを、教えてくれたらいいだけだよ。それこそさつきと同じみたいだね」

それじゃあ、さつきのは予行練習みたいな感じだったのか……思わぬ思いやりで心の中で感謝しつつ、さつきと同じように、己がどのように動いて、何が起こったかを説明する。

「きっかけは、1年1組に展示してあったISだと思います」

「ほうほう……」

「ただ……ISをつけることができれば、空を自由に飛べるよなって思いながら触れると……」

あのラファールという名前のISをつけて入れてた……これ以上でも、これ以下でもない。

「特に細工をしたわけでもないんだね？ 純粹にその思いで触ると、ISに乗れる仮説が通るなら……世界中の男性が乗れるようになるし……」

私と流星の子達に聞いても、そんな嫌がってたわけじゃなかったな……

と続けて話しながら束さんはうーんと言いながら、椅子をくるくると回して考える人の姿勢を取っている。

「ISのコア人格と、会話を……!?!」

録音をしている山田先生から、驚きの声上がる。

今の発言の中に衝撃的なことが含まれていたようだけど、詳しいことはわからない。これからわかっていくのだろうか……

「とにかく……きつくくんも男性操縦者の一員になったことだし、IS学園で少なくとも3年くらいしてもらうのは確実かな？」

「3年も……」

「各国の優柔不断な人たちが、きつくくん達をどうするかって決めるのに必要なだつて。そんなに時間はいららないと思うけど……でもごめんね、勝手にきつくくんの進路を決めるような根本的なものを作ったのは、私だから……」

うさ耳が萎れて、目に見えて落ち込む束さん。

……一度、束さんのISの夢についてを流星から聞いたことがあるが、その時に聞いたことから彼女も苦勞をしてきたことを知っている。

「これも、一つの運命だったかなって思ってるんです。人生何が待ってるか、わからないですし……」

それこそ、流星の今までのこととかその周りにいるシャアやイーライ、ザ・ボスみたいに……

別の世界から来た人がわんさかいるんだ。こんな事が起こっても、受け入れれる。

「運命ね……そう言ってもらえると、嬉しいよ。お詫びと言ってはあれなんだけど、きつくくんのサポートをさせてもらいたいんだ」

「……具体的には、どういったものなんですか？」

「基本的にIS関連でできることは手伝わさせてもらうよ！ ……それともう一つ。今のIS学園の知り合いってりゅーくんとかんちゃんだけだよな？ しののんはもうすぐ来ることになってるけど……そこで、提案があるんだ」

「提案……？」

「お詫びと言っては何だけど、りゅーくんと同じ年の明日菜さん……あーちゃんだっけ？ ならあーちゃんの意向によったら、こっちに転入することもできるよ？ それこそしののんと同じようにね」

知らない所で博士に気に入られているアスナのあだ名はさておき

……

「そんな簡単に決めていいんですか？」

IS学園って普通何十倍もの入試をくぐり抜けてこないと、入れることがないところなのに……

「まだ世間に公表してないけど、あーちゃんもしののんと同じISの適性がA+。これはちーちゃんにぎりぎり届かないくらいで、世界でもまだ10人はいない……正直私がびっくりしてるよ」

「いつ測ったんです……？」

「彼女の了承は取ってる。その上学力も十分だから……後何人かのイエスを貰えるだけで、すぐにこっちに転入できるよ？ 後お金とかの心配もいらないし」

確かにそうしたいが……アスナのことも、考えないといけないな

……

「……後で、彼女と相談してみます」

「人の体って持ち主が思っているより疲れている事が多いし、そうするといよいよ……さて、これやることは終わったけど、この後はどうするの、やまびー？」

「……ああはい。えっと……今日から、一時的に寮の空いている部屋で泊まってもらうことになってます」

ここの生徒がいるだろうし、迷惑かけないようにしないと……「まあすぐに正式になるだろうけどね。途中、いつくんを見かけるかもしれないから、そのときはよろしくー！」

「いつくん……織斑一夏くんになにか用事があるのですか？」

「いつくんとは仲良くしてほしい。それだけだよ？ ……なんせ私のフィアンセだから」

「……あ？」

世間では3人のはずだが……一夏くんのお嫁さん、4人目がいたのかっ……!?

—
—
—
—

『キリトくん、大丈夫だった？』

「ナニカサレタわけじゃないし、篠ノ之博士と話をしたただだよ」

『そっか……体調には気をつけてね。それと、IS学園についてなんだけど……』

「アスナ、無理は言わない。今まで通り、ミト帰やアルゴ還と同じ学校者のままでのいいんだぞ？」

『ううん……キリトくんのそばにいたい。今の私から言えることはそれくらいかな……』

「……ありがとう」

大好きだよ、キリトくん。という言葉最後に聞き、通話を切る。

「彼女とのお話は終わった、桐ヶ谷くん？」

携帯を閉じた途端に、壁にもたれかかっている簪に似た容姿で、青い髪を持つ女性から声がかかった。

「はい……おまたせしました、更識さん」

彼女についていくことになっているのでアスナと話している間、待つてもらっていたのだ。

「それなりに砂糖ばらまいていたわよ。午前の帆坂さんによる、実質告白のあれほどじゃなかったけど……」

周囲では、鼻を押さえていたり何かを口から出しかけている人がちらほらと、寮の扉の隙間から顔をのぞかせている。

「むう……」

「そんなムスツとしなくても……この後の説明が終わったら明日菜さんとはまた後で話せるし、そんな気を落とさなくていいわよ。それより、短い期間だと思うけど、よろしくね和人くん」

「はい……そしてここが、IS学園の寮室……おお」

楯無さんの開けた木製扉の先には、どの家具も高級そうで、本当にここで泊まるのかという錯覚をしてしまう。

自分の部屋と比較するのは言うまでもなく、アスナの部屋に匹敵するほどだな……机に至ってはディスプレイが内蔵されているものだ。

噂通り……高級ホテルと言われても間違えてしまうほどに、きれいな部屋である。

「随分と税金かかっているでしょ？」

「ですね……ここで、楯無さんと……」

一緒に寝ることになるのか……アスナがいるのに、他の女性と寝ることになるとは……

「……どうしたの、桐ヶ谷くん？」

そう言いながら振り向いた楯無さんの声で、意識は現実に戻されて……そのまま彼女の顔に釘付けとなり、ドキッとしてしまう。

「……あ、お嫁さんが何人にもできるからって、私を狙おうとしないですよ？ ……もう彼氏はいるから」

こちらの表情から察したのか、楯無さんから牽制がかかってくる。
何なんだ一体……結構

「あなたも流星の……」

「そういうこと！」

『御名答！』と書かれた扇子を広げる。

……元から用意していたのか？

「簪からたまに聞いてましたよ。恋愛にはポンコツのお姉さんだつて」

「ふぐっ!? ……地味にツツコミが痛い……」

かなりのダメージを負ったようだ……ちよっとお返しができたのでよしとするか。

「なんで楯無さんと一緒の部屋になったんだ？」

「こう見えて私、この学校の生徒最強がなっている生徒会長「流星が、楯無さんに負けた……？」か、彼はそれに興味ないだけだしっ！」

もうおちよくらないでちょうだいっ！　と言って拗ねる立てなしさん。

　　押搦れば押搦るほど面白いなこの人……

「それで、なんで楯無さんと同じ部屋になったんですか？」

「色々おつかない奴らが、たまに和人くん達を狙ったりしちゃうからよ……それは嫌でしょ？」

　　なんか捕まったら最悪ホルマリン漬けとかなんとか言ってたからな……それは御免被りたいので首肯する。

「でもここのセキュリティって、世界で指折りの強度があるんじゃない……？」

「そうとも限らないのがこの世の中なの。備えあればというものね

！　最近――コースが誰かに集中――狙われ――ると聞くし……」

「……なにか言いました？」

「い、いや別に……桐ヶ谷くんも、ちよつと訓練をしたらどうかなーっと思って。流星は言わずもがな、一夏くんも暇があつたらそういうこと頑張っているみたいわよ？」

　　取り繕いつつ、新たな話題を持ち出してくる楯無さん。

　　なにか裏事情があるんだろうけど、あまり詮索はしないほうがいいだろう。

「訓練って、どんなことを……」

「CQCって言われてる技術を習得するの。気になるなら、私が実践してみようかしらっ！」

　　この後、むちやくちや転がされた。

side たきな

IS学園の学園祭から2日後の休日。連日のように、第3の男性操縦者のニュースがテレビで流れている。

思い返してみれば出張店は大成功で純利益が7桁に迫るほど……ということとはさておき。

「制服でロニイさんや簪さん達と回っていた流星、楽しそうでしたね」
「ん〜？ たきなも、学校に通いたいの？」

ふとこぼした独り言を、千束が聞いたようです。

ですが、さつきの独り言は到底叶いそうにないですから……なぜならば。

「彼女や流星さんが安心して暮らせる社会にするのが、私達の使命なので……でも正直、羨ましかったです」

一緒に学んで、ご飯を食べて、話をして……

「それもそうだね……特に流星と一緒にしたいんじゃない？」

「それは千束も同じでしょう！ 私、知ってますからね！」

「おおんっ!? いったなあ〜？」

どちらも顔を赤らめながら視線がぶつかり合って、火花が飛び散っている幻覚が見える。

「それよりも、はやく荷物を届けなくていいの？」

ミズキが指差す方には、今日中にヤのつく人達がいる場所に届けないと行けないものが入った小包。

中身が違法ではないことは確認済みです。

「……そうだね、この話の続きは帰ってきてからにしようか」

千束がそれを持って、外に出ようとしたところを……

「待ってくださいー！」

「んお？ どうしたのたきな？」

呼び止めていました。というの……

「気がかりなことが……最近、サードのリコリスが何者かに襲われる案件が複数発生しています」

「……リコリス襲われているのか？」

「詳しいことはミカさんに聴いてください、クルミ」

私はあくまでも、この事があったことだけしか知らないの……それ
に、このこともミカさんから聞いた話ですし。

「それで、損害はどうだったんだミカ？」

「被害を受けたのは4人……そのうち、偶然襲われているところに出
くわしたD.A.C.の一人が救助に成功したそうだ。そのサードは現在
ツイマッドのところまで治療中らしい」

「……気になるな。ちよつとそれについて調べてみる」

そう言うところミは、いつもの押し入れに入った。

次出てくるのはいつになるのでしょうか……つとそれよりも、千束
の話に戻らなくてはと思い出してさつきから準備を進めていた千束
に話しかける。

「聞いてのとおりです千束。カモフラージュするとはいえ、いくらな
んでも一人での行動は危険ですよ」

次は何を反論してくるのかと思っていたら、取り出したのは黄色い
ポンチョ。

これをつけていればリコリスの制服を隠せながら、銃を持てるので
かなり合理的だと納得する。

「でもそれ……千束のだけですよね」

「そんなこともあるかとおくこちら、じゃんっ！」

今度は紺色のポンチョを見せびらかしてくる千束。

「これは……私の？」

「そーだよ！ これなら大丈夫でしょー！」

「大丈夫、たきな……？」

「ええ……こちらはなんとか」

……まさか、こちらが複数人でも襲ってくるとは……

肩で息をしつつ、今しがた横転させたバンから這い出てくる、緑色

のくせ毛持ちの男に非殺傷弾入の拳銃の標準を合わせて二人でジリジリと寄っていく。

最初に、スポーツカーで撥ね飛ばされそうになり、千束とともに轢かれたフリをして、千束とタイミングを合わせて反撃を初め、引き撃ちをしずつけた結果こうなりました。

千束は携帯を落としてしまい、私のものは残っているとはいえ……この状況で連絡もできそうにありません。せめてインカムをカバンに入れとくべきでしたか……

「ポンチョ……すみません、落としてしまいました……」

「大丈夫だよ、生きてるだけでも……」「千束っ！」えっ?」

茂みの中にある黒光りが一瞬目に入り、とっさに千束を押し倒す。

最後に感じたのは……

「……チツ。赤服リコリスに当たらなかつたか」

と話すスナイパーを持つ灰色髪の男と、自分の身体から出ている赤い液体だっ——

第56話 e s c a p e

「あれ、この時間流星とテレビ電話する筈だけど……連絡来ないな？
楯無さん、流星と連絡が取れないんですけど……」

「いま取り込み中なんじゃない？ もうちよつと、待ってみたらどうかしら？」

「……もう10分待ってみます。それまでちよつとVRMMOの話で
もしませんか？」

「あ、それ気になる……！ 聞かせて頂戴！」

side 流星

「ブラックグリントの解析結果がでたよー！」

「お……どうだった主任？」

学園祭の数日後の週末、ツイマツド社で業務をしていると、青い機械のヘッドをつけたツイマツド社技術部代表……通称『主任』がある数枚の報告書を手渡してきた。

かなり前から登場していた主任は、時には今のよう^{幕間}に白衣を着ていたり、時には開発した覚えのないロボット^{ハンゲドマン}だったりする……正直、正体がはつきりしてない。

「ロニイちゃんのIS、三次移行の際に変化したジェネレーターなんだけど……その粒子から、コジマ粒子とサイコフレーム粒子のハイブリットであることがわかったぞ！」

渡された資料をめくると……ロニイのISの^{サードシフト}三次移行で、色々出てきた謎の内の一つが判明した事が書かれていた。

「となると、ロニイのサイコフレームのパーソナルカラーは紫か……コジマ粒子の毒性は？」

「今のところは確認されてないね。だけどなにかの拍子に切り替わっ

て、黒い鳥みたいになる可能性も……あるかな？」

「……わかった。続けて、サンプルを取りながら調査を進めてくれ」

「はいはい……おや、忙しそうだね、そんなに机の上に別の資料広げて。もしかして夜も忙しいからかな？ ギャハハ……ア。ツー！」

「心配してくれるのは嬉しいが、紛らわしいことまで言わなくていい……！」

頭を何故かその場にあったハリセンで叩くと、主任の頭の装甲の一部が吹き飛ぶ。

ツツコむ時に毎回思うんだが……そんなに強く叩いてないのに、どうしてすぐにダメージを受けるんだ？

まさか……そんな見た目して、物理攻撃には弱かったりしてな……

「機体がダメージを受けてマース」

そう言いながら、トボトボと持ち場に戻っていく主任。

まあ……いつもの如く、気づいたら治っているだろうし、問題ないだろう。

「……はあ」

だが……主任に言われたとおり、最近の業務が忙しくなっていることに違いはない。

学園祭にだしたVRゲームの報告書に然り、学園祭のために後回ししていた書類に然り……これだけではなく、もつとある。今日寝れるか……？

そして何よりも優先しないといけない、一番の課題は……

「三人の……専用機、か」

ロニイの報告書をファイルに直して、元々広げていた資料に目を配る。

色々な方面から……篠ノ之博士がいるなら、すぐに作れるよな？

(意訳)と急かされているので、期限は言われていないものの……もう半月もない今月中に作らないといけないだろう。

「そうポンポン作れるものじゃないんだってのに……」

原材料の調達はもう済ませて、コアも束と一緒に作ったが……キリト達本人の意向を聞いて、フレームを作らないといけない。それをま

だやっていないので、このあとにテレビ電話をする必要がある。

「それは30分後か……眠いな。ちよつと寝るか」

机にある時計のタイマーをセットし、仮眠をしようとするモノアイが書かれたアイマスクを被せ……れなかった。

止めたのは……

「何かあったのか、マ?」

「流星、なにか手伝えることあるか? 例えばその横の決済の書類などは……?」

「いや、これは後でやる予定のやつだから気にしなくていい」

この書類を終わらせれば、今日の仕事は終わるし……概ね9時に終われば御の字だろう。

「やることなく困ってるんだ。部下がやることなくコーヒーを飲んでいて、上司だけがブラックというのもの……」

「じゃあ……この資料捌いてくれ。頼む」

テレビ電話の後にしようとしていたものを、彼に任せるとする。

暇になった分、今日は家に戻る予定があることから、木綿季たちとゆつくりしようと考えてみた。

「頼まれた……本来なら、私や他の者がする作業なんだがな……どうしたんだ主任? さつきで報告が終わったんじゃないのか」

なにかいい忘れてたことでも、あるのか?

どんどんと仮眠の時間が削れていつてるから、はやく終わらせてほしいが……

「今度は何だ、主任……できれば手短かに頼む」

「そりゃ無理だ、申し訳ないけど。だって……緊急回線、さつきから鳴りっぱなしだからね? もしかしなくてもやばいんじゃない?」

「……何だどつ!」

主任の指の方向には、俺の机の上に乗ってる赤い受話器についているランプが点滅しているた。

まずいな……普通はこれ鳴らないはずなのにっ!

「誰からの通信だ!」

「クルミと名乗っています！」

「クルミ……こつちに直接繋げっ！」

ブリーフィングをする余裕がないので、すぐにISの換装をできるようにしている。一体何があった……

内容が分かり次第ですぐに出撃できるようにな……ISを使うのはあまり良くないが……すでに東からもこの方に使う旨は伝えてある。

『流星！ 千束と、たきなが！』

少しのノイズがしたかと思えば、最近聞き慣れた声がつけているインカムから聞こえた。

その声は憔悴しており、いつもの様子とはまるっきり違っている。

「……何があった。落ち着いて、ゆっくり話してくれ」

『ああ……つだがそんなゆっくり話している時間はない！ 二人は今襲われてるんだ！』

二人が襲われている……想像しがたい話だが、現に起こっているのか。

恐らく大多数による飽和攻撃、もしくはその大多数を囿に使った意識外からの攻撃を狙って……

「場所はわかるか？」

『携帯を落としているから、具体的な場所はわからないんだ……』

恐らく襲われた直後に落としたか……ならば。

「携帯の位置はわかるか？」

『それなら……』

……と、HUDの一部に出てきた地図に点が示される。

ここは……近くに公園がある？ この近くの公園をまずあたってみるか。恐らく千束とたきなの戦闘スタイルだと、ここで闘っている可能性も高い。

「これだけでも上等だ……もう一つ、千束たちと連絡がつかなくなっ
てから何分経つ？」

『……もう、10分は』

10分。すでにどちらか……いや、どちらも負傷していてもおかし

くない。

「主任！ 緊急手術対応型対人治療セット
IS搭載用CURE改良型と輸血の在庫は！」

「たーっぷりあるよ。いくつ持っていくんだい？」

「2セットと千束とたきなの血液型と同じ型をそれぞれ20140m1x20単位を医療部の在庫から引つ張ってこい！」

「了解したけど……問題が起きてない？」

主任が即座に運んできた人の胴体くらいあるコンテナを拡張領域にインスタール……できない!？」

「どうしてか……原因は容量不足だと……!？」

「いつもの装備を拡張領域に入れたままだと、それ運べないよ?」

「思わぬ弱点を指摘されつつ、瞬時に対処法を考える

「非殺傷弾搭載のライフルは全部外付けで対応させる! DACの今いるメンバーに喫茶リコリコの周辺半径5キロを、重点的に警戒するように通達!」

「りよーかーい。んじゃぽいーつと」

取り出したアームドアーマーS B、V N、ビームマグナムを主任に投げ渡し、今度こそコンテナを収納した。

代わりに非殺傷弾フランジル弾の詰まったISのアサルトライフルを両手に持つ。

後は、試験場方面に向いているカタパルトを、目的地に向けて「流星、私もいい?」……今のは?

「あれれ、流星だけで行くの? ロニイちゃんも行きたくそうにしてるけど……」

さつきまで主任と、ISの調査をしていたロニイもいつの間にか臨戦態勢で、少し後ろのカタパルトにいた。

「これに関与すると、裏に片足突っ込むことになる……それでもか?」
「いいの。元々裏から生まれてきたようなものだし……それよりも、

はやく千束達を助けないと……!」

ロニイもこっちに来てしまうのか……なら、これからより一層お互いに守ったり守られたりすることが増えるだろう。

「あ、そうなんだ。それじゃあ頑張つてー!」

主任がそう言いながらカタパルト発射ボタンを押す。

「間に合ってくれよ……！」

レールに一瞬の紫電が走り、2機のISは一瞬にして亜音速まで加速した。

side 真島

「まーじまさん！ はやくトドメ刺しちゃってくださいよ！」

「真島さんに勝つなんて、100年早いんだよ赤服！」

周りからの聞き流しつつ、

「ハウズの方も動員していたら、もうちよつと損害少なかったんじゃないか？」

青服を赤服の方がかばうようにして倒れている状態に目を配らせながら、スナイパーライフルを持ちながら喜びの顔を見せているそいつに問いかける。

実際、あの化け物出したらこっちの何人かは気絶することはなかったし、何台かの車も潰れることはなかっただろう。

「いや、あれだしたら関係ない人まで被害及ぶからね……今回は休んでもらってる」

「変なところで律儀だな、お前は……じゃあ誤射した青いほうはどうするんだ？」

その話題の主はというと、赤服がかばうように覆いかぶさっているそいつの下を中心に赤い池が広がっている……今すぐ手当をしなければ手遅れになるであろうダメージを負っている。

「ほつといていいよ、時間が経てば失血死するだろうし」

こいつの射撃センス、もうちよつと見たかったんだがな……せめて手くらはいは合わせてやるとしよう。

なにかの才能ではないかと思うくらい、射撃が正確だった。

「私……君とは、面識がないんだけど？」

青服の上に覆いかぶさっている赤服、殴った後意識飛んだと思っていたが、まだ意識があったのか。

よくもまあ……さすがはかつて一度しか見たことのない希少種というだけある。

「……なくて当然だろうね、直接的に被害を被ったわけじゃないし。だけど君が引き起こしたことに違いはない」

「私になにか恨みがあるかもしれないのはわかる……けど。なんで、たきなも……？」

「いや、あれほんとに誤射だよ……それは謝っておく」

こいつもこいつで、どこかおかしいよな……ただ復讐のために、他人のことはどこか無頓着になるところ。そして、一つの目的にかなる手段を使うことをためらわないことが。

「消星……早く赤服にケリをつけるなら、さっさとつけろ。これでお前のステップは一つ進むだろ？」

「わかって……あれ、これは……僕と真島も同じの持ってたよね？」

あいつがリコリスのつけているフクロウのペンダントを指差す。

こいつも……アラン機関の「真島さん、上と横から何かきますっ！」
あ？

横から来ているのが赤い乗用車、そして上から飛んできているのは……

「なっ……いきなりISだと……!？」

報告したやつから赤い煙が出て倒れたかと思うと、周囲のやつが次々と撃たれて倒れていく。

こいつらも、よりによって非殺傷弾を……そして、さっきの拳銃のときとは違い、一発一発が強力になっているのが嫌でもわかる分、余計に当たりたくないなあ……!

「どうしてここで出てくるんだよっ！」

海外の紛争地域の平和維持活動で、動いているのを何度か見たことがあるやつが見えた。その時はほぼ自衛用の装備しか持っていなかったが、こいつは……完全に武装している。

飛んできているのは2機……一つは紫色の何かを纏っている黒いもの。あれは見たことがない。だがもう一つのところどころ青く光っている、白いものは……

「おい消星、黒い方は全然見たことないが、白い方って……」

「ああ……間違いないよ、あれは白獅子。パイロットは尾白流星……僕の第2の目標だ……そうだよっ！ まさか、本当に赤服と関係があったとはね……！」

話すにつれて興奮するこいつは、スナイパーライフルを構えて白獅子に向けて何度も撃つ。

だが悲しいな。見た目通りに装甲が弾を弾いて、絶対防御なるものが発動している素振りもない。

「流石IS！ 待っていたんだ、この時を！」

スナイパーライフルを投げ捨てて、やつが懐に持っていたグレネードの安全ピンを引き抜き、レバーを握った消星は赤服に呐喊する。せめてこいつとだけでも心中するつもりか……!?

「ゴハアツ……ずるいだろ、それ」

だが相手は俺たちの何倍も早く機動することができて、自立兵器も動かせるIS。消星の今からやることそうはさせまいと、白い人の大ききさほどある、飛び回っている盾がやつにぶつかって消星が吹き飛ばされた。

その時に別の方向に飛ばされた手榴弾は少し離れた所で、その手榴弾は爆発する。

「グエツ!?!」

「な、何なんだよ、こいつ！」

黒い方のISはすでに赤服のもとにいて、その赤服と青服をかばいながら、この前位にいる城獅子と同じく非殺傷弾で俺たちの部下をのしている。機体を見るに、これは専用機……あまり名を知られていない精鋭を連れてきたのかよ……

『……』

これはなにかの縁なのか……白獅子の進行上の真横だったようだ。そのパイロットとバイザー越しで目が嫌でも合う。たしかこのパイ

ロットの名前は……

「尾白……だったか。日本は、ISをこんなために使っているのか？」
『……俺達は、政府の走狗なんかじゃない。自らの意思で来ただけだ』
黒いISのパイロットは赤い服のリコリスを抱えたまま、やってきた赤い乗用車に転がり込む。それを確認した白獅子はこの短いやり取りの後、盾を背中に移して青い服のリコリスを抱えると一瞬で空に飛び上がった。

「……追いかけていいのか、真島？」

「いや、追わない方がいい……もう警戒を強めている筈だ」

飛んだ後を確認できるから、追いかけていけないわけではない……だが、ツイマッドといえ……裏の人間が真っ先に連想するのは会社直属の傭兵部隊。こいつに目をつけられていて、生き残ったやつは俺の知る限りいない。

おそらくここにも、裏で名を馳せているツイマッドの実働部隊がやってくるかもな。

とどのつまり、俺たちも悠長にしてられないっていう話だ。

『ちよつと真島!? ドローンがいきなり全部つかなくなったんだけど、どうなってブツッ』

かかってきた電話の通話ボタンを押した瞬間、ロボ太のうるさい声が飛んできたのですぐさま切る。

大体ここに来るまでに全部壊してから来たんだろう。

「うちのハッカーの目も全部潰されたようだな。追いかけるのは難しい」

「ふーん……こういう感が鋭い、あんたの言葉を信じるよ」

そう二人で話しながら夜の闇に溶けていく。部下はそれにひよこひよこついてきた。

青服は死ぬかもしれないが、赤服の家は知っているし、生きているだろう……今度訪ねてみるか。

第57話 技術の暴力

「……遅いな、流星。ほんとに何があったんだ……」

「っ千束ちゃんたちが……そう、わかった。桐ヶ谷くんにそう伝えとくわね」

「……いまのは、流星からですか？」

「緊急の用事ができたから、明日にしてほしいって……巻紙先生に送った資料を見て、大まかに決めてほしいって言ってたわ」

「……また、なにか抱え込もうとしてるのか？」

「今回は千……別の人の用事みたいだから、そんなことはないと思う……けど」

side 千束

あれから、私はどうなったんだろう……ここがどこか、わからない。ここに来た経緯を、私の記憶から辿ってみる……

まず、送りものをするためにたきなど店を出て……緑髪のやつと、つなぎを着たやつらに追いかけて……

……たきなが、撃たれて……

……たきな……たきはもうなくなったのっ！

「たきなっ！」

「……あー、束さん、千束の目が覚めたよー！」

飛び起きると、私がいたのは喫茶リコリコ。

そこにいるのは、水の張った桶を持ったロニイちゃんと、『CUR E』と書かれた箱を持つ束さんに、テーブルでパソコンを見ているミズキとクルミとオタクンさん。そして入口を見張っているジンさん……と金髪の誰か。

そして……たきなど、ミカの姿が見えない。

「いやー……二人共、随分とやられちゃったね……」

「束さん、たきなは……!」

「まあまあこれでも飲んで落ち着いて……彼女は、店の裏で流星とミカさんが今頑張ってるから……彼らが付いてるし、大丈夫だよ」

「……そう、なんだ。よかった……」

束さんから渡されたコーヒーを一口飲もうとするけど……口の中が切れてて、飲めそうにない……

「貰ったのは嬉しいんですけど、今はちよつと……」

「あー……ごめんね、てつきり口の中は大丈夫だと思ってたよ……ロニイちゃん、これ飲む?」

「貰います……にがつ!」

ここでたまにブラックを飲んでるロニイちゃんが、見たことのない渋い顔をしながらそれを飲む。

……飲まなくて正解だったかな。

「あら……炒りすぎちゃったかな? 細胞レベルで天才とか言われてても、やったことのないことは先駆者に聞いてみるしかないね……」

じゃあ……なんでIS作れたんだろう?

「あの……ジンがここにいるのは百歩譲ってわかるんだけど……」

彼は誰?

指を指した先にいる男性は、俺のことか? と首を傾げたので、首を縦に振る。

「……俺か。俺はただの雇われ……リキッド・スネークだ。兄弟の頼みで、ここの防衛に当たっている」

「そんなカツコつけなくてもいいよ、イーライ」

「んなつ……まあいい。とにかく、落ち着いたら勝手に去るから気にするな」

ロニイちゃんのツッコミにダメージを受けながらも、あくまでも自分の役目を通そうしているイーライさん。

「……ほんとに苦いな、これ。どうやって作ったんだ?」

「もう! いくらくんまでそんな事言わなくていいじゃないっ!」

お返しと言わんばかりに、東さんをいじっているけど……

「……やつと終わった」

東さんとイーライがわちゃわちゃしているのを眺めていると青い手術をするためであろう服を着た先生が、汗を大量にかきながら裏からでてきた。なにか見覚えがあつたのは……気の所為、かな。

「先生、たきなは！」

「弾は取り除けたし、銃創も塞いだ……あとは、目を覚ますのを待つだけだ………苦いな。始めたての頃の味に似てる」

そう言いながら先生はイーライから差し出されたコーヒーを飲む。先生も最初はヘツタクソだったからね……

そんなことより、手術が無事に終わって……あれ、東さんの話だと流星もいるって聞いてたけど……

「彼なら私の後ろで、休んでいるよ。あまり動かさないでやってくれ……疲れているようだからな」

「よく耐えたよ、たきなはっ……っつと」

ちょうど先生の影で椅子の脚にもたれている、いまにも崩れかけそうになっている流星もそこにいた。

「どうしたの、流星!？」

駆け寄ろうとするも、立ち上がってこちらにゆっくり歩いてきている彼の手で制される。

「俺から直接、輸血したんだ。血液型が同じだということは覚えていたから、足りない分は俺からな……」

「……何単位輸血したんだ？」

「7と少しだな。血が足りない時は、生で送るに限る……ちやんと血液検査機には通してるから、問題はないはずだが……」

「1リットル超えているよな、それ……」

この答えにクルミの顔が引きつり、流星は苦笑いする。

身体からそんなに抜いたってことは……ちよつとした貧血状態ってこと、だよな？

「にしても……どうやってここに運んでくるまで、たきなを生かしたのりゅーくん？」

「ISの登場者保護機能を、たきなが受けるように設定した……手術中もISをつけっぱなしにして、血は出ても頭に血が回るようにしてたんだ。これで後遺症のリスクを減らせる」

「……へえ。そういう使い方もあるんだ」

束さんは関心した声をあげながら、「宇宙とかで、その技術を応用できたら良さそうだね……」と何かを考え始める。この人の研究、どんなことをしてるんだろうか……今度そういうときに聞いてみるのも、ありかも……と思ったことはさておき。

「どれくらいで、元気になれるの？」

「そうだな……目が覚めて、一週間後には普通に動けるようになるか？」

「一週間……意外と早いね？」

撃たれて、銃創とかあるはずんだけど……どうやってそんなに早く治せるんだろう……何がともあれ、本当にたきなが無事で……

「そりゃあ、うちの変態技術者謹製のナノマシンを投与しているからな……値段は気にしなくていい」

ナノマシンって初めて聞く単語だけど、とにかくたきなが治るのが早くなるなら……

「ほんとによかったよお、もお……後でちゃんと鉄分取っついてね、流星」

「……ああ……あ、もう起きたのか、たきな。殆ど治りかけとはいえ、まだ無理はするなよ」

刹那流星の後ろで、まるで何もなかったかのようにキョトンとしている彼女に飛びついた。

「おいっ、また傷口開くかもしれないからやめろっ!？」

「……それが真島か？」

黙して結果を待っていた楠木司令が尋ねる。

すると、先日の傷がまるで嘘のように治った二人が良い笑顔で首肯した。

「はい、これが真島です！」

ばつ、と一齐に紙が出される……両者とも、俺の記憶とすら違う。記録と比べたら尚更だ。

千束とたきなは、お互いの絵を見合って大爆笑したり不満を垂れたりと忙しない。それを眺めていた楠木司令がちら、と俺を見てくる。

「流星氏も書いてみる」

「……こつちのほうが早いでしょ」

ISのハイパーセンサーに記録していた真島の顔。それをこのプロジェクターに共有して投影した。

「緑の縮れ毛に、猫目……季節に反するコートが特徴だ。二人のそれとは大違いだな」

「ぬなあにおお！ 流星の絵がヘツタクソだから、描きたくなかっただけでしょ！」

「……ずるいです」

「一応、自分でも書いてみたんだがな」

「……」

二人からの批判の声が止まらないので、昨日の晩に仕上げていたものを見せると、当事者は固まった。

……実は俺も今日の朝、束に電話で言われるまで録画機能を忘れていたのはココだけの話だ。

「へえ……流石はIS学園の生徒。そつちの才もあるんっすね」

「……いや、この二人の画力が終わっているだけだ」

「何をっ!!」

……仲いいな、この4人。

「もう一人の……消星と名乗ったやつは」

千束達の喧嘩を一瞥した楠木司令は、話を次の段階に持ち上げよう

とする。

「それはごつち……なんでかは知らないが、俺と千束を狙っているらしい発言をいくつかしていた。そのデータは後でそちらに送っとく」次に投影されたのは、灰色の髪をもった中学生くらいの大きさの子供。

あどけない表情をしているが、その目の奥にはなにかの黒い感情が渦巻いているのが画像越しでも伝わってくる。

「……コヤツがたきなを」

「随分と小さなガキだな……サクラより若いんじゃないか？」

さっきの瞬間までぎゃーぎゃーしていた千束とフキも、スクリーンを認めると争いを一旦やめた。

「こちらでラジアータにデータを参照しておくでしょう……わかつていることだが確認だ。尾白氏と千束が行動したところのあるのは？」

「千束とともに行動したことは……ここ半年と、10年前の旧電波塔か。それ以外は週末に店に顔を覗いてるくらいだ」

「その中で、一度も見たことがないんだな？」

「……一応、これまでのISの記録を洗っておいとく。オタコン、なにか思いついたか？」

消星の写ったスクリーンをまじまじと見ているオタコンも、なにか言いたげにしている事に気づいて話を振ってみる。

「それほどの恨みを持っているなら、10年くらい拗らせていそうだけれどね……突発的な感情のようには思えない。その消星とやらに、何かあったとするなら旧電波塔辺りのことを調べてみたらいいと思うな？」

「……その方向で間違いなさそうだな。オタコン氏、助言感謝する」

司令がオタコンに頭を軽く下げているのを見ていたサクラがオタコンに妙な目線を向けている事に気がついた……他に、気がついていたのはフキだが、あつちは何かを知っているようで、ため息を一つつくとサクラを突っついて現実に引き戻させた。

……まあオタコンは今の所見てないから、修羅場になる可能性は低いか。

「現代技術を遥かに超えるものを使ったからな。IS使用費に弾薬費と、ナノマシン使用代と、薬代と、人件費は考えるのが面倒臭いから特別オマケするとして……今回はこれくらいか？」

今回のかかった費用を持っていたタブレットに映し出して、司令に見せると特に表情は変わらない代わりに秘書のような人物が驚きの声を上げた。

「……こんな法外な金額を、こちらに請求するのですか!？」

「別に法外ではない。彼らの技術を外に流したら、世界が混乱しかねないほどのものだ……むしろこれくらいが妥当どころか安い。本来なら、すぐに命を落としてもおかしくない状況だった……惜しい人材を失くすことを考えたならこれくらいでも安いものだ」

この普通にたきなの評価が上がりつつあることに、内心喜びを覚える。

「司令の口から、そんな言葉が聞こえるなんてねえ……」

千束もポーカーフエイスをしているが、内心がニヤニヤなのはお見通しだ。

「この作戦は半分俺のエゴだったし、いろんな器具はまだ実証段階ということにして、今回はこっちの予算から削っている……次からは請求するがな」

……言い忘れかけていたことを、司令に補足しておく………今ので気が良くなってこうしたわけじゃないぞ？

「……いや、この料金はDA……リコリスが持たせてもらう。そして、一つお願いがある……」

少し考える仕草をした後、楠木司令は妙な事を言ってきた。

これを支払うとは……俺達から何を買うつもりなんだ？

「……聞かせてもらっても？」

side ザ・ボス

「かつて世界を敵に回したというのに……どういふ風の吹き回しだらうな」

訓練所で山積みにしたリコリスを眺めながら一人つぶやく。

スネーク流星から金はいくらでも積むから、リコリスの面倒を見てほしいと頼まれた。ツイマツドの任務に支障をきたさない程度で、こうやってDACとやらの隊員が出張している。私は鼻の下伸ばしている不届き者がいないかという御目付も任されているから、忙しい……特にカズヒラというやつが何をしでかすか……スネークもこいつは一番気をつけてくれと言っていた。腕は一級品だが、素行が終わっている……既に未遂を3回くらい仕留めたな。

まあ……かなりの額をもらっているから、不満なんて一切ないが。

「ボス！ 次の訓練志望者がやってきました！」

何でもDAから直々に頼まれたそうだ……どこまでもお人好しなことだ。

先日襲われたという二人組には、リキッドとオセロットがみっちりしごいているというらしい。

全く……あいつは一体何人好きになるんだか……

「ああ……待ってる。すぐ向かう」

そう思いながらも、私は彼女達を鍛える。

……ちいさな体で大きな銃を持つ少女達を死なせない為に。

キャノンボール・ファスト編

第58話 新たなる3機

「私は……まだ……!」

「たきなさん、今日はもうやめとけ……まだ体が治りきったわけじゃないんだ。休むことも、大事なんだぞ?」

「えー? リキッドたきなにだけずるいー!」

「千束はもう治ってるだろう! 流星から治り次第CQCを覚えさせてくれって頼まれてるんだ!」

「オセロツト……数日での治療を実現できるそのナノマシン、高性能過ぎると思うが……」

「……今に始まった話じゃない、クルミ」

side 詩乃

「——でね、その時に一齐に告白したら流星が泣いてね……」

今日から始まったIS学園での生活……ルームメイトになったかんちゃん^替から、流星の昔の話を聞いていた。

「……流星って、泣いたことあるんだ」

「私は2回見たことあるかな……一回はその時に、もう一回はSAOの時にね」

「かんちゃんの今の話を聞くまで、私は涙もない人に惚れたって思ってた……」

「流星もちゃんと人の体だよ……実際の年齢はともかく」

キリトくんとか、アスナがたまに流星の昔すぎる話をしてるのは聞いたことある……でもまさか、何回も生まれ変わってきた人だとは簪

の話聞くまでそうだとは思わなかった。

「彼の記憶のある限りで、1000年超え……そんなに生きてたら、記憶するのも大変だろうね」

「昔聞いたことで、エミールっていう人よりはマシだって言ってたけど……誰なんだろう?」

「さあ……以外にもこのハロみたいな形をしてるのかも?」

かんちゃんはその言いながら、コロコロと転がっていたハロを持ち上げて抱え上げた。

『リュウセイハジツサイ、ジュ……エミール……アレツ、ドコカデキイタコトノアルナマエ……』

じゅ……? 何かを言いかけたハロは、別の言った言葉を拾って何かを考え始める……あれ?

「ハロってこんな言葉覚えるっけ?」

「AIを載せてるから、どこかで覚えたのかも……それに、それは流星がこの世界に来る時に一緒に来たオリジナルのハロだよ。市販とは、動いてる年数がまず違うし」

「これが!」

確か市販のハロの販売はそろそろ10年くらい経つけど、このハロだけは流星と一緒にやってきた特別な子……ってこと!?

「入ってもいいか?」

さっきのように雑談をしていると部屋の外から聞こえてきたのは、織斑千冬さんの声……時計を見るとそろそろ、昨日やるはずだったことをやる時間になっている。

「どうぞ、織斑先生……時間が来ましたか」

簪が扉を開けて、織斑先生が中にはいつてきた……要件は間違っとなさそう。かんちゃんと話して決めたISの資料をもつてこないと……

「そうだ。ついさっき、ツイマッドから準備ができたと連絡が来た……朝田、行けそうか?」

「はい……」

そう言っ立ち上がろうとするも……立ち上がれなかった。脳裏

に浮かんだのは、前の学校で散々家を我が物顔で使ってきた人……どうしてこんなときに……！

「……つちよつと待ってください、すみません」

「どうしたの、しののん？」

「ごめん、簪……フラッシュバックが」

「謝ることはない……これからのことが心配なんだろう？」

織斑先生がこう聞いてくるといふことは、私がなんで悩んでるか知ってる……流星から話を聞いたのかな？

……間違つてはないので、首肯する。

「織斑先生、私もついて行っていいですか？」

「事前に簪の同席については許可を取っている……むしろ、簪はツイマッドの代表なんだから、これを取らなくても言われたがな……」

「……そういえば、そうでしたね」

織斑先生と似たような視線を向けると、アハハ……と言いながららんちゃんバツが悪そうに顔を横に向けた。

そういうことはしつかりしとか「朝田」ひやいつ!？」

「前の学校ことはすでに聞いている……もし、朝田に害を為すものがあったら私が許さないし、私に言いにくいことがあっても流星や結城、桐ヶ谷に相談してほしい。なに……今はそんな事で、悩まなくてもいいよ」

「ありがとうございます……でも……織斑先生は、流星が相談に乗ってくれるってどうして知って……」

「さあ、な。本来は生徒と教師の恋愛は避けるべきではあるが……」

あ……もしかして……

「……んんっ！ 流星が待ってるぞ」

話し始める前より心なしか頬が赤く色ついている……眼の前のこれからの教師が移動を催促した。

side 和人

「この部屋で、ちょっと待っててくださいねー」

山田さんに連れられてやってきたのは……ここの教師が使っているであろう会議場。

30は優に超える画面が表示されている、この部屋には何人かの教師と……

「やつほ、キリト……学園祭ぶり」

「お姉ちゃん、和人をいじつたりしてない？」

先に座っていた詩乃と、その横に座っている簪。そして……

「キリトくん……」

「アスナ……久しぶり」

話し始めている時には、もう抱きしめ合っていた……よかった、アスナに何もなくて。

数日会わなかっただけなのに、数週間も会えなかったかのような感じがする。

「はわっ……この二人は……!」

「……青いな」

山田さんや、織斑さんが言葉をこぼして……

『……てえてえ……アイムオーバーブーストツ!』

なにかが高速で移動するような音の後、昔にどこぞのVRMMOで聞いたことのある爆発音と共に、写っていた一つの画面が真っ白になる。

「……いまのは？」

「ホワイトグリン子……本名は白隼閃光だ。ISになってる一般転生者がキリアスのイチャラブに耐えきれずにオーバーブーストしてアサルトアーマーしてコンボイ司令官しただけだから気にするな。数分したらもとに戻る」

「??」

おーばーぶーすと? こんぼいしれいかん?

理由の分からない単語を並べられて脳内の処理が追いつかなくな

る。これを言った人は……

「ともかく……待たせたな、3人共……野暮用で1日ズレたことは謝っておく」

目の前の画面の中央に写っている、流星だった。

なんでもツイマッドの方からのリモートで、今回はやることになったそうだ。

「昨日、何があつたんだ？ 顔色もなんかよくなさそうだし……」

「それはちよつと言えないな……事情が事情で、会社のこととしか。悪い」

「……無理はしないようにしろよ」

「覚えとく……まず、始めるにあたって先生方から、なにか聞いておきたいことはありますか？」

そう聞いてまず最初に手を上げたのは、織斑先生だった。

「尾白はいつ、学校に戻ってくるんだ？」

「俺のことは……休日明け、明日にはもう教室で座ってるようにしときます、織斑先生」

「遅刻と授業中のうたた寝は許さないぞ？」

言ってること自体は、ふつうに教師と生徒のやりとりなんだが……口調がもう親戚のそれに近い。

仲いいな、二人は……

「わかってますよ……他には？」

「ひとつ……いいか？」

「何だ、和人？」

『ぜひ我がアクアビット部門のアクアビットマンを……！』

『何を言うっ！ それならこの雷電のほうが！』

『ナインボー……デデデ、デストローイ、ナイン、ボー！』

流星以外の画面でずっと、某夢の国のマスコットキャラクターを青色にしたものや戦車のようなもの……赤い9が書かれた機体の模型などを持ちながら、騒いでる人たちがどうしても視界にはいる。

「流星の画面の横にいる……この人たちは？」

「あー……コイツラはほっといてくれ。こういう時、いつもこうなってるから。」

デユノア社向けのISの武器の依頼がいくつか入ってる『ヒヤツハーツ!』……そっちを優先で頼むぞ」

流星が周りの画面の人達になにかの依頼を出すと、騒いでいた人たちのモニターが一斉にオフになり……一気に静かになる。

「……すまん、普段はいい奴らなんだがな。それじゃあ、話を始めるとするか……3人の専用機について」

「詩乃、これで決定か？」

「うん。ガンダムエクシアリペアⅢの……このヘカーテパックで決める」

「ヘカーテライフルとGNビットの換装パック……『エクシアリペアヘカーテ』で決定と……いまのを聞いたな、製作班？」

『はい！ 誠心誠意、作らせていただきます！』

さつきは騒がずに、残っていたツイマツドの人達であろう画面に写っている人たちから、威勢のいい返事が聞こえてくる。この人達が作ってくれるのだろうか……

「じゃあ次は言いたげにしてる明日菜は、どれにしたんだ？」

「そんな事ないけど……私は……この今そっちに共有したそれでもいい？」

「明日奈の方はOOセブンソードか……カラーリングはどうする？」

「赤と白で……ちようどこんな感じに」

そう言って、アスナは流星が見ている画面に、元から作っていたであろうカラーリングを変えたISのイメージ図を共有する。

「これで、確定だな？」「これをお願いね、流星」了解……あ、一つだ

「おまけしとくか……」

「おまけ？」

「それは届いてからの、お楽しみ……っ」と

「木星から今ある分を持ってくるとして……もし太陽炉足りなかったら、今あるやつをコジマに載せ替えるか」と言いながら、パソコンに何かを打ち込んだ後、流星は最後に俺に聞いてきた。

「最後で悪いな……和人はどれにするんだ？」

「……俺は、これにする」

その機体の画像を見せた途端、流星の表情が変わった。

「そのじゃじゃ馬を、選んだか……」

さっきの雰囲気と全然違う。これを選ばないほうが良かった……？

「そいつを乗るには……相当な覚悟がいる。機体に呑まれる可能性も、否めないが……それでも、乗るのか？」

「なんかこれにしか目が行かなくて……別に色が気に入ったとか、そういうわけじゃないんだ」

1分くらいだろうか……画面越しに何かを考えていた流星は「……賭けてみるか」と言っつて、続けてこう喋った。

「そこまで言うなら……乗ってみると良い。こいつに、なにか運命的なものを感じたんだらうな……」

ユニコーンガンダム2号機『バンシィ』……俺の専用機の4号機……『アレス』の兄弟機に」

IS学園の専用機をもっている学生達と、新しくはいる3人の眼の前に置いてあるのは……赤と白、青と白、そして……黒と金色の3体のIS。追加で横に流星と束さん。

「そして出来上がったものがこちらになります！」

「……早っ!？」

もう一人の男性操縦者……織斑一夏くんが、目を見開いて驚く。

あれ……一昨日に、まだ決めたばかりだったよな? そういう視線をアスナに向けると、ややぎこちなく首を縦に振る。

「いろんなところから、もうすぐ開催される『キャノンボール・ファスト』に間に合わせてほしいって言われたから……ISコアと装甲にするような塊はもう作ってたから、後は削り出して塗装して引っ付けるだけだ」

「……流兄、ISコア地味に3個も新しく作ってんじゃないわよ……」

「468個が471個になっただけだ。誤差だよ誤差」

中国の代表候補生と、やや笑い気味にそんな言葉を交わす流星。

教科書を書き換えなれないことを、そんな簡単にして……IS学園の制服もでさえも、まだ届いてないんだぞ……?」

「それじゃ、早速最適化^{パーソナライズ}して実際に飛んでみようか。目標は1週間後のキャノンボール・ファストで参加できる位の實力をつけることだ」
かなーり高く設定されたハードル……できるかな。

「だね……」

「二人はなにか色々ある感じ?」

「ほんつとに色々あるのよ。代表候補生って色々縛られたりしてるし……」

「……ボクも、そういうしがらみ無しで思いつきり空を飛びたいけどね」

私が飛んでいるところを見て、どこか遠い目をする二人。学生だけど、二人は国の仕事とか忙しいのかな……代表候補生も暇じゃないってことが今の状況を見ただけでわかる。

「でも、今は楽しもうよ!きつと私や凰さん、デユノアさんのISも飛べて楽しいだろうし!」

『はい!私も一緒に飛べて嬉しいです!ママ!』

本来、ここでは聞くことのできないはずの声が聞こえて、思わず空中で止まる。

私のことを『ママ』と呼ぶ子は、一人しか知らない。

「ユ……ユイちゃん!?どこから話して……」

『こうやって話すのは初めてですね!私は今、ママの装着しているISから話しています!』

「突然止まって、どうしたの結城さん?」

「ア……ISからユイの声がしたんだけど……」

「ユイさんって……一体?」

私が突然泊まったことに気づいた凰さんとデユノアさんが此方に来て、事情を伝える……けど、しまった。この二人はユイのことを知らないから、どうやって説明したら……

『サプライズ、気に入ってくれたか?』

今度は流星の声が頭に直接聞こえてくる。

「流星もどこから話して……!?!」

『今使ってるのはプライベートチャンネル……秘密の話をしたときに使える』

「それはわかったけど、ユイちゃんの声はどうして……」

『コア人格にユイを同期させたんだ。別に今の状態になったからと

言って、ALOとかで会えなくなるわけじゃない』

種明かしに内心胸をなでおろしつつも、新たな疑問が浮かび上がってくる。

「……なんでそんなことを？」

『一緒に、この空を飛びたいんだとき……俺はその手伝いをしたままで』

詳しく話を聞くと、私に専用機が回されることになった時に流星がユイちゃんに相談したそう……

「先に教えてくれたって良かったじゃない」

『そこんところはすまなかったな。これで説明は終わるが……ユイ、しっかり明日菜のサポートをするんだぞ？』

『了解です、流星さん！』

こうして話を終えて、待っていてくれた鳳さんとデユノアさんの元に戻り、誰と何を話していたのかと聞かれたのでさっきの内容を二人に答える。

「コア人格って、そんなふうにすることもできるんだ」

「きつと流星のことだから、なにかしでかしてると思ったけど……やっぱりだったわね」

「……流星はいつもそんなことを？」

「簪も無理矢理ツイマツドの代表にしたし、デユノア^バ社に第3世代の設計図渡すし……それだけじゃないかな。ISを動かしていても、仲間をかばうこと前提で動いてるし……スタントプレーが多すぎるよ、流星は」

「それ、わかるよ……VRMMOの中でも、そんな行動が目立ってたし……」

「他のところでも相変わらずってわけね……いつか、どでかいしわ寄せが来そうだけど……っ？」

「そ、そんな縁起のないこと言わないの！」

「……そういうのは事前に教えてほしかったな」

「明日奈と似たことを……でも、そっちのほうが楽しいだろう?」

アスナと話していた流星が、アスナのISにユイをコア人格?というものに載せていることを知らされた。

飛行の練習をしていると、時折練習がてら他の生徒がよくこっちにかけて、俺と流星をまじまじと見たり、他の専用機乗りの人がアドバイスを教えに来てくれたり、ある時には……

「……何か壮観だな、白獅子が2体いるって」

「ほら、道草食べてないで高速飛行の訓練をするぞ嫁!」

「おわっ!?!ちよつとまつてくれラウラ!」

途中、一夏くんがこちらを覗きに来たと思ったら、銀髪のラウラという子に引つ張られていく。

一夏くんが……嫁?と呟くが、それを拾った流星が気にするなと首を横に振った。

流星は時々速度を落として、俺がついていけるようにしてくれている。

カタログスペックでは、つけてる武装は後ろの流星のISの背中に乗せている畳んでいる物以外同じはずなんだけどな……

「流星は後ろの羽を外して、こっちは全力で吹かしてるのに……どうして流星のほうが速いんだ?」

「サイコフレームから斥力を発生させてるからな……具体的な原理は知らん」

よくよく見ると、装甲の隙間から漏れている青い光がなるほど確かに、流星の機体を押ししているように動いている。

サイコフレームって、ただピカピカ光るだけの装甲じゃなかったんだ……

「じゃあ、サイコフレームを使ってる、このバンシイも……」

「それは乗り手次第だな。こいつはお前の望むことバンシイを実現できる可能

性を秘めている……人の未来を切り開く事もできるし、その逆も然り……というわけで、次は武装を試しに使おうか」

神妙な顔をしていた流星だが、一変して飛行訓練の次は武装の練習を勧めてくる。

「まずは……つておお。なかなかやるな!？」

「ちよつと変わった軌道をするんだな。狙ったところには当たるけど」

2枚の板から出てきた不規則な弾道を描くビームは、流星が設定して出した直後の的に命中する。

「ちよつとずれてたら顔にあたってたぞ……」

「……すまん!」

「まあいい……射撃はISの方で照準を補助してくれる。今ので大体わかったんじゃないか？」

そう言われてみれば、狙いを合わせる時……若干ISの方から動いていた事に気がつく。

「言われてみれば、たしかに……」

「それがわかったなら上等だ。次は左のナツクル……名前は知ってる筈だ」

アームドアーモ^{ヴァイブロネール}V N。そう名付けられた黒いそれは勢いよく

開き、内側から金色の爪が見え隠れしている。

「これって、流星がSAOで使ってた……」

「ものを新しく作ったんだ。使い方は言わずもがな、横で見えてきたお前に知らんとは言わせないぞ?」

「思った通り……使いにくいなこれ。リーチの差がどうしても剣には……」

「それはどこまで行っても慣れとしか……しかし、剣か。剣を持ちたいなら、心のなかで願ってみろ」

彼の言われるがままに、この両手についている武器の代わりに、剣を持つ……両腕の武装が消えて、空いた両手に二振りの刀が握られていた。

おもむろに流星の方を見ると、彼はニカツと笑う。

「伊達に3年一緒にいたわけじゃない」

「……用意の良いことで」

「近接ならもってこいだが……使い所は気をつける。GGO以上に銃器が有効だから……油断したらすぐにおじやんだ。その分、VNは防御にも使えるから、よく考えて立ち回れよ」

「昨日から、顔色が悪くないか？」

練習の終了後、ISを解除した流星から飲み物をもらった時に、昨日のミーティングから変わらず顔色が芳しくない彼に声をかけてみる。

「血を抜きすぎたから、ちよつと色白になってるんだよ」

「それじゃあ、なんで目に隈が？」

「最近の睡眠時間が足りてないんだ。仕事が忙しくてな……」

「本当か……？」

「本当だ。もうキャノンボールも近い……今日はゆっくり寝る」

そう言つて、流星はロニイ達と次の授業の場所へと向かっていく。

「ロニイ、待たせたな。詩乃も、今日はどうだったんだ？」

「詩乃が思った以上に射撃がうまくてびっくりしたよ！」

「でもロニイは、どれだけ訓練したらあんな運動を取れるように……」

遠ざかる彼を見てみると、肩に誰かの両手が置かれて聞き慣れた声が聞こえた。

「キリトくん、お疲れ様！」

「あ……今日はお疲れ、アスナ」

side 流星

「シャルは寝たか………だが俺は今日も……」

すやすやと眠るシャルの少々乱れた布団を整えると、彼女を後目に

しつつ寝静まった寮のベランダで夜空を見上げながら独り言を呟く。
和人と明日奈の話し声？だけが微妙に聞こえてくるくらいだ。

右腕を見ると和人に指摘された通り、日に日に色白になってきている。それに、眠れない……これが、前にたきなに輸血したのから来てるものじゃないことは、身体がわかっていた。

「……まさか、今になって心臓にガタがくるとは」

これは4年前の厄災時で治療が半年も行われなかった事によるものだと、主治医から説明を受けている。

症状名は千束と同じ……言わずもがな、このままだとそう遠くない内にお迎えがくることになる。

「これを見越して、あいつらが作ってたんだがなあ……もうあれは千束のものって決めたし……」

もしもの事があれば、取り替えるために家の技術者が作っていたそうだ。

S A Oをクリアした時にはもう治っていたから処分しようかと考えていた矢先に、ミカからの依頼でその作りかけの心臓を千束に譲る事を決めた。

『千冬女史といい、千束といい……流星は好きになった者には目がないな』

「全員魅力的なのが悪い」

I Sの待機形態から聞こえてくる、シャアの声に即答する。

どうせ、俺は結局死んでもどこかに送り飛ばされる……ならばせめて、千束には長生きしてもらいたい。

『遺される方の身になって、考えてくれ……』

「……それもそうだが」

もしそんなことになれば……後ろで寝ているシャルやロニイを始め、多くの人が色々な感情を持つことになる……に違いない。

この命ある限り、頑張っただうにかできないか考えるのが彼女たちのため……

……だが今日はその気分になれない。明日から考えるところ。

「ちよつと昔話を洒落込むが、付き合ってもらえるか？」

『現実の身体は、部屋で横になって夢の中だ。もしそうじゃなくても構わんさ』

「……悪いな」

そうして、男二人の会話が密かに続いていく。

結局朝まで話し通し、巡回の千冬に少しばかり注意を受けた。

第60話 ラインの乙女

side 詩乃

空を飛び、障害物を右に左に避けていく。最高速度の方は問題なくだせるようになった。そして次が問題……ある瞬間に、機体を急旋回させて的に狙いを……今回も命中せず。

ふう……と一息ついて的のリセットを実行する。

GGOとは違い、空中での戦闘が主体になる……大半の場所では遮蔽物のない空域で戦うことになってわかった課題が山積みだけどまず……

「ふーむ……やはり空中での射撃時に手がぶれてしまうことが、課題になってますわね」

横で今の訓練を見ていたセシリアさんから、いかにもな意見が飛んでくる。

「地上戦ばっかり経験してたから、筋肉の使いとかがあんまり……わかってないのかも」

「ならば一度、わたくしが実践してみます……さあ、技術をどんどん吸収していつてくださいますし！」

次々に的に命中させていくことを実演してくれるオルコットさん。自立兵器を動かしながらも、狙いが正確なオルコットさんはどれくらい練習してきたんだろう……

「……すごい」

GGOで見てきたプレイヤー達の本職はほとんど知らなかったけど、眼の前で舞う彼女は……国の代表になりうる実力を持っている人。

そして……きつと流星の横に恥じなくいられるように頑張っているのだろう。

「いかがでございましたか？」

「これをただで見ているのかって思えるくらいだよ。なにかお礼をしたいと思います……」

一通りの演習をしてくれたセシリアが前に降り立って感想を尋ね

てくる。私が思った事を伝えたら彼女は少し考える仕草をした後、次のように聞いてきた。

「ならば……僭越ながら私としては、そのライフルが気になるのですが……詩乃さんの銃はマルチスナイパーライフルとおっしゃっていましたが、具体的には……どのような機能がありますの？」

とこのように。手の内を明かすことになるけど明日結局見ることになるし、問題ないか。そう結論付けて、彼女にヘカートIIの説明を始める……といっても。

「ん、これのこと？……まあ見てもえたらわかるよ」

実弾、GN弾、そしてレーザー・プラズマ複合弾を順番に発射する。地上から静止して撃つなら、問題なく弾丸が的に吸い込まれていく。

「いま撃つたみたいなのに3つのモードがあつて……これらを掛け合わせることができると」

「7通りも撃てるのですか!？」

「チャージの時間が長くなるし、その後の排熱も同じことになるけどね……」

実弾と掛け合わせるのはまだ早く済むけど、ビームとプラズマ……もしくは全部合わせたときのその時間はチャージに2秒と冷却の5秒を合わせて7秒かかるという説明を前に受けた。その分、流星のISでさえも当たれば大丈夫じゃない火力は保証されてるらしいということも。

「……使い所を選びますわね」

「二長一短……機体製作に選ばれなかったAC部門の人達が、威信をかけて作つたみたいだよ？」

その人達が他にもリクエストがあれば作ってくれると言つてたけど、流星は「あいつらの作るグレネードは気をつけてくれ」とだけ伝えられた。

「あら。その部門の方々は、確かマドカさんの武器も作つていらしたような……つてええ!？」

「逃げてても無駄だぞ!」

「いやあああああつ!？」

セシリアが考え始めた途端、悲鳴を上げながら逃げ回る白いISに乗った簪を追いかける青いIS。簪に向かってひきりなしに巨大な砲弾……じゃなくてグレネードが飛んでいく。

「……セシリア、あれは」

「あれはマドカさんが注文した試製の火力特化型の装備らしいのですが……随分と気に入ったようですね」

マドカに乗るISの両手、両肩のすべての装備がキャノンになっていた。かろうじて羽のような場所についているワイヤー付きの自立兵器だけはビームを撃つて、一応ISとは思えるけど……あれを外して、戦車の足をつけると何かガチタンが完成しそうだという謎の直感を感じた。

そしてどういわけか「メーリメリメリ！」と聞こえてきそうな風貌をしている。

「あれ……グレネードの、ガトリング?」

「ですわね……」

そして特に異彩を放っているのが右手の巨大なガトリング状のナニカ。そこから本来連射されてはいけないはずのものが大量に打ち出される音がする。

ついにグレネードのシャワーに飲み込まれた簪。その爆炎からでてきたのは、目がぐるぐるになって地面に倒れる彼女だった。

できれば明日、あれの正面には立ちたくないな……

side 流星

「「大会に出れない!?!」」

大会当日、「なんで準備してないんだ?」と着替えない俺に築いた一夏に聞かれた所、理由を説明すると着替えていた和人と一夏につまみ出された。

その旨を伝えたらこうやって全員から一斉に……耳が痛い。

「どういうわけで、ドタキャンしたのよ？」

「前々から言おうと思ってたんだがな——」

「りゅうくんは来週のキャノンボール・ファストでちやだめだよ」
「……どうしてそうなった？」

機体の調整をしようと思つて、整備室に向かつている途中にばつたり会つた束と出会つてまず放たれた言葉は、キャノンボール・ファストの出禁発言。

いきなりにも程がある、と言いたいところだが……次に出したのは織斑先生と学校長のサインが書かれた正式な紙。

「強すぎで出来レースになっちゃうからね……そここのところの自覚があるでしょ？」

「それは、まあ……だが理由にしては弱くないか？」

「自分が一番わかつてゐるはず。今の状態が悪い方に向かつてゐるってことは……この前の夜中の話も知ってるし」

誰もいなかったはずなのに、どこから聞いていた地獄耳……という言葉は、束にとって無用に等しいので言わないでおこう。

「まだ心臓の替えが無い状態でこれ以上の無茶をすれば……もう……」

「いつ心不全でポックリいくなからないってか？」

束が言い淀んでいたことを、すんなり話すと彼女は首を縦に振る。

「ちーちゃんとかロニイちゃんのためにも、ここは我慢して」

「その手札を切られるとなあ……」

「——という訳だ。実質ドクターストップだよ」

だから実は和人の訓練の時も、俺自信は初歩的な飛行とかに抑えて

いた。これを聞いた和人や明日菜、一夏達は驚きや困惑の表情を見せる中、

「……やはりお兄ちゃんは心不全を患っていたのか」

「最近の感じがおかしくて、そんなところだろうと思った……」

楯無とラウラは最近の行動が控えめになつていたことに薄々感づいていたらしく、やれやれと言った表情を見せる。裏とか軍にいた人は、やはり分かるんだろうな。そして一方……

「流星の、いない……世界なんか」

「まてまてまて、早まるな!? ……俺はここにいる」

うるうるしながらとんでもないことを言いかけるロニイ。ロニイの人類種の天敵とか見たくないぞおい。

「まだそうなるかもつていう段階で分かったからな。もう手は打つている……半年後に、一旦人工心臓に置き換える手術をするつて決めるから」

「……ほんとに?」

「ほんとだ。だからそんな悲観するなつて……」

「ん……」

ロニイに軽くハグをして、過呼吸になりかけていたのを落ち着かせる。

「まあ、人工心臓ができ次第とつかかることになつてるがな」

「人工心臓つて軽々しく言うけど……失敗のリスクとか、わかつてるの?」

「知り合いに一人、人工心臓のやついるし……その時はそいつの助言でも借りるさ」

後、ウチの変態共の技術は知つてのとおりだと簪に加えておいく。突貫工事で3ヶ月後に手術を始めれると言われたが、会社の業務を優先させた。それでも早急に作ると言われた時は目に来るものがあつたことは記憶に新しい。

にしても、半年……それまでにガタが来ることは……ないとは信じたいが。

「その話は一旦置いておくして、この後どうする? 今日一日暇になつ

たの？」

「もちろん、みんな活躍を間近で見たいから、遠隔操作で出る……運営の方だな」

体を動かさなければ、心臓を酷使することもない。つまり道中の生徒の相手をする教師に混じって、よりレースを複雑に、盛り上げる一員として参加できる。

「「ええ……」」

別の意味を含んだであろう、ため息に近い落胆の声が聞こえてくる。これはまたどうして……

「……体を動かさないからリスクはないだろう？」

「そう……だけどそうじゃなくってだな！」

「実質流星と戦うつてのが……」

遠い目をした男勢が俺と戦うことを憂いている。

遠隔操作の方には誰も突っ込んでくれないことに、少ししょぼんとした。そっちの方には鈍くなったのか、もう慣れてるのか……ともかく。

「いい経験だと思つて頑張つてくれ」

「今回は、白獅子で出るの？」

「できなくもないが……今回はツイマッドからの試作機を頼まれた『ラインの乙女』というやつで相手する」

人の乗ってない状態のISは、中身をくり抜かれた甲殻類みたいなものだ。別に普通に動きはするが……剛性の観点では人は乗っていない方がいい。

「俺だけみんなのISの情報を知ってるのも、不公平だから……情報を今見せるな」

武装や加速力、旋回半径などを記したデータを空中に投影する。一度目は通してるものの……コイツの構造はまだわかる。なんせもとACだったからな。だが……

「四脚……にしても、速度のところだけとんがりすぎてない？ 絶対お金かかってるよね……」

「理論上の最高の速度を求めた無人機だ。ゆくゆくは有人機にしたいらしいが……確かにコストが馬鹿にならないから、まだ先になるだろうな」

データを見ていた詩乃の口からごもつともな意見が飛んでくる。コイツを量産しようものなら、本当に会社が傾きかねない。これ壊れたらもう知らんぞ……

「でもアレスも、一度マツハ4で飛んでたような……」

マドカのつぶやきに、マツハ4!? と驚く和人。大丈夫だ和人。お前が今の段階で到底出せる速度じゃない。

『スペックでそんな速度は出ないはずなのに、どうして流星はそんな速度を出せたのですか?』

「サイコフレームで斥力かき増してたんだ、ユイ。それに自分が乗ってなかったら、そんなにサイコフレーム発動しないし、あれは曲がりにくい……その点、こいつは機動力では洒落にならない能力を持つてるぞ?」

明日奈と詩乃のISもいずれは量子テレポートとかできるようになったら、それが一番になるんだが……

(『アレスでも、それくらいはできるぞ?』)

……うそだろ……一応それは内密に頼む。

『なるほど……ならばママとどっちが上手に操縦できるか勝負ですな!』

「頑張れよ、ユイ」

『はい!』

「私の紅椿の持ち株を、殺しに来てないか……」

「こいつの武装は限られてるし、展開装甲はついてない。箒の工夫次第で十分に勝てる相手だぞ?」

「一夏……努力はする」

頬が引きつった箒に寄り添う一夏。二人がお熱い雰囲気……

「ンンッ! さて、まずは量産機部門だから本音の相手を……あれ?」

わらわらと生徒が準備に向かい始めているのを確認して、己もぼちぼち移動を始めようかと腰を上げて一瞥し……最初から今まで、来て

ない人が一人いることに気づいた。

「……シャルは？」

「呼んだ、流星？」

「そのISは……!?!」

シャルがストライクフリーダムを纏って降り立つ……だが、ドラ
グーンは見当たらない？

「……だが先に量産機の方するから、説明は後でな」

「ちよつと!?!」

第61話 資格

『いまごろあの娘達は元気かねえ……』

「珍しいな、お前が物思いに耽るとは」

『マ・クベか……いやいや、ちよつと『提督』だった時の記憶が唐突にね!』

「……………もしお前の言っている彼女たちが、電いなずまやゴーヤという名前なら……丁度下でお前を呼んでたぞ? 正夢、というやつだな」

「hey, テートク! あのとときの答え聞かせてほしいデース!」

「全員……婚姻届を持っていたが、お前彼女たちになにをした?」

『……アツ!?!』

side 本音

キャノンボール・ファストの一般生徒部門……その一番初めを飾る1年生の番。

生徒が搭乗した複数のISが動作確認をしたり、これから始まる競争に期待している人もいる。

「尾白くんが操作してる無人機つて、足が4つあるらしいよ?」

「悪路を歩くわけでもないのになんで多脚を採用してるんだろ……でも、彼との戦闘は避けたほうが良さそうだね」

私も、開始される前に装備や機体に不備がないかチェックをする……問題なし。もちろん、自分で整備したIS……そんなこと万が一でも起こさないようにしている。

『キャノンボール・ファスト……スタートツ!』

その放送とともに、緑色になった空中に浮かぶランプ。それを確認した一斉に飛び立つIS群に私も負けじと飛び上がる。

始まってすぐに、近づいたら少し威嚇射撃したり刀を振ったりして散発的に戦闘が始まりつつ、そんな中でも、多くの生徒が空中に置かれているビーコンを頼りに、決められたルートを飛んでいく。

「本音、途中まで一緒に協力していかない？」

「けど今は敵同士だから、あんまり話さないほうが……」

「でも、途中で教師が妨害するギミックがあるしそれに……きゃあつ!?」

横で話していた一組の生徒に向けて、幾多ものミサイルが命中し、その子のSEが一気に半分まで削られた。

今やったのは……あれは！

『まだ俺もこれを動かしたばかりで、操作がおぼつかない……』

地上にいた状態の特徴的な四脚は折りたたまれている、ラインの乙女が上空より舞い降りてくる。

隅々まで見ると、このISがいかにか空力を味方につけているかがわかる

「……やっぱり私の前に来たんだね、りゅーりゅー」

『ただ単にみんなの実力を知りたいんだ。さあ……ついてこれるか!』

『ラインの乙女に見事被弾させた生徒には、尾白くんからささやかなプレゼントがあるそうなので皆さんがんばってくださいねー!』

その掛け声とともに、一瞬にして遠ざかったラインの乙女を追いかけるように、多くの生徒がそのプレゼント欲しさに詰め寄ってくる。

「それは私でもらうわよ……!」

「なんの、それはこっちのセリフだよ!」

そんなことはさせまいと飛び回るラインの乙女は、いつもりゅーりゅーが使っているアレスよりも速度に磨きがかかっている。

「……でも、なんで流星がそっち側になつてまでもこの大会に出ようと思つたの?」

『どうして……か。言い方が悪いかもしれないが、これは俺が試してることでもあるし、俺が試されてるところでもあるんだ』

「自分の身は自分で、か……」

「どうしたのかんちゃん？」

「いや……私達も、千束みたいなことになったらどうなっちゃうのかなと思つて……お姉ちゃんとさつきまで話してたんだ」

「千束つて……あの電波塔の人？ その人がどうかしたの……？」

「その人が、最近誰かに襲われたみたいだね。あまりにも、私達が弱いと……流星に、負担かけちゃいそうつて思つて……」

最近、かんちゃんの知り合いが襲われたという話をふと思ひ出した。

彼がこのことを意図してるかは

『この試合は飛んでるだけじゃ勝てないぞ！』

「わわっ……とお！」

突然此方に向かつて飛んできたミサイルを、バレルロールですれすれに避けた。

どちらかというと、ステゴロとかのほうが色々教えられているからそつちが長けてる……けど、お姉ちゃん虚は優れてるとも言えないし……

「こつちにこないでええええ!!」

「回避回避回避いー!」

追いかけることに夢中になっていた生徒の何人かが、流星の放ったミサイルの餌食となって地面に墜ちていく。

周りにいる生徒達にもミサイルを降り注げている、流星の背中を必死に追いかける。

遙か高みにいる彼。その圧倒的とも言える力によつていつも守つてもらつてばかり……

……でも、流星のと一緒に進むには!

「私は、守られてるだけじゃ……ダメなんだ!」

ラインの乙女の側面からブースター炎が吹き出て右に急速に移動

する先を狙って、手持ちのアサルトライフルを乱射する。いくらあのISが速度に長けてると言っても、急激な起動は取りにくいはず。

私だって、頭を使うことくらいならできるよ流星……！

『これは不味いな……だが……！』

今度は左に向かって急激に移動した流星の操るIS。流石に両方移動できるようにはしているか。

だけど……運の良いことにばらまいた銃弾の内一発は、完全にあの機体ラインの乙女に吸われていった。けど命中したところで、あの強固なバリアを突破できるか……と思っていた矢先

突然、ラインの乙女の背後から黒煙を吹いた。

『メインブースターがイカれただど！ 狙ったか本音……！』

「え……ええ〜っ!?!」

これは想定外……

今のアサルトライフルのたった一発だけで、そんなにダメージを受けることある……!?!

『熱が籠もる関係で、後ろのPAは不安定なのを知って……くっ……くっ……メインブースターも、PICも完全に逝ってやがる……』

流星の声を発しながら、ラインの乙女推力を失ってどんどんとその高度を落としていく。

『オツツダルヴァの二の舞……いや、これは本音の実力……か。すごいよ』

「その……りゅーりゅーのことは……」

『追いかけてなくてもいい……本体は無事だし、な？ もうゴールは近いから、はやくレースにもどれ。これに関しても、試験機だから色々心配はしなくてもいい』

いつの間にか目の前まで迫っていたゴールの目印。流星は戦闘中にも、こっちのレースのことを考えてくれて……

「ありがと、りゅーりゅー。それに、私は守られてるだけじゃないんだよ?」

『……そうか。なr』

喋っている途中に池に直撃したラインの乙女は、大きな水柱を上げ

てその動きを完全に止めた。

side シャルル

「ブースターだけ交換できる仕様で助かった……おかげで、このあとは問題なく出れる」

ついさつき、逝けから引き上げたラインの乙女という無人機の破壊されたブースターを外して、予備だという別のブースターに付け替えた流星はそう言いながら、流星は本音をまるで猫のように頭や顎を掻いている……いいな、それ……

「背中が弱点なら、そこを狙えば流星の操ってる無人機は問題ないな！」

「……言つたな和人？」

「あれはまだ航行速度の半分にも満たない。戦闘中にも言つただろ……慣らし運転だと」

まあ一回でフルスペック出せない俺と機体が悪いだけなんだけども……と続けて喋つた流星に、ここにいる誰もがそうじゃないだろうとツツコミをいれる。

「……始まつたら、まずお前からしばき倒す」

「ストレートな暴言!？」

ガンという音が聞こえてきそうな顔になった和人くんを後眼に、流星は何かを思い出した表情をして、こちらに話しかけてきた。

「そういえば、シャルのさつき言つたた新型機は……」

前回は時間なかったから詳しく説明できなかつたけど……今回こそしっかりと説明できる。

あとこの話を2ヶ月放置してた作者にもしっかりとおはなししないとね……というメタい事はさておき。

「よつと……これはストライクフリーダム式……それにプラウ

ドデイフェンダーを搭載した『マイティーストライクフリーダム』堅
牢な対エネルギー防御性能と、広範囲の瞬間制圧能力を備えた第3世
代機だよ！」

「どれどれ……ストライクフリーダムと違うところもいくつかあるな
……一番目を引くのは、背部の白いウイングユニットだが……よくよ
くみれば、腕の装甲とかラケルタ・ビームサーベルのマウント方法が
変わってる……たしかにこっちの方が保持力に関しては……」

研究者の血が騒いだのか、流星が私が今搭乗したISに近寄ってま
じまじと見つめながら、ブツブツとつぶやき始める。

「よく分かるね……今から言おうとしてた変わったところを全部言い
当ててるよ……あと……その……距離が……」

「……失礼」

……こういう事は、夜とかあんまり人にいないところでやってほし
い……かな。

「で、このISがあるということは、キラあたりが色々いじくってそう
だが……『式式』という名前、最後の戦いのあとにもまだ戦争が残っ
ていたということか……」

「御名答。キラとかアスカが共闘したって言ってたよ」

その時に、また多くの人の命が失くなった……とも。

「歴史は繰り返される……か……というか、珍しいな。キラやアスラ
ンを含めたゴズミック・イラのガンダムを開発できた彼奴等フランス
で暮らしてるって言うことか……せめて連絡よこしてほしかっ
たなあ……」

「またそれについては連絡したがっていたって言つとく。あともう一
つ相談があるんだけど……この装備、なにか知ってることはない？」

流星に見えるように空中に投影した画面に、とある装甲の欠片の画
像とその物の特性を映す。

「ふえむてく……いや、全く知らないな。これも、キラたちが？」

「うん……現段階だと実用はおろか、作ることも難しいみたいだね
……お父さんが一緒に開発しなかったって聞いてたけど、どうする？」

「なら、そっちの資料はまた合同開発って名目でこっちの変態共に回

しといてくれ。暇な部門の奴らが喜ぶ……にしても、ISコア2個を積むとは贅沢な……演算処理の向上は見込めるが、コアの相性よくあつたな」

「うん……お母さんの乗っていたISのコアだからね……」

お父さんが、そのISコアだけはどのISにも載せずにまるでこの時のために置いてたかのように、準備してたということも付け加えると流星は、

「……成る程な」

とすぐに理解したようだった。

例年だと次が1年生のはずだけど……もう2、3年生の専用機まで終わったし、どっちみちボクたちが最後のレースとなる。

「今年を取っておきのデザートにしたいんだろうな。なんせ、今までで一番専用機持ちが多い学年だから……楯無とはこいつを修理していたせいで戦うことはできなかったのは……少し残念だが」

「それは……やっぱり、実力を見たいから？」

「弱くて見捨てるなんてふざけたことは絶対しないがな……さ、もうすぐ始まるから準備をしろ……俺は実際の戦闘する感覚で挑むから、覚悟しとけよ？」

「はは……お手柔らかにね」

「んじゃ、頑張れよシヤル」

出場選手の待機場所まで見送りに来てくれた彼は去り際、額に落とすしていった。

「あつちよつ………もう」

ボク………そんなに物欲しそうな顔しちゃってた、かな？